

# 人間文化研究

第 22 号

---

島田勝正教授

退任記念号

友沢昭江教授



2025年 2月

桃山学院大学 総合研究所



高田勝正教授 近影



友沢昭江教授 近影

# 目 次

献辞 ..... 人間文化学会会長 有 川 康 二 ( 1 )

## 論 文

文法指導におけるビリーフ変化 ..... 島 田 勝 正 ( 5 )

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に  
影響する親の言語観と子の主体性を考える  
—— Family Language Policy の視点から——  
..... 友 沢 昭 江 ( 31 )

安倍能成, 悪しき家父として ..... 高 田 里 恵 子 ( 71 )

An Exploration of Japanese Working Holidays:  
Trends, Motivations, and Challenges  
..... Thomas LEGGE ( 103 )

An Example of Romanesque Architecture in the Ribeira Sacra:  
The Church of Santa María de Nogueira de Miño  
..... ÁLVAREZ PEREIRA Abel ( 119 )

汉字书法与视错觉 ..... 徐 国 玉 ( 159 )

*A Portrait of the Artist as a Young Man* における  
ステイヴンの魂の救済 ..... 吉 田 一 穂 ( 185 )

## 研究ノート

スジャラ・ムラユにおける古地名ムラユ……………深見純生 (215)

生成 AI を活用した英語ライティング教育支援ツールについて  
……………谷野圭亮 (223)

## 翻 訳

朝鮮漢文短編小説集 (IV)  
人の性と情篇 (中)……………梅山秀幸 (233)

島田勝正教授 略歴…………… (289)

島田勝正教授 主要研究業績目録…………… (292)

友沢昭江教授 略歴…………… (305)

友沢昭江教授 主要研究業績目録…………… (308)

# 献 辞

人間文化学会会長 有 川 康 二

桃山学院大学人間文化学会は、『人間文化研究』第22号を、本年度3月で定年を迎えられます友沢昭江、島田勝正両教授（以下ご就任順に申し述べます）に献呈することとなりました。人間文化学会を代表しまして、お二人の現在に至る教育・研究面でのご貢献に心から敬意と感謝の念を表します。

ここでも、お二人のご足跡を簡単にご紹介したいと思います。

友沢昭江教授は、米国ウィスコンシン州立大学マディソン校歴史学部大学院修士課程を修了された後、香川大学教育学部助教授を経て、1991年に本学文学部国際文化学科助教授として就任されました。2002年に文学部（現、国際教養学部）国際文化学科の教授にご昇任、一貫して日本語教育分野の教育、研究にあたってこられました。学内行政についても、副学長、国際センター長など重要な役職でご尽力されました。友沢教授は、ご事情により定年を待たず選択定年制の適用を受けられ、爾後特任教授として本学の教育、研究にご協力いただきました。

友沢教授については大多数の本学の同僚が、本学の日本語教員養成課程の立ち上げと維持における大きな御功績を、感謝の気持ちとともに鮮明に記憶していることでしょう。ご自身ずっと取り組んでこられた日本語教育に対する情熱を、学生の指導に惜しみなく注いでいただきました。本学は

現在日本語教員養成課程を維持しておりますが、友沢教授はそのプログラムの構想・発足に中心的メンバーとして関わられました。その後の数百名にも及ぶ教え子達は見事に期待に応え、多くの卒業生達が国内外の日本語教育の現場で活躍しています。

友沢教授からは、本学の日本語教員養成、さらには国際交流のあるべき姿を身を以て示していただいた思いです。2016年に本学で開催された第10回日本語教育学会関西地区研究集会では、私もコメンテーターとして発表教室において友沢教授のおそば近くで参加させて頂いたのを今も懐かしく思い出します。日本語教員養成課程が今日のように底力のあるプログラムへと成長したのは、学生諸君の頑張りもさることながら、いつも演習教室や実習教室の教壇に立って日本語教師を目指す学生たちの努力を見守ってこられた友沢教授のご薫陶あったればこそと確信しておりますのは私ばかりではないでしょう。

島田勝正教授は、三重大学、兵庫教育大学大学院、オーストラリアのマッコーリー大学大学院修士課程を修了され、いくつかの中学校の教諭を歴任されたあと、1994年本学文学部専任講師としてご就任になりました。2001年には学生生活委員長、07年には教職課程委員長、10年にはキリスト教センター長、16年には文学研究科長、22年には再び教職課程委員長など要職を歴任され教育、研究に尽力していただいています。オープン・キャンパス等の入試業務を私はご一緒させていただいたこともございますが、ある時、入学相談の閉場時間ぎりぎりに駆け込んできた生徒と保護者がおられました。後片付けをしなくてはならないから別の部屋に行ってくれと関係者に言われながらも、島田先生は「後は僕が対応するから」と言い残して穏やかに机と椅子を並べながら「将来の桃大生」とその保護者に対して丁寧で誠実に向き合っておられました。「時間ギリギリに駆け込ん

## 献 辞

できた、この一人の生徒、桃山に興味を持ってきている、まさしくこの一人を大切にしないで何がオープン・キャンパスだ」という気迫さえも私は感じました。

島田教授は、社会活動としましては、ご専門との関連で、外国語教育メディア学会中部支部の評議員、中部地区英語教育学会近畿地区運営委員、同紀要編集委員長、全国英語教育学会紀要査読委員、日本言語テスト学会研究会運営委員長、同著作賞選考委員会委員長、文部省・三重県教育委員会主催第3ブロック英語教育指導者講座講師、三重県立川越高等学校杯中学生英語弁論大会審査委員長、同高校評議員などを務めておられます。

島田教授のご専門は英語教育学、とくに気づきを促す文法指導、英語学力の測定と評価の代表的研究者として斯学の第一線に立ち続けてこられました。この分野では、まさに余人の及ばぬ貴重な業績を上げてこられました。『「気づき」をうながす文法指導—英語のアクティブ・ラーニング』ひつじ書房 2022 年などの著書のほか、多数の論説も世に問うておられます。

以上ご紹介しましたように、お二人が本学に寄与してこられましたご功績は実に多大であります。桃山学院大学がお二人に名誉教授の称号を以てそのご貢献に感謝の念を表したのは誠に当然のことでありました。両先生におかれましては、ますますご健勝で人生の新しいステージに向かわれますよう祈念いたしております。

# 文法指導におけるビリーフ変化<sup>1)</sup>

島田 勝 正

## 1. はじめに

英語教師は、長年の生徒としての英語学習の体験や、あるいは、教師としての指導経験に基づき、「英語指導はかくあるべし」というビリーフ (belief) を無意識的に形成している。ビリーフは、肯定的に言えば、教育実践を支える信念であるが、否定的に言えば、それは、理論的な根拠や実践的な裏付けのない勝手な「思い込み」である (島田, 2022, p. 175)。

### 1.1 目的

本研究では、「英語科教育法Ⅰ」の授業を通して、受講生がどのように文法指導に対するビリーフを修正していくのかを追跡調査する。そして、どのような活動がそのビリーフの変化に貢献するのか、つまり、どのようなタスクが受講生のどのようなビリーフ変化に有効な影響を与えるのかを量的・質的に探る。したがって、本研究は「英語科教育法Ⅰ」の授業効果を量的・質的に検証した実践報告である。「英語科教育法Ⅰ」の授業の目的については、ガイダンス時に配布したハンドアウトに「本講義の主たる目的は、中学校、高等学校、大学等で経験した英語教育や英語学習を基盤にして作り上げた「思い込み (belief)」から、解放し、望ましい英語授業

---

キーワード：ビリーフ、文法指導、英語教師

のあり方を自己評価, 自己点検ができる視点, 観点を提供することにある」と明記されている。本研究は, この授業目的がどの程度達成されたのかを検証する授業評価でもある。

## 1.2 先行研究

島田(1996)は、「英語科教育法」の受講生45名の約1年間にわたるビリーフ変化を Lightbown & Spada(1993)の質問紙に基づいて量的に分析した。その結果, 「言語学習が模倣によるという意識が低下し, 習慣形成理論に基づく誤りの即座の訂正という指導技術への態度にも変化が見られる」と報告している(p. 36)。しかし, この調査結果が直接指導に結びつくわけでもない。

さらに, 島田(1996)は, 質問項目を増やすとともに記述を日本語に変更した。そして, 2か月にわたるビリーフ変化について, 「言語学習が模倣によるという思い込み」が軟化し, 「学習者の文法創造によって言語発達が進むという認識」が深まり, 「生徒の間違いはすべて迅速に訂正する必要がないという態度」に変化してきていると述べている。また, 「人間には生得的な言語習得能力があり, 母語と外国語, 大人と子供を問わず習得過程に類似性があるという意識」は育ったが, 「誤りの原因を母語からの負の学習転移であるとする意識」は残っていると報告している。そして, 学習理論を如何に教育実践に結実させるのかを今後の課題として挙げている(p. 37)。

また, 島田(2002)は, Tillema(1998)およびCabaroğlu & Roberts(2000)を参照してビリーフの修正過程を認知, 強化, 深化, 追加, 再編, 結合, 否定, 逆転, 無変化の9つに分類した。そして, その分類にしたがって受講生22名のビリーフ修正に関する内省レポートを分析した。そして, 深化, 否定, 追加の修正過程が多く観察されたことは授業実践の少ない就職前の(pre-service)教員志望学生の特徴であると考察している。具体的には, 「言

## 文法指導におけるビリーフ変化

語習得は学習者が自ら規則を発見する創造的構築の過程であること」、「言語知識には分析と自動化の2種類があること」、「話す必然性のある教材を使用し、言語使用を通して言語学習をする必要があること」、「誤りには柔軟な対応が必要であること」等のビリーフ修正が顕著であり、ビリーフの修正が著しかった項目はいずれも「講義よりもワークショップによって取り扱われた」と説明している。しかしながら、ビリーフ修正は「個人により既存ビリーフが異なること、ビリーフの種類により修正しやすいもの／しにくいものがあること、処遇タスクにより修正を促す／促さないものがあること等の複数の要因により影響されるので一元的な説明が難しい」と述べている (p. 21)。

Busch (2010) は、3年間にわたる第二言語習得理論コース（指導方法論は含まない）を受講した381名の教員志望学生の受講前と受講後のビリーフ変化を、第二言語学習の難しさ、適性、言語学習の本質、コミュニケーション方略の4つのカテゴリーに分けて比較した。反復して練習を多くすることが重要であることや、外国語学習における最も重要な部分は語彙や文法の学習であるなどに有意差が得られた。しかし、質問項目は総花的で、特定の領域を対象としたものではない。また、具体的な指導技術論とその背後にある学習理論への言及がない。さらに、第二言語習得コースの授業内容が「言語学習目録についてのビリーフ」の各項目にどのように反映されているのかが明示されていないので、両者の因果関係は依然ブラックボックスのままである。

猫田 (2014) は、40項目から構成される質問紙を作成し、35名の「英語科教育概論」受講生を対象にビリーフ変化の調査を実施した。そして、英語教師、目的・目標、カリキュラム、言語習得、学習者、授業、指導法、テスト・評価の8つのカテゴリーに分けて受講前と受講後のビリーフの変化を分析している。「コミュニケーション能力をつけるためには文法学習は役に立たない」や、「生徒の間違いはすべて明示的に訂正すべきである」

等の多くの項目に有意な差がみられた。しかしながら、授業内容と質問項目の関係を示す表に記載されている「授業の概要」欄には、文法の指導方法や留意点を「説明」としてだけ記述されており、授業で行った具体的なタスクへの言及がない。

本研究では、前述したさまざまな問題点を克服して、調査対象を文法指導に特化し、授業で扱ったタスクとビリーフ修正との関連を量的・質的に探ることを目的としている。

## 2. 研究方法

### 2.1 参加者

参加者は2023年秋学期に「英語科教育法Ⅰ」を受講した学生12名である。ただし、そのうち1名はビリーフテストの紙版とそれを転記したWeb版(Google Forms)とに齟齬があり、分析対象から削除した。

### 2.2 授業の概要

「英語科教育法Ⅰ」の授業の前半の主たる目的は、英語の文法指導において、文法説明に代わる「気づき」をうながす指導方法を紹介することであった。そして、それは、受講生を文法指導に対する「思い込み」から解放し、望ましい文法指導のあり方を自己評価、自己点検する視点・観点を提供することでもあった。

2023年の秋学期は教科書として島田(2022)『「気づき」をうながす文法指導—英語のアクティブ・ラーニング』を使用した。この書籍は教師による一方的な文法説明に代わるものとして、アクティブ・ラーニングを導く課題解決型の文法指導を提案している。具体的には、第二言語習得過程の各々の段階に対応して、意識化指導、認知文法、ディスコース、インプット、アウトプット、タスク、訂正フィードバックの7つの観点から、「気づき」

## 文法指導におけるビリーフ変化

をうながす英語の文法指導の基盤となる理論を解説し、その実践例を紹介している。

授業の基本的な流れは毎回授業日までに提出する課題を出し、授業中にその答え合わせをグループディスカッションや発表形式で行った。教科書は予習や最後のまとめの段階で使うことが多かった。ちなみに定期テストはこの教科書の元になっている理論が書かれた原典から専門用語（英語）をピックアップして出題した。

表1は教科書の関連する章と課題および後述するテスト項目との対応を示している。

表1：教科書の章・課題・テスト項目の対応

章	章タイトル	課題番号	課題タイトル	テスト項目番号
1	第二言語習得と文法指導	1	明示的知識と暗示的知識	5
		2	創造的構築	2, 3, 4
		3	転移	1
2	文法指導の分類	本研究では取り扱いなし		
3	意識化指導による気づき	5	演繹法と帰納法	6, 7, 8, 9
		6	意識化タスク	10
4	認知文法による気づき	7	認知文法	11, 12, 13, 14, 15
5	ディスコースによる気づき	8	ディスコース	16, 17, 18, 19, 20
6	インプットによる気づき	9	オーラルイントロダクション	21, 22, 23
		10	インプット処理指導	24, 25
7	アウトプットによる気づき	11	アウトプット	26, 27, 28
		16	文脈化	30
		17	機能	29
8	タスクによる気づき	12	タスク支援	31, 34, 35
		13	タスク基盤	32
		14	タスクと教科書	33
		15	コミュニケーション方略	
9	訂正フィードバックによる気づき	4	訂正フィードバック	36, 37, 38, 39, 40

### 2.3 ビリーフテスト

ビリーフテストに関しては、上述した島田（1996, 2002）や猫田（2014）があるが、いずれも英語指導全般を取り扱い、総花的で文法指導に特化したものではない。

それに対して、本研究では研究対象を文法指導に特化して、島田（2022）の8つの章（2章「文法指導の分類」を除く）に対応した40項目の記述文から成るビリーフテストを開発した。各章に5項目を配している。

これらの英語の文法指導に関する40項目の記述に対して、5 = 「確かにそう思う」、4 = 「ややそう思う」、3 = 「どちらとも言えない」、2 = 「あまりそう思わない」、1 = 「まったくそう思わない」という5件法による回答を求めた（附録1参照）。基本的にすべての設問は「望ましくない」ビリーフに対する受容度を測定することを念頭において作成した。しかし、精査すると20番の「文と文はいつもつながっている」は反転項目であるので、集計の際には尺度の方向性を修正した（安間・渡邊, 2023）。

ビリーフテストは一連の授業の前後に同じものをそれぞれ1回実施した。

### 2.4 レポート

レポートは文法指導に関する一連の授業の事前と事後を比較して、どのようなビリーフが変化したのかについて参加者の内省をうながすことを目的としている（附録2参照）。具体的なレポートの書き方としては、まず、既存ビリーフを記述し（例えば、文法は明示的に教えるべしと思っていた）、次に、「英語科教育法Ⅰ」でどのようなことを学習したのか（例えば、具体的な訂正フィードバックの方法）を述べて、その学習の結果、既存ビリーフがどのように変化したのかについてその理由とともに説明することを要求した（例えば、誤りの訂正は、暗示的である方がよいと思うようになった。その理由は、誤りに生徒が気づくことによって第二言語習得が促進される

からである)。

回収したビリーフテストを返却する際に、事前テストと事後テストの得点差のデータも併せて提供した。データには得点差が±2点以上の項目を黄色でマークした。事前・事後の得点差が大きい順に回答するように指示したが、取りあげる項目は5点とし、任意に選択させた。猫田(2014)が「どの項目を取り上げるかについては学生の判断に任せているため、考え方が変化したすべての項目について書かれているわけではない」と指摘するように(p.176)、中には、得点差が同じであっても取り上げられていない項目はある。

### 3. 結果

表2は、ビリーフテスト各項目の事前テストと事後テストの平均点およびその差を示したものである。恣意的ではあるが、0.6以上の差があった項目は9点あり、点差の大きい順に次のとおりである。

項目37「生徒の誤りは教師が訂正すべきである」0.9(3.8→2.9)

項目8「文法はまず説明をし、その後に練習問題をするのがよい」0.8(4.4→3.5)

項目7「文法規則は教師が明確に示すべきである」0.7(4.1→3.4)

項目13「動詞の後に動名詞と不定詞のどちらが来るかは動詞により決まっている」0.6(3.4→2.7)

項目20「文と文はいつもつながっている」0.7(3.4→2.7) この項目は反転項目であるので、平均点の差の算出は事後から事前の平均点を引いた。

項目38「誤りははっきりと指摘し、訂正すべきである」0.7(4.5→3.8)

項目39「誤りはすぐに訂正すべきである」0.7(4.1→3.4)

項目3「英語は反復によって習得される」0.6(4.7→4.1)

平均点は事前と事後の変化があっても正(+)と負(-)がある場合に

表2：ピリーフ変化（項目）

章	1					3				
項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
事前	3.2	3.9	4.7	2.4	2.0	3.5	4.1	4.4	2.2	2.3
事後	3.5	4.3	4.1	2.4	1.7	3.2	3.4	3.5	2.4	1.6
差	-0.4	-0.4	0.6	0.0	0.3	0.3	0.7	0.8	-0.2	0.6
望ましい変化	3	1	4	3	4	5	6	7	3	5
変化なし	3	6	6	5	4	2	2	2	4	6
望ましくない変化	5	4	1	3	3	4	3	2	4	0

章	4					5				
項目番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
事前	1.5	3.1	3.4	3.5	2.3	3.8	3.5	3.3	3.5	3.4
事後	1.5	3.0	2.7	2.9	1.8	3.5	3.4	3.1	3.3	2.7
差	0.1	0.1	0.6	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	0.2	0.7
望ましい変化	3	2	6	3	4	5	5	2	3	5
変化なし	6	8	2	3	5	4	4	8	4	4
望ましくない変化	2	1	3	2	2	2	2	1	4	2

章	6					7				
項目番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
事前	2.5	2.8	3.3	3.2	3.4	4.3	3.5	3.6	2.7	2.7
事後	2.9	2.5	3.0	3.2	3.6	4.4	3.4	3.5	2.8	3.1
差	-0.4	0.3	0.3	0.0	-0.3	-0.1	0.2	0.2	-0.1	-0.4
望ましい変化	3	5	5	2	1	4	4	3	1	3
変化なし	3	3	4	7	7	4	2	5	9	2
望ましくない変化	5	3	2	2	3	3	5	3	1	6

章	8					9				
項目番号	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
事前	3.1	2.9	2.3	3.4	4.1	4.7	3.8	4.5	4.1	4.1
事後	3.3	3.3	2.6	3.3	4.2	4.3	2.9	3.8	3.4	3.6
差	-0.2	-0.4	-0.4	0.1	-0.1	0.5	0.9	0.7	0.7	0.5
望ましい変化	3	2	1	5	1	3	6	4	6	5
変化なし	4	4	7	3	8	6	4	6	4	3
望ましくない変化	4	5	3	3	2	2	1	1	1	3

## 文法指導におけるビリーフ変化

表3：ビリーフ変化（章）

章	1	3	4	5	6	7	8	9
事前	16.2	16.4	13.7	17.5	15.2	16.9	15.7	21.3
事後	16.0	14.1	11.9	16.0	15.3	17.1	16.6	18.0
差	0.2	2.3	1.8	1.5	-0.1	-0.2	-0.9	3.3
望ましい変化	6	7	9	6	5	4	3	6
変化なし	4	3	2	5	5	5	6	2
望ましくない変化	1	1	0	0	1	2	2	3

は、両者が相殺されてしまうことが問題点として挙げられる（例えば、 $(+2 + -2) = 0$ ）。そこで、表2の下3段に望ましい変化、変化なし、望ましくない変化とビリーフ変化の方向を示した参加者の人数を示した。中でも項目30（「文型練習は単調である」）では、望ましくない変化が過半数（6名）に達している。

表3は、島田（2022）の章ごとに事前テストと事後テストの平均点の差を算出したものである。まず、その差が一番大きいのは9章（訂正フィードバック）の3.3（21.3 → 18.0）である。この差には項目37, 38, 39が貢献している。次に、その差が大きいのは3章（意識化タスク）の2.3（16.4 → 14.1）である。この差は項目7, 8, 10に起因する。さらに、平均点差の大きい順に、4章（認知文法）1.8（13.7 → 11.9）、5章（ディスコース）1.5（17.5 → 16.0）と続く。1章（第二言語習得）0.2（16.2 → 16.0）、6章（インプット）-0.1（15.2 → 15.3）、7章（アウトプット）-0.2（16.9 → 17.1）については大きな差はなかった。8章（タスク）に関しては、-0.9（15.7 → 16.6）と望ましくない方向に変化している。

## 4. 考察

本節では8つの章の一つひとつにおけるビリーフの変化に関して、望ましい変化だけでなく望ましくない変化も含めてその結果に考察を加える。

(1) 言語習得 (1章) では、言語習得のプロセスやメカニズムについて学習し、文法がインプットに果たす役割について考えた。言語習得が習慣形成ではなくて創造的構築であることに気づかせる狙いがあったが、特に顕著な変化は見られなかった。「英語は反復によって習得される」(項目3) については、参加者の一人が「確かにそう思う」から一気に「まったくそう思わない」と望ましい変化を経験している。変化なしが半分以上(6名) もいるのに、参加者数が少ないのでこの一人の変化が全体への望ましい変化(0.6) に大きな影響を与えている。

(2) 意識化タスク(3章) においては、教師の一方的な文法説明に代わるものとして、データを与えて生徒自身に規則を発見させようとする「意識化タスク(consciousness-raising task)」について考えたところ、訂正フィードバック(9章) に次いで高い得点差を得た。「文法規則は教師が明確に示すべきである」(項目7) に関して、2名の参加者が顕著な望ましい変化(5→2, 4→1) を示した。この変化の理由について参加者が書いたレポートの中に「実際に授業で「何を」→「誰に」「誰に」→「何を」を用いて、自分たちで規則を導くことができたからである」という記述がみられた。教師による説明ではなくて学生が生徒の立場で実際に課題に取り組む学習をうながす、課題解決型ワークショップの授業(課題6) を行ったことが望ましいピリーフ変化に功を奏したと考えられる。

(3) 認知文法(4章) では、認知文法(cognitive grammar) を援用して物事の認知的なとらえ方が言語形式にどのように反映されるのかをみた(課題7)。得点差は意識化タスクに次いで大きかった。また、望ましい変化の件数が9名と一番多かった。ある参加者は「動詞の後に動名詞と不定詞のどちらが来るかは動詞ごとに覚えるしかない」(項目13) と思っていたが、「動詞ごとに覚えなくてよいと思うようになった」と述べている。そして、その理由に一つ目の行為と二つ目の行為における近接性を学習したこと

## 文法指導におけるビリーフ変化

(課題7) を挙げている。また、別の参加者は「仮定法過去では過去の事実  
に反することを仮定する」(項目14) と思っていたが、過去の事実  
に反する仮定ではなくて現在の事実  
に反する仮定と修正している。彼女は、  
仮定法において「過去という時制は時間的な距離を表しているのではなく、  
ありそうもないという現実からの距離を表している」ことを学習したから  
であると述べている。

(4) ディスコース(5章)では、ディスコース(discourse)の中で言語  
形式がどのように使われているかをみた。得点差は認知文法に次いで大き  
かった。ある参加者のレポートには、事前は「文と文とはつながっていな  
いと思っていた」が、事後には「明示的に示されていない文と文には必ず  
ギャップがあるが文と文はいつもつながっていると思うようになった」と  
いう記述がみられた。つまり、文と文とが明示的なつながりをもつ結束性  
(cohesion)だけでなく、明示的なつながりをもたない一貫性(coherence)  
の場合でもそのギャップを推論で補えば文と文はつながることを学習した  
のである。

(5) インプット(6章)では、インプットの与え方をその頻度(frequency)  
と顕著性(saliency)から考えるとともに、不適切な処理方略を是正するた  
めのインプット処理指導を検討した。2回の授業の事前・事後間に特に顕  
著な得点差は見られなかったが、「聞いたり読んだりする量は多いほどい  
いというわけではない」(項目22)では、望ましい変化が5名と望ましく  
ない変化3名よりも上回っている。また、「聞く・読むよりも話す・書く  
方が大切である」(項目23)も同様に望ましい変化が5名と望ましくなく  
変化2名よりも上回っている。ある参加者は、「私が受けた英語教育では  
聞いたり読んだりすることがとても少なくて書く量がかなり多かった」が、  
「言語知識をたくさんインプットしなければアウトプットしづらい」こと  
に気づいたと述べている。

(6) アウトプット (7章) においては、アウトプットにより自分の弱点に気づかせる指導方法と単調な繰り返しを緩和する文脈化ドリルをみた。インプットと同様に、事前・事後の得点差に大きな変化はなかった。しかし、「英会話ではまずモデルを示すべきである」(項目 27) に関しては、望ましくない変化が5名と望ましい変化4名よりも多い。文法知識の正確さを向上させるためには、アウトプットさせて自分の弱点 (hole) に気づかせるという考え方が重要であるが、ある程度のレベルに達していないと簡単なアウトプットさえもできないからと考えたからかもしれない。また、「文型練習は単調である」(項目 30) に関しては、望ましくないビリーフへの変化が過半数の6名にみられる。項目 30 に対応する課題 16 においては、任意に文法事項を1つ選び、その文法項目の3段階文脈化ドリル (contextualization drill) を考案させた。「文脈化」とは、ある文法項目が会話の流れの中で繰り返しでてくることをいう (島田, 2022, pp. 116-118)。

文型練習 (pattern practice) における単調な繰り返しをよりリアルな場面を想定した3段階文脈化ドリルを作成することにより、文型練習も単調ではないことに気づかせることを意図したが、参加者のレポートからは「文型練習は退屈なものである」というビリーフを強めてしまったことが読み取れる。当該の参加者は「文型練習には提示されたモデル文に対する反復練習、置換練習、変換練習が含まれ、コントロールされた刺激に対して正確に反応することが求められるが、与えられた文を機械的に操作しているにすぎず、乏しいものである」と記述している。

しかし、別の解釈をするとすれば、3段階式文脈化ドリルを作成する作業を通して、それと比較して従来の機械的な文型練習に対する「文型練習は単調である」というビリーフがより強くなったのかもしれない。もしそうであればこの項目は反転項目として扱った方がいいのかもしれない。

(7) タスク (8章) に関しては、提示→練習→産出の最後の段階でタス

## 文法指導におけるビリーフ変化

クを導入するタスク支援型 (task-supported) と、事前に文法指導を行わないというタスク基盤型 (task-based) があることを学習した。平均点の差 (-0.9 (15.7 → 16.6)) を見ていると望ましくない方向に差が出ており、タスクが望ましくないビリーフを導いた印象を受ける。該当する5項目中4項目に望ましくない変化がみられた。

項目を個別にみると、「話す練習では話す必然性がなくても仕方がない」(項目 32) に関しては、望ましい変化が2名に対して望ましくない変化が5名もみられた。タスクは学習者の間に何らかのギャップがあり、そのギャップを埋めるために情報を伝える、意見を述べる、意味を推論することが要求される。課題 13 においては、無人島に持っていくものの優先順序を決めるというタスクの性格上、意見差を埋めるために話す必然性があることは明白である。しかし、「話す練習では話す必然性がなくても仕方がない」というビリーフは根強く、この課題がビリーフを変化させるほどの効力がなかったと考えざるを得ない。

さらに、「話す練習をするときは教科書を見てはいけない」(項目 33) に関しては、望ましい変化が1名に対して望ましくない変化が3名とその差は顕著である。教科書の本文には産出タスク遂行の際に参照すべき資料、すなわち言語リソースが多く含まれている。意味内容は自分で準備して言語形式は教科書本文を模倣して使用すればよいというのが「借用 (borrowing)」の考え方である。課題 14 のタスクにおいては教科書の本文からの借用の練習を行ったが、その効果はみられず、「話す練習をするときは教科書を見てはいけない」というビリーフは根強く残っている。

5項目中、望ましい変化が5名にあった唯一の項目は、「まず文法説明をしてからコミュニケーション活動に入るべきである」(項目 34) である。前述した無人島タスクを実際にやってみることで、タスク基盤の考え方、つまり、文法後出しの考え方がある程度は理解されたと考える。

(8) 訂正フィードバック (9章) は、生徒が誤りに気づくためにはどのような訂正フィードバックを与えたらいいのかを考えた (課題4)。この章が、事前・事後の得点差が一番著しかった。

特に、「生徒の誤りは教師が訂正すべきである」(項目37)に関する変化は、訂正フィードバックには明示的な訂正 (explicit correction) 以外にも言い直し (recast), 明確化要求 (clarification request), メタ言語的解説 (metalinguistic comments), 誘出 (elicitation), 繰り返し (repetition) などの多様な方略があることを学習したからであると考えられる。そして、これらの訂正フィードバックの6種類のうち4種類が生徒自身に誤りに気づかせようとする暗示的な方略であることを学習したからだと考えられる。つまり、今までは教師が明示的に生徒の誤りを訂正するものと思い込んでいたのに対して、訂正フィードバックの多様な方略という新しい情報を得て、ビリーフの否定・逆転が促進されたのである (島田2002, pp. 19-20; Cabaroglu & Roberts, 2000, p. 393; Tillema, 1998, p. 221.)。

## 5. まとめ

英語教師は、生徒としての英語学習の体験や、あるいは、教師としての指導経験に基づき、「英語指導はかくあるべし」というビリーフ (belief) を無意識的に形成している。ビリーフは、肯定的にいえば、教育実践を支える信念であるが、否定的にいえば、それは、理論的な根拠や実践的な裏付けのない勝手な「思い込み」である。本研究では、私が担当する「英語科教育法Ⅰ」において、文法指導に関して受講生にどのようなビリーフ変化がみられるか、また、望ましいビリーフ変化をうながすタスクにはどのような特徴があるのかを示した。

本実践においては教科書として島田 (2022) を使用した。この書籍は教師による一方的な文法説明に代わるものとして、アクティブ・ラーニング

## 文法指導におけるビリーフ変化

を導く課題解決型の文法指導を提案している。具体的には、第二言語習得過程の各々の段階に対応して、意識化指導、認知文法、ディスコース、インプット、アウトプット、タスク、訂正フィードバックの7つの観点から、「気づき」をうながす英語の文法指導の基盤となる理論を解説し、その実践例を紹介している。授業の基本的な流れは毎回課題を出し、授業中にその答え合わせをグループディスカッションや発表形式で行った。教科書は予習や最後のまとめに使用した。

上記の島田（2022）の8つの各章に対応した40項目から成るビリーフテストを開発した。そして、「英語科教育法Ⅰ」において文法指導に関する一連の授業の事前と事後に受講生11名にそのビリーフテストを課した。さらに、事前・事後テストの得点差を記載した資料を配布し、ビリーフ変化の理由を自己分析するレポートを課した。その得点差を分析したところ、訂正フィードバック、意識化タスク、認知文法、ディスコースに関しては望ましいビリーフの変化が見られたが、タスクに関しては望ましいビリーフの変化が見られなかった。

### 注

- 1) 本研究は第53回中部地区英語教育学会富山大会（2024年6月23日；富山大学）における口頭発表の資料に加筆修正したものである。また、本研究の一部は2023年度春学期「特別研修（国内B）」の成果をベースにしている。ここに記して感謝の意を表す。

### 引用文献

- 安間一雄・渡邊一弘（2023）. 「文法指導と誤り訂正は是か非か：Schultz 論文を読む」『外国語教育研究所紀要』12, 87-103.
- Busch, D. (2010). Pre-service teacher beliefs about language learning: The second language acquisition course as an agent for change. *Language*

- Teaching Research*, 14, 318-337.
- Cabaroglu, N. & J. Roberts. (2000). Developing in student teachers' pre-existing beliefs during a 1-year PGCE programme. *System*, 28, 387-402.
- 猫田和明 (2014). 「英語科教育概論」を受講した学生の英語教授・学習についてのビリーフの変化』『研究論叢. 第3部, 芸術・体育・教育・心理』(山  
口大学教育学部広報戦略部編) 64, 175-191.
- 島田勝正 (1996). 「英語科教育法」受講生の英語学習・教授に対する意識変化」  
『中部地区英語教育学会紀要』26, 35-40.
- 島田勝正 (2002). 「英語学習・指導に関するビリーフ修正の質的分析」『桃山  
学院大学総合研究所紀要』28 (2), 17-24.
- 島田勝正 (2022). 『「気づき」をうながす文法指導—英語のアクティブ・ラー  
ニング』ひつじ書房.
- Tillema, H. (1998). Stability and change in student teachers' beliefs about  
teaching. *Teachers and Teaching: theory and practice* 4, 217-228.

## 文法指導におけるビリーフ変化

### 附録1：ビリーフテスト

#### ビリーフテスト

下記の文法指導に関する記述について、5段階（5 = 「確かにそう思う」、4 = 「ややそう思う」、3 = 「どちらとも言えない」、2 = 「あまりそう思わない」、1 = 「まったくそう思わない」）で、答えて下さい。

- 1 生徒の誤りは日本語の影響による。
- 2 英語は模倣によって習得される。
- 3 英語は反復によって習得される。
- 4 生徒は母語話者と同じように英語を習得する。
- 5 文法知識は会話には役立たない。
- 6 生徒は文法規則を暗記すべきである。
- 7 文法規則は教師が明確に示すべきである。
- 8 文法はまず説明をし、その後に練習問題をするのがよい。
- 9 文法説明の例文は少ない方がよい。
- 10 生徒は自分で規則を見つけることができない。
- 11 文法に意味はない。
- 12 物事のとらえ方が言語形式を変えるわけではない。
- 13 動詞の後に動名詞と不定詞のどちらが来るかは動詞により決まっている。
- 14 仮定法過去では過去の事実と反することを仮定する。
- 15 英語では行為を受ける人やものには焦点を当てない。
- 16 例文は単一文で示した方がわかりやすい。
- 17 文の初めに重要な情報が来る。
- 18 複文では従属節を文の前半に置く。
- 19 受動態は能動態の主語と目的語を入れ替える。
- 20 文と文はいつもつながっている。

- 21 文法の授業は英語で行わなくてもよい。
- 22 聞いたり読んだりする量は多いほどいいというわけではない。
- 23 聞く・読むよりも話す・書く方が大切である。
- 24 文を理解するとき、生徒は意味内容よりも文法形式を優先する。
- 25 文の初めに来る名詞が行為をする人（もの）である。
- 26 話したり書いたりすることにより新しい文法知識が身につく。
- 27 英会話ではまずモデルを示すべきである。
- 28 英作文ではまずモデルを示すべきである。
- 29 1つの言いたいことを表すために1つの文法形式がある。
- 30 文型練習は単調である。
- 31 言語学習は意味よりも言語形式に焦点を当てるべきである。
- 32 話す練習では話す必然性がなくても仕方がない。
- 33 話す練習をするときは教科書を見てはいけない。
- 34 まず文法説明をしてからコミュニケーション活動に入るべきである。
- 35 文法範疇（項目）は教える前に決めておく。
- 36 誤りは訂正すべきである。
- 37 生徒の誤りは教師が訂正すべきである。
- 38 誤りははっきりと指摘し、訂正すべきである。
- 39 誤りはすぐに訂正すべきである。
- 40 誤りはすべて訂正すべきである。

## 附録2：レポート

●テーマ：「文法指導に関するピリーフの修正（変化）の自己分析」  
「英語科教育法Ⅰ」の授業を受講して、大きく修正された文法指導に関するピリーフ5項目について述べなさい。

## 文法指導におけるビリーフ変化

### ●レポートの形式

レポートの書式は下記の通りとする。どのようなビリーフがどのように修正されたのかがわかるように詳述すること。

- A. 項目番号 ( ): ビリーフテスト1〈青〉の得点 ( ) - ビリーフテスト2〈黄〉の得点 ( ) = 得点差 ( )  
〈記入例〉38: 5-3=2, 23: 2-5=-3
- B. 既存ビリーフの記述  
(例) 「文法の指導は○○○であるべし」「文法は○○○と教えるべし」と思っていた。
- C. 「英語科教育法 I」で学習した内容  
(例) 「「英語科教育法 I」の授業で○○○と習った」
- D. ビリーフ修正  
(例) 「文法の指導は○○○であると思うようになった。その理由は○○○である。」

### 附録3：課題

#### 【課題4】

1. ファイル Ellis&Shintani (2014) \_3\_Corrective Feedback.pdf に記載されている6種類の訂正フィードバック (Corrective Feedback) の説明を読みなさい。教科書の pp. 165-171 を読みなさい。
2. コミュニケーション活動のときにある生徒が次のように言った。この生徒の誤りに対してどのように対応したらよいか。ただし、went が不規則変化することを未習の場合と既習の場合に分けて、それぞれ2例考えなさい。

T: Where did you go last Sunday?

S: I goed to Tokyo last Sunday.

T: \_\_\_\_\_ .

- (1) went (不規則変化) が未習の場合
- (2) went (不規則変化) が既習の場合

【課題 6】

■ データ

〈カード A〉

- × We reported Mike the car accident.
- He bought my children a lot of presents.
- We suggested a good plan to Mary.
- He gave pretty flowers to me.

〈カード B〉

- We reported the incident to the police.
- He bought a car for his son.
- × I suggested him the idea.
- I gave her some chocolates.

(Fotos, Homan & Poel, 1994, pp. 57-58 を改変)

■ 操作

指示① 問題文の正誤に関する情報を相手から聞き取りなさい。ただし、お互いにカードを見せ合ってははいけません。注:「課題 6」では「カード A」と「カード B」の両方が見えています。

指示② 日本語の「何を」に相当する語句を□で、「誰に」に相当する語句を○で囲みなさい。

指示③ 問題文が文法的に正しい場合には○が、文法的に正しくない場合には×がついています。どんな場合に×がついていますか。

▶ ヒント: 動詞の後には「何を」と「誰に」が来ます。その順序に注目しなさい。

文法指導におけるビリーフ変化

動詞	何を→誰に	誰に→何を
report		
buy		
suggest		
give		

指示④ 相手の情報を聞き取って上の表に○×を記入しなさい。

▶ ヒント：×は2つ入ります。

指示⑤ 表に基づいて4つの動詞を2つのグループに分類しなさい。

▶ ヒント：動詞はグループごとにそれぞれ2つ入ります。

1. 指示③⑤について回答しなさい。
2. 上記の「2重目的語」の意識化タスクについて、Ellis (1997) 『Designing C-Rtasks. pdf』の pp. 161-162 に記載されている Data options 1～5 および Operation types 1～7のうち、それぞれ、どれに該当するか（データは略記号を、操作は数字を記入する。操作は該当するものをすべて挙げる）。

Data options	1	A C
	2	O W
	3	D C
	4	W D
	5	G N
Operation types		1 2 3 4 5 6 7

【課題7】

1. まずは、自分で（教科書の答えを見ないで）教科書に載っている意識化タスク（不定詞と動名詞〈pp. 44-45〉、仮定法〈pp. 46-47〉、受動態〈pp. 50-51〉）をやってみましょう。
2. 次にその解説を読んで答え合わせをしなさい。

3. 最後に、これらの認知文法を応用した文法指導が中学校・高校で受けた文法指導とどのように異なるのかを記述しなさい。また、これらの文法指導の問題点を挙げてもよろしい。

● M-Port への課題提出は上記の 3. について文法範疇ごとに書いてください。

- (1) 不定詞と動名詞
- (2) 仮定法
- (3) 受動態

**【課題 13】**

問 1：次の文を読んで、無人島 (Deserted Island) へ持っていく必要がある項目を、優先順序にしたがって、3 点選びなさい。

You and your friends are planning to go to a deserted island, which is 100 km away from the nearest land. Your survival depends on the items that you will take with you. You have to choose the most essential items to take. The 15 items are listed below. Your task is to rank them in order of their importance. Write number 1 for the most important item, number 2 for the second most important item, and so on through to number 5. Use specific reasons to support your decision.

文法指導におけるビリーフ変化

- A. box of matches B. sunscreen C. 20 meters of nylon rope  
D. small transistor radio E. cellphone F. .45 caliber pistol  
G. tins of dried milk H. first-aid kit I. star map J. fishing rod  
K. 20 liters of water L. compass M. army knife N. crop seeds  
O. binoculars

問2：選択した項目名と、その理由を1～2行程度の英語で書きなさい。

1. 項目名：  
理由：
2. 項目名：  
理由：
3. 項目名：  
理由：

【課題14】

問3：教科書のコピー「辞書選び pdf.」（省略）を読みなさい。

●タスク3 電子辞書と紙の辞書のいずれを買うか決めなさい。

(1) 教科書本文をよく読んで2種類の辞書の長所と短所を下の表にまとめなさい。

	長所	短所
電子辞書		
紙の辞書		

(2) 教科書に記述されていない特徴を追加しなさい。

(3) 辞書を買う機会がまたあれば、どちらの辞書を選ぶかを決めなさい。

## 【課題 16】

任意に文法事項を1つ選び、その文法項目の3段階文脈化ドリル (Contextualization Drill) を考案しなさい (教科書 pp. 116-118 参照)。「文脈化」とは、ある文法項目が会話の流れの中で繰り返しでてくることをいう。A君とBさんの2名の対話とし、双方のやりとりが3回連続すること。

ステージ1ではA, B両者の機能も形式も固定する。

そして、ステージ2でBの機能と形式はともに固定する。ただし、Aの機能は固定し、形式は形式1, 形式2, 形式3, , , と変化させること。

ステージ3では、A, Bともに形式を変化させること (下表参照)。

ステージ	対話者	形式	機能
1	A	固定	固定
	B	固定	固定
2	A	変化	固定
	B	固定	固定
3	A	変化	固定
	B	変化	固定

## Changes in Beliefs about Grammar Instruction

SHIMADA Katsumasa

English teachers tend to unconsciously form some beliefs about teaching grammar because of their experiences while learning English as a student and while teaching English as a teacher at school. In a positive sense, beliefs are strong convictions that support teachers' daily teaching practices; however, in a negative sense, they are arbitrary assumptions without a theoretical background and practical evidence.

This study aims to explore how the students in my English Language Teaching Methodology course changed their beliefs about grammar instruction and which tasks were effective in promoting changes from negative to positive. *Noticing-oriented Grammar Instruction: Active Learning of English* (Shimada, 2022) was used as the textbook, which proposes discovery learning through problem-solving activities as an alternative to explaining grammar by the teachers. In the classes, students worked on activities and discussed problems while the grammar was explained.

A beliefs survey was developed and administered to 11 students as a pre- and post-test to examine what beliefs had changed. The test consisted of 40 items, each of which was supposed to measure the students' beliefs on a 5-point Likert scale. They were also required to describe how their beliefs related to grammar instruction had changed during the course of the program. The results indicate that beliefs in corrective feedback, consciousness-raising tasks, cognitive grammar, and discourse have desirably changed; however, no improvements in beliefs in task-based/supported language teaching have been observed.

# 中国帰国者家庭の子どもの言語生活に 影響する親の言語観と子の主体性を考える

—— Family Language Policy の視点から ——

友 沢 昭 江

## 1. はじめに

国境を越えて人々が移動し、異なる言語環境で生活することが年々増加している。先進国の中でも比較的人種、民族的多様性が低いとされる日本でもその傾向は年々顕著になっている。最新の統計によると、在留外国人数は約 359 万人、対前年末増減率 +5.2% で過去最高となっている（2024 年 6 月末現在、出入国在留管理庁）。少子高齢化が急速に進む日本において、この増加率は一層際立って見える。

増加スピードは国の想定 of 1.5 倍で、「国は欧米並みに人口の 1 割を超える時期を 2067 年ごろと想定するが、10 年ほど早まるペース」と見込まれ、「今の子どもたちが働き盛りになる頃には本格的な多国籍社会となる」ため「公的機関の多言語対応や母語が外国語の児童生徒への教育の整備を加速させる必要がある」<sup>1)</sup> との指摘がある。

来日外国人数の急増だけでなく、日本で暮らす期間の長期化傾向も指

---

キーワード：中国帰国者家庭、ファミリー・ランゲージ・ポリシー (Family Language Policy)、二言語環境、親の言語観、子の主体性 (Child Agency)

摘されている。観光客や親族訪問などの短期滞在者を除く外国人の滞在期間についての調査では、1996年に来日した人で3年以上生活したのは28.8%、2006年では32.3%、2016年では41.7%と上昇傾向にあることが分かっている<sup>2)</sup>。1990年の入管法改正により多くの日系ブラジル人が来日したが、当初の短期滞在（「デカセギ」）から出身国の景気後退により滞在が長期化した例なども知られている。

外国人の長期滞在者をどのように日本社会に統合していくかの方針も明確にされない中、日本語を母語としない子どもたちの言語教育を長いスパンで考えるには、国や学校などの社会機構のみならず、子どもたちの生活基盤となる家族の役割を考えることも重要である。どのように子育てをするかについて保護者の考えは最優先されるべきであり、日々の生活に追われて明確な意思形成の余裕がない場合でもそれは例外ではない。

本稿では、長期滞在家中が多いとされる中国帰国者家庭における子どもの言語に対する保護者の考えと子どもの思いについて考える。

## 2. ファミリー・ランゲージ・ポリシー

### (Family Language Policy: 以下 FLP) とは：先行研究

ファミリー・ランゲージ・ポリシー (FLP) は「家庭での家族間の言語使用に関する明示的で (explicit) 明白な (overt) 計画」と定義され、「家庭内で言語がどのように管理され、学ばれ、交渉 (negotiate) されるかについて包括的な研究の枠組みを提供した。」(King, Fogle & Logan-Terry, 2008, 907)

研究領域としての「言語政策 (初期は「言語計画」)」は1960年代には独立を果たした旧植民地国の抱える言語問題を解決することであったが、2000年前後からはより動的な社会、文化、イデオロギーシステムへと関心が移行した。しかしあくまで公的空間、国、学校、職場などの組織化され

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考えた (institutionalized) 文脈におけるもので、家庭のような親密な文脈は対象とならなかった。一方、子どもの言語習得 (child language acquisition) 研究は家庭での親子間の言語活動を詳細に分析することに焦点があり、親のもつ言語学習の目標や意志などには注意は向けられなかった。また、多くの研究は規範的な第一言語 (母語) 習得が中心で、バイリンガル言語習得に関するものは少なかった。

FLP の貢献は私的な領域での日々の言語活動とそれを支える親の言語イデオロギー、ピリーフ、言語学習の目標や成果などをより広い家族やコミュニティの文脈に置いてとらえ、特に複数言語環境にある家庭においては、家庭言語を保持し継承語学習を支援するようなマクロな視点の言語政策研究とをつなぐことであった。(King et. al, 2008)

Fogle & King (2013) は、複数言語環境にある家庭では保護者から子どもへの影響だけでなく、子ども (特に学齢期) による親への影響が大きく、親子間の社会化のベクトルが逆転することがあるとし、そうした「子どもの行為主体性 (Child Agency)」の重要性を指摘している。言語背景の異なる 6 家族の親子間の音声データとインタビューを分析し、子が親の FLP に抵抗したり、子の言語能力の向上により親の使用言語や FLP が変化することが報告されている。

近年、FLP に関する研究は家族構成、居住場所、日々使用する言語とその言語の社会的地位、家族の生活様式や言語使用の歴史、保護者の役割や保護者自身の言語にまつわる経験などを考慮し、より多層的に理解を深める方向にある。Smith-Christmas (2017) は状況や環境が異なれば一つの FLP が他の家族にも機能するとはいえず、そのためにもこれまでに焦点の当たっていないタイプの家族や異なる言語の組み合わせを分析する重要性を指摘している。これまでの研究対象は欧米の産業化された社会で生活する中産階級の家風に偏りがちだとも言われ、経済面や情報面でも恵まれた

環境における「加算的バイリンガル」育児や英語中心の事例だけでなく、言語の組み合わせや家族や子育てに関する文化や習慣も大きく異なる「非西洋」地域の事例を増やしていく必要があるとする。またデータ収集についても、親へのインタビューや家族間の言語使用の録音などが多く採られているが、変化のダイナミズムをとらえるためにも長期的、縦断的な研究が必要だとする<sup>3)</sup>。

### 3. 中国帰国者の言語環境について

戦前、戦中を現在の中国東北部（旧満州）で過ごした日本人<sup>4)</sup>は、敗戦時の過酷な逃避行の中で多くの死者を出した。その混乱の中で肉親と死別、生別し、中国人養父母に育てられた子どもたちは日本との国交がないために長い間帰還の道が閉ざされた。1972年の日中国交回復後、ようやく帰国が叶った残留邦人家族（実際には残留婦人および残留孤児とその中国人配偶者、その子や孫たちを総じて呼ぶ。以下「中国帰国者」)<sup>5)</sup>であるが、その言語生活は非常に特殊である。

望郷の思いで帰国した一世と配偶者、それに帯同あるいは「呼び寄せられた」二世や三世たちに対し、帰国後の受け入れ社会による就業や言語習得の支援は十分ではなく、なんとか親族が助け合って生活基盤を築き、ようやく三世、四世の世代が定住するまでになった。同じ二世、三世でも成人後に来日した人、あるいは年少時に来日し日本での教育経験をもつ人、そして先に帰国した二世、三世との結婚のために中国から来日した配偶者、日本生まれで日本での教育経験しかない三世、四世などが一つの家族を構成し、家族の日本語能力も日中二言語への思いもさまざまな状況の中で三世、四世の子どもは成長する。本稿ではこうした中国帰国者家庭における日本生まれの学齢期の子どもに焦点を当て、FLPの観点から親の意識や子どもの思いを中心に考察する。

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

2024年6月末現在の在留外国人数は359万人を超え、中国籍は約84.5万人(前年度末比2.2万人増)と最大である(出入国在留管理庁)。石井(2007)は日本の公立学校に在籍するポルトガル語、スペイン語、中国語、ベトナム語を背景とするJSLの子どもの言語教育に対する親の意識に関する大規模調査を行った。家庭言語環境が中国語のグループには、①大半の親の学歴が大学、大学院卒で、経済・社会的状況が安定し、一定レベルの日本語能力を備え、来日目的が留学や研究、あるいは企業や政府の派遣で大学や企業等に所属する専門職の家庭と、②半数を超える親が小卒、中卒で、滞日年数が長いにも関わらず、「帰国」後の日本語学習の機会に恵まれず日本語能力が低い居住グループがあり、その大部分は中国帰国者の家族であると指摘する。家庭で日本語を使うと回答した家庭でも、①のグループは親の日本語力が日本人と同等であることが多く、それは日本滞在中に得られる日本語学習機会の差にも起因するとある。すなわち大学や企業では日本語教育プログラムが整備され、学習のための時間や機会が確保されているのに対して、②のグループは日本への「帰国」初期の学習支援と帰国5年後までの再研修はあるが、あくまで働きながらであり、十分な学習機会が保証されているわけではなく、親の日本語力は必ずしも高くはない。

①のグループの子どもで滞日1年未満でも母語(中国語)も日本語も高い能力をもつ例があるが、親の日本語能力が高く、来日目的が企業派遣や留学であり、来日の準備としてある程度の日本語学習を行ってきたと考えられる。一方、②のグループの年少時(3.9歳)来日で、母語も日本語力も低い子どもの例では、親の日本語力があいさつ程度で、家庭で日本語を使うとしているものの、親が子どもの日本語力育成の支援ができないだけでなく、親子間の豊かなコミュニケーションが成立していないことも考えられると指摘する。①、②のグループともに子どもの将来の教育を日本で受けさせたいと希望する親が多く、そのために日本語能力を伸ばすことを

強く期待している。

家庭で中国語を主として使うと回答したグループでも子どもが接触する中国語は日常会話中心で、読み書きを含めた学習言語能力の育成につながるような言語環境を望むことは特に②のグループではむしろかしい。日中どちらの言語が家庭の主要言語であった場合でも、①の子どもは②の子どもに比べて二言語能力が高い傾向にあるとされる。

#### 4. 大阪府内 K 小学校の中国帰国者家庭の 児童の家庭言語環境調査と結果

志水他（2014）は大阪府内の小中学校 39 校<sup>6)</sup>を対象に 1989 年、2001 年、2013 年と調査を行い、子どもの家庭環境と学力格差の関連について分析を行った。なかでも 2013 年の調査では保護者を調査対象とし、家庭環境を構成する要素として P. ブルデューの三つの資本、「経済資本（収入）」、「文化資本（学歴や文化的活動）」、「社会関係資本（人と人とのつながり）」<sup>7)</sup>がどの程度子どもの学力を規定するかを検討した。そして、親の収入、学歴、文化的活動が格差を生む要因と指摘する一方、たとえ家庭の収入が相対的に少なくとも、親子のつながり、学校とのつながり、地域とのつながりが豊富であれば、学力を一定水準に保つことができると「社会関係資本」の重要性を指摘した（志水他、47）。

友沢（2019）は大阪府内の中国帰国者が集住する地区の小学校に 2011 年に入学した全員が日本生まれの中国帰国者家庭の児童 17 名の保護者を対象に、子どもが小学校一年時（2011～2012 年）と六年時（2016 年）に質問紙（日中二言語版）によるアンケート調査を行った。二回目のアンケートでは、家庭での親子、兄弟姉妹の会話における二言語使用の状況などに加え、授業参観や運動会などの学校行事への参加度、教員とのコミュニケーション、子どもに関する相談相手の有無、家庭での文化活動、中国の親戚

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考えるとのつながりなど社会関係資本に関わる質問項目を加えた<sup>8)</sup>。アンケート調査の結果の分析に際しては、研究チームが同じ子どもたちを対象に行った日本語と中国語の二言語能力（語彙力、会話力、読書力）の調査結果（真嶋他，2019）と合わせて分析を行った。以下は調査結果のまとめである。

(1) 中国語能力が高い児童の家庭では親子間で双方向の中国語使用の割合が高い（「いつも」か「ほとんど」中国語が60～80%。日本生まれの兄弟間でも30%台と比較的高い）。

(2) 中国語力が低い児童の家庭では親子間（特に父親）で中国語使用の割合が低い（「あまり使わない」が60%，兄弟間では100%）。

(3) 中国語保持のために家庭で行っていることとして、①中国語で話す、②中国のことを話題にする、③親戚と連絡を取る、④中国に帰省する、の項目の頻度と中国語能力に相関が見られた。

(4) 日本語能力<sup>9)</sup>が高い児童は「本が好き」で、「家で本を読む」「親や子自身が本を買う」「学校や公共図書館で借りる」習慣がある。一方、日本語力が中程度あるいはやや低い児童でも「本が好き」「家で読む」「親や子が買う」の例が中にはあることも、後に述べる保護者へのインタビューを通して分かった。

(5) 日本語能力が高い児童の親は日本語能力が高い（父親の日本語力が4技能で「十分できる」が60%以上、母親で「まあまあできる」が60～100%）。

(6) 日本語能力が低い児童の親の日本語能力は低く、「十分できる」が0%，父親で「全然できない」が16～33%，母親で16%（ただし「読む」と「書く」について。「聞く」「話す」ができない母親は0%）。

(7) 子の中国語能力への親の期待は、中国語能力が高い児童の親は高いレベルの能力、特に「話す：普通語を使って仕事ができる」を求めており、「読む：簡単な本が読める」，「書く：簡単なメモや手紙が書ける」については

希望するレベルがやや低めになっている。

(8) 中国語能力が低い児童の親は子の中国語能力で、「話す：保護者の話しかけに答える」、「読む：簡単な簡体字が読める」、「書く：簡単な簡体字が書ける」と最も低いレベルの技能を期待するに止まっている。

(9) 家庭の文化活動では「お花見」「クリスマス」「こどもの日」などの日本の行事の実施率が高く、中国の文化活動では「春節」「端午節（ちまき）」「八月節（月餅）」などの実施率が高い。家庭での日中両文化活動の実施率が高いのは子の日本語力が高い家庭で、日本語力が低い家庭での実施率は低くなっている。

(10) 帰省は中国との繋がりを確認する重要な機会だが、子の中国語力が高い家庭の帰省回数は「これまでに4回～5回」が50%以上で、中国語力が低い家庭は「帰省なし」が60%を越えている。また、子の中国語力が高い家庭は帰省中に児童を現地校に入れるなどして、中国語学習の場を与えていることが分かった。

決して経済的にも文化的にも豊かな環境にあるとはいえない中、意識して家庭内の言語使用や文化的要素を保持しようとの努力が感じられる。

## 5. インタビュー調査とその結果

2回のアンケート調査の結果を受けて、さらに子どもの教育（中国語保持、日本語学習、学校での学び）や日常生活における子どもとの関係について深く知りたいと考え、小学校卒業を控えた2016年12月に子どもの日本語能力と中国語能力の観点から選んだ五つの家族にインタビューを行った。インタビューは保護者の家庭を訪問して行った。日本語によるインタビューに不安があるとのことで、子どもたちが在籍する小学校の教員で中国ルーツ児童を中心に指導にあたり、保護者との関係も強かった中国出身の女性教諭に通訳をしてもらった。

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

質問紙によるアンケートでは見えなかった保護者の考えを知ることができたが、詳しい考察は紙幅の関係で友沢（2019）ではアンケート調査分析の最後でおおまかに言及するに止まった。その後、小学一年生から六年生まで継続して言語能力や家庭環境について調査を行ってきた子どもたちが高校卒業を目前にした時期に一回目のインタビューを受けてくれた家族に連絡をとり、「子育てのゴール」ともいえる段階でこれまでの振り返ってもらうため二回目のインタビューを計画した。

二回目も家族との連絡は一回目と同じ中国出身の小学校教諭の協力で行ったが、当該教諭はすでに他校に異動しており、保護者との連絡はそれほど密には行っていなかったこともあり、一回目の五つの家族のうちの3家族とのみ連絡が取れた。そこで小学校一年時からの調査対象の中の1家族を加え、4家族に対して二回目のインタビューを行った。以下に一回目と二回目のインタビューで得られたデータを詳しく考察することで、中国帰国者家庭の親の考えと子の主体性について考えることとする。

## 5.1 インタビュー調査の概要

インタビュー調査の考察に入る前に、2回の調査の概要を簡単に以下にまとめておく。いずれのインタビューも1時間～1時間半程度の長さ。

第一回調査：2016年12月、対象者5家族（C02, C12, C13, C15, C17）<sup>10)</sup>

- ・ 保護者は日本語によるインタビューはむずかしく、中国出身の小学校教諭が通訳として入る。学校生活のあらゆる面でサポートを受けていた教諭なので、保護者も安心してインタビューに臨めた。
- ・ 半構造化インタビューを行ったが、話しの流れでこちらが意図した項目がカバーできなかった部分もある。
- ・ 通訳の日本語訳をインタビューデータとした。

第二回調査：2022年12月～2023年2月 対象者4家族（C02, C09, C12,

C15)

- 3家族（C02, C12, C15）は二回目、1家族（C09）は今回初めてインタビューを受けた。
- 2家族（C12, C15）は一回目と同じ教員（インタビュー時は他校に異動）に通訳に入ってもらい、日本語訳を分析した。2家族（C02, C09）は保護者が日本語でのインタビューが可能とのことで、教諭は同行せず、筆者が日本語で行った。またC09の家庭では、C09の子ども（高校三年生）が同席した。この2家族から得られた日本語データをそのまま分析対象とした。
- 中国語通訳が入ったインタビュー（C12, C15）で日本語訳が不十分と思われる箇所と日本語でのインタビューに中国語が入った箇所（C09）については研究協力者（中国語母語話者の大学教員）が音声データを聞いて翻訳した。

二回目のインタビュー調査では、前回からほぼ6年が経過しており、調査開始は小学一年生であった子どもたちも高校卒業を控え、社会人となることから、保護者へのインタビューでは以下の質問項目を中心に尋ねた。

- ①小学校卒業後の進学について
- ②中学、高校時代の成績はどうか。勉強で保護者として支援を行ったか。
- ③家族間、親戚間のコミュニケーションで中国語使用はあるか、日本語使用が優勢か。中国語はどれほど保持されているか。現状に満足か。
- ④中学校、高校では中国語を学ぶ機会があったか。
- ⑤子どもは中国人としての意識はあるか。中国をどう見ているか。
- ⑥中国への帰省は行ったか。中国の親戚との連絡はあるか。
- ⑦日本（地域）での中国人家族や親戚との付き合いがあるか。

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

## 5.2 インタビューの考察

表1：インタビューを行った4家族の基本情報（言語力調査は小学五年時）

生徒番号	C15 (女)	C09 (男)	C02 (男)	C12 (男)
日本語読書力	A (G4*) 高い	A (G4) 高い	C (G4) 低い	C (G4) 低い
日本語語彙力	高い 92.7%	高い 96.4%	高い 94.5%	やや高い 89.1%
中国語読書力	B (G4)	(K)	B (G1-1)	×
中国語会話力 (OBC)**	ステージ5	ステージ2	ステージ4	ステージ2
中国語語彙力	非常に高い 94.5%	低い 30.9%	中程度 54.0%	非常に低い 12.7%
父親学歴	中卒 (日本) 帰国者	中卒 (日本) 帰国者	中卒 (中国) (結婚来日)	高卒 (日本) 帰国者
父親のJ力***	◎◎◎◎	◎◎◎◎	××××	○○○○
母親学歴	NA 結婚来日	中卒 (中国) 結婚来日	高卒 (日本) 帰国者	高卒 (中国) 結婚来日
母親のJ力***	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
家庭での使用言語	ほぼC****	父と時々C, 母とJ	父とC, 母とJ	父と時々C, 母とほぼC
子の勉強をみる	みない	みる (父)	みない (塾)	みる (父母)
本が好きか 入手方法	好き 親も子も買う	好き 子が買う	嫌い 買わない	好き 学校, 公共図書, 子が買う
兄弟姉妹	弟2名	妹	妹	妹
子の将来について 親の希望進路	大卒・ 専門学校	子の意志尊重 専門学校	大卒・技術者	大卒・ 専門学校
子の中国滞在歴 (半年以上)	なし	あり (1年, 学校歴なし)	なし	なし

\* 日本語, 中国語とも使用テキストの学年レベルを指す。(例: G4は四年生, Kは幼稚園)

\*\* OBC: Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children(カナダ日本語教育振興会) 会話力のステージは1~6で, 6がもっとも高い。

\*\*\* 親のJ力は「聞く」, 「話す」, 「読む」, 「書く」の順。自己申告による。◎は「十分にできる」, ○は「まあまあできる」, △は「あまりできない」, ×は「全然できない」。

\*\*\*\* C15は1歳半の時に両親が離婚し, 養育は父方の祖父母(残留婦人二世, 1985年来日。日本語能力は両名とも低い)が担ったため家庭内ではほぼ中国語使用。

表1は二回目のインタビューを行った家族の基本情報で、子どもの二言語能力順（能力の高い子どもが左）に並んでいる。集住地区の中国帰国者家庭だが背景はさまざまで、保護者の考えや子どもとの関係の経年変化をとらえるため、個々の家族を詳細に分析した。一回目のインタビューで得られた情報を表にまとめ、それをふまえて二回目の内容を加えた。

### 5.2.1 C15（女）：日本語能力も中国語能力もともに高い

#### ・一回目のインタビューのまとめ（2016年12月）

回答者と場所	児童の父方の祖母、場所：親戚（児童の伯母たち）が経営する中国食料品店（集住地区の団地に隣接）
教育方針	児童の両親が離婚したため、15か月の時から育ててきた。祖父母の生活スタイルを貫き、児童にも生活面で自立するように育てた。学校から帰ってきたら、今日何があったかを尋ねて話させた。人と仲良くするように言ってきた。
父親	8歳の時に一家は来日（1985年）。児童と同じ小学校を卒業。中国語は話せるがイントネーションは少し変。父親は日本語環境が圧倒的で中国語との接触が少なかった。父親の祖母である残留婦人とも日本語で話した。
母親	母親は父親との結婚のため、祖父母が中国から呼び寄せた（息子の嫁とは中国語で話したいし、中国文化を継続させたかった）。別居後は東京在住（オーストラリア人と結婚）で、C15は休みには東京で過ごす。C15が日本語インタビューで「です・ます」体を使ったり、関西アクセントが少ないのはその影響か。
中国語	中国語のみの使用を心がけた。使い方（父方と母方の「祖父母」の言い方の違いなど）も教えた。父親の時も学校から日本語でできるだけ話すようにと言われたが、中国語使用を断固続けた。
勉強	・祖母は未就学のため勉強は手伝えないので、C15が小さいころから親戚の人たちに手伝ってもらった。父親は別居だが近くに住み、父方の兄弟、その家族、C15の年上の従兄弟たちも大勢いる。 ・児童は一人で勉強する。家でよく本を読む。日本語の本も中国語の本も少しがある。母親と中国に帰省した時にピンインを学習する本を買ってきてそれで勉強した。字を書くのが早いし、中国のテレビで見たものをすぐに再現したりできる。
生活	中国ルーツ児童の家族が多く住む大規模団地（20棟以上）の近くに居住し、親戚も近くに多く住んでおり、中国語や中国の生活習慣に触れる機会が多い。祖母がその中心にいる。地域には中国人向けのデイサービス（中国人の介護士）もあり利用している。麻雀、踊り、中国の食事、忘年会、ビンゴゲームもある。Ethnolinguistic Vitality <sup>11)</sup> が強い。
子どもの将来	オーストラリアに移住するかもしれないので英語を学んだら、中国語を忘れてしまわないかと心配している。

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

- 二回目のインタビュー（2022年12月）★「 」内は通訳の日本語。

回答者：C15の祖父母（通訳同席）

場 所：集住地区の団地にある自宅

- 進学について

「小学校卒業とともに離婚した母親のところに移り、中学校は東京で、高校になって母親の再婚相手の国（オーストラリア）に引っ越し、現地の高校に通って卒業を迎えた。」

- 中国語について

「オーストラリアでは普段生活してる時にお母さんとの間では必ず中国語をつかう。」「オーストラリアでは日本語を自分で勉強したりしてる。おじいちゃんからはせっかく身についた日本語だから忘れてはいけませんよっていうのを子どもには伝えている。」「アプリでやり取りをしてるから」、「音声で送ってきて聞いてるんですが、（C15が）中国語で言えば文字になっておじいちゃんおばあちゃん、読めるわけですね。」

- 子育てについて

「家では勉強に関してはおじいちゃんおばあちゃん何もできないし、してない。で、ほぼ学校任せにしていたっていうところがあって、ただ家では全部中国語は使っていた。」

- 中国への思い

「（C15の）父さんも、自分の子供たちはやっぱり中国語で聞いた方がいいと思ってるんで。その一つ理由としては親戚は向こうに住んでいますので、中国に帰った時に親戚と話をするとき、やっぱり日本語では通じないっていうのが、ちょっとやっぱり悲しいかな。」「このコロナがあったから帰ってないけど、コロナがなかったら毎年1回は帰ってます。」

• 定住を決意

「若い頃、日本に最初は来た時には3、4年ぐらい働いて自分のお母さん（残留婦人一世）が亡くなったら家族連れて中国に帰ろうかなって思っていたんですが、でも住んでみれば、自分たちが好きっていうよりは自分の子どもたちが好きになって、もう帰らないってなったら、もうどんどん孫も生まれて、自分たちも生活してみて。今は帰るっていう風にはうん思っていないですね。」

C15の祖父母は教育面でのサポートができない中、中国語使用を徹底し、親戚などのサポートを得て豊かな中国語資源を与えることができた。一世とともに数十人単位で帰国し、集住地区の団地に住むことで中国語圏コミュニティができており、一家は団地近くで中国惣菜や食品を扱う店を経営し、帰国者たちの生活拠点となって、活発な交流がなされていた。

東京在住の母親も中国語使用をはじめ勉強面で関与し続けたことも大きい。C15は高校卒業後、日本の大学への進学を希望したが、母親の希望もありオーストラリアの名門大学に進学することになった。筆者は会うことはできなかったが、C15は2023年の正月に日本に帰省し、親戚や友人たちと会ったが、またいとこでもあるC09はインタビューでC15が日本語、英語、中国語の三つをどれも流暢に使えることにショックを受けたと話し、自分が何を失ったか（取り戻すことも可能）を悟ったと話した。

5.2.2 C09（男）：日本語能力は高いが中国語能力は低い

• 二回目のインタビューのまとめ（小六時のインタビューは実施せず）

回答者：C09の母親とC09（高校三年生）日本語使用（通訳同席せず）

日 時：2023年2月

場 所：集住地区の近くにある自宅（一戸建て）

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

教育方針	比較的放任。子ども（兄、妹）の成績があまりよくないことについて塾に行かせるなどの対応はしない。大学への進学についても特に強く薦めるなどはしない。
父親	父親の祖母が日本人（C15の児童とまたいとこ）。5歳で一家で来日（帰国）し、小学校は日本（大阪）。家族で中国に帰国したため、中学校は中国。中学卒業後に再度日本へ。高校には進学せず。二言語能力が高い。子どもには日本語で話す。
母親	結婚のため20歳で来日。中学校の同級生。子どもに話しかけることについては、あまり深く考えなかった。二言語で話しており、どちらかというと日本語使用が多い。しかし日本語でのインタビューではかなり日本語理解と話す能力が低いと感じられた。自分は日本語ができると考えており、家族間で中国語を使う家庭は親が日本語ができないからだと考えている。
中国語	小学校五年時の中国語能力が「低い」とされた息子（C09）が母親が中国語をもっと使ってくれていたなら、もっと中国語ができたはずだったと話した時に、母親は「自分のせいだ」と後悔の言葉を発した。母親は息子の中国語能力では簡単なことしか言えないので、あまり乗り気ではない。下の妹はさらに中国語能力は低く、「ほぼ喪失」。
勉強	小学校から勉強はできなかった（本人弁）。中学校は楽しかったが成績はよくなかった。そのため早く働きたいと思い、自身の判断で工業高校に進む。必修科目（国語、英語など）以外に進路によりコースに分かれ、実技もからも授業は楽しかった。就職も安定した企業に決まり、これからは楽しみ。
日本語	小学校の頃からあまり勉強ができなかったし、帰宅組だった。両親は共働き。母親は日本語ができなかったが、日本人の多い職場に変わってから日本語が上達した（と思っている）ので、子どもには日本語で話そうとした。特に日本語能力が高い父親を尊敬していて、それに近づきたいと考え、子どもたちにも日本語で話した。夫婦間は中国語であったが、家庭内では圧倒的に日本語使用。
中国	母親の家族がいるハルピンの近くに子どもの頃2、3度行った。中学生になってからは勉強も忙しいし、夏休みも遊びたいので行っていない。親戚の人の言ってることは少しは理解できたが、話すことは簡単な挨拶だけ。C09は曾祖母が日本人ということもあり、日中に関しては「半分半分」「一歩引いて見ることができる」。父親の祖母とその子、孫がすべて日本にいたので、中国との繋がりは母親ルートのみ。
子どもの将来	妹もあまり成績がよくなって、高校進学も心配。母親は「学校は好き。勉強は嫌い」と話す。兄妹ともに好きなことは頑張るが嫌いなことは手を付けない。あまり学校の話は親にしなかった。親は子どもを信頼しているよう。4年前に集住団地を出て、現在の一戸建て住宅に。兄と妹のため別の部屋があったほうが良いと思った。最近、母親は息子に中国から結婚相手を紹介しようかと半ば冗談で持ちかけるらしい。

• 中国語能力について

C09：(今後の自分の中国語能力について)「これからっすか。減っていくんじゃないですかね。このまま行ったら。」「いや中国語と触れ合う機会ってというのが今後多分、絶対少なくなっていくと思うんで。」

C09：「今の気持ち的にはちゃんと中国語の能力っていうのは維持しときたいなどは、そう思います。」

母：(「小さい時に中国語で書かれた本とか子供のため与えた?」)と聞かれて、「ない。」

母：(「日本語の方が大事と思った?」の問いに)「それはないやな。全然考えてない。もう私と子供、しゃべる時は両方しゃべるから、多分な私、ずっと中国語でしゃべる。子供で生活する時、多分めっちゃじょうずになるやんな。私、日本語しゃべる時も多いかね。」

C09：「う〜ん。」「お父さんは完全に日本語でしゃべりかけてくるんす。」

母：「私知ってるの友達みんなな、日本語できない。だから子どもの中国語めっちゃじょうず。」

• 家庭内言語使用について

C09：「さっき言ったお父さんの兄弟、弟さんの家族はめっちゃだから中国語うまいんすよ。いとこたちは親がもう中国語でしゃべってるから。」

母：(義弟の家族について)「母さん日本語できないからなあって。今もあんまり日本語わからない。」

C09：「子どもに対してのその中国語か日本語で多分変わってくると思うんですよ。子どもに対して中国語でずっとしゃべってるとうまくなって、日本語でしゃべると。」

C09：(「中国語でだけしゃべってくれたらよかったのには思わん?」)「思ってます、ちょっと。もしずっと中国語でしゃべっとったら。最近直してるんですよ、だから。俺に対して中国語。」

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

母：「子どもたちはなんか話し時、ずっと日本語話すやろ。よく分かるから。あれ面白い、私たちできないんだけどいない。もう中国語でしゃべってって、そんな言いよったら絶対今な、中国語、めっちゃじゃようずになるやな。ねえ。多分、私のせいやなって。」

C09：「でも基本的に今は中国語でしゃべってる。」

母：「めっちゃ簡単のやな。私、むずかしいの中国語、言ったら T 君 (C09) 困るや。」

C09：「最近はそのわからん単語があったら聞くようにしてます。え。それどういう意味って。」

・父親の二言語能力について（父親は息子のロールモデル）

母：「どっちもじゃようず。どっちも一緒。」

C09：「ほんまにどっちもじゃようず。」

母：「どっちもわからん。どっちもわからないな。中国語聞いたらもう中国語人。めっちゃめっちゃ中国語人。日本人なんか友だち。その時。めっちゃ日本人。」

母：「父さん、多分賢いやな。」

C09：「地頭がいいんですかね。日本語を話す時は、日本人と同じように話し方も発音も（そうそうす）で、中国語を話す時はまたそうというのは一番すごいですけど、両方できるけど、日本語しゃべってる時はなんか中国語っぽい発音が入ったりで、中国語しゃべる時になんかちょっと中国人と違う内容発音が入ったりとかもよくあるんですけど、お父さん、それがない。」

C09：「立ち振る舞いとか、そういうのもちゃんと分けてる。両方できます。会社にお父さんの会社とかおる時はいわゆるサラリーマンみたいな日本人の立ち振る舞いができて、逆に中国に行ったら、多分中国人っぽくなる。」

• またいとこの C15 について

C09：「C15 はまじすごいっすよ。もう三か国語もペラペラなんで。ちょっとあれはすごいっすね。で大学も行くって。なんかオーストラリアの結構上位の学校, 大学に行くって言って。すごいな～C15 って。」

C09：（「C15 さんとは何語で？」）「日本語っす。そこは日本語です。もうずっと日本語やったんで。すごいんすよ。家では中国語, で, 学校では英語, 友達としゃべる時は日本語っていう。どれも減ってないですね。あ, でもちょっとこの前会った時はなんか標準語になってました。大阪弁抜けてましたよ。」

C09：「C15 はガチで多分〇〇（同一姓）の中でもめっちゃ頭いい方で。すごいな, あれ。すごいな。C15 はまじすごいっす。」

• 中国について

C09：「1 歩引いて見れるみたいな。中国人的に考えたらこうやけど, 日本人的に考えたらこうかなみたいな。」

C09：（「日中で試合やってたら？」）「どっちも頑張れって。うんやっぱ, 日本にずっと長年, もう 18 年おるし, やっぱ日本の方が気持ち的にはあんのかな, と思いますけど。」

今回予期せぬことでインタビューに同席することとなった C09 は日本語能力が五年時の調査でも高かったが, 日本語でインタビューが可能だと聞かされた母親については, 実際はこちらの質問が十分に理解できなかったり, 回答の日本語も分かりにくいところがあった。C09 が適宜補って答えてくれたことでインタビューが滞りなく進みありがたかった。また筆者が驚いたのは高校三年生になった C09 の日本語力, 特にあいづち, ターンの取り方, 日本語らしい表現や語彙を自然に使うコミュニケーション能力の高さであった。

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

C09 は五年時の調査で中国語能力が会話力、語彙力、読書力でいずれも低く、インタビューでも自身の中国語は今後はもっと少なくなるだろうと答えている。母親は子どもに日中どちらの言語を使って育てるかを深く考えることはなかったようだが、少なくとも自分の母語である中国語で育てるという選択はしなかった。その理由として母親は職場で日本語を使用することも多く、日本語能力に一定の自信をもっており、小学生の時に帰国した父親（夫）が高い日本語能力をもつこともあり、それに近づきたいと考えたかもしれない。

父親（夫）の弟一家は家庭では中国語のみを使用しているが、C09 の母親はそれを親の母語（もっとも力強い言語）で育てるメリットとしてとらえるのではなく、自分と同じく結婚のため来日した義妹が「日本語ができないから。今もあんまり日本語分らない」からだとして否定的な意見を述べた。それに対して、C09 は「お父さんの弟さんの家族はめっちゃ中国語うまいんすよ。」「親が中国語でしゃべっているから。」と肯定的に捉えている。中国語だけで話してくれていたらよかったと思うかという筆者の問いには「思ってます、ちょっと。」と遠慮がちに述べたあと、「最近直してるんですよ。俺に対して中国語。」と言い、「分からん単語があったら聞くようにしてます。」と前向きな言葉を述べた。それを聞いた母親は、自分がずっと中国語で話していたら子どもは中国語が「めっちゃじゃようずになるやな。たぶん私のせいやなって」と中国語を習得させる機会を失ったことに気づいたようであった。

中国語能力については同年齢で同じ小学校に入学したC15の存在が大きな刺激となったことも考えられる。小学校卒業後に東京へ転居し、その後はオーストラリアへ移住したまたいとこのC15とは帰省時に会うだけで、それほど連絡は取っていなかったらしいが、高校を卒業し社会人になる自分に対して、外国で大学進学を決め三か国語を維持しているC15から大い

に刺激を受けたようだ。C09 は筆者が普段話す大学生（日本語母語話者）にもないような滑らかで（音声では特に発音の明瞭さがある）かつ年長者への配慮もされた受け答えができる大人の日本語を習得しているが、それでも中国語のみならず世界に通ずる英語も習得している同年齢の親戚と話すことで自分が習得できなかった中国語への思いを強くし、これからの中国語習得にも前向きに取り組むきっかけになったようだ。C09 は二言語どちらも流暢に駆使する父親を尊敬しており、父親が身近なバイリンガルのロールモデルとなるよう期待したい。

### 5.2.3 C02（男）：日本語能力も中国語能力も中程度

#### ・一回目のインタビューのまとめ（2016年12月）

回答者と場所	児童の父親と母親 同席者：児童本人、妹 児童の自宅（大規模団地、集住地区）
教育方針	児童が今少し反抗期のように心配。高校から大学、就職など、これからの進路について不安。
父親	来日時（2003年）には日本に定住すると思わず（いつか帰国したい）、日本語学習に不熱心だった。児童の授業参観に行き、自身も向上心を持たなければと確信。最近日本語を熱心に学び始めた。読書習慣はあり、スマートフォンで読む。アプリで日本語も読む（漢字から推測する）。子どもと中国語で話すが、話が通じないのは自分の責任。深い話をしても心が伝わっていないと感じる。
母親	年少時に来日（1990年）したので日本語の読み書き可能。小五から高校まで日本の学校。児童と中国語で話すが、分からない時は日本語を使う。
中国語	iPadでアプリをダウンロードして中国語のアニメを見る。字幕も出るが主に聞くだけ。パソコンのカメラで中国の親戚と話す。中国語は話すのは大丈夫。読むと書くはむずかしい（児童の弁）
勉強	漢字、特に抽象的な語彙が弱い。六年生になって勉強がむずかしくなり、自分たちで対応できないので塾に通わせているが、効果があるか不安。最初は塾の仕組みが分からず、特級クラスに入れたが、今は予習復習をするクラスに変えた。親が中国語で説明して分かったのは三年生ごろまで。算数の計算は早い、国語は漢字が苦手。ゲームが好きで時間制限しているが守れない。今はサッカーの方に関心（児童の弁）。
生活	クリスマスが近いので家族で外出する予定（インタビュー当日もUSJに行く）。近くに親戚(母方)も多く、行事ごとに集まる。料理などを作って食べる。

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

中国	中国のテレビで抗日番組を見ているが、あまり見てほしくない（父親）。日中関係がよく描かれたものを見てほしい。帰省は父方の実家を訪問（母方が残留邦人家庭）。帰省後には中国語がうまくなったと感じる（児童、妹とも）。親戚とは中国語でやり取りできた。中国への愛国心は強く発展にも誇りをもつが、早すぎてついていけない。コネがないと何も動かない（父親の弁）。通訳を担当した小学校教諭と中国の現状について中国語で熱い議論。
子どもの将来	自分たち夫婦は肉体労働なので、子どもには事務職に就いてほしい。公務員になるにはどうすればいいのか教えてほしい。妹は将来の目標（介護職）をもっている。児童はあまり将来のことを考えていないのが不安。子どもが将来日本人と結婚するのも賛成。こうした問題については父親が意見を述べる傾向。

• 二回目のインタビュー（2023年1月）

回答者：C02の母親（母親は11歳で家族全員一残留邦人の母親と中国人の父親、兄弟姉妹7人—で帰国した二世。小五から高校卒業まで日本で教育を受けているため日本語で行った。）「 」は発話データ。

場 所：集住地区の団地にある自宅

• 中国語について

「家人中では割と4人ともが中国語しゃべってる。」

「あ、だから、やっぱりその子どもだけ、そのあの一自分の国の言葉だけ忘れないようにしてほしいから。」

「(中国語は)簡単なんは行けます。Hちゃん(C02の妹)はあの高校の受験始まるまでにずっとオウ先生のところで中国語習いに行っただけですけど。」

• 勉強と進学について

「もうサッカー好き、あの子が。勉強そんなに好きじゃなかったら、将来どうすんのって「分かれへん」って言って。分かれへんかったらとりあえず高校行って。その後どうすんのって聞いたら「うーん」とか言って、C02はもう勉強嫌いもママも分かってるし、ママとパパが大学で

行かせたいねんけど、本人が嫌やったら無理やりに行くのも可哀想やし」

「(塾に) お兄ちゃんは強制的に行きなさいもあって。だからH(妹)ちゃん塾行く時も、Hちゃん言ってね、自分が行きたい時はママ行かす。」

「塾もママ行かせたし、塾行った、結局効果が良くなかったし。C02も頑張ってきたし。ママもゆっくり考えて、工業高校に選ぶかは、普通の高校に行くとして最後に就職するんやったら、やっぱり旦那が自分の手に技術持ってた方がいいんちゃうかな。」

「最後の決定がほんで工業高校に行ってね。まあ親としてはちょっと悔しいけど、今まで塾代…。」

「勉強嫌いでも、レベル低いの大学も行くことはできるじゃないですか。でも大学4年間行って、趣味が夢があったらいいけど、夢なかったらどうせ大学行って、はい卒業しましたって。そこからどうすんのって聞いたら「分からん」とか言ってて。それやったらあの金ももったいないし」

• 将来の仕事について

「会社を選ぶとき、ちゃんと大きなくを選んでねって。私も色々アドバイスをしました。」

「できれば私たちみたいなこう、普通の工場に働いたらね、しんどいもあるし。ちょっと可哀そうかな、と思って。」

「私の夢はH(妹)ちゃんが、第一は看護師さんがいい、第二、無理やったら公務員(んー)に」

• 子育てを振り返って

「それ(中国語を家庭内で話し続けたこと)も一番良かったと思います。」

「あとは反抗期もそんなになかったし、それが一番よかったかな。」

小学校を卒業後、中学と高校での六年間の家庭での言語使用や勉強につ

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える  
いてインタビューを行ったが、母親が特に熱心に語ったのは成績が思った  
ほど伸びない息子への不安だった。決して経済的に豊かではない中、塾に  
行かせたが、C02はサッカーが好きで、両親が期待する普通高校から大学  
へ進学という方向には進めなかった。工業高校への進学を選んだことには  
悔しさもあると語るが、それでも結局は子どもの希望を尊重し、大学進学  
を強いることは断念している。

一回目のインタビュー時に同席した父親は結婚のため来日したが、来日  
当初は将来帰国する可能性を捨てきれず、日本語習得に熱心に取り組まな  
かったが、C02が学校で懸命に学ぶ姿を目にし、自らの工夫で日本語学習  
を始めたと言った。一方、子どもとは中国語でコミュニケーションを取ろ  
うとするもうまくいかず、そのことで辛い思いをしているとも話した。

複数言語環境の家庭での言語使用については家庭内では親の母語を用い  
て子の年齢相応の認知力を育むことが重要とされるが、親の言語が異なる  
場合にはそれぞれの親の母語を区別して用いる「one person one language  
(OPOL)」などもある。良質のインプットを与えるには親が十分に能力を  
もつ言語で育てる必要があるが、C02の家庭では父親は中国語が選択肢と  
なるが、母親は筆者がインタビューを通じて感じたことではあるが、日本  
語はその役割を演じられるだけの能力があるかにやや不安が感じられた。  
自分たちでは子どもの勉強をみることができないと、早くからC02を塾に  
行かせることを選んだが、結果としてあまりよい結果をもたらさなかった。  
母親は中国語を家庭内でできるだけ使うよう努めていると言った。確かに  
訪問時に、筆者が団地の階段を上がっていると、上の階からC02の妹が母  
親に「来了！」と伝えたのが聞こえた。だが、日常生活レベルの中国語（生  
活言語）ではなく、認知力を向上させる学習言語の習得には日々の生活の  
繰り返しを越えた良質のインプット（読み書きを含む）が必要で、日本語  
でも中国語でもそれを母親が担えるかどうかはむずかしいと感じた。

両親ともに中国語を習得した後に来日し、適切な日本語学習の機会を得られることが多い留学や研究、企業での研修が目的の中国人家庭の子どもについては、こうした問題はあまり起こらないとされる。(石井 2007)一方、滞日年数は長くとも、帰国後の言語学習や研修の機会に恵まれない帰国者家庭の場合、まず親が言語能力をしっかりと習得、保持することが子の言語習得や学習成果につながる必要があるであろう。

C02を塾へ無理に通わせた経験から、妹については子の意志を確認した上で通わせることにしたり、子が望んだとして高校受験までの期間、中国人教師のところに授業料を払って中国語を学ぶために通わせており、やがては大学に進学して看護師か公務員になることを願っている。自分たちのような「工場に働いたらしんどいもあるし、ちょっと可哀想かな」という言葉は重く響いた。しかしC02や妹の子育てについては、家族で話し合い、子どもたちの意見にも耳を傾け、父親の判断もおおきながら決めていくというプロセスがあり、仲のよい家族の一面がうかがえた。C02が無事に高校卒業、大手電機工事会社への就職までたどり着いたことは母親にとって達成感を覚えることとなっている。

#### 5.2.4 C12 (男)：日本語能力は中程度（やや低い）、中国語能力は低い

##### ・一回目のインタビューのまとめ（2016年12月）

回答者と場所	母親、中国出身の小学校教諭（通訳として同席） 児童の自宅（集住地区に近い、新興開発された地区の一戸建て）
教育方針	自分たちは十分に受けられなかったので、来日した時から子どもには十分な教育を受けさせたいと考えていた。習い事も希望すればさせたいし、留学もさせたいし、教育費はいとわない。
父親	児童とは友だちのような関係。何でも話す。先に来日した父親は日本語ができるので、児童とは日本語で話すことが多い。(ピアノのレッスンに妹を車で連れていく父親の姿はまるで日本人家庭と同じに見えた)
母親	日本語はうまくないので勉強したいが、児童とはなるべく中国語で話したいが、六年生になって日本語で話すことが増えた。子の前では中国語で話すようにしている。来日15年だが、日本人に助けももらった。

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

中国語	両親が共働きなので、近くに住む父方の祖父母に育てられたので、中国語を聞くことはできる。今も毎日祖父が午後に来て、児童の帰宅を確認する。中国語の本も購入したり、中国の実家からも送ってもらいが、読み書きを教えるのはむずかしいし、子どもも読みたがらない。大きくなってから中国の大学に留学するなら応援したい。今後も中国語は大切にしてほしい。
勉強	サッカーが好きで、勉強はいまひとつで心配だったが、六年生になって自分で勉強するようになり、親に対して気遣いや思いやりが見られるようになった。四年生ごろは反抗期がひどかった。習い事にお金を出すのは問題ない。
生活	夕食はなるべく家族でとる。父親の遅い帰宅を待つこともある。子どもが自分の部屋が欲しいと言ったので一生懸命働いて家を買った。妹はピアノを習っている。児童も五年生まで。今はサッカーに夢中。
中国	児童が2歳半の時に一度帰省したが、それ以後は帰っていない（母方の祖母が亡くなったことが原因?）。中国のイメージはあまりない（人が多くらしい）。家の中に中国的な装飾などなし。中国のテレビの字幕を見て子どもが中国語を話すときがある（外ではほとんど話さない）。正月の行事は行う（手作りの料理やお菓子を作り、親戚、友人、職場の社長（日本人）を招いて祝う）。親自身も現在の中国の価値観と相入れない感覚があり、素朴な自分たちに合った日本での今の生活がいい。
子どもの将来	子どもの結婚相手は中国人がいい（自分たちとのコミュニケーションができる）が、日本人でもいい（息子が間に入るだろう）。ベストは文化背景が同じ渡日生。物質的欲求の強い今の中国人との結婚はうまくいかないだろう。

- 二回目のインタビュー（2022年12月）★「 」内は通訳の日本語。

回答者：C12の母親（通訳同席）

場 所：集住地区の団地の近くの自宅（一戸建て）

- 進学と就職について

「本人は進学を希望していない。小さいときからあまり学校に行くのが好きではなかった。勉強も成績はずっとあのままで、塾に行ってもだめで、ただサッカーが大好きで、しかしサッカーで2回ケガをしていたから、サッカーも続けられなくなって、就職か進学かになります。進学はあまりよくない大学に進学しても時間の無駄だと思って、そうになると就職しようと、本人が言っていました。早く就職すると、経験を積んでいけるしいと思います。本人はそう思っていたが、私たちは同意しな

かった。大学に行って教養を身に付けた方がいいと思って。」

「C12は小さい頃から勉強に対してはあまり興味がなかった。サッカーに興味があったから、お母さんはサッカーでもいいよって伝えたことでサッカーの一本道で高校までやってきたんですが、C12はもう社会人でちゃんと就職したいという気持ちを持ったので、親としては最初は反対しました。最終的には子どもの考え方を尊重して、もう10月で内定ももらった。」

「営業の仕事になるんです。C12の性格は誰かとしゃべったりとかするのが好きなので、だからC12にとっていい選択になるのかなってお母さんは思ってます。」

• 中国語について

「(C12が) 高校に入ってから母語の環境がなかったんですけども、うちではお母さんたちがしゃべってる中国語は聞き取れます。ほぼ。聞き取った内容は簡単な返事は中国語で、むずかしいところの説明は日本語で。半分半分かなあ。」

「妹はお母さんと悩み相談とか全部話をするのに、お母さんはそんなに日本語はじょうずにしゃべれないから。だから妹も頑張って中国語で話をして、お母さんと練習と思ってる。親子(妹)のコミュニケーションは中国語でしっかりできてる。そこが強いわけですね。」

「C12は外に行くことが多いから、繋がりも外の子が多い。妹はお家。だからお母さんとコミュニケーション取る時間が多いので母語の維持ができたのかな。意識的に家でも絵本とか置いてたりとかもしてたので。」

• 中国について

「保育園の時からのお友だちは周りは中国の子が結構いてんですが、だんだん高校に上がると日本人がほとんどで、そこからは日本の方に興味というのか情報も全部日本に関わるために、そっちの方が多いように

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

は感じます。」

「子どもたちは日本生まれで日本育ちなので、もう日本に溶け込んでいくように思います。中国に対してそれほど馴染みもないようです。ずっと前に中国に帰ったときはとても寒い時期でしたので、中国はたいへん寒いということは印象に残っているようです。」

• 妹について

「高校生になってとても楽しく学校生活を送っているように思います。中学校はちょっと大変な時がありました。学校に行きたくないときもありました。とても心配していました。高校に行く前に環境が変わって、先生もクラスメートも変わるから、大丈夫かと聞きましたが、娘はその方がいいと言っていました。」

「妹は本好きなんです。とても本好きな子で、小学校の時は毎週お母さん本屋さん連れていきました。時間ない時でも2週間1回は必ず行きました。」

• 相談相手について

「(通訳の教員に) 本当にいつも気に掛けてくださって感謝しています。ずっと感謝したい気持ちです。」(中国人教員の存在が保護者には大きかった。職場の日本人上司、同僚ともよい関係をもっている。)

• 子育てを振り返って

「母さんの中では1番やってよかったのが、なんでも子どもたちの考えを尊重する。で、支える。信頼するっていうところかなって」

「そんなにお金持ちとかではないんですけども、でも子どもたちがやりたいことはお母さんやお父さんはもう自分の精一杯頑張ってお金を出して、あのサッカーの試合見に行きたいと、ああいよいよってお金を出してチケットを買って行かせたり、本買いたいって言ったらいいよって。」

「それはもう親として最善を尽くす、というのが一番、もうお母さん、

お父さんとしてはそれは一生懸命やってきた。」

C12の家庭は一回目のインタビュー時に集住地区内にすでに一戸建ての住宅を構え、訪問時にはきれいに片付いた広いリビングで迎えてくれた。大型のテレビでは中国の衛星放送を見たり、母親の勤務先の上司や同僚を春節などの行事に招いて中国料理を振る舞うこともあると述べた。二階には子どもたちのために早くから独立した部屋を与え、勉強の環境を整えようとの意志が感じられた。

結婚のため来日した母親の日本語がどの程度のレベルかを推し量ることはできなかったが、特に学習の機会があったわけではなく職場や生活環境で習得した程度で、日本語で子どもたちと良質のコミュニケーションができるレベルではないと推測された。サッカーに熱中したC12は家で親と中国語で生活する時間よりも外で日本語に触れることが多く、中国語保持はかなわなかった。内向的で読書が好きで家にいることが多かった妹とは中国語で話すことが多く、中国語能力も一定程度保たれていると思われる。

母親の両親が存命中は中国に帰省することもあったが、親が亡くなると中国には兄弟しかおらず、そこへ帰省することに遠慮がちになると述べた。さらに最近の中国人の価値観の変化（拝金主義、競争過多など）を見るにつけ、落ち着いた今の日本での生活により馴染んでいると感じることが増え、子どもたちだけでなく自分も日本での定住を希望するようになったと述べたことは興味深い。そして相談に乗ってくれる学校の教諭や職場の雰囲気よさなど、人間関係にも影響を受けていると思われた。

C12の両親もやはり上の男の子には自分たちが叶わなかった大学進学を希望し、塾通いやさまざまな支援を行ったが、結局は子どもの意志を尊重して進学を断念し、就職することを受け入れている。日本も中国も学歴社会といわれるが、近年日本では大学進学以外の選択肢も十分に評価される

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考えるようになっており、きっぱりと割り切った選択をした子どもの影響もあり、親も徐々に受け入れているようであった。子育てに熱心な家庭であらゆる努力を惜しまなかったが、親の意に反した結果となったかもしれないが、子育ての一つの区切りにはなったようだ。

## 6. まとめと考察

中国ルーツ児童が多数在籍する小学校で帰国者家庭と学校をつなぐ役割を担う中国出身の教諭がおり、保護者も学校行事に積極的に参加したが、卒業後は中国語を学ぶ授業も中国語図書を備えた図書室もない中学、高校時代を経たことで、子どもたちの中国語との関係は一気に弱まったといえる。特に子どもたちが高校に入学した2020年4月はまさにコロナ禍が拡大し、学校も休校となりオンライン授業もしばらくは始まらなかった。2023年3月の卒業時はようやくコロナ禍が収束に近づいたころではあったが、高校生活のほぼすべてがコロナ禍の制約を受けた時間となってしまった。このことは子どもたちだけでなく、不安定な雇用関係が多く、特に日本語能力が低い親の場合は解職となった例もあり、経済的にも苦しい中、中国語保持の努力は最優先課題ではなくなったといえる。そうした点も考慮しながら、以下にインタビュー結果をまとめる。

### (1) 中国語使用の変化

中学校の卒業後から高校にかけて、小学校時のような中国語の授業や中国語を育むような環境が減ったことに加えて、学校の勉強のレベルがあがり、親の関与もできなくなり、日本語使用の度合いが強くなった。

帰国者との結婚のため来日した父親1名、母親3名は来日後に日本語を学習する機会も時間もなく、多くは中国人が多く働く環境の職場を選んだこともあり、来日後20年が過ぎても日本語力が低い。その結果、中国語使

用を意識的に継続した家庭（C02, C15）と簡単な日本語使用を選んだ家庭（C09, C12）に分かれた。

(2) 子どもの学力と進路について

4家族のうち海外に移住した1名を除く3名の生徒は普通科高校ではなく工業高校に進み、就職を選んだ。それに至る過程では大学進学を希望する保護者の葛藤は大きかった。保護者の多くは中卒（1名のみ高卒）で、厳しい現実を経験しており、また「大卒」への憧れもあった。しかし最後は子どもの意志を尊重して決めた。親としても「あまりよくない大学に進学しても時間の無駄だ」という子どもの意見に対し、「早く就職すると、経験を積んでいけるしいいと思います」と納得している。

(3) 保護者の日本語力について

子どもが五年時に行ったアンケート調査では、帰国者の親の日本語力は「十分できる」（C09, C12, C15）か「まあまあできる」（C02）だが、結婚のため来日した親の日本語力は「まあまあできる」（C09, C12, C15）、「全然できない」（C02：父親2003年来日）であった。しかし、今回の日本語によるインタビューを通して、C09の母親の日本語力は子どもの年齢相応の読み書きを含む学習言語能力の育成につながるレベルではないことが明らかになった。母親本人は、①配偶者の日本語力が高いこと、②義弟家族の来日妻（自身と同じ境遇）の日本語力が低いこと、③職場で日本語使用に慣れてきたことなどから、自身の日本語力は子育てを行うのに十分だと考えていたことが分かった。母親の日本語力は必ずしも十分ではないと筆者は判断したが、母親は自信をもっており、そのことが家庭内での日本語使用の背景にある。どちらの言語を家庭内言語にした場合でも、先行研究（石井2007）にあるように、子どもは一定レベル以上の安定した言語（4技能にわたる）環境で育つ必要があるが、帰国者の家庭については厳しいことが分かる。

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

#### (4) 子育てを振り返って（保護者の自負と反省）

それほど「お金持ちではない」けれど、「子どもたちがやりたいことは、精一杯がんばってお金を出した」とか「親として最善を尽くす」、「一生懸命やってきた」と自負する親（C12）には頼もしさを感じた。一方、嫌がる兄を塾に行かせたが結局は子どもが大学進学を拒否したことから、妹については、妹が塾へ行きたいと言うまで行かせるのを控えたと述べ、上の子どもでの経験を下の子どもの教育に活かした例（C02）もあった。また、子どもの中国語能力が十分かどうかは別にしても、少なくとも生活環境においては「中国語を家庭内で話し続けたことはよかったです」（C02）と述べたことは救いでもあった。

#### (5) 子どもの自主性

C02は小学校時代から塾へ行かされたが、本人はサッカーが好きで勉強があまり得意ではなかった。地域の中学校時代も引き続き塾へ行かされたが、高校は本人の希望で工業高校に進み、卒業後は就職を選んだ。同じくサッカー一本で推薦入学した高校ではケガに悩まされ、コロナ禍で試合もできず、結局サッカー選手としての道を断念し、大学進学を強く望んだ親に対して「社会人でちゃんと就職したい」と強く主張し、親を断念させたC12も自分を客観的に見ることができ、将来をしっかりと見据えているといえよう。

また、C09は子育てを日本語で行った母親に対し、「ずっと中国語で話してくれたらよかったのに」と本音を吐露した。中国語使用を貫かなかつたことで、子どもが二人とも中国語能力が低いか喪失状態にあることについて「わたしのせいやな」と母親が気づききっかけとなった。そのこともあって母親は息子に対して中国語使用を増やし、息子は分からない時には尋ねるようになったと述べ、今後も継続することで子どもの中国語能力が向上することも大いに考えられる。

(6) 結婚のために来日した親の特徴

帰国者家庭のインタビューでは親や親戚と帰国し、日本での生活がある程度長く、日本での教育経験をもち、親兄弟親戚なども近くにいる安心感をもてる親に対して、結婚のために来日した方の親は初めてやってきた日本で様々な面で苦労が多いことが分かった。日本語習得の機会をもてた親は少なく、職場での人間関係が十分に構築できない場合や、配偶者の親戚などとのつきあいも必ずしもうまく行くことばかりではなく孤立した例もあった（一回目のインタビューを行ったC13の父親の例）。

マクロレベルでの言語政策・言語計画などの分野で優れた業績を多数残した Joshua A. Fishman (1990) だが、世代間の言語の継承には社会的なサポートももちろんだが、何より家庭が中心となる必要がある<sup>12)</sup>。両親が日本における生活基盤を築くための条件が不均衡の場合、協力して子どもの言語能力を育成したり、子育てに自分たちの能力を発揮することができないことなどが、中国帰国者家庭の保護者の特徴の一つといえるのではないだろうか。「中国帰国者家庭」と一括りにされる集団ではあるが、詳細に調べることでその共通の問題やそれぞれの家庭における個々の問題なども明らかになった。彼らがいかに日本社会に定着していけるかを考えることは、彼らの存在を生じさせた日本の責任でもあるといえよう。

\*本稿は2024年8月1日～3日開催のICJLE2024（日本語教育国際研究大会、アメリカ合衆国ウィスコンシン州マジソン市）において発表した「中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える」に加筆を行ったものである。

謝辞

本稿は2回のアンケート調査に加えて、貴重な休日に長時間にわたる2回のイ

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考えるインタビューを快く受けてくださったご家族の方々、またインタビューの調整と通訳を担当してくださったK小学校の于涛先生(当時)のお力がなければ実現することはできませんでした。ここに心よりの謝意を表します。そして、一部中国語が含まれるインタビュー音声の翻訳をして下さった愛知大学現代中国学部の薛鳴教授のご協力にも感謝を申し上げます。

## 注

- 1) 「見えてきた外国人『1割』時代」, 日本経済新聞 2024年3月19日付
- 2) 是川夕(国立社会保障・人口問題研究所)による集計。日経新聞 2024年3月19日付「見えてきた外国人『1割』時代」に掲載。
- 3) 先行研究については「FLPに関する文献紹介」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』Vo.18, 2022年3月, 138-161を参考にした。
- 4) 「当時(昭和20(1945)年), 旧満洲地区(現在の中国東北地方, 以下「満洲」)には, 軍人の他に155万人の日本人が住んでおり, この中の27万人は開拓団として農業に従事していた」とされる。中国帰国者センターのウェブサイトより。[https://www.kikokusha-center.or.jp/kikokusha/kiko\\_jijo/kiko\\_jijo.htm](https://www.kikokusha-center.or.jp/kikokusha/kiko_jijo/kiko_jijo.htm) (2024年11月11日)
- 5) 厚生労働省の調査(令和6年9月30日現在)では, 中国残留邦人のうち永住帰国した「孤児」, 「婦人等」は6,725人, 家族を含めた総数は20,912人となっている。<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/bunya/engo/seido02/kojitoukei.html> (2024年11月11日)
- 6) これら39校は, 中学校14校はいずれも校区に同和地区のある「同推校」(=同和教育推進校)であり, 小学校は基本的にその校区の下にある「同推校」および「一般校」である。志水他(2014)6
- 7) Bourdieu, P., "The forms of capital" in J. G. Richardson (ed.) *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, New York: Greenwood, 241-258.
- 8) 二回のアンケート質問紙は日本語版, 中国語版ともに真嶋(2019)の巻末に「資料1 保護者へのアンケート」(252-271)として添付した。
- 9) 子の日本語能力については, 学年相応レベルに比して「高い」「低い」の

判断である。

- 10) 2011年のK小学校に入学した日本生まれの中国帰国者家庭の子ども17名の調査開始時より、17名にC01～C17の番号を付けた。
- 11) 集団の大きさ、話者人口、経済、文化、政治的影響力から言語文化集団の活力をとらえた概念。Landry, R & R. Allard (1994) Ethnolinguistic Vitality: a Viable Construct. *International Journal of the Sociology of Language*, 108, 5-14.
- 12) Fishman, J. A. (1990). What is reversing language shift (RLS) and how can it succeed? *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 11 (1-2), 5-36. <https://doi.org/10.1080/01434632.1990.9994399>

#### 引用文献

- 石井恵理子 (2007), 「JSLの子どもの言語教育に関する親の意識—ポルトガル語及び中国語母語家庭の言語選択」, 『異文化間教育』26, 27-39.
- 志水宏吉他 (2014) 『調査報告「学力格差」の実態』岩波書店
- 友沢昭江 (2019) 「家庭言語環境調査から見える子どもの二言語能力—1年次と6年次の保護者へのアンケートとインタビューを通して」真嶋潤子編著『母語をなくさない日本語教育は可能か—一定住二世児の二言語能力』大阪大学出版会 119-158.
- 真嶋潤子編著 (2019) 『母語をなくさない日本語教育は可能か—一定住二世児の二言語能力』大阪大学出版会
- 真嶋潤子, 櫻井千穂, 孫成志, 于涛 (2019) 「中国ルーツ児童14名の二言語能力の変化—K小学校での教育実践を通して—」, 真嶋編著 (2019) 『母語をなくさない日本語教育は可能か—一定住二世児の二言語能力』大阪大学出版会, 90-108.
- Fishman, J. A. (1990). What is reversing language shift (RLS) and how can it succeed? *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 11 (1-2), 5-36. <https://doi.org/10.1080/01434632.1990.9994399>
- Fogle, L. W. & King, K. A. (2013). Child agency and language policy in transnational families. *Issues in Applied Linguistics*, 19, 1-25.

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

King, K. A., Fogle, L., & Logan-Terry, A. (2008). Family Language Policy. *Language and Linguistics Compass*, 2 (5), 907-922.

Smith-Christmas, C. (2017). Family language policy: New directions. In J. Macalister & S. H. Mirvahedi (Eds.), *Family language policies in a multilingual world: Opportunities, challenges, and consequences*, 23-39. Routledge.

## Language Ideology and Language Practices of Chinese Returnee Parents and Child Agency from the Perspective of the Family Language Policy

TOMOZAWA Akie

The number of foreign residents in Japan has reached a record high of 3.59 million, with the growth rate exceeding expectations. Japan is on track to become a society where 10% of the population will be foreign-born, roughly ten years ahead of the country's projections. There is also a growing trend of longer stays, with nearly half of the foreigners having lived in Japan for more than three years. It is necessary to speed up efforts to improve multilingual services at public institutions and enhance education for children and students whose native language is not Japanese.

Among the largest groups of these foreign residents are Chinese nationals. One survey revealed that the Chinese-speaking community in Japan may be divided into two groups. The first includes families with parents who hold university or graduate degrees, live in stable socioeconomic conditions, and are proficient in Japanese. These families often move to Japan for professional opportunities, such as research or corporate work. The second group, in contrast, includes families in which the parents have limited educational backgrounds and lower proficiency in Japanese due to restricted opportunities to learn the language after coming to the country. This latter group often comprises returnees from China who are Chinese "war orphans" (Japanese children who had been abandoned in China during the Japanese retreat toward the end of World War II), as well as their spouses, children, and grandchildren who

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える

repatriated after the normalization of Sino-Japanese relations in 1972. Although the government tried to develop a comprehensive program aimed at promoting returnees' independence, including acquisition of Japanese language, there is little tolerance for the development of a distinct cultural niche for them within Japanese society.

The Family Language Policy (FLP) refers to “explicit and overt planning in relation to language use within the home among family members.” (King et al., 2008) It offers a comprehensive framework for examining how languages are managed, learned, and negotiated within families. However, existing FLP research disproportionately focuses on middle-class families in industrialized Western societies, overlooking the complexities of non-Western regions. In these regions, the interplay of the diverse language combinations, family structures, and child-rearing practices requires further exploration. To capture these dynamics effectively, the researchers advocate for long-term, longitudinal studies that examine changes over time.

This study investigates the language experiences of children born to families of Chinese returnees in Osaka, Japan. By tracking these children from their first year of elementary school to high school graduation, the study explores their language environments, parents' language ideologies, child-caregiver bilingual interactions, and children's acceptance or rejection of the FLP. The data were collected through questionnaires completed by 17 families whose children were in the first and sixth grades of elementary school. Additionally, two rounds of interviews were collected with selected families when the children were in their sixth grade of elementary school and just before their high school graduation.

The language experiences of the returnee families are unique due to such factors as the availability of the opportunities to learn Japanese after returning to Japan, their educational experiences in Japan, the language environment in their workplaces, their length of stay in Japan, their proficiency in Japanese, and their relationships with family mem-

bers in China. Through the interviews, it was found that the elementary schools where these children studied had a significant number of children of Chinese descent, and with the help of a native Chinese teacher who served as a bridge between the school and the families, the returnee parents were actively involved in school events. However, in middle and high school, there were no Chinese language classes or no Chinese books in the library, and the children's connection with the Chinese language weakened rapidly. As academic demands increased in the higher grades, parental involvement became more difficult, and the use of Japanese became more dominant. Many children did not go to regular high schools but rather chose to attend technical schools and decided to enter the workforce. While the parents experienced a deep conflict considering their unfulfilled wish to get university education, they ultimately respected their children's wishes and career decisions. Some children who chose to work and convinced their parents about their choice demonstrated maturity and foresight, and their parents were eventually satisfied with their parenting.

Regardless of whether Chinese or Japanese became the family language, it was necessary for the children to grow up in a stable language environment that involved proficiency in all four language skills that enabled the child's cognitive development. In returnee families, however, this was often challenging. In one case, a woman who came to Japan to marry a returnee man raised her son with her limited Japanese, which led to a significant decline in or loss of his Chinese language skills. However, just before graduating from high school, he reunited with a former classmate and his second cousin in Osaka, who she was raised by Chinese-speaking grandparents and later moved with her Chinese mother to Australia to attend high school. She was proficient in Japanese, Chinese, and English, and was planning to enter university. He keenly felt the gap between them and realized his desire to learn Chinese and asked his mother to speak to him in Chinese at home, hoping to "revive" his moth-

中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える  
er tongue.

The unique experiences of returnee families in Japan highlight the importance of creating stable and supportive language environments for children. These families face challenges in preserving their heritage language while adapting to the dominant Japanese language. The decline in the use of Chinese among children, particularly as they progress through the Japanese education system, underscores the need for more comprehensive language support.

### References

King, K. A., Fogle, L., & Logan-Terry, A. (2008) Family Language Policy. *Language and Linguistics Compass*, 2 (5), 907-922.

# 安倍能成，悪しき家父として

高 田 里 恵 子

## 「永遠の弟子」と「準弟子」

森田草平（1881～1949）の小説の読者は現在では相当に少なくなっているだろう。1908（明治41）年，平塚明（後のらいてう・1886～1971）と起こした心中未遂事件，森田がその自分の体験を題材にして書いた新聞連載小説の題名に従って「煤煙」事件とも呼ばれる騒動も文学史か社会史か，はたまた日本フェミニズム史のたんなる一項目になったように見える。

そのような森田草平も2021年には生誕140年を迎え，漱石山房記念館で記念展を催してもらっている。冊子のあいさつには「漱石永遠の弟子を自任した作家・森田草平に迫ります」とあり，冊子の題にも「永遠の弟子」が選ばれ，本文中では漱石（1867～1917）が「永遠の師」と呼ばれている<sup>1)</sup>。「永遠の弟子」とは，草平が自著『夏目漱石』（1942）の緒言のなかで使った言葉だ。「ただ私は近頃自分は永遠の弟子である，一生師匠にはなれない人間だというような気が頻りにしている。いや近頃ではない，前から時折りそんな事を考えたものだが，近頃はそれが確定した，動かし難い事実のように思われて来た，つまり，私には人の師となる資格はない，一生弟子として終る人間である」<sup>2)</sup>。

この引用からも明らかのように，草平の言う「永遠の弟子」にはポジティブな意味はない。ドストエフスキーの中篇小説「永遠の夫」と同じな

---

キーワード：大正教養主義，個人主義，安倍能成，森田草平，岩波書店

のである。この「永遠の夫」とは永遠に忠誠を誓う夫というような良い意味ではなく、小説の内容が示すとおり、いつまでたっても夫程度の者にとどまっている詰まらない男という謂である。草平とドストエフスキーの関係について言うなら、このロシア人作家の愛読者だった草平は師にも読書を強く勧め、『白痴』を手始めに、所有している全作品（英訳）を貸したのだという<sup>3)</sup>。1914（大正3）年には、本稿の主人公である安倍能成（1883～1966）との共訳で、メレジュコフスキーの『人及芸術家としてのトルストイ並びにドストイェフスキー』を出版している。こうした草平とドストエフスキーの結びつきを考えれば、「永遠の弟子」が「永遠の夫」から来ていることは間違いなからう。漱石山房記念館の表現は誤解を招きやすいものになってしまっているのである。

小島信夫（1915～2006）の『私の作家評伝』が第一番目に取りあげるのも「永遠の弟子」である。冒頭に「つまり、私には人の師となる資格はない、一生弟子として終る人間である」が引用される。もちろん小島が同郷（岐阜）の先輩作家の言葉を誤解するなどということはない。それどころか、続いて「とにかく漱石は、晩年子買〔飼〕いのおれ達よりも芥川や志賀を尊敬していた」<sup>4)</sup>という森田の遺稿の覚書を引きながら、「いずれも率直でわだかまりのなさそうに見えるが、いうにいけない腹立たしさがこもっているようだ」<sup>5)</sup>と小島は言う。「死ぬまで漱石山房の亡霊にとりつかれていたのは、弟子の中で彼ひとりだったかもしれない」<sup>6)</sup>。

たしかに森田草平は、誰が本当の漱石門下と言えるか、誰が一番漱石に目をかけられたかといったことにシツコクこだわった。その名も「誰が一番愛されていたか」というエッセイのなかで、自分は鈴木三重吉（1882～1936）や小宮豊隆（1884～1966）ほどは愛されていなかったかもしれないが、「誰よりも一番先生に迷惑を懸けた」弟子として、聖書のなかの「帰宅した放蕩息子」のような特別なかたちで愛されたのではないかとおずおず

## 安倍能成、悪しき家父として

と述べる。「生みの親が道楽息子に対して持つ感情」を亡き先生から期待しても許されるのではないかと<sup>7)</sup>。

森田草平と対照的なのが、われらが安倍能成である。「漱石の弟子といえ、先ず寅彦、〔松根〕東洋城、草平、三重吉、豊隆、〔野上〕豊一郎、百閒、龍之介くらいで、〔阿部〕次郎、〔和辻〕哲郎や私などは先ず準弟子という格であろう」<sup>8)</sup>と言っているのだ。草平が「が、安倍君もしくは阿部次郎君などになると、私には何と云っていいか分からない——と云うのは、勿論、先生が彼等を軽んじていられたという意味ではない。が、まあ当人がそれで好ければ「門下生」になって居って貰う分のことである」<sup>9)</sup>などと排除的な物言いをしているのと比べると、「準弟子」にすぎないと自分で言ってしまう能成はさっぱりしているではないか。

ここで「準弟子」に挙げられている、そして事実、豊隆、三重吉、草平ほどには漱石に親しまなかった阿部次郎(1883～1959)、和辻哲郎(1889～1960)、安倍能成が大正教養主義の中核に位置していたことは注目し値するだろう。漱石の弟子と教養主義の誕生が切り離せないことは言うまでもない。そこにもう一つ、漱石の弟子であり、同時にラファエル・フォン・ケーベル(1848～1923)の弟子でもあったということが付け加わるのが普通であろう。三木清(1897～1945)が「教養の観念は主として漱石門下の人々でケーベル博士の影響を受けた人々によって形成されていった」<sup>10)</sup>と指摘して以来、大正教養主義の説明の定番になった。

大正教養主義批判者として知られる唐木順三(1904～80)も、近代日本の教養を考えるうえで、「ケーベルにのみ就いて漱石に疎かった」者でなく、「漱石にのみ親しく、ケーベルに親近しなかった」者でもなく、「二人の先生に同時に親近した人々」の存在が重要であると言ひ、阿部、安倍、和辻そして岩波茂雄(1881～1946)の名を挙げる<sup>11)</sup>。まさに大正教養主義の奥の院のメンバーだ。唐木は『現代史への試み』(1948)において、「あれも

これも」気楽に享受し、多趣味と柔軟性をもたらしたが、性格と型を喪失したというように教養主義を批判したが<sup>12)</sup>、その「あれもこれも」の一つとして、ここでは、漱石にもケーベルにも師事したことが挙げられているわけである。もっとも、漱石は第一高等学校と東京帝国大学英文科の講師で、ケーベルは哲学科の講師であったから、「二人の先生に同時に親近した人々」は一高から帝大哲学科に進んだ（加えて創作にも興味があった）者たちであり、単純に学校歴の結果とも捉えられるということを一応言っておかねばなるまい。

唐木の論をもう一步進めると、するとむしろ反論になってしまうのだが、彼らは「二人の先生に同時に親近した」のではなく、どちらの師にたいしても「準弟子」程度にしか親しまなかったと言えるのではないか。唐木が槍玉にあげているのは阿部次郎だが、実際のところ、阿部次郎はそれほど漱石山房を訪ねていないし、漱石自身もあまり次郎を好いてはいなかったようだ。ケーベルとの関係についても同じようなことが言える。最初にケーベル先生の家自分を連れていってくれたのは、2年先輩の次郎であったと能成は思い出を語る。しかし「後何かの理由で阿部は先生を離れることになって、後は魚住〔影雄〕が中心となって、我々も度々先生の晩餐の席に連なった」<sup>13)</sup>。

漱石と阿部の関係について能成は「阿部の持つ自恃の念が思い切って赤裸々に漱石に接触することを妨げた」<sup>14)</sup>のではないかと分析しているが、これは安倍自身にも和辻哲郎にもあてはまる。要するに、だから能成は自分たちを「準弟子」と呼んでいるのである。「自恃の念」をもった「準弟子」は漱石に甘えなかった、そしてケーベル先生にも。阿部次郎は、自分はケーベル先生の「愛弟子」ではないと言いきっている。「私はいかなる先生にも全身を投げかけて甘えることができなかった」<sup>15)</sup>。

能成もまた、師の懐に飛びこんでいけなかったことを晩年になってこう

## 安倍能成、悪しき家父として

振りかえっている。「私に至っては魚住の如く〔ケーベル〕先生に甘えることもできず、久保〔勉〕の如く心身を傾けて先生に奉仕することもできず、又小宮の如く漱石に没到することもできない。彼等の関係を世にも好ましいとも美しいとも思うけれども、それをまねようとも思わず、又今更羨ましいとも思わなくなった。人にはめいめいの自然がある」<sup>16)</sup>。実際、「準弟子」とは、「漱石山房の亡霊」からも、ケーベルの呪縛からも自由だった者に他ならない。久保勉（1883～1972）は、ケーベルが死ぬまで一種の Hausgeist（家僕）として仕えたが、その後東北帝国大学に職を得、50歳過ぎになってはじめて家庭を手にしたことを、つまり自分自身の人生をもてたことを能成は心から喜んでいる<sup>17)</sup>。

先ほどからケーベル関係で名が出てきている魚住影雄（1883～1910）は、一高と哲学科を通して安倍能成の親友であり、藤村操や阿部次郎とも親しく、和辻の姫路中学の先輩だった。この人脈のなかにいた魚住であったが、明治末に27歳で夭折したため、大正教養主義の中心人物として取りあげられることは少ない。魚住は「ケーベルにのみ就いて漱石に疎かった」者の典型であろうが（安倍に拠れば、一高時代の魚住は夏目講師の「飄逸なユーモラスな話し振り」<sup>18)</sup>などを好まなかったらしい）、唐木順三は、早逝の所為なのか、魚住の名は挙げていない。ケーベルと魚住の親密な関係について、魚住自身が兄宛ての手紙で書いている文章を引用しておこう。「先生が私を baby と云わるるので、私が「私が baby ならあなたはお父さんです」（If I am a baby, you are my papa）という、又後ほどに先生が私に「子になるか」（Do you become my baby）、私は yes! という。〔中略〕菓子が出る、my baby と云いながら先生が私の口へもってこられる、私は手を出して頂こうと思ったがいやと思いかえして口をあいて入れてもらう、大笑になる」<sup>19)</sup>。

「女嫌ひ」<sup>20)</sup>と見られていた独身者ケーベルが、可愛らしく整った顔立

ちであった魚住を熱愛したことはよく知られているが、安倍はそこにむしろ my baby 側の甘えを見ている。「先生は魚住の肩に両手をかけたり、魚住の頬に頬を寄せたりすることもあった。そうして魚住は全くこれに甘えて居た。魚住の甘え性はここにエレメントを得た姿があった」<sup>21)</sup>。そして安倍は同じように森田草平のなかにも擬似父への無限の甘えを見る。「森田が晩年〔終戦直後〕共産党に入党した時、漱石が生きて居たらきっとそれを肯定してくれたろうといったのは、恐らく中らなかつたろうと思うが、これは森田が死んでもなお漱石に甘えて居たのだと思えば、かわいいとまではいえなくても一概にいやがるわけにもゆかなくなる」<sup>22)</sup>。

### 漱石商標問題をめぐる対決

ここまで安倍能成の側に立って事態を眺めてきたが、安倍の甘えにたいする敏感さ、(擬似)父への甘えを見逃さない態度もまた多少奇妙と言え、奇妙かもしれない。このことが明確にあらわれたのは、漱石商標問題をめぐって森田草平と対立した時である。

1947(昭和22)年8月23日付朝日新聞に「『漱石』商標登録の申請 夏目家で商標登録 漱石の全著作に「反文化的と出版界わく」<sup>23)</sup>という大きな見出しの記事が出る。当時、著作権の存続期間が著者の死後30年であったため、1916年12月に亡くなった漱石の著作権がちょうどその頃に消滅していた。それで、遺族が印税の代わりに商標使用料を得ることを考え、29種の商標(たとえば「夏目漱石全集」、「漱石」、「吾輩は猫である」など)を登録しようとしたのである。結局、夏目家の目論見は失敗するのだが、その詳細はここでは扱わないとして<sup>24)</sup>、こうした遺族の行動にたいして安倍能成がやや品位を欠くほどの、あるいは如何にも彼らしい非難をしたことに注目したい。

翌8月24日付朝日新聞にも「各方面に非難の声あがる」という見出し

## 安倍能成、悪しき家父として

で記事の続きが出た。その筆頭が「<sup>レ</sup>食いものにするな、安倍氏遺族なじる」なのである。取材を受けた安倍は法律的解釈や出版文化の問題よりも、漱石の長男（純一）と次男（伸六）の体たらくを責めたてたらしい。「遺族の人達は三十年間、漱石先生の労作によってひたひたに汗せずしてぜいたくな生活を送ってこられたのだ。もうこれ以上は先生の労作を国民の前に解放してもいいのである。良書として残すためなどと言っているようだが、本当はやはりいつまでも先生の力にしがみついていたという情けない心の現れであろう、それも老い先の短い未亡人が要求するならともかくこれから自分の力で生活を開拓すべき純一、伸六君などがこんどのような処置に出たことは実に遺憾である。漱石先生の作品が商品なみに商標登録を受けるよりも、漱石を愛せずして、漱石を食べ物にする遺族の人々の心情をわたしは悲しむのである」<sup>25)</sup>。

森田草平の8月25日の日記にはこうある。「朝日、毎日共に、昨日の紙上に夏目の遺族が漱石の著作を商標登録したというのでトップ記事として大々的に出したが、今日は又安倍、小宮、久米〔正雄〕等の談話をかかぐ。夏目家袋叩きに会っている形なり。俺は今日からそれに対する反駁を書き始めた」<sup>26)</sup>。というわけで、東京新聞に8月31日、9月1日、9月2日の3回に渡って漱石商標問題をめぐる意見を発表する。森田の批判の主な標的となった安倍能成が、今度は9月5日と7日の東京新聞紙上に森田にたいする反駁文を出すという動きになった。

森田草平の第一の主張は、漱石全集のおかげで「大岩波」となった岩波書店は印税を払ってやるべきではないかというものである。印税欲しさに他の出版社から全集を出そうとした漱石の息子を安倍は口汚く罵ったと森田は報告しもする。「安倍は「伸六が櫻菊〔書院〕に買取されたんだ、五万円位つかまされたんだらう」と吐き出すようにいていた」<sup>27)</sup>。第二の主張は、みな岩波書店の肩ばかりもつのはおかしいではないかということ

である。なぜか次第にこちらにたいする怒りのほうが大きくなって来る。「しかし、名士諸君はこんな一方的な、弱い者いじめの議論をして、（正に弱い者いじめである。岩波に盾突いたら操觚者としてたちまち痛手を負うだろうが、今の夏目家なぞいくらぶん殴っても決して損をする気遣いはない。）果たして自ら疚しいとは感ぜられぬだろうか。不思議だ」<sup>28)</sup>。

森田はもちろん安倍のこだわりも見抜いている。「安倍君は夏目の遺族が漱石の印税に依って徒食して来たばかりでなく、贅沢と思われるような生活をして来たことに多大の反感を持っているらしい。そして、彼の夏目家攻撃は主としてここに根差しているように見える」<sup>29)</sup>。けれども、父祖の築いた財産で遊んで暮らしている者なぞいくらでもいるではないか、なぜ漱石の家族には許されないのか、それはたんに安倍がやはり漱石を特別視しているだけの話ではないのかと。ついには森田はこう言い放つにいたる。「極言すれば、夏目の遺族なぞ食えなくなっても宜しい。ただそうなれば、岩波茂雄の子孫も漱石の著作に依ってもうけることは罷めてもらいたいと思うばかりである」<sup>30)</sup>。

たいして安倍能成は「君の誤解とおく測とにもとづいた文章」にはうんざりしたし、「冷静な議論のできない君」には何を言っても仕方がないから、「大事な事実」だけを挙げると反駁をはじめめるが<sup>31)</sup>、いずれにしる議論が噛みあうはずもなく、両者がそれぞれ何にこだわっているかが浮かびあがってくるだけである。「君は天下のジャーナリズムが「大岩波」の勢力の前に遠慮し、無辜の漱石遺族をいじめているように錯覚して、遺族のために弁ずることにヒロイズムを感じているようだが、これこそ実に滑けいの至である」<sup>32)</sup>と安倍は言う。森田が漱石遺族の味方をしているようにも見えないが、岩波書店がひじょうに大きな勢力と金力をもって文化界・学問界を牛耳っていると思ひこんでいることは確かである。そしてこの権力獲得もすべて漱石先生のおかげなのではないかと。ここに安倍から見る

## 安倍能成、悪しき家父として

と森田の誤解があるのだが、その前に安倍が自分の妙なこだわりについて素直に認めていることを確認しておこう。「〔今度の商標登録騒動は〕純一、仲六両君が、自分の汗によって生活する意力に乏しく偏に漱石の遺著に寄生しようとする態度から来るのであって、ぼくはどうしてもそれを是認し得ないのである」<sup>33)</sup>。

これは朝日新聞における非難の繰りかえしであるが、実はその一年ほど前すでに、盟友岩波茂雄への追悼文のなかでも漱石遺族にたいする怒りを露わにしている。たしかに岩波書店が発展していった理由の一つは漱石全集の刊行であろうが、岩波茂雄は採算を度外視して先生の完璧な全集を出版しようとしたのであり、「そこに利害の動機のなかったことは私の疑わぬところである」と安倍は力説する。「漱石先生の文学は偏に遺族を湿してこれをスポイルするまでになったが、遺族が岩波を単なる出入りの商人視して、岩波に対する感恩の念の薄いのは、私の遺憾とするところである」<sup>34)</sup>。

いや、実際はもっと以前から漱石遺族の金銭問題は岩波茂雄を困らせていた。久米正雄（1891～1952）が文学報国会の事務局長を務めていた時期というから、1942年か43年ころと思われるが、久米は、銀行の抵当に入ってしまった漱石山房を何とか買い取って保存したいという気持で、「弟子」のなかでは最も金銭的に成功しているであろう岩波茂雄に寄付を求めたのだという。結局この話は流れるのだが、岩波茂雄は、「夏目家の問題で大分苦勞している支配人」がいるので、その男から夏目家の経済事情や岩波書店の状況をまず聞いてほしい、その後改めてそちらの話を伺おうと答えたい。「そして、早速支配人なる人を、そこへ呼んで呉たが、要するに、岩波対夏目家の関係は、幾分秘事に属するとして、岩波の方の側から云えば、もう夏目家に対しては尽くすべき事を尽くしたから、これ以上は、金の件だったら何とも致し兼ねる、と云う事務的な返事だった」<sup>35)</sup>。

この「見るからに家老然とした、頑固一徹な支配人」とは堤常<sup>つつみつね</sup>（1891～1986）で、岩波書店の創業のころから経理係を務めてきた大番頭である。そして安倍能成の母方の従弟にあたる。ここから推察するに、安倍、堤、岩波は漱石遺族には困ったものだという気持ちを前々から共有していたのであろう。岩波は漱石先生への感謝を込めて破格の印税率を維持してきたが、遺族たちはそれを当然視するだけであったと<sup>36)</sup>。

ここで森田草平の言う「大岩波」の件に戻る。森田も、彼の「大岩波」という表現にたいして「安倍は「内情は決して大岩波じゃないよ」と苦笑していた」<sup>37)</sup>と報告しているが、安倍の言葉は、森田がそう考えたのとは違ってたんに金銭的なことだけを指しているのではない。たとえば先ほどの大番頭、堤常。彼がどれほどの無私の献身と日々の小さな苦勞の積み重ねで「大岩波」を支えてきたか。関東大震災後に店が財政危機にあったとき、経理担当の堤常が長い間こっそり自分の給料を全額カットしていたという「美談」が残っている<sup>38)</sup>。敗戦後のなお続く混乱のなかで店主の岩波茂雄も、その長男も亡くなったいま、みなが若い次男を支えていこうとしているというのが「大岩波」の現状だ<sup>39)</sup>。だから安倍能成は、「岩波茂雄の子孫も漱石の著作に依ってもうけることは罷めてもらいたい」という森田の言葉にたいして、「故人の印税というものは、遺族にとってはそれこそ一挙手一投足の労もなくはいつて来るもので、こんな楽な収入はない。出版者は紙も買い、印刷もさせ、人を使用し、労力も金も入る。遺族の無勞利得とはいくら違うところもあるう」<sup>40)</sup>なぞと、岩波茂雄の後継者たる次男を擁護して、いくぶん弱々しく言いかえしもするのである。

### さまざまな父

ここで問題となっているのは、あるいは安倍能成がこだわっているのは父の在り方、父と息子の関係である。エスタブリッシュメントにたいする

## 安倍能成、悪しき家父として

反抗息子としてあらわれた大正教養主義の担い手たちがみずからエスタブリッシュメントになり（ただし倉田百三などはいつまでも「不良少年の反抗」<sup>41)</sup>を続けたが）、「永遠の弟子」ではない「準弟子」たちが立派に「師」となり得たとき、そして一家の家長となったとき、どう振舞うべきなのか。まずは「大岩波」の店主から見てみよう。

1946年4月30日、大々的に行なわれた岩波茂雄の葬儀。その葬儀委員長として安倍能成は弔辞のなかでこう述べている。「岩波書店は岩波茂雄の力によってできたけれど、その事業は岩波一家のものではなくて天下の公業である」<sup>42)</sup>。実際、岩波茂雄は息子にそのまま店を継がせる気持ちはなかった。茂雄よりも半年前に病死した長男は東京帝国大学理学部物理学科を出たあと、東芝で初期のテレビ研究に携わっていた。娘婿でもある岩波編集者の小林勇に拠れば、次男が兄の死後に岩波書店に入ることを希望したさい（おそらく親孝行の意図で）、茂雄は、自分の息子だからと言って店を継がせることはしたくないし、甘やかされるから、まずはどこか外に奉公に出すと言いつ張ったそうである。東京帝国大学文学部を卒業したばかりの次男には、なぜ本屋になりたいのか文章の提出を求め、原稿用紙10枚ほど立派なものを書いてきたので入店を許し、最低の下っ端から働かせはじめたと<sup>43)</sup>。いささかクサイ話だが、個人の人格とその独立を重んじる教養主義の真骨頂を垣間見ることもできよう。能成も、一高の校長になった直後の新聞記事で、つまり世間的な視点から見れば最高の教育者として、子どもを甘やかすべきでないと主張する。「家庭生活が愛を基礎とすることはいうまでもないが、むやみに児童を甘やかして、父母の足手纏いとし、その独立の気性を傷めしめる軟教育の弊は、日本の家庭に於いて特にその甚だしきを見るのではないかと考えられる」<sup>44)</sup>。

それにたいして、漱石の二人の息子はどうか（娘たちはみなひとまず問題外である）。高等教育もまともに受けずにフラフラしていると「準弟子」

たちは、その責任をおおむね漱石未亡人の甘やかに被せながら考えていたらしい。和辻哲郎はヨーロッパ留学中に、つまり漱石の死から10年ほど経た1927年か28年ごろ、ベルリンの日本人クラブで夏目純一とばったり出会ったのだという。純一は当時、それこそ漱石全集の印税を湯水のように使ってヨーロッパを漫遊していた。和辻も子どものころの純一をちらりと見かけたことがある程度で、ほとんど初対面であったが、漱石の長男は少しばかり奇矯な自由人風の青年になって和辻の前にあらわれた。純一は、狂気のように折檻した父親を深く恨んでいると和辻に語ったそうである。和辻がいくら最高的人格者としての漱石の姿について伝えても、純一は納得しなかった。和辻は、母親が「父親の痲癩に対する反感を煽ったのではなかろうか」とさえ疑うのだが、ともかく純一にとって漱石は良き父ではなかったと和辻は見る。「だから私は、漱石の明るいサロンが、家庭の悲劇の犠牲において作り出されていた、と感ぜざるを得ないのである。ああいうサロンの空気は、すでに『吾輩は猫である』のなかにも見いだすことができる。漱石はそこでは妻子に見せるのとは異なった面を見せていた。何十人もの若い人たちに父親のような愛を注ぎかけた。そのための精力の消費が、夫として、あるいは父親としての漱石の態度に、マイナスとして現われるということはある得たのである」<sup>45)</sup>。

これは1950年になってからの文章であるが、和辻のこの捉え方が現実のすべてを言いあてているわけではなくとも、能成には見られない洞察があるだろう。漱石山房が有していたと思われる「ああいうサロンの空気」は、現在ではホモソーシャルという、少々使い古された言葉を以って否定的に捉えられるようである。実際、漱石はこうした知的で特権的な、従って当時は男性だけの「サロンの空気」を好んだにちがいないが、しかしそれを支えたのは漱石の妻鏡子の「太っ腹」であったことを最晩年の能成は認めている。「一時は奥さんが嫌になったが、元来さっぱりして太っ腹の人で

あり，姉御肌の気象にも，面白いところのあることが，だんだん分かって来て，むしろ好意を感じずるようになった」<sup>46)</sup>。1963年の鏡子の死に際して漱石の家族に接した能成は（和辻同様，「準弟子」たちはそれほど漱石の家族を知っていたわけではなかった）彼らの気さくな明るさに触れて，なぜかたいへん陽気になってしまう。「みんなが隣の仏様にかまわず，高い笑声を立てた」<sup>47)</sup>と。

### 家族主義と個人主義

漱石山房のホモソーシャリティや，それを支えた「家庭の悲劇」を強調しすぎることには，従って多少の注意が必要であろう。しかしいづれにしろ，漱石の「準弟子」である大正教養主義の書き手たちは，漱石に比べると，穏やかで堅実な戦前的新中間層の家庭を営んだと言える。鏡子とは違いきちんとした女子教育を受け，子どもの教育にも熱心な専業主婦，当時のホモソーシャルな学問界や文化界でそれなりの地位を確立した夫，順調に東京帝国大学に進学する息子たち，同じような賢い主婦へと再生産される娘たち。要するに，彼らは新中間層核家族の，いわゆる「教育する家族」の家長となった。そのような時代になっていたのである。こうした新中間層家庭がまた，教養主義の主な受容者たちの家庭でもあったわけで，教養主義の優等生的な生ぬるさ（本当にそうかどうかはともかくとして）が意地悪く指摘される所以となっている。

教養主義は比較的安定した家庭と家族に支えられたと言っていいだろう。いささか教科書的な表現になるが，大正教養主義が掲げたのは，自我の主張であり，自由な個々人の独立であり，自己への忠実であり，要するに個人主義である。魚住影雄が1905(明治38)年10月に一高『校友会雑誌』に発表した文章「個人主義の見地に立ちて方今の校風問題を解釈し進んで皆寄宿制度の廃止に論及す」<sup>48)</sup>が，当時一高内の主流派だった国家主義的

学生たちや集団主義を掲げる運動部員たちの反感を買い、あわや魚住への鉄拳制裁にまで発展しそうになり、魚住論文をめぐって校風問題演説会が開かれるのだが、この時、安倍能成は無鉄砲な親友を守り抜き、すでに帝大に進んでいた阿部次郎も乗りこんできて魚住擁護の論陣を張った<sup>49)</sup>。これが大正教養主義のはじまりと言えはじまりである。

魚住が過激な個人主義論を発表した切っ掛けは自分にあったのではないかと、晩年の能成は振りかえっている。1905（明治38）年3月1日の「第十五回寄宿寮紀念祭」において、能成は個人主義に関する演説を行なう。あまり自信もなかったのだが、「ところが意外にもこの演説は満堂の傾聴を得た」<sup>50)</sup>。木下杢太郎（太田正雄・1885～1945）の当日の日記が能成のこの成功と能成らしい率直な話ぶりを伝えている。「此夜の琵琶，狂言，生徒余興面白きもの一つもあらざりしが，何とかといえる若き弁士の，はじめは軽々しきいい様なりしが其理明に其情美わしく力ある演説をききて今日一日を讚しぬ」<sup>51)</sup>。

この同じ3月に能成は『校友会雑誌』に「個人主義を論ず」<sup>52)</sup>という論考を発表して好評を得る。というわけで、「魚住が翌年になって〔実際は同年〕思い切って、皆寄宿制度の廃止を痛論したのも、或は私のこの演説の成果に刺激されたのかも知れない」<sup>53)</sup>と老能成は回顧するのである。まことに能成はこの個人主義の勃興期の「花形」<sup>54)</sup>であった。

安倍能成の書くものは、自分も認めているとおり、やや練りかえしが多いのだが、個人主義の主張も、この一高生時代から死ぬまで、昭和初年のマルクス主義の台頭、戦中のファシズム時代、そして敗戦後の左翼全盛期もすべて乗り越えて練りかえしてきたことの一つである。1924年の婦人雑誌などでも、つまり戦前の女性にたいしても、「世の中には我々の成長を妨げる多くの套習がある。それを勇敢に無視し、もしくは排撃してもらいたい。よい意味に於ける個人主義はいつの時代に於ても、道徳と文化との

## 安倍能成，悪しき家父として

基礎でなければならない。個人主義の名がわるければ人格主義でもよい。自己の要求に忠実であるというより外に，結局に於て忠実な生き方はない」<sup>55)</sup>と訴えている。

それでは，実際の生活はどうであったかと言えば，安倍能成がこれも繰り返かえし書いているのだが，家族主義に相当に苦しめられてきたのだという。だからこそ，個人の精神的独立性の重要性を強調せざるをえなかったのかもしれない。つまり，能成の個人主義は全体主義，国家主義と対決するものと言うより，日本的家族主義への反抗であった。いずれにしろ能成は苦しんだことを正直に語った。父と兄たちの不甲斐なさと経済的な問題のせいで父母弟妹の面倒を一身に背負わざるを得なかったと。そしてこの家族の軛から逃れて自由に生きたいと願うとき，それは個人主義ではなく，たんなるエゴイズムなのではないかという思いに苦しめられたと。「私がかつて勝海舟の『氷川清話』を読んだ時，人間を弱らせること，家庭内の事如くはないという意味の一節を読んで，恐らく豪傑の士を以て任じたらうと思われる彼にも，この悩みがあったかと思い，又それを当然の事とも思い返したことがある」<sup>56)</sup>。同時に，父となっては自分の息子たちにはこうした苦勞をさせたくないと，不幸な個人主義者は思うのである。が，この話は最後にしよう。

地方の大地主の次男であった魚住影雄は，安倍能成とは違って経済的にも恵まれ，家族との軛轢もなかった。早くに亡くなった父とも，兄や母とも，親戚とも当時としては珍しいほどリベラルな，そして愛に満ちた関係を維持していた。魚住や安倍と哲学科の同級であった伊藤吉之助（後に帝大哲学科主任教授 1885～1961）は，魚住の実家を訪ねた時の印象をこんなふう語っている。「実に魚住の家庭は春風の吹きわたる思いがした。家族の人々は皆無邪気で快活であった。「魚住は主張は個人主義でも実行は家族主義だ」と誰かの言った戯談を思い出させた」<sup>57)</sup>。しかし，このよう

に経済的にも精神的にも安定し独立した親兄弟をもっていたからこそ、魚住は勝手気ままに（と、時に安倍の眼には見えた）<sup>58)</sup> 過激な個人主義を謳歌できたのではないのか。

## 八男の苦勞

それにたいして安倍能成のほうは父への恨みを自叙伝やエッセイでこれまた繰り返しかき書いた。安倍の描写からはどこかユーモラスな父の姿も浮かびあがり、それほど悲惨な話とも思えないのだが、一高校長時代の同僚である竹山道雄（1903～81）に拠ると、連載の自叙伝で「父親のことをひどく悪く書いたので（安倍さんは自分の父にはずっと怨恨意識をもっていた）、読者から投書が来、反省して本にするときにはその部分を削った」<sup>59)</sup> ということである。

士族出身で愛媛松山の医師であった父は、能成が12、3歳のころ、50代半ばでなぜか医業を放棄し、その後は財産で生活する状況であったらしい。次第に貧しくなっていく暮らしのなかでも、経済観念に乏しい父は家族を顧みず自分の衣食にはお金をかけていたという。しかしながら、家族の問題はこうした経済的な困窮（といっても、実はそれほどの困窮でもない）や家長のエゴイズムにあったのではなかった。長兄と次兄のドロップアウトが一家の生活に暗い影を投げていた。

能成は八男であった。まず、父の前妻の息子が二人で、能成が長兄、次兄と呼ぶ兄たちである。彼らは漱石と同じように明治維新前後の生まれなので、能成より15、6歳年上であった。そして能成の母である後妻が8人の息子をもうけたが、上の4人がすぐに亡くなり、能成が小兄と呼ぶ、2歳違いの兄と能成、そして二人の弟という構成である。こうして能成は戸籍上は八男であったが、出奔した長兄、道楽の果てに28歳で自殺した次兄、生れてすぐに死んだ4人の兄たち、善人だが「のほほん」<sup>60)</sup> として頼りに

## 安倍能成、悪しき家父として

ならない小兄に代わって、長男のような役割を果さざるをえなかったというのである。長兄は「法螺吹きではあったけれども、根が単純で腹に蔵する処のない男」<sup>61)</sup>だったが、父親とは性格があわず家を出てしまった後は、籍を入れない女とともに、のらくらと暮らしていた。父親に溺愛された美形の次兄はすぐにぐれて、家のものを勝手に売り払おうとしたり、借金をこさえたり、詐欺師と関わったり、新聞沙汰の事件を起こしたりと、座敷牢に入れられていたこともあったらしい。父の甘やかしが、文字通りの放蕩息子をつくったと能成は見ている。

「父は私とは異腹だった長男と次男との教育に失敗して、終始二人に厄介をかけられた欠陥を、我と私のすぐ上の兄によって満たそうとして、ともかく優秀な小学生とするには成功した」<sup>62)</sup>と能成は言う。この時父に厳しく仕込まれた漢文の素養や書道は後々ずいぶん役立ったし、あまり出世の見込みのない一高文科に進むことも、案外あっさり許してくれた（小兄は三高から京大工科）父なのだが、能成は、父がたんに見栄のために、後には生活のために子どもを利用していただけなのではないかと疑った。「父の私達を一家の名聞とするという態度には、常に反感を持って居た。そうして父のそういう態度にも父のエゴイズムを感じ」<sup>63)</sup>た。

ここには、漱石の息子たちにも見せた、能成の極めて厳しい態度があるだろう。父は、能成が長じてからはむしろ「私を憚るようになった」<sup>64)</sup>というが、老父のその気持ちもわからないでもない。漢学についても、やがては息子のほうが父を超えて、「父もその点は私に一目おくようになった」<sup>65)</sup>と。このような能成の家父長的振舞いが一番発揮されたのが、父の亡くなる前年、1914年夏に決行された長兄の廃嫡手続きの際である。「私が主張して長兄の廃嫡を取り計らったことは事実である」<sup>66)</sup>と能成は書く。長兄が昔の民法に則って全財産を相続するのは「正義に反くと思ひ出した」からであった。無論、自分が財産をもらうためでは断じてなく、それどこ

ろか、この件で得をしたのは結局長兄であったと能成は言うが、その意味するところは、自分が長兄に代わって、親と兄弟の面倒を見続けたということであろう。何も知らされないまま廃嫡された長兄は、狂言自殺めいたことをしたあと、小兄の家に引きとられ、同棲していた女にも去られ、廃嫡の4年後に亡くなったという。「こういういきさつをかくのも実に不愉快で、なさけない気持ちさえするが、私はこれを決行したことを恥だとは考えて居ない。やむを得ない処置だと思って居る。私は家族主義の名で、兄弟姉妹の為に自分を痛めつけることを、美德と考えないで不徳と考えて居る。美德とは自己の正しい要求を素直にのぼすことだというのは、私の奪う可からざる信念である」<sup>67)</sup>。

### 家族をめぐる小説

こうして大正初年にかけて、能成にとって家族関係の変化が立て続けに生じた。30歳前後のことになる。1912（大正元）年12月に藤村操の妹の恭子と結婚、1914（大正3）年6月に長男の誕生、その年の8月に長兄の廃嫡手続き、翌1915年10月に父の死。書き手としては、哲学科を卒業した明治末年ころから活躍が目立つようになってきていた。漱石の肝いりではじまった「朝日文藝欄」や『ホトトギス』などで文芸評論やエッセイを発表し、それをまとめるかたちで1911（明治44）年3月に、阿部次郎、小宮豊隆、森田草平との共著として『影と聲』を出す。そして1913（大正2）年9月に初の単著『予の世界』を刊行。その前月の8月には友人岩波茂雄が古本屋から出版業に乗り出していた。1915年、古本屋に毛が生えた程度の小出版社を大躍進させることになる「哲学叢書」の編集を、『三太郎の日記』（1914）ですでに人気を得ていた阿部次郎とともに担う。このように並べてみると、「家父」の誕生と、大正教養主義の書き手の誕生が重なっていることがわかるだろう。

さらに、能成は1911年秋からの1年間で3篇の短篇小説を發表している。1911年9月号の『ホトトギス』に「長兄」、『新小説』1912年1月号に「二階の家」、そして9月号に「落日」。こうした創作活動はしかし、小説家にはなれない、あるいは、ならないという気持とむしろ結びついていったようである。まだ大学の非常勤講師生活を送っていた1915年の新聞エッセイでは、長期の休みの時に「自分の時間」がもてる教師生活を有難く感じるが、だからといって、もっと自由な作家稼業は無理であると言っている。「自分は気が向いても向かなくても無理やりにペンを把る原稿生活はいやであるし、又到底出来そうにない」<sup>68)</sup>。

それにしても、なぜ小説を？という話になれば、やはり漱石の「弟子」として、というところに落ち着くであろう。初作の「長兄」が發表されたのは、『ホトトギス』が「五人集」と銘打って、三重吉、草平、次郎、豊隆、能成の、つまり漱石門下「五人集」の小説を掲載した折である。あるいは、小説を書くこと自体が一種のブームになっていたのかもしれない。宇野浩二(1891～1961)は1952(昭和27)年あたりから振りかえって、「明治の末年から大正の初め頃」ほど「才能ある作家や詩人や歌人が数おおく活動したのを見たことがない」と、思い出すまま次々と作家たちの名を挙げていき、「その他、更に、安倍能成や小宮豊隆までが小説を書いたのであるから、これでは、書いても、書いても、書ききれないのである」と言う<sup>69)</sup>。

このように言わば素人として小説發表の機会を得たとき、能成は自分の家族を素材として取りあげた。「長兄」ではもちろん、あの長兄が語りの対象となり、「落日」は次兄を中心に据える。「二階の家」は母方の叔父一家の不幸と没落を描いており、事実としても小説の設定としても、ちょうど能成が一高生の頃の出来事である。後の話になるので小説には書かれていないが、この叔父一家の、唯一生き残った病弱な長男が堤常であり、やがて従兄の能成に紹介されて岩波茂雄のもとで働き、健康も取り戻し、そ

の恩返しのようなかたちで岩波書店を支える番頭となる<sup>70)</sup>。これら3篇の小説の出来については判断できないし、また判断する必要もないと思われるが、能成に拠れば、小説は「名前を変えた外に、殆ど事実と実感とを描いた」<sup>71)</sup>ものであるという。ただ、「長兄」と「落日」では「東渡生」というペンネームが使われている。

能成が一高卒業時の帰省のついでに15、6年ぶりに、津山に住む長兄を訪ねた折の話が「長兄」の題材である。冒頭から、能成を思わせる主人公の七郎は尊敬する先輩（おそらく漱石）と兄がほぼ同年齢であることを考え、その大きすぎる違いに気持ちを腐らせている。しかし兄は能天気で明るく、単純に弟の訪問を喜び、平気で兄貴風を吹かせたりもする。「水草を追うて移住する様な御手軽な無造作な変化に富んだ漂浪生活」<sup>72)</sup>を送ってさまざまな経験もし、それなりの苦勞をしているはずの長兄がその痕跡もなくのんびりとしたままであることに、七郎は不思議すら感じてしまう。これは、「二階の家」の叔父にもあてはまる。士族の家柄が次第に没落し、食い詰めて無一文同然で上京を余儀なくされ、妻も死病に倒れるのに、昔話をするときの「叔父の顔には如何にも苦のなさそうな子どもらしい所」<sup>73)</sup>さえ浮かびあがる。とりあえず学歴エリートとして上昇しつつあり、豊かな精神生活を築こうとしている主人公が、没落しつつも、あるいは下降生活者であるからこそ気楽に生きる親族を複雑な感情で見ているという点で漱石の『道草』（1915）と似ているかもしれない。

生涯で最後の小説となった「落日」では主人公が、28歳で自殺した兄のことを語っている。兄は、語り手が中学3年生の時に自殺したのだが、それからまた12、3年ほど経った現在の視点から振りかえっているのである。つまり、語り手はちょうど兄が自殺したころの年になっている。「この頃よく一人ぼつ然と五月雨の鬱陶しい空に対して居ると、亡くなった兄のことが頻りに過去の記憶の中から浮み出て来る」。「兄の放縦な漂浪生活と、

## 安倍能成、悪しき家父として

自分の平凡な波瀾のない単純な生活とは、何という著しい対照であろう」と<sup>74)</sup>。

兄はさまざまな犯罪的行為に関わり、奇妙な政治活動に首をつっこみ、なぜか女装をして歩き、町でもつねに悪い噂の種となっていた。こんな兄のせいでいじめられもした語り手は中学生になると、「何とかしてえらい者になって、兄の汚名を雪ぎたい」<sup>75)</sup> 気持ちで表面的な優等生になり、「毎朝起きると東天に向って自分の将来の成功を祈って居た」<sup>76)</sup>。だが、いまは時にこう考えてしまう。「兄は勝手なことをした。何でもやりたいことをやって親も兄弟もかまわず、女の風までもして、わるい病気を得て木賃宿で毒を仰いで死んだ兄の一生を、或る意味に於て悲痛な何だか羨ましい所もある生活だと思うこともあるのも、つい近頃になってである」<sup>77)</sup>。

### 息子から見れば

自殺した兄を「何だか羨ましい所もある」と記した能成は、世間的な目から見れば立派な成功者、真面目な教養主義の書き手、そして家族にとって厳父であり通した。だが、この「父」のありようについては少し説明が必要だ。能成の長男は、終戦直後の10月に病死するが、その3か月前の7月に友人宛の手紙のなかでこう言っている。「僕の父は悪しき家父です。必ずしも自分でそれを是認して居るのではない。公務の忙しいことを家を顧みない口実にしているばあいもあることを、自分でも反省していると思う。母は口では不平を云います、然し根本に於て父の態度を是認していません。〔中略〕親父は「悪しき家父」で「正しき公人」だから、何も疎開もしないですべてのものを〔空襲で〕焼いてしまいました」<sup>78)</sup>。

この言葉をそのまま読めば、能成が漱石と同じように家庭の雑事をあまり顧みなかった、公のための男の大事な仕事を優先し家族を犠牲にしていたというふうにとれる。しかし能成自身は、富裕な名家から妻を迎えた長

男が自分の実家からはあまり金銭的援助を受けられないことに不満を抱いていたと見ている（長男の手紙にはそのような話はまったく出てこないのだが）。「彼のいわゆる私の「悪しき家父」にはその基礎に私一流の考え方があった。それは一つの個人主義というべきものであろうが、極めて平凡なものである」と能成は言う。自分が親兄弟の所為で味わった苦労を自分の子らにはさせたくない、と同時に、「子供に対する扶助をも打ち切り、従来の家族主義的な重圧の下ではなく、自由な意志から互いに助け合って生きてゆきたい、親が子をあてにし子が親をあてにするために、互いに不快な気持にならぬようにしたい」、こういう「独立せる人格として自由に助け合うという理想に拘泥するところもあった」と<sup>79)</sup>。

まさに「よい意味に於ける個人主義」あるいは「人格主義」が家庭のなかにも、家庭のなかにこそ導入されようとしていたわけである。もっとも、ある程度裕福になった親たる能成は成人した息子を渋々だったとしても金銭的に助けていた。「彼等の結婚披露のために多大の費用を使うことにも、私は気の進まぬところがあった」<sup>80)</sup>と能成は言っているが、実際1943年という大変な時期にもかかわらずかなり大きな披露宴を催したらしい。大正元年の能成自身の質素な結婚の宴とは大きな違いである。そこでは大人の客は漱石を含めた3名しかおらず、能成の両親の出席もなく、あとは少数の友人だけで無礼講的に祝われたのだという<sup>81)</sup>。

長男の披露宴に招かれた野上彌生子（1885～1985）の1943年5月11日の日記にはこうある。「八日夜のアベ家の結婚式は道ちゃんの時ほどにはないがそれでも中々盛んなものであった」<sup>82)</sup>。「道ちゃん」というのは能成の長女であるが、彌生子はこの披露宴についても日記（1942年12月12日）を残している。「披露宴は中々の盛宴であった。縁遠いのをきのどくがられていた道ちゃんがみんなに羨まれる良縁をえたわけである。こんなことは娘のない私たちにはただお目出度いとおもうだけだが、そうでない

## 安倍能成、悪しき家父として

母親には大に羨望と焦慮を与え<sup>ママ</sup>に違いない<sup>83)</sup>。彌生子が何を以って「みんなに羨まれる良縁」と言っているのかははっきりしないが、雪の結晶の研究で知られている中谷宇吉郎（1900～1962）の紹介でその一番弟子と結婚したこと、当時としては重要だった軍関係に近い理系領域の研究者であり、その父親が有名な航空工学者の海軍中将であったことなどを頭に置いているのかもしれない。

彌生子の日記からわかることは、大正教養主義者の二世たちが良家との、いわゆるお見合い結婚をし、親がかりで、親の知人たちを大勢招くような披露宴を受けられていることである。すでに何度か言っているように、反抗的な若者であった大正教養主義者たちは、能成も和辻も阿部も岩波も、そして彌生子も、当時としてはまだ珍しかった、親とは関係のない自由な結婚を選んだ。だが二世たちは言わば文化的名士となった親にふさわしい結婚をするのである。しばしば指摘される大正教養主義者の体制順応者への変化は二世たちの結婚のなかに鮮やかに見てとれるのではないか。

ところで、能成の孫である安倍オースタッド玲子（国文学者、オスロ大学教授）はこんな話を伝えているので、最後に引用しておこう。「恐らく祖父〔能成〕は意識していなかったのだと思いますが、女たちは決して男と同じおかずは期待できなかった。それを嫁として体験した母がよく不満げに話していました。安倍のうちでは松茸ごはんを炊いたら、松茸を食べるのは男たちで、女たちは松茸の香りごはんだった、と。母は明治の女ではなかったし、当時としてはかなり自由な家庭に育っていたので、カルチャーショックだったようです。こういう明治の男の矛盾は漱石の小説にもさかんにテーマ化されていて、興味深いです<sup>84)</sup>。

もちろん人間の性格に考察すべき深みと面白さを与えるのはこうした「矛盾」に他ならないのだが。

註

- 1) 「ごあいさつ」, 新宿区立漱石山房記念館編, 『森田草平：生誕140年記念永遠の弟子』, 2021年, 2頁。
- 2) 森田草平, 「緒言」, 『夏目漱石』, 甲鳥書林, 1943年, 1～2頁。引用に際して旧仮名遣い・旧漢字を新仮名遣い・新漢字に改めたが, 以下も同様である(ただし特別な場合を除く)。なお, [ ]内は引用者の補足である。
- 3) 森田草平, 『漱石先生と私』下巻, 『森田草平選集』第4巻, 理論社, 1956年, 233頁。
- 4) 「森田草平選集月報3」, 1956年9月, 3頁。
- 5) 小島信夫, 「永遠の弟子 森田草平」(初出1967年7月), 『私の作家評伝』, 中公文庫版, 2024年, 7頁。
- 6) 同上, 39頁。
- 7) 森田草平, 「誰が一番愛されていたか」, 『夏目漱石』, 107頁。
- 8) 安倍能成, 「漱石とその弟子たち」, 『新潮』第47巻8号, 1950年, 62頁。安倍能成は, 漱石の死の直後から, 自分が漱石の「弟子」とは言えないことを強調していた。「夏目先生の追憶」(初出『思潮』第1巻2号, 1917年), 『山中雑記』, 岩波書店, 1924年, 296頁。
- 9) 森田草平, 「田舎に棲みて——最初の「漱石全集」刊行を中心に」(初出1947年5月), 『私の共産主義』, 新星社, 1948年, 197頁。
- 10) 三木清, 「読書遍歴」(初出1941年), 『三木清全集』第1巻, 岩波書店, 1966年, 387頁。
- 11) 唐木順三, 「ケーベルと漱石——二つの椅子の間」(初出1952年), 『唐木順三全集』第11巻, 筑摩書房, 1982年, 215頁。
- 12) 唐木順三, 「現代史への試み——型と個性と実存」, 『増補 現代史への試み』(初出1948年), 『唐木順三全集』第3巻, 筑摩書房, 1967年, 75～198頁。
- 13) 安倍, 『我が生ひ立ち』, 岩波書店, 1966年, 407頁。
- 14) 「漱石とその弟子たち」, 56頁。
- 15) 阿部次郎, 「ケーベル先生の言葉」(初出『思想』第133号1933年), 『阿部次郎全集』第10巻, 角川書店, 1960年, 251～252頁。
- 16) 安倍, 「『ケーベル先生とともに』に序す」(初出1951年), 『一リベラリス

安倍能成、悪しき家父として

- トの言葉』、勁草書房、1953年、257頁。
- 17) 同上、259頁参照。
  - 18) 『我が生ひ立ち』、348頁。
  - 19) 魚住影雄、「1907（明治40）年6月16日兄宛ての手紙」、『折蘆書簡集』、岩波書店、1977年、264～265頁。
  - 20) 「我哲学界の恩師ケーベル博士危篤 横浜領事館に九年間の蟄居 女嫌ひの大沈黙家」、『東京朝日新聞』1923年6月14日付第5面。
  - 21) 「『ケーベル先生とともに』に序す」、253頁。
  - 22) 「漱石とその弟子たち」、56頁。
  - 23) 『東京朝日新聞』1947年8月23日付第2面。
  - 24) 櫻菊書院の漱石全集、そして漱石商標登録をめぐるの漱石遺族と岩波書店との対立についての詳細は、矢口進也著『漱石全集物語』（岩波現代文庫版、2016年）の第5章「桜菊書院の登場」を参照されたい。
  - 25) 『東京朝日新聞』1947年8月24日付第2面。
  - 26) 森田草平、「日記」、『森田草平全集』第5巻、理論社、1956年、247～248頁。
  - 27) 森田草平、「一面的な抗議」（初出『東京新聞』1947年8月31日付）、『私の共産主義』、211頁。
  - 28)・29) 森田草平、「文化財と公有物」（初出『東京新聞』9月2日付）、『私の共産主義』、215頁。
  - 30) 同上、217頁。
  - 31) 安倍、「大事な事実だけを——森田君の抗議に答えて（上）」、『東京新聞』1947年9月5日付。
  - 32)・33) 安倍、「紛糾した原因——森田君の抗議に答えて（下）」、『東京新聞』9月7日付。
  - 34) 安倍、「岩波と私」（初出『世界』1946年6月号）、『一日本人として』、白日書院、1948年、214頁。ただし、こうした場所で関係ないことにまで言及してしまう安倍能成の大人げなさを指摘する向きもある。晩年の漱石の弟子である林原耕三（1887～1975）は、次のように安倍能成の「悪い癖」について述べている。「例えば、森田草平氏の葬儀の時の弔辞にまで、故人の悪口を繰り返したり、上野精養軒に於ける〔夏目〕伸六さんの結婚式の祝宴で

のスピーチで、お前たち（純一さんを含めて）漱石を父に持つことで、いい気になってはいかぬ、自分は自分だと思えなどと言ったり、そういう場合に他の人なら能う言わぬことを言う。唯さえ漱石を父に持つことに負い目を感じ、劣等感を抱いて悩んでいる子たちに、衆人跳座の中で言う、わざわざ言う、そういう悪い癖があった」（『漱石山房の人々』、講談社、1971年、191頁）。林原は最初の漱石全集の編集メンバーから外されたことで安倍能成には恨みをもっていただと思われる。それにたいして草平のことは「〔漱石山房の人々のなかで〕あれが一番いい人だった」と小島信夫に言ったそうである（『狂気と羞恥 夏目漱石』、『私の作家評伝』、82頁）。

- 35) 久米正雄、『風と月と』、鎌倉文庫、1947年、110頁。
- 36) さらに付け加えると、国文学者の山本芳明に拠れば、昭和に入ると漱石全集の売上げの重要度は下降し、岩波書店の屋台骨を支えたのは自然科学系と社会科学系の書物であったという。とりわけ、検閲が厳しかった戦時中は自然科学系の本の売上げに助けられた。漱石が国民作家的位置を得るのも戦後になってからだと言われているが、そのことを別にしても、岩波書店を岩波書店たらしめた漱石全集と哲学叢書（つまり大正教養主義の本尊）は次第に後退していったわけである。「岩波茂雄と夏目漱石」、『漱石研究』第13号、翰林書房、2000年、184～185頁参照。
- 37) 「一面的な抗議」、『私の共産主義』、211頁。
- 38) 上野直昭、「或る美談」（初出1951年）、『邂逅』、岩波書店、1969年、225～227頁参照。
- 39) 1949年、堤常を会長、次男の岩波雄二郎を社長として岩波書店が株式会社になった際、安倍能成も監査役を引き受けている。『写真でみる岩波書店80年』、岩波書店、1993年、106頁参照。
- 40) 「紛糾した原因——森田君の抗議に答えて（下）」。
- 41) 亀井勝一郎は次のように言う。「『三太郎の日記』からは教養人の内的苦悩を、『愛と認識との出発』からは不良少年の反抗を感じた。云うまでもなく、私の最も魅せられたのは、倉田氏の反抗であった。西田、阿部両氏が模範的秀才なら、倉田氏は学校をサボる不良である」。「青春のゝ助産役、二十世紀最大のテーマとの対決がない」『青春の古典』、『日本読書新聞』第574号、

安倍能成、悪しき家父として

- 1951年1月1日第4面。
- 42) 安倍, 「岩波を弔う詞」, 『一日本人として』, 201頁。
- 43) 小林勇, 『惜樂莊主人:ある岩波茂雄伝』, 講談社文芸文庫版, 1993年(初出1963年), 379～380頁。
- 44) 安倍, 「家族制度と生活の問題」(初出『讀賣新聞』1940年12月23日付), 『巷塵抄』, 小山書店, 1943年, 48頁。
- 45) 和辻哲郎, 「漱石の人物」(初出1950年), 『和辻哲郎全集』第3巻, 岩波書店, 1962年, 427頁。
- 46) 安倍, 「漱石先生と漱石夫人」(初出『図書』1963年7月号), 『涓涓集』, 岩波書店, 1968年, 110頁。
- 47) 同上, 112頁。
- 48) 魚住影雄, 「個人主義の見地に立ちて方今の校風問題を解釈し進んで皆寄宿制度の廃止に論及す」, 『校友会雑誌』第150号, 1905年10月28日, 1～15頁。
- 49) 魚住事件の詳細は『我が生ひ立ち』の380～386頁参照。なお, 一高の校風論争については次の論文を参照されたい。菅井鳳展, 「明治後期における第一高等学校学生の思潮——『校友会雑誌』を中心に」, 『日本近現代史 2 資本主義と「自由主義」』, 岩波書店, 1993年, 147～183頁。
- 50) 『我が生ひ立ち』, 363頁。
- 51) 「木下空太郎日記」第1巻, 岩波書店, 1979年, 151頁。ところで, 安倍は1906(明治39)年2月23日には「クォーワヂスをよむ」という講演をしているが, この時も, 安倍の気取りのない話しぶりが多くの一高生を引きつけたようである。当時一高生だった谷崎潤一郎(1886～1965)は安倍の性格の特徴をよく捉えている。「そしてその時の演説の内容は, 特に深みのあるものではなかったが, いかにもそういう彼の人が迷り出たものであった。私はああ云う風に演説する人の人格とまごころとが溢れ出た演説を, その後あまり聴いたことがない。別にそう変ったことをしゃべっているのではないが, 飾り気のない一語々々を通じて現われる安倍君の人格に, 妙な薫染力があって聴者を魅了するのである。そう感じた者は私一人ではなかったと見えて, 演説が終った時は非常な喝采であった」。「同窓の人々」, 『谷崎潤一郎全

- 集』第16巻，中央公論社，1968年，44頁。
- 52) 安倍，「個人主義を論ず」，『校友会雑誌』第145号，1905年3月28日，1～9頁。
- 53) 『我が生ひ立ち』，363頁。
- 54) 安倍能成，勝本清一郎，唐木順三，竹山道雄による「大正の精神史」という座談会のなかで，冒頭，竹山によって次のように言われている。「個人主義が目ざめてから〔昭和初期のマルクス主義の流行によって〕押しのけられるまで，これはずいぶん大事な時期の大事な問題だと思うのですが，不思議に閑却されています。これを，その時代の花形で，その時代を作った安倍先生にひとついろいろ伺いたいと思います」。「大正の精神史（上）」，『自由』第3巻9号，自由社，1961年，66頁。
- 55) 安倍，「よい意味に於ける個人主義」，『婦人之友』第18巻5号，1924年，16頁。
- 56) 『我が生ひ立ち』，230頁。
- 57) 伊藤吉之助，「魚住君の追懐」（初出1911年），『折蘆書簡集』，岩波書店，1977年，641頁。
- 58) 安倍は，早逝した魚住を最も心に残る「忘れられない友人」として回顧しているが（「魚住影雄のこと」『新潮』第46巻1号，1949年，および「再び魚住影雄のこと」『新潮』第46巻2号），最晩年には，魚住の甘やかされた少年のような唯我独尊的な性格にも触れ，鉄拳制裁を主張した運動部の連中の気持ちも実はわからないでもなかったと言っている。『我が生ひ立ち』，383～386頁参照。
- 59) 竹山道雄，「安倍能成先生のこと」（初出1981年），『竹山道雄著作集4』，福武書店，1983年，201頁。
- 60) 『我が生ひ立ち』，486頁。
- 61) 同上，399頁。
- 62) 同上，504頁。
- 63)・64) 同上，505頁。
- 65) 同上，150頁。
- 66) 同上，484頁。
- 67) 同上，485頁。この長兄の廢嫡手続きの時期については，安倍ははっきり

## 安倍能成、悪しき家父として

- 覚えていないとし、自叙伝のなかで明記していないのだが、大西貢の戸籍簿調査に拠れば、「大正参年八月拾九日推定家督相続人排除の裁判確定同月式拾七日届出同日受付」とあり、父の亡くなる1年ほど前となる。大西は、安倍がある種の後ろめたさから、意図的に正確な記述を避けていると見ている。大西貢、「大正期教養派の成立とその挫折——安倍能成の文芸評論」、『近代日本文学の分水嶺——大正文学の可能性』、明治書院、1982年、285頁。
- 68) 安倍、「春休みの日記より」、『讀賣新聞』1915年5月23日付。
- 69) 宇野浩二、「芥川龍之介」（初出1952年）、『宇野浩二全集』第11巻、中央公論社、1973年、71頁。
- 70) 堤常と岩波茂雄の関係については、「岩波と私」の221～222頁参照。『我が生ひ立ち』にも「堤一家のこと」として、実際は母の兄なので伯父と書かれている以外はほぼ小説の内容と同じ状況が書かれている（428～431頁）。
- 71) 『我が生ひ立ち』、401頁。
- 72) 東渡生、「長兄」、『ホトトギス』第14巻9号、1911年、50頁。
- 73) 安倍、「二階の家」、『新小説』第17巻1号、1912年、73頁。
- 74) 東渡生、「落日」、『新小説』第17巻9号、1912年、49頁。
- 75) 同上、64頁。
- 76) 同上、68頁。
- 77) 同上、71頁。
- 78) 安倍亮、「河田敬義宛て書簡」、安倍能成編、『一青年科学者の手記』、白日書院、1948年、165～166頁。
- 79)・80) 安倍能成、「亡兄亮のこと」、『安倍亮 追悼録』、非売品、1949年、251～253頁。
- 81) 『我が生ひ立ち』、464頁。
- 82) 野上彌生子、『野上彌生子全集第Ⅱ期』第8巻、岩波書店、1987年、35頁。
- 83) 同上、第7巻、586頁。
- 84) 安倍オースタッド玲子、「講演 安倍能成の子規への思い」、『子規会誌』第163号、2019年、55頁。

本研究はJSPS 科研費 JP22K00498 の助成を受けたものである。

## Abe Nosei or the “Bad Father”

TAKADA Rieko

This paper aims to elucidate the features of the individualism espoused by Abe Nosei (1883–1966) by examining his relationships with his father, his elder brothers, and his sons. The analysis focuses on Abe’s autobiography and his three autobiographical novels. The motto of Taisho-liberalism, of which Abe was the leading exponent, was self-assertion, independence of free individuals, and loyalty to one’s own wishes and feelings. In the context of pre-war Japan, this individualistic mindset may also be viewed as a form of rebellion against authority. However, Abe had to suffer from the Japanese concept of familism, which is exactly opposite of his rebellious individualism. In contrast to his elder brothers, who had dropped out of society, Abe was able to advance in his career; however, he had to provide financial support to his parents and siblings from an old family that had fallen. When he wished to escape the yoke of this family and live freely, he was tormented by the feeling that this was not individualism but simple egoism. This paper presents several episodes and statements by Abe, demonstrating his criticism of the “dependence” (*amae*) that exists between family members and between master and disciple. Abe wanted to spare his sons the hardships he had faced and tried to establish “individualism in a positive sense” within the family structure. He advanced the notion that family members were autonomous individuals capable of offering assistance to one another on a voluntary basis. Nevertheless, Abe did not necessarily exemplify this ideal in his role as a father or husband. He placed a high value on his role as a public figure and made considerable personal sacrifices to fulfill his professional responsibilities. Abe’s eldest son, who prematurely died, re-

# An Exploration of Japanese Working Holidays: Trends, Motivations, and Challenges

Thomas LEGGE

## Abstract

This paper explores the trends, motivations, and challenges surrounding Japanese working holidays (WH) by considering existing literature and recent media. It looks at some of the reasons why young Japanese people decide to embark on WHs, and considers the role that perceived financial incentives, stemming from Japan's stagnant wages and a weaker yen, may now play in their decision-making processes. The paper also highlights some of the challenges that WH participants face, such as difficulty in finding regular or stable work, underpaid wages, poor working conditions, and difficulties in re-entering the job market upon return to Japan. Finally, it briefly reflects on the shifting demographic and economic landscape in Japan, suggesting a potential for WH returnees to contribute valuable cultural and linguistic skills to an increasingly globalized workforce in future.

---

**Keywords :** working holidays, Japan, Australia, job hunting, financial

## Introduction

For over forty years, young Japanese people have had the opportunity to travel abroad through working holiday (WH) programs. In Japan, the governmental organization which oversees the WH system is the Ministry of Foreign Affairs (MOFA). The first bilateral WH arrangement was established with Australia in 1980 (MOFA, 2024a), followed by New Zealand in 1985 and Canada in 1986. Programs were later introduced in several non-English-speaking countries, including the Republic of Korea (1999), France (2000), and Germany (2000). The United Kingdom joined in 2001, followed by Ireland and Denmark in 2007 and Taiwan in 2009. Since 2010, an additional 20 countries, primarily in Europe, have been added and, as of June 2024, Japan has bilateral WH agreements with 30 countries worldwide (MOFA, 2024a).

Around 20,000 Japanese people participate in WHs abroad each year, according to the Japan Association for Working Holiday Makers (JAWHM)<sup>1)</sup>. Approximately 40% of these participants are students and 70% are female (JAWHM, n.d. -a). In comparison, neighboring South Korea, with a smaller population, sends around 100,000 people on WHs annually. JAWHM has stated its goal of collaborating with the Japanese government to promote WHs to increase the number of participants to a similar level (JAWHM, n.d. -a).

This article examines existing literature and media coverage on young Japanese people and WHs, aiming to outline recent trends and explore the factors driving the growing popularity of WHs among Japanese youth. It also considers the challenges faced by working holiday makers

(WHM) and how their experiences are perceived.

### **Working Holiday Trends**

The most popular of the (now 30) countries available to Japanese holiday makers is, and has always been, Australia (Fujioka, 2017, as cited in Cavcic, 2024). Oishi describes Australia as “the most accessible English-speaking country for Japanese youth” (2022, p. 34), while Furuya (2021) notes the ease with which Japanese WHMs can acquire Australian WH visas. If we consider the data for 2013, just under 11,000 Australian WH visas were given to Japanese people (Fujioka, 2019) out of a total of just over 20,000 visas issued for all WH destinations (JAWHM, n.d. -b). In other words, around half of all WHs undertaken by Japanese people were to Australia.

The scale of the WH visa program in Australia has grown over time. In 1980, there were just 884 visas granted (Fujioka, 2019). This number climbed rapidly and, by the end of the 1990s, Australia was granting nearly 10,000 WH visas a year to young Japanese people (Fujioka, 2019). The number of Australian WH visas granted to Japanese remained constant until the mid-2000s when there was a considerable drop (Fujioka, 2019). From then, numbers began to climb again, with nearly 11,000 visas granted in 2017 (Fujioka, 2019) and the three-year average for the period leading up to the coronavirus pandemic of 2020 was 11,300 visas per year (Bloomberg, 2024).

Following the pandemic, a period in which hardly any visas were granted (Bloomberg, 2024), there has been a significant rise in the number of visas granted to Japanese WHMs in Australia, with 14,398 issued

between June 2022 and June 2023 (Bloomberg, 2024). This is the highest number of Australian WH visas that has ever been granted to Japanese people (NNA Asia, 2023) and visa numbers for the following year are expected to be higher still (NHK, 2024). Although there is still a long way to go before Japan will see participation at anything like the levels in South Korea, WHs are more popular than ever among Japanese young people.

Canada has also seen an increase in WH activity with 8,000 visas being granted in just 10 months in 2023, compared with a 3-year average of 6,700 a year before the pandemic (Bloomberg, 2024). While UK participation rates for Japanese WHMs have remained flat, this is likely due to the low cap of 1,500 visas per year that existed up until April 2024 (MOFA, 2024b). This cap has been raised to 6,000 visas per year (MOFA, 2024b) and so it is likely that more Japanese young people will undertake WHs in the UK in future.

### **Motivation for Undertaking Working Holidays**

MOFA describes the Working Holiday System in Japan as follows:

“The working holiday programmes are, based on bilateral arrangements, intended to make it possible for the youth of Japan and its partner countries/regions to enter each country/region primarily for the purpose of spending holidays while allowing them to engage in employment as an incidental activity of their holidays for the purpose of supplementing their travel funds. The programmes are designed to provide the youth with wider opportunities for them to appreciate the culture and general way of life in the partner countries/

regions for the purpose of promoting mutual understanding between Japan and its partner countries/regions.” (MOFA, 2024a)

In this description, the bilateral nature of the WH system is emphasized. Additionally, by describing work undertaken by WHMs as *incidental* or *supplemental* in nature, it makes clear that the main purpose of the experience is the *holiday* as opposed to the *work*. In other words, programs should be culturally, as opposed to financially, enriching. This is a perspective that can be found in academic studies relating to WHs. One such study is that of Wilson, Fisher, and Moore (2009), which reinforced the notion that work undertaken by WHMs should largely be a means to an end in supporting participants’ travel rather than the main motivation for going. The study concluded that “cultural aspects of the WH experience are important, even central” (2009, p. 16).

On the other hand, other studies have found that the work conducted by WHMs can hold value in and of itself. It has been argued that it can form an integral part of the overall experience (Uriely and Reichel, 2000) and that it can impact social bonds, well-being, cultural exchange, and even national identity (Spyriadis and Went, 2024). Similarly, Matsubara and Tsutsumi (2021) presented four case studies of young Japanese individuals on WHs in Australia, each of whom was carrying out work that had a positive, well-defined purpose which was connected to their broader life goals and interests.

Several surveys have directly canvassed larger groups of WH participants about their motivations for doing a WH. In 2004, a survey by the Japan Association of Overseas Studies (一般社団法人海外留学協

議会) indicated a number of different reasons why young Japanese people were choosing WHs. The most common of these were a desire to live abroad (83.6%), improving foreign language skills (53.3%) and wanting to go overseas without a particular reason (41.9%) (Fujioka, 2017, p. 102 as cited in Cavcic, 2024).

Another online survey conducted in 2022 revealed “gaining experience” as the most significant reason for undertaking a WH (55.2%), followed by improving language skills (51.6%) and a general desire to live abroad (50.7%) (Value Press, 2022, in Cavcic, 2024). Cavcic’s own study, which examined online testimonials of women published between 2012 and early 2023, identified a wide range of motivations for doing WHs, the most common of which were for acquiring language, experiencing living abroad, traveling, or taking a career break (Cavcic, 2024).

Oishi (2022) indicated several reasons why Japanese young people were undertaking WHs. She noted that the ability to improve English ability was a key driver for many WHMs. Wanting to see and experience different cultures, and the ability to take a break from difficult or stressful jobs in Japan were also mentioned in her study. Kato (2013) argued that young Japanese people decide to do WHs for the purposes of self-searching.

Less reflected in the above studies and surveys is the notion of any kind of financial motivation for doing a WH. However, if recent (i.e. post-2022) media coverage in Japan and Australia is to be believed, financial reasons are one of the primary reasons for young Japanese people deciding to undertake a WH. Indeed, Nikkei Asia reported that the yen’s declining value has directly contributed to the increase in WH

applications from young Japanese people (Nikkei Asia, 2022) and Kota-  
ro Sanada, who works for JAWHM, is quoted in the Asahi Shimbun as  
saying, “[working] holidaymakers have grown increasingly interested in  
Australia due to the plummeting value of the yen since the global pan-  
demic” (Asahi Shimbun, 2024).

There is a growing corpus of newspaper articles and other media  
coverage that support this narrative, with frequent tales of young Japa-  
nese people jetting off to Australia, or elsewhere, and working in facto-  
ries or cafes where they earn multiples of their previous salaries back  
home. There is even a book, written by Toru Uesaka and published in  
November 2023, titled *Leave Cheap Japan for a Working Holiday!: Young  
People Who Found Their Dreams in Countries Where the Minimum  
Hourly Wage is At Least 2000 Yen* (安いニッポンからワーホリ！：最低  
時給 2000 円の国で夢を見つけた若者たち).

In fact, wage disparity between Japan and popular WH desti-  
nations is a recurring theme in news articles. While nominal wages in  
Japan remained stagnant in the period from 1992 to 2022, in Australia  
they increased by more than 150% (Bloomberg, 2024). Wages in the UK  
and Canada also more than doubled over this period (Bloomberg, 2024).  
Low wages in Japan and higher wages in WH countries are often cited  
in articles as a push factor for young Japanese people heading overseas  
for WHs. Often these comparisons are used to great effect, enforcing the  
idea that the grass is greener elsewhere. For example, a recent Japan  
Times article (2024) cited a former military worker who tripled his sala-  
ry by moving from Japan to a meat-processing job in Australia. Another  
report highlighted a metalworker earning significantly more in Australia

than in Japan (ABC News, 2024), and there are many comparable articles that detail similar cases (See Cavcic, 2024 for a useful summary of the Media Discourse of 2023).

In these articles, attention is often drawn to Japan's comparatively low minimum wage. As of now, the minimum wage in Japan ranges from 943 to 1,163 Japanese Yen (JPY), depending on the prefecture. Conversely, Australia's minimum wage is equivalent to 2,439 JPY, while minimum wages in Canada, New Zealand, and the UK are 1,911 JPY, 2,120 JPY, and 2,275 JPY, respectively. Although discussion of the minimum wage in news articles is relevant to WHs who tend to work in minimum wage-paying jobs, the higher cost of living in Australia and other countries is often not explained.

Although primarily reported in the media rather than in academic literature, there is good cause to believe that financial challenges in Japan are influencing young Japanese people's desire to undertake WHs. Notably, the post-pandemic surge in Australian WH visas granted to Japanese citizens coincides with a period of relative financial and economic uncertainty in Japan, and a weakening of its currency. At the same time, it seems likely that media coverage has somewhat established among would-be WHMs the notion of poor prospects at home and an abundance of riches overseas. Determining how many WHMs are now motivated by financial factors as opposed to some of the other factors highlighted in academic research warrants further exploration.

### **Challenges Faced by Working Holiday Makers**

While working holidays can be life-changing, WHMs often face significant challenges during their stay. Oishi (2022) argues that many of these challenges arise from institutional vulnerabilities, particularly a lack of protection for Japanese WHMs. She suggests this is partly due to the program's designation as a cultural exchange rather than a labor initiative, which means participants do not receive the same legal protections as employees in traditional work programs.

Most work undertaken by WHMs is part-time, which is more precarious than full-time employment. A 2004 survey by the Ministry of Health, Labour, and Welfare (MHLW) found that over 70% of WHM jobs were part-time (MHLW, 2004). In countries where zero-hours contracts are common, WHMs face particular financial instability and uncertainty, as these contracts offer no guaranteed work hours.

Some WHMs are unable to find any work at all, a fact that the media does tend to report on. A recent article in *Asahi Shimbun* (2024) stated that many Japanese WHMs in Brisbane have resorted to using food banks due to their inability to secure employment. The article describes a 22-year-old Japanese woman who applied for over 30 jobs without receiving a single reply (*Asahi Shimbun*, 2024). Similarly, an article from *NHK* (2024) recounts the case of a 20-year-old Japanese man in Sydney who, despite visiting more than ten cafés a day to inquire about work, had received no responses.

Even when WHMs do find employment, receiving full and fair wages can be challenging. In Oishi's survey, 96.7% of respondents re-

ported being underpaid while working in Australia (2022, p. 37). Over three-quarters of these WHMs worked in Japanese restaurants, earning only A\$10–16 per hour—well below the Australian minimum wage of A\$24–25 (2022, p. 38). This is consistent with a JAWHM survey cited by Oishi which found that 66% of Japanese WHMs were paid below the national minimum wage (2022, p. 37), and has been similarly reported in other studies such as Berg and Farbenblum (2017, cited in Oishi, 2022).

Challenges related to working conditions are often mentioned in studies of Japanese WHMs in Australia. Fujioka summarizes the situation in his 2019 paper, stating that “working holiday makers tend to face poor working conditions and achieve less from cultural exchange” (2019, p. 146). Oishi describes Japanese WHMs as experiencing summary dismissal (2022, p. 39), poor housing conditions (2022, p. 39), excessively onerous duties (2022, p. 40), and sexual harassment (2022, pp. 43–44).

As far as finding a job after a working holiday is concerned, Oishi stated that participants in her study were “confident that they would find secure positions in Japan upon their return”<sup>2)</sup> (2022, p. 36). However, for fresh graduates in Japan who start a WH immediately or shortly after university, securing stable employment upon return may be challenging. Japan’s job-hiring process is highly structured and primarily aimed at fresh graduates for whom preparations begin as early as the second year of university. Students are generally expected to start job hunting in their third and fourth years, participate in internships, attend company information sessions, and undergo tests and interviews.

Most graduates are expected to begin working on April 1, shortly after their graduation in March (Kawaguchi, 2021) and students who do

not follow this regular path may be severely disadvantaged. As Cavcic states, “[There is] the assumption that the passage from graduation to full-time employment in Japan is a seamless flow.” (2024, p. 1). Kawaguchi concurs with this view, arguing that “it is important for college graduates to move forward from school to work quickly in order to succeed in early career path” (2021, p. 3). WHMs who go abroad immediately after university simply do not fit within this regular and expected pattern. As Kawashima states, “those who are not new graduates are practically excluded from entry-level positions” (2010, p. 276).

As a result, university career centers may discourage students from undertaking a WH immediately after graduation. Alternatively, they may suggest working for a few years and doing a WH later. One of the primary reasons for this is the 就職率 (shūshoku-ritsu) or employment success rate of the university. Getting as many graduates as possible into jobs and maintaining a high rate of employment success is a key aim of universities, since prospective students will look at this percentage closely when deciding on which university to go to.

WHMs may face other challenges after returning to Japan. Kawashima (2010) found that many WHMs secure part-time positions upon their return, which, while offering flexibility and easier access, often lack job security and advancement opportunities. Kawashima also noted the difficulty part-time workers experience in then transitioning into full-time roles, suggesting they may be perceived as “irresponsible, non-committed, and unskilled” (Amamiya, 2007, in Kawashima, 2010, p. 276).

It may also be that returning WHMs’ expectations around work prospects and those of employers do not match up. WHMs may, with

good reason, want to make use of their newly acquired language skills but may not have the other skills required to make use of them in a work setting (Kawashima, 2010). Equally, the cultural experience of WHMs may be ignored or even considered undesirable by employers looking for employees who can easily fit into the company structure. As Kawashima states, “Frustratingly for returned WHMs, the personal qualities developed by exposure to cross-cultural environments do not seem to be particularly sought after by employers.” (2010, p. 279).

Those who do find jobs related to their WH experience may find them to be unsatisfying. Kawashima (2014) cites several examples of WHMs who returned to Japan and were able to secure jobs in the travel and tourism sector. However, these jobs are portrayed as being low paid, offering few real chances to use English, or being generally unsatisfying. She says, “despite the promise of prestige and social advantage associated with cosmopolitanism, many of the stories of returned WHMs resulted in career outcomes that were unfulfilling” (2014, p. 119)

These perspectives, however, may shift as Japan faces a shrinking population and increasing recognition of the need for inward migration to strengthen its workforce. In this context, a more international workforce in Japan could benefit from the cultural and linguistic skills that returning WHMs do bring. Companies may need to adopt more flexible hiring practices in order to take advantage.

## Conclusion

Japanese young people have been embarking on WH programs for over four decades and there has been a rise in interest and partic-

ipation in recent years. While it is undoubtedly true that many young Japanese continue to see WHs as a chance to gain or improve language skills, learn about new cultures, and have new adventures, it also seems clear that financial incentives have become something of a motivating factor. Recent media coverage has likely played a role in disseminating this idea.

At the same time, WHMs often face challenges in earning fair wages, finding stable employment (or any at all), and enjoying good working conditions. On return, many WHMs experience difficulties (re) integrating into Japan's labour market, often facing limited opportunities, being limited to part time positions, or being undervalued by employers.

As Japan experiences demographic changes, it is likely that it will find itself looking towards a more diverse and internationally experienced workforce in the future. As a result, WHMs may be better positioned in possessing some of the valuable cultural, linguistic, and adaptability skills that Japan needs to compete in an increasingly globalized world. How or whether Japan adapts to accommodate and make use of these skills remains to be seen.

### Notes

- 1) Data from 2013, which appears to be the most recent data for the overall number of WH visas granted to Japanese WHMs.
- 2) It should be noted that most participants in her study were engaged in secure employment before leaving for Australia (2022, p. 35), with one stating "I can always return to my job" (2022, p. 36).

References

- ABC News. (2024). *Shoma moved from Japan to Sydney for a working holiday, but instead he found a financial bonanza*. ABC News. <https://www.abc.net.au/news/2024-02-29/japan-cost-of-living-young-people-leaving-for-australia/103520934> (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)
- Asahi Shimbun. (2024). *Jobs difficult to find for those on working holiday in Australia: The Asahi Shimbun: Breaking News, Japan news and analysis*. The Asahi Shimbun. (2024, September 11). <https://www.asahi.com/ajw/articles/15395932> (Retrieved 30<sup>th</sup> October 2024)
- Bloomberg. (2024). 高賃金求め海外へ出稼ぎ、「ワーホリ」人気を示す若手人材の日本離れ. Bloomberg.com. <https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2024-04-15/SBM1U5T0G1KW00> (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)
- Cavcic, A. (2024). Mass Female Exodus: The Working Holiday as a Gateway to Opportunity for Japanese Women. *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*.
- Fujioka, N. (2019). 若者向け国際交流プログラムの重要性と起こりうる問題.
- Furuya, T. (2021). 日本人ワーキング・ホリデー滞在者をめぐる課題—オーストラリアの事例国際人権ひろば No.158 <https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section4/2021/07/post-201909.html> (Retrieved 29<sup>th</sup> October 2024)
- Japan Times. (2024). *Japan's young workers head abroad as huge wage gap persists*. The Japan Times. <https://www.japantimes.co.jp/business/2024/04/13/japan-workers-abroad-wage-gap/> (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)
- JAWHM. (n.d. -a). 日本ワーキング・ホリデー協会概要 <https://www.jawhm.or.jp/about.html> (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)
- JAWHM. (n.d. -b). ワーキング・ホリデー制度について <https://www.jawhm.or.jp/system.html> (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)
- Kato, E. (2013). Self-searching migrants: Youth and adulthood, work and holiday in the lives of Japanese temporary residents in Canada and Australia.

An Exploration of Japanese Working Holidays: Trends, .....

*Asian Anthropology*, 12 (1), 20-34.

Kawaguchi, R. (2021). *Recruitment System in Japan: Characteristics and Impacts of the Simultaneous Recruiting of New Graduates* (Master's thesis, University of Massachusetts Lowell).

Kawashima, K. (2010). Japanese working holiday makers in Australia and their relationship to the Japanese labour market: Before and after. *Asian studies review*, 34 (3), 267-286.

Kawashima, K. (2014). Uneven cosmopolitanism: Japanese working holiday makers in Australia and the 'lost decade' 1. In *Internationalising Japan* (pp. 106-124). Routledge.

Matsubara, S., & Tsutsumi, J. (2021). オーストラリアにおける日本人ワーキングホリデー渡航者の近年の傾向. *オーストラリア研究*, 34, 77-88.

MHLW. (2004). 海外就業体験と若年者のキャリア形成に関する調査研究 <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/12/h1227-3.html> (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)

MOFA. (2024a). The Working Holiday Programmes in Japan [https://www.mofa.go.jp/j\\_info/visit/w\\_holiday/index.html#:~:text=Japan%20started%20the%20working%20holiday%20programmes%20first%20with%20Australia%20in%201980](https://www.mofa.go.jp/j_info/visit/w_holiday/index.html#:~:text=Japan%20started%20the%20working%20holiday%20programmes%20first%20with%20Australia%20in%201980) (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)

MOFA. (2024b). Expansion of Visa Quota for Japan-UK Working Holiday Program [https://www.mofa.go.jp/press/release/pressite\\_000001\\_00256.html](https://www.mofa.go.jp/press/release/pressite_000001_00256.html) (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)

NHK. (2024). *Japanese flock to Australia in record numbers on working holiday* <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/backstories/3408/> (Retrieved 30<sup>th</sup> September 2024)

Nikkei Asia. (2022). *Weak yen sends young Japanese abroad for higher-paying jobs*. Nikkei Asia. <https://asia.nikkei.com/Business/Markets/Currencies/Weak-yen-sends-young-Japanese-abroad-for-higher-paying-jobs> (Retrieved 28<sup>th</sup> October 2024)

NNA Asia. (2023). 日本人へのワーホリビザ発給数、過去最高に— NNA

*Asia・オーストラリア・経済*. NNA. ASIA. (n.d.). <https://www.nna.jp/news/2598879>

Oishi, N. (2022). Voluntary Underclass?: Globalism, Temporality, and the Life Choices of Japanese Working Holiday Makers in Australia. *Youth and Globalization*, 4 (1), 31-55.

Spyriadis, T., & Went, A. (2024). Social connections of tourism working holiday makers. *Tourism Management Perspectives*, 51, 101242.

Uriely, N., & Reichel, A. (2000). Working tourists and their attitudes to hosts. *Annals of Tourism Research*, 27 (2), 267-283.

Wilson, J., Fisher, D., & Moore, K. (2009). The OE goes 'home': Cultural aspects of a working holiday experience. *Tourist studies*, 9 (1), 3-21.

# An Example of Romanesque Architecture in the Ribeira Sacra: The Church of Santa María de Nogueira de Miño

ÁLVAREZ PEREIRA Abel

## Abstract

As is well known, Spanish Romanesque art constitutes a cultural and architectural legacy of incalculable value that extends across practically the entire northern half of the Iberian Peninsula. In this work we will focus on a very specific area located in the northwest of the peninsula: the so-called Ribeira Sacra, which covers the current provinces of northern Ourense and southern Lugo in the Autonomous Community Galicia. This region is home to a vast collection of Romanesque monuments that, despite their historical importance, have been largely forgotten or underestimated. This article addresses the current situation of this heritage, highlighting the importance of its conservation and the need to educate future generations for its preservation, taking as an example what may represent this aspect for two reasons that we consider essential: On the one hand, the artistic wealth it possesses and on the other, the general lack of knowledge of it, as well as the lack of institutional support to preserve and publicize this heritage. We are referring to the Church of Santa María de Nogueira de Miño, which, like almost all Romanesque architecture on

---

**Keywords :** Catholic art, architecture of the Ribeira Sacra, Romanesque in Galicia, Compostela art, School of Venice in Spain

the peninsula, was subject to aesthetic changes and is a witness to the different architectural and artistic styles of each era. Thus, starting from a pre-Romanesque hermitage, we have here an example of Romanesque architecture with Gothic additions and Renaissance-style frescoes inside, which gave it the nickname of the “Sistine Chapel of Galicia” due to their quality and uniqueness.

## Un ejemplo del románico en la Ribeira Sacra: La Iglesia de Santa María de Nogueira de Miño

### Resumen

Como bien es sabido, el arte románico español, constituye un legado cultural y arquitectónico de incalculable valor que se extiende por prácticamente toda la mitad norte de la península ibérica. En este trabajo nos centramos en una zona muy concreta situada en el noroeste peninsular: la denominada *Ribeira Sacra*, que abarca gran parte del norte de Ourense y sur de Lugo en la Comunidad Autónoma de Galicia. Esta región es hogar de una vasta colección de monumentos románicos que, a pesar de su importancia histórica, han sido en gran parte olvidados o subestimados. Este artículo aborda la situación actual de parte de este patrimonio, subrayando la relevancia de su conservación, tomando como ejemplo el que consideramos puede representar este aspecto por dos motivos que consideramos esenciales: Por una parte, la riqueza artística que posee y por otro, el desconocimiento general de la misma. Nos referimos a la Iglesia de Santa María de Nogueira de Miño que, al igual que casi todo el románico peninsular, fue permeable a los cambios estéticos y es testigo de los diferentes estilos arquitectónicos y artísticos de cada época.

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

### **Palabras clave**

Románico español, arte católico, románico en Galicia, Escuela de Venecia en España, Renacimiento español.

### **Introducción**

En la Península Ibérica la aparición y expansión de la arquitectura románica se dio de una forma diferente que en la mayoría de los países de Europa central y occidental, porque allí las condiciones históricas eran diferentes. La llegada del románico a España coincide con las primeras victorias importantes de la llamada *Reconquista* contra la larga ocupación árabe, que desde el año 711 habían estado dominando prácticamente la totalidad de la península. La Reconquista partió de las montañas de la actual Asturias y desde ahí se fueron creando diferentes reinos como el Reino de León, posteriormente extendiéndose a Castilla y hacia el este creando los Reinos de Navarra y Aragón llegando a la actual Cataluña. Los señores de estos territorios convirtieron sus disputas con los árabes en un asunto concerniente a toda la cristiandad. La peregrinación por el llamado Camino de Santiago ha contribuido a su expansión por todo el norte del país desde finales del siglo XI. Aunque en un principio la consolidación de la España cristiana se basaba en los éxitos militares, a partir de ese siglo (XI) también fue fuertemente apoyada por grandes esfuerzos culturales. Si al principio, a lo largo del Camino de Santiago únicamente se encontraban hospicios, que servían a los peregrinos que iban a visitar los restos del sepulcro del apóstol como refugio en su largo periplo, posteriormente se formaron alrededor de los mismos establecimientos de considerable extensión. Al mismo tiempo, en el ámbito sacro

se llevaron a cabo una serie de reformas entre las que se encontraba la sustitución de la liturgia mozárabe por la liturgia romana. Una serie de comunidades monásticas comenzaron a preocuparse por el bienestar espiritual y material de los peregrinos y, para poder cumplir con esa misión, comenzaron a construir un gran número de edificios sagrados.

Tomando las palabras del historiador Rolf Toman “*Las iglesias románicas en un paisaje rural son lugares de paz que producen un efecto de continuidad histórica: uno piensa que cuando la iglesia fue construida en la Edad Media debió tener el mismo aspecto o parecido al actual. A veces incluso puede descubrirse un rincón donde nada recuerda al presente. El encanto de estas iglesias rurales románicas que no obligan al espectador a admirarlas por su enorme magnitud, como sucede con las grandes catedrales de las ciudades reside principalmente en lo humano de sus medidas*” (Toman R. 1953). Muchas de estas iglesias románicas fueron antiguamente iglesias monásticas y algunas de ellas lo continúan siendo. El hecho de que los monasterios del románico se encuentren por regla general rodeados de hermosos paisajes se debe a que los monjes del siglo XI y XII se dedicaron especialmente a la cultura rural. Esto sintonizaba con los intereses de los señores feudales, de cuya protección solían gozar los monasterios. Los lugares privilegiados para la construcción de monasterios fueron los valles más silenciosos y apacibles que por aquel tiempo todavía abundaban.

## **1. Contexto histórico**

Es en este escenario donde surge la importancia de la citada Ribeira Sacra, situada en una amplia zona que comprende los ríos Sil y Miño,

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

entre las provincias de Lugo y Ourense en Galicia. Es conocida, no sólo por sus impresionantes paisajes naturales y sus viñedos en terrazas, sino también por su rico patrimonio histórico y cultural. Entre sus tesoros más destacados se encuentra una significativa colección de arquitectura y arte románico, que floreció en Europa entre los siglos XI y XIII. Cabe destacar que aquí se encuentra la mayor concentración del arte románico rural de toda Europa. Son numerosos los ejemplos de arquitectura civil (calzadas, puentes) pero sobre todo religiosa (monasterios, capillas, ermitas, iglesias) que cumplían la función de refugios espirituales. Dentro de este territorio nos encontramos con una de esas grandes joyas del patrimonio cultural gallego, que fácilmente podríamos pasar por alto si solamente nos fijamos en su aspecto exterior a primera vista. Estamos hablando de la Iglesia de Santa María de Nogueira de Miño en el concello lugués de Chantada, muy cerca del conocido mirador de *Cabo do Mundo*. Partiendo de una ermita de estilo prerrománico, tenemos aquí un ejemplo de románico con añadidos góticos y en su interior unos frescos de estilo románico y renacentista que le otorgaron el sobrenombre de la “Capilla Sixtina” de Galicia por la calidad y singularidad de los mismos.

La iglesia, de origen románico, data del S XII aunque ha sufrido sucesivas intervenciones a lo largo de la historia. Recordemos que parte de una antigua ermita de estilo prerrománico. De su factura románica todavía se conserva en el exterior, el rosetón central, ricamente decorado. Así como una de las puertas laterales (fachada sur), en la que se observa una cruz griega en el tímpano y figuras animales en las mochetas laterales. Algunos de los canecillos también se mantienen en buen estado, y muestran curiosas figuras, que según el profesor Xosé Lois García, muestra esce-

nas propias del románico de Chantada y la Ribeira Sacra. Como pueden ser la fauna local y fluvial (cabras, murciélagos, truchas, anguilas...) y las siempre presentes cubas de vino. Pero esta riqueza arquitectónica choca de lleno con el estado de conservación de las mismas. El mismo autor nos dice “*Los conjuntos románicos no solo en Lugo, sino en toda Galicia, tuvieron muchos enemigos que fueron muy agredidos desde el Concilio de Trento*<sup>1)</sup>. *Hay agresiones permanentes que llevan ahí muchos años: sacristías horribles pegadas a las iglesias, campanarios añadidos que desfigurán los edificios, lápidas incrustadas en los muros de sillería,...*” (Trad. del autor. La Voz de Galicia, 2002). Esta iglesia no es ajena a estos cambios.

### **1.1 Arquitectura prerrománica**

Generalmente, se denomina arte prerrománico aquel que coincide con el primer gran periodo del arte medieval en Europa Occidental, coincidiendo en el tiempo con la denominada Alta Edad Media (s.VI-X) y estilísticamente no designa un movimiento estético definido sino más bien una expresión genérica que engloba la producción artística de la cristiandad latina entre el arte paleocristiano (primeros cinco siglos después de Cristo) y el arte románico. Se conservan grandes ejemplos en la actual Francia. Ya en España, de la antigua arquitectura cristiana de la época del reino de Asturias (antes de la llegada del románico) apenas se conservan en la actualidad unos cuantos ejemplos. Es preciso destacar en el llamado Monte Naranco, la Sala Palaciega del templo Ramiro I (842-850) y la Iglesia de San Miguel de Liño (mediados del siglo IX). Ambos edificios muestran una riqueza excepcional de elementos arquitectóni-

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

cos, como lesenas, arcos ciegos, cornisas, relieves ornamentales, naves centrales, etc. Al poco tiempo se modificó esta forma de construcción debido a que la población cristiana de la zona árabe (mozárabes), se vio crecientemente acosada y buscó refugio en el norte. Allí, a causa de la influencia cultural mozárabe, surgió un nuevo estilo arquitectónico en el que se mezclaron los elementos locales, más antiguos, con elementos árabes, que a su vez, presentaban reminiscencias romanas y bizantinas. Esta arquitectura mozárabe ya había existido con anterioridad en el antiguo Al-Andalus, no obstante es en el norte cristiano de España donde todavía puede apreciarse toda una serie de edificios en los que se dota al antiguo estilo con nuevos elementos: por regla general se simplifica el complejo eclesiástico pero, en contraposición reciben arcadas, ábsides con arcos de herradura y cúpulas en el crucero. Esta arquitectura fue sustituida al poco tiempo por la arquitectura románica.

## **1.2 El monacato de la alta Edad Media**

La forma de vida monacal durante la Edad Media ha tenido un enorme significado político y cultural. El filósofo alemán Hugo Fischer decía que “*el nacimiento de la civilización occidental parte del espíritu del monacato románico*” (en Toman, R. 1996). El importante alcance de esta concepción medieval se entiende si se considera el elevado número de monjes y monasterios que había. Destacamos dos órdenes: Cluny y Cister. Podríamos preguntarnos entonces ¿Dónde reside el mérito cultural de los monasterios de aquella época? Para contestar adecuadamente a esta pregunta es necesario concentrarse primero en la división de la sociedad medieval que fue de gran importancia para la conciencia de los habitantes del me-

dievo. Los tres estamentos de la sociedad feudal eran: el clero, la nobleza y el campesinado. Este esquema de orden trinitario, que se consideraba establecido por Dios, relevó la división habitual hasta el siglo IX entre Iglesia y el mundo seglar, entre la vida clerical y secular, y se impuso hasta el final de la Edad Media. Sin embargo, esta organización no tenía en cuenta las verdaderas diferencias entre cada uno de los estamentos, ni tampoco a los comerciantes o burgueses que, a consecuencia del acelerado desarrollo de las ciudades durante la baja Edad Media, adquirieron una importancia considerable en la vida social. Así, el esquema de ordenación trinitario refleja esencialmente el mundo agrario de la alta Edad Media, es decir, la época del románico que abarca desde el siglo XI a la primera mitad del siglo XIII.

### **1.3 El culto a las reliquias y el Camino de Santiago**

Los santos, gracias a su cercanía con Dios, desde la que podían pedir clemencia para todos aquellos que la invocaban, se habían convertido en los intermediarios que encendían la esperanza y la piedad de cada individuo. Muchos buscaban la curación de enfermedades y cuando sanaban lo consideraban un milagro del santo invocado. Fueron, sobre todo, los cultos que surgían de una forma espontánea, como las diversas peregrinaciones a lugares en donde se atribuían apariciones o sepulcros del susodicho santo o santa, los que configuraban poderosas manifestaciones de fe popular contra las que la Iglesia debía actuar. “Y es que la veneración sin control de los santos socavaba la autoridad eclesiástica como intermediaria terrenal de la salvación divina. Entonces, la Iglesia solía aceptar a los venerados en el santoral y así poder controlar el culto en

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

cuestión desde las instancias más altas. Cuantas más personas visitaban el lugar de peregrinaje, más importante se hacía el lugar de culto y más poder adquirían. El gran crecimiento de construcciones sacras durante el románico incrementó la demanda de reliquias, es decir, los restos o efectos personales de un santo” (Toman, R. 1996). Un claro ejemplo de todo esto es la peregrinación a Compostela donde (supuestamente) descansan los restos del apóstol Santiago. Según la leyenda áurea (compilación de relatos sobre la vida de 180 santos y mártires) tras su decapitación en Judea fue llevado en secreto por sus seguidores a un barco sin timón, al que ellos también subieron y que los transportó a las costas de Galicia. Allí, el santo fue enterrado en una tumba de mármol. Las reliquias fueron llevadas a Compostela en la segunda mitad del siglo VIII. No obstante, el camino que llevaba hacia allí no se liberó para los peregrinos hasta el cambio de milenio, recordemos que por entonces España seguía siendo musulmana. Cien años más tarde ya se habían establecido cuatro grandes caminos que cruzaban Francia y a partir del pueblo de Puente de la Reina, se unían en uno hasta su destino final. En muy poco tiempo Santiago de Compostela se había convertido en uno de los tres lugares de peregrinaje más importantes de la cristiandad. Los otros dos, Roma y Jerusalén, eran lugares a los que los cristianos peregrinaban desde el siglo I y que estaban consagrados al Salvador y príncipe de los apóstoles, San Pedro. Por el contrario, Santiago no era ningún príncipe entre los apóstoles, era el patrón de los pobres. Fueron, sobre todo, estos últimos los que emprendieron el largo y tortuoso camino, sin saber si un día llegarían a su destino y menos aún, si volverían a sus casas. Por eso, no debe extrañar que los peregrinos también visitaran durante su trayecto a otros san-

tos a los que pedían ayuda y protección y en cuyas iglesias descansaban. Esta es la causa principal por la que un gran número de monasterios y templos experimentara un verdadero florecimiento.

## 2. El caso que nos ocupa

El arte románico en Galicia se desarrolló, sobre todo, entre los siglos XI y XIII, cuando los eremitas (aquellos que profesaban una vida solitaria y ascética) se asentaron a lo largo de los ríos Sil y Miño, caracterizándose por su sobriedad y funcionalidad, con influencias locales que le confieren una singularidad especial. Estilísticamente comparte sus rasgos esenciales con el románico castellano-leonés aunque es con el llamado románico asturiano, con el que comparte unas determinadas características que le otorgan cierta identidad respecto al románico castellano. Sobre todo, en una primera fase, en la que fue determinante la tradición del prerrománico local, denominado genéricamente arte asturiano independientemente de su ubicación en una u otra comunidad autónoma actual. En esta primera fase, en torno al siglo XI, se mantiene la planimetría prerrománica, introduciendo elementos identificables como románicos en la escultura y decoración arquitectónica. Simultáneamente, se introduce el románico lombardo o primer románico. La fase central del románico en Galicia ha recibido la denominación de *románico compostelano* dada la indiscutible centralidad cultural del programa artístico en torno a la catedral de Santiago de Compostela. Aunque este término no será del todo acertado como veremos más adelante.

La Ribeira Sacra, lugar en el que nos centramos en este trabajo, debe su nombre a un cronista benedictino del siglo XVII al equivocarse a la

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

hora de transcribir un documento por el que la reina Doña Teresa de Portugal donaba al monasterio de Santa María de Montederramo en la localidad del mismo nombre en Ourense (uno de los más poderosos de la orden Cister en el siglo XII y que cabe mencionar su estado actual de casi abandono) unas posesiones situadas en las “Rovoyra Sacrata”, es decir, en la *Robleda Sagrada*. El monje entendió que decía “Rivoira Sacrata” (Ribera Sagrada) y así lo escribió. Con todo, el nombre dado se ajusta a la realidad pues como adelantamos, esta zona alberga numerosos monasterios, iglesias y ermitas románicas a lo largo de los dos ríos principales de Galicia. Entre los más destacados se encuentran el Monasterio de Santo Estevo de Ribas de Sil, el Monasterio de Santa Cristina de Ribas de Sil, y la Iglesia de San Pedro de Rocas, entre muchos otros. Las iglesias románicas se distinguen por la claridad de la construcción, tanto en la planta y el alzado, como en la coordinación de las partes del edificio. Aparte de las diferencias entre los distintos elementos arquitectónicos, se pueden distinguir algunos tipos de construcciones elementales. Al primer grupo principal, las construcciones de planta longitudinal, se le contraponen un segundo, las construcciones de planta central.

## **2.1 Análisis arquitectónico de la Iglesia de Santa María de Nogueira de Miño**

Antes de la construcción de la iglesia románica (Fig. 1) había, como decíamos, una ermita prerrománica datada entre los siglos VI y VII. Todavía se conservan algunos elementos de ella que se han reubicado en diferentes espacios de la posterior iglesia: Uno es la espadaña (estructura vertical que sobresale de la construcción) que fue trasladada de esa anti-



Fig. 1

gua ermita a lo alto de la nueva iglesia en el siglo XII. Por otro lado, observamos una piedra cuadrada en lo alto del ábside donde normalmente las iglesias románicas colocan una cruz, la denominada cruz hastial, pero que aquí esa piedra cuadrada no es realmente una cruz sino la representación de una flor; *La Rosa de los Seis Pétalos*, símbolo del padrenuestro (oración cristiana por excelencia). El círculo central representa el amor de Cristo, y los pétalos cada una de las partes en las que se divide la oración: La fe, la entrega, la ayuda al prójimo, la abundancia, el perdón y la superación. Otros elementos de la antigua ermita se trasladaron a su interior del cual hablaremos más adelante.

### 2.1.1 Estado exterior actual:

La fachada principal románica ya desaparecida fue sustituida por una posterior del siglo XVIII, pero que conserva algunos elementos del románico original como un rosetón (Fig. 2) de notable envergadura, lo que nos hace pensar que la fachada anterior debía tener una puerta de grandes dimensiones y que los elementos característicos de la época debieron

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....



**Fig. 2**

ser relevantes debido, precisamente, a los detalles ornamentales del susodicho rosetón. Este elemento tiene la particularidad de estar conformado por un círculo central con ocho pequeños círculos, que en el románico suele representar el paraíso, y en su contorno cuatro círculos completos que representan los cuatro elementos de la naturaleza (el fuego, el agua, la tierra y el viento). Si juntamos estos cuatro círculos con los ocho centrales nos da el número doce, el número por excelencia en el románico.

En la cultura occidental, el origen de los cuatro elementos se encuentra en los filósofos presocráticos y perduró a través de la Edad Media hasta el Renacimiento, influyendo profundamente en la cultura y el pensamiento europeo. La posición de estos elementos no es casual, pues nos hace reflexionar, desde una perspectiva de la época, que en el centro del mundo terrenal está el espiritual y uno no se entiende sin el otro. Posee, por tanto, un valor mundano y eucarístico. Es el doce el símbolo del orden cósmico y de Cristo como Cronocrator, es decir, como dominador del tiempo. No será necesario mencionar las numerosas reminiscencias a este número en toda la religión cristiana.

La puerta lateral de la fachada sur es el elemento más destacado en su aspecto exterior y cabe destacar su buen estado de conservación, sin alterar ninguno de sus elementos característicos. El granito gallego posee una gran dureza que le confería una dificultad extra a los canteros (maestros de la piedra) que lo manejaban con maestría pero esa robustez ayuda a que las piezas se conserven en un estado bastante óptimo.

En esta fachada sur es donde se concentra la mayor simbología escultórica de esta iglesia; en los canecillos que soportan el tejado se combinan imágenes religiosas con algunos ejemplos de simbología local.

Empezando de izquierda a derecha, podemos observar la representación de un murciélago, símbolo de la fe. Seguido de un perro, que simboliza la nobleza y la lealtad. En el tercer canecillo tenemos ya un elemento local: una copa de vino, recordemos que estamos en una de las zonas vitivinícolas más importantes de la península ibérica. Siguiendo de izquierda a derecha, destacamos otros como el canecillo donde hay esculpidas seis esferas que viene a representar los seis días de la creación, seguida de una esfera de mayor tamaño que será el séptimo día: El domingo o día de descanso. En el centro de esta fachada sur podemos observar la representación de una figura humana. Cabe destacar que esta figura se encuentra mutilada por la tan destructiva censura católica posterior, ya que en el románico en ocasiones se representan como símbolo de la fertilidad a hombres y mujeres desnudos con sus órganos reproductores visibles. Dicen los locales que fuera un sacerdote de una parroquia próxima, sin especificar una fecha concreta, probablemente influenciado por alguna reforma llevada a cabo por la iglesia entre los siglos XVI-XVIII, quién él mismo se encaramó a lo alto con una escalera y con un martillo “eliminó”

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

lo que él consideró que “sobraba”. En este canecillo la figura es un varón con sus genitales mutilados, en otro canecillo (más concretamente el tercero empezando de derecha a izquierda) había la figura de una mujer, pero en este caso ya picaron casi todo, no dejaron prácticamente nada. Siguiendo con los canecillos; en el siguiente, tenemos una cuba de vino, símbolo del canon que agricultores locales pagaban a la iglesia. Como era habitual se solía usar producto local, aquí se pagaba o bien en vino o bien en uvas. Otra cuba se puede observar también en el penúltimo de ellos, según Vázquez Porto, guía y sacristán de la iglesia, representa el símbolo de la eucaristía. La posición diferente de las tres cubas es clave para poder interpretar todos estos elementos.

Ya, por último, en el canecillo más a la derecha tenemos representado otro animal, en este caso se trata de una cabra, el símbolo del diablo. Sobre los canecillos y en la cornisa se puede ver la representación de una serpiente persiguiendo un pez. Al igual que en todo el cristianismo la serpiente es el símbolo del pecado y el pez es el símbolo del cristiano que escapa buscando la salvación. Al final de la cornisa, en su parte derecha vemos tres peces viendo hacia el este, hacia oriente, representado el cristianismo que está mirando hacia Tierra Santa (lugares donde se desarrollaron escenas bíblicas, las actuales Palestina, Cisjordania, Israel, Egipto, Irak y Siria sobre todo).

En la misma fachada destaca una puerta puramente románica (Fig. 3). Puerta que era de servicio, pero con un gran detalle ornamental que nos puede dar una idea de cómo sería entonces la puerta principal, ahora desaparecida. En esta puerta lateral, destacan los capiteles con adornos vegetales que representan los cultivos locales: a la izquierda, el vino re-



Fig. 3

presentado con hojas de vid y a la derecha un ramo de plantas medicinales.

Recordemos que fueron los monjes, no solo en esta zona sino en casi todos aquellos lugares donde se erigían los monasterios en lugares de viñedos, los que potenciaron la cultura vitivinícola y aquí no podría ser menos al tratarse de un lugar tan propicio para ello, debido a sus características geográficas y climatológicas. A la vez que cultivaban sus propias plantas hacían progresos en herbología, incluso elaborando sus propios productos medicinales a base de estas. En las mochetas de la propia puerta tenemos representados “El Bien” a la derecha representado por un buey y a la izquierda “El Mal” representado por un felino, un lince en este caso. En el tímpano podemos observar unos círculos, que vienen a representar la creación. Rodeándolos hay dos palmas, cada palma contiene doce ramos: La palma derecha representa los doce apóstoles, la palma izquierda las doce tribus de Israel. Justo en el centro lo que parece ser una cruz, que no lo es sino halos que desprende el círculo central, que

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

es el sol que representa a Dios como creador del universo en el centro. Por último, en las arquivoltas vemos la rosa de María en la primera de ellas, y en la segunda arquivolta unas figuras cuadradas con una bola en el centro. Esta bola representaría el trigo, es decir la eucaristía. Posee dos cimacios (uno a cada lado de la entrada) decorados con supuestas piedras preciosas, posiblemente representaciones de perlas. Hay que mencionar que en todo el románico estas puertas se decoraban con todo este tipo de detalles para invitar a la gente a entrar en la iglesia, era por decir de alguna manera, un reclamo para su participación en el culto. Sería una especie de publicidad de la época. Las puertas se consideraban la frontera entre lo humano y lo divino. De ahí que se esmerasen tanto en su decoración. Podemos mencionar también que, en las construcciones románicas, existen numerosas muescas o marcas que dejaban los canteros. La idea más extendida es la de que eran una especie de firma para atestiguar su trabajo y así poder cobrar al final de este. Hay quién dice que pueden tener otro uso ya que las mismas marcas se repiten por numerosas iglesias en lugares muy lejanos y es difícil creer que haya sido el mismo cantero el autor.

En la parte trasera de la iglesia. A primera vista no parece poseer nada destacable. Sin embargo, si nos detenemos a observarla con calma, podemos descubrir algunos aspectos que cabe mencionar: Para empezar, el muro del ábside en las iglesias románicas suele ser semicircular y éste es recto. Es este el caso de un trabajo llevado a cabo por una orden cisterciense (Cister). Recordemos que los primeros proyectos de esta orden religiosa se hicieron en Francia en el siglo XII. En ellos se primaba el

ábside recto sobre el curvo y así lo hicieron por todos aquellos lugares en Europa donde construyeron sus lugares de culto. No se sabe a ciencia cierta los motivos de este estilo, pero hay teorías entre algunos historiadores que dicen que eran una orden austera y así abarataban costes y agilizaban los plazos de ejecución de las obras. Otros historiadores contradiciendo esta afirmación sostienen que es muy posible que estuvieran influenciados por el prerrománico donde los detalles arquitectónicos eran más sencillos debido entre otras cosas a una técnica más rudimentaria. Tenemos que decir que este es un ejemplo de románico francés que llegó aquí a través del Camino de Santiago. Dentro del románico español hay varias líneas de estilo: Las que más fuerza tienen son la línea francesa y la italiana, aunque también hay algunas más. En el Camino de Santiago, la primera construcción destacable que se hizo fue la Catedral de Jaca a partir del año 1077. Ahí representaron por primera vez el ajedrezado románico o taqueado jaqués que también está representado en la iglesia que nos ocupa en la arquivolta que rodea la ventana. Este elemento se fue extendiendo a lo largo de las numerosas iglesias dispersas por todo el camino hasta llegar a Compostela en la época de la construcción de la Catedral de Santiago. Historiadores cuentan que en Compostela se adoptó este estilo como propio, allí le llamaban románico compostelano pero ya existía con anterioridad. Al finalizar la construcción de la Catedral fue cuando se empezaron a construir numerosas iglesias rurales adoptando varios de sus elementos, entre ellos el ajedrezado. La simbología de este estilo es representar *el Bien y el Mal, la Luz y la Oscuridad* y los diversos altos y bajos que tiene que superar el católico en el camino de la salvación. En esta misma ventana podemos observar en los capiteles los

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

sarmientos de la vid y el trigo. Recordemos que los símbolos de la eucaristía son el pan y el vino.

### **2.1.2. Estado actual del Interior y su contexto histórico:**

En cuanto atravesamos la puerta principal, bajo lo que debería ser el pórtico románico, actualmente desaparecido como habíamos adelantado, se conserva en un lateral, una pila bautismal prerrománica, elemento que ya pertenecía a la antigua ermita. La cual es testigo de los primeros bautismos en la zona. Eran muchos los que se convertían al catolicismo siendo ya adultos y los metían de pie dentro de la pila bautismal, de ahí que carezca de base. Se le echaba el agua por la cabeza en los bautismos, ese agua era purificada con sal. Si se visita hoy en día la iglesia, veremos cómo esta pila está sobre un pilar que fue añadido posteriormente. La original se mantenía en el suelo. El efecto de la sal dañó esta piedra hasta el punto que vemos que se deshace completamente. Según canteros expertos que analizaron la obra, habría que pasarla al vacío para extraer la sal que la contaminó, pero por mucho que hagamos ya la piedra nunca volverá a ser la misma y claro cómo se corre el riesgo de romperla se optó por mantenerla así. Adentrándose hacia el centro de la iglesia, es cuando se puede contemplar la verdadera joya en la que estamos inmersos. Ante nuestros ojos, todos los frescos que dan el apodo de “La Capilla Sixtina Gallega” haciendo un guiño a la gran obra que el gran artista Miguel Ángel realizó en los muros interiores de la *Capella Magna* del Vaticano. Salvando las distancias, podríamos pensar que posee cierta relación con esta (Fig. 4).



Fig. 4

## 2.2 ¿La escuela veneciana en Galicia?

Hablaremos de ahora en adelante sobre las pinturas realizadas en los muros, dejando a un lado los aspectos arquitectónicos interiores de la iglesia que también requieren de un estudio aparte. Hay que decir, primeramente, que son frescos auténticos y aquí tenemos plasmados distintos estilos en distintas etapas. La primera obra que se realiza es la bóveda sobre el altar, cuando se abre al culto en el siglo XIII. Es una pintura románica en la cual vemos la representación del tetramorfos: símbolo de los cuatro evangelistas (el hombre, el león, el toro y el águila). A la izquierda, San Marcos (el león) y a la derecha, San Lucas (el toro). Los símbolos que nos faltan son el águila de San Juan y el ángel de San Mateo que quedaron ocultos por el retablo barroco que construyeron en el siglo XVIII. En lo alto de la bóveda y justo en el centro, medio oculto por el mismo retablo podemos ver claramente, un sol, representando a Dios. Un poco más alto, justo encima de la mesa del altar tenemos a la luna que representa a la Virgen rodeada con cuatro figuras que son los

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

cuatro vientos que estarían soplando a la Virgen para expulsar las tinieblas (símbolo de las adversidades). Aunque los personajes recuerdan perfectamente a las características del románico y coinciden plenamente con el románico, tenemos que darnos cuenta de que expresan ya movimiento, no son estáticas. Por lo tanto, tenemos una mezcla de estilos: aquí podemos observar la transición del románico al gótico. Se conoce por los historiadores que en algún tiempo estos dos estilos convivieron usando elementos de uno y otro simultáneamente. Es evidente que es este un románico tardío y que cuando se estaba finalizando la construcción de la iglesia, el gótico ya estaba comenzando en gran parte de Europa y parte de su influencia llegaba a estas iglesias que adaptaban su decoración al momento. Un ejemplo de esto es el fresco en el lateral derecho del altar: La representación de *La Pasión de Cristo*, es un gótico flamenco para ser más preciso. Debemos mencionar que la pasión de Cristo comienza con *La Última Cena*, obra que estaba representada en el muro anterior pero que se ha perdido cuando se abre una ventana y destruyen esta pieza irreparable ya que estas pinturas estaban enlucidas a mediados del siglo XVII cuando un rebrote de la peste llegó hasta aquí y para desinfectar las iglesias se les echaba cal. Ya en el siglo XVIII, se abrió el hueco para una ventana sin saber que estaban destruyendo el fresco de la última cena. Si bien, aquí el motivo de semejante destrozo fue el desconocimiento de la pintura que estaba debajo, debemos recalcar que se ha destruido cuantioso patrimonio por, queremos creer, ignorancia de su valor histórico y artístico como ha pasado en tantísimas obras del románico en toda la península ibérica.

Volviendo a la obra que nos ocupa, después de la última cena, nos

encontramos con la siguiente secuencia: *La Oración en el Huerto* que tenemos representada rodeando parte del altar. Debemos decir que estas pinturas están ordenadas como si de un *Vía Crucis* (recorrido sagrado relacionado con la muerte de Jesucristo) se tratase. En esta imagen tenemos a Jesús rezando con el *Santo Grial* delante en el momento en el que la biblia dice que reza “aparta Señor de mí este cáliz”, Jesús aparece acompañado con los discípulos Pedro, Santiago y Juan que fueron los que lo acompañaron al huerto de los olivos. En la siguiente secuencia, podemos observar la representación de cuando los soldados romanos lo capturan y lo hacen prisionero. Se puede ver el momento exacto del *beso de Judas* a la vez que vemos a Pedro en el momento que sacó la espada para defender a Jesús y corta la oreja a un soldado romano, mientras que Jesús la coje y se la coloca en su sitio (Fig. 5). Es una obra muy rica en estos pequeños detalles y que posee un gran impacto visual. Es por tanto una obra, más que decorativa, didáctica. La mayor parte de la gente del momento no sabía leer y con estas obras iban aprendiendo la religión. De ahí la riqueza en estos detalles. Después de la *Prendición* viene la *Flagelación*, que es la siguiente secuencia, pero ya en el lado opuesto del altar, aunque aquí ya vemos una obra muy incompleta, muy dañada pues se perdió gran parte cuando se abrió el hueco para hacer la puerta de la sacristía. La siguiente secuencia es Jesús camino del *calvario*, cuando es ayudado por el cirineo. En esta imagen podemos observar que la calidad no es la misma que las anteriores, no hay prácticamente expresión en las caras y las proporciones no están ajustadas. Podemos suponer que es obra de un discípulo, un aprendiz. Siguiendo con este orden, lo que nos falta para completar la pasión de Cristo es la *Crucifixión* que debería

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....



Fig. 5

estar detrás del retablo principal. Recordemos que los muros estaban recubiertos de cal y cuando se encargó el retablo que casi todas las iglesias debían tener según la tendencia de la época, los carpinteros no sabían lo que había debajo y para sujetar toda la estructura iban picando la pared para buscar puntos de anclaje y sin darse cuenta destrozaron la obra. En exploraciones recientes con cámaras se ha podido constatar que la piedra está a la vista, ya no hay mortero. Por este motivo ya no se ha tocado el retablo, que también tiene su interés artístico al tratarse de un retablo barroco hecho a finales del siglo XVIII, más concretamente, en 1783. Rico en policromía y en detalle, realizado por artistas de la zona.

Los dos últimos elementos que pertenecían a la antigua ermita son los capiteles de piedra que decoran el altar. En la derecha, podemos ver la representación de *Adán y Eva* en el paraíso y en la izquierda el foso de los leones. Cabe mencionar que la policromía que tiene la piedra no es original sino de cuándo se realizaron los frescos. En el prerrománico no se hacían las obras con mucho detalle, primaba más la simbología. Sobre los grandes frescos que ocupa prácticamente toda la altura de las pare-

des de la nave principal existen distintas versiones, una de ellas data de las décadas de los años 60 y 70, cuando historiadores realizaron estudios sobre los frescos que nos ocupan, y dice que esta obra está realizada por un maestro anónimo que acaba trabajando por la zona y que debido a esta gran composición dejó su impronta y es recordado o conocido como el maestro Nogueira. Estamos hablando de mediados del siglo XVI, actualmente los estudiosos del románico gallego están recopilando más datos provenientes de diferentes estudios, así como de la información aportada por los restauradores, profesionales de las Bellas Artes, para ajustar la información y poder dar una versión más detallada. Según palabras de Antonio Vázquez Porto, guía y estudioso de la iglesia, “un *puzzle* donde se van añadiendo y modificando partes para resolver lo que se esconde tras él”. Al comprobar que hay muchos elementos que coinciden se puede aventurar a concluir que el conjunto de los frescos es una obra renacentista de principios del siglo XVII. Sobre el dintel del arco del presbiterio o arco triunfal, tenemos la representación de la Anunciación, el arcángel que anuncia a María que va a ser madre del Mesías (Fig. 6), en esta obra ya se aprecia la perspectiva. La técnica que destacaba en los artistas renacentistas era la sensación de profundidad, y esta perspectiva se ve en todos los elementos arquitectónicos de dicho arco y otros elementos que lo rodean como columnas, puertas o ventanas. Donde mejor se aprecia esta perspectiva que parece tener ya un punto de fuga es justo en la parte derecha del arco a los pies de la Virgen María, en el suelo formado por losas. Justo debajo del arco y en la pared que enfrenta la nave principal tenemos la representación de la Santísima Trinidad (dogma central sobre las personas que conforman un único Dios en la religión

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....



**Fig. 6**

católica). Esta obra en particular llamó mucho la atención de estudiosos del románico, pues en aquella época no se representaba de la forma en la que aquí aparece, se representaba con símbolos (un triángulo, un ojo, una paloma o combinando dos o más de estos elementos). Aquí tenemos la figura del padre, un hombre senil con barba blanca, gesto serio y normalmente sentado o sobre la bola del mundo sujetando la cruz de su hijo en la cual se posa una paloma (Fig. 7). Fueron los maestros italianos los que empezaron a representarla de esta manera, el Dios como persona. Es decir, un claro ejemplo de la idea del renacimiento italiano: el gran paso del teocentrismo al antropocentrismo. La razón comenzó a sustituir a la fe y la religión necesitaba actualizarse para que sus fieles no se encontrasen perdidos. Será este detalle, junto con otros más que iremos viendo los que nos den la gran respuesta a la autoría de estas obras. Justo al otro lado, en la pared izquierda del frente del altar, tenemos la representación del *Martirio de San Sebastián* (Fig. 8). Aquí debemos mencionar que en este fresco se puede apreciar como está pintado sobre otro más antiguo.



Fig. 7



Fig. 8

Los elementos que se mantienen de esa primera pintura, así como sus características de estilo y diversas capas descubiertas en la pared (p.ej. estrellas de seis puntas), nos hacen indicar que pertenecía a la misma época románica original del siglo XIII. La misma época de las pinturas de la bóveda anteriormente mencionada. Así, podríamos aventurarnos a decir que las pinturas originales se extendían por el resto de la iglesia, al menos por el arco principal pues las evidencias son claras. La llegada de las nuevas corrientes artísticas y arquitectónicas como el gótico también se deja notar como en la gran mayoría de las obras románicas hasta llegar el Renacimiento al que corresponden las obras que estamos analizando.

Siguiendo con la descripción de los frescos, a la derecha del muro de la nave principal o muro sur, tenemos representada la *Coronación de la Virgen María*. Parte de esta obra está cubierta por un retablo lateral barroco posterior que se ha mantenido y por tanto desconocemos lo que oculta en su parte posterior. Si bien se puede adivinar por la composición

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

de la imagen que es bastante simétrica lo que se encuentra detrás; los ángeles que rodean a la Virgen. La siguiente secuencia, en la misma pared de la derecha, tenemos la representación de la *Resurrección de Cristo* (Fig. 9), donde destaca la composición y la aureola que rodea a Cristo en forma de concha cuando se suele representar como una nube. Debemos mencionar que en simbología la concha puede representar diversos conceptos dependiendo del contexto que rodee la obra. Por ejemplo, en la tan conocida obra *El nacimiento de Venus* del artista del renacimiento Sandro Botticelli, la concha representa fertilidad. Sin embargo, en el caso que nos ocupa, la concha representa las buenas obras. Las formas redondeadas que tiene son como los dedos de las manos que recogen y dan las buenas acciones. Cristo fue elevado a los cielos por sus acciones, según la biblia. Podemos asegurar que esta obra ha sido realizada por otro artista diferente a las anteriores, por el nivel de detalle, formas, expresiones y simbología que utiliza. Por ejemplo, a la izquierda de la imagen aparecen las tres Marías (María Salomé, María de Cleofás y María Magdalena)



Fig. 9

que a la vez suelen representarse como las tres virtudes teologales: la fe, la esperanza y la caridad. También, medio oculto se puede ver a José de Arimatea, el dueño del sepulcro. El artista de la obra en cuestión quiere destacar, por encima de las otras, la figura de María Magdalena, porque vemos que es una mujer totalmente diferente. Lleva el pelo largo suelto, tiene un pañuelo blanco que es símbolo de pureza y sobre todo porque lleva un vestido de la nobleza. Pensamos que quiso destacarla con la intención de dar a conocer al mundo la importancia que tuvo esta mujer en la religión católica. Después de la figura de Jesús y de la Virgen María o de San José, es esta una de las personas más conocidas en la Biblia. Los motivos son su mala fama, la llamaban “la pecadora” fue considerada como una prostituta, así se refleja en los evangelios que cuentan la vida de Jesús. Sin embargo, se sabe que era discípula fiel de Jesús y, además, hay algo que lo confirma: Jesús no se le presentó en la resurrección ni a su madre ni a san Pedro, se le presentó a María Magdalena. Nos está dando a conocer la importancia que tuvo esta mujer en el cristianismo. Esta mala fama viene dada después de la muerte de Jesús, se dice que los apóstoles no la veían con buenos ojos, más bien con envidia, sobre todo el apóstol Pedro que veía en ella a una rival. Ya en la crucifixión los apóstoles se encargaron de desacreditarla. Ahí fue donde desapareció de toda vida pública y no se supo a ciencia cierta qué fue de ella. Tenemos tres versiones diferentes: Hay una versión que dice que se marchó a Éfeso (zona de la actual Turquía), otra versión dice que se fue a Chipre y la versión más popular dice que desembarcó en un puerto al sureste de Francia, en lo que es la actual Marsella, donde siguió practicando el evangelio, según historias escritas por cátaros y templarios.

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

Volviendo al fresco, podemos observar cómo es María de Cleofás quién aparece señalando a María Magdalena con su dedo índice. Sabemos que no la señala por pecadora, sino pareciendo indicar que es ella ahora quién debe seguir con la obra de Jesús. Sería ella la indicada, por sus conocimientos, su forma de ser, por su carácter, seguir la vida pública de Jesús. Sin embargo, desapareció y nunca más se supo de ella. Por lo tanto, fue San Pedro quién tomó el relevo. Recordemos que esto que aquí decimos es lo que este artista quiere plasmar en este mural. Es evidente que no coincide con la versión dada por la iglesia. En la misma pintura aparecen representados los soldados romanos, que según la versión de la iglesia en el momento de la resurrección estaban totalmente dormidos, pero en esta versión, el artista además de pintar algunos soldados dormidos pinta a dos de ellos que no lo están. Estos soldados despiertos representan la versión de los evangelios apócrifos<sup>2)</sup> que no se aceptaron ni incluyeron en ninguna versión de la biblia al contrario que los textos canónicos que son los que merecen ser aceptados como parte de la Sagrada Escritura. Sabemos de quién es el evangelio que dice que los soldados estaban despiertos en el momento de la resurrección de Cristo, de Pedro. Todos los apóstoles escribieron evangelios (escritos de los primeros cristianos que recogen las primigenias predicaciones de Jesús) sin embargo es sabido que la iglesia solamente ha aceptado la versión de cuatro evangelistas: Mateo, Marcos, Lucas y Juan y todos los demás fueron prohibidos. Esto fue en el momento en el que el emperador Constantino I decidió poner fin a las persecuciones de los cristianos y hacer su religión oficial en todo el imperio romano, pero con ciertas particularidades. Para ello reunió a todos los obispos en el concilio de Nicea (considerado el primer concilio

ecuménico de la iglesia católica en el año 325) donde se aprobaron solamente los mencionados evangelios para, según los historiadores, adaptarla a sus necesidades para tomar las riendas de la iglesia católica y así hacerse con el poder del cristianismo. Obviando también los evangelios gnósticos<sup>3)</sup> y los evangelios sinópticos que son los tres primeros del Nuevo Testamento. Por tanto, podríamos deducir que el artista ha querido plasmar ambas versiones; la oficial y la extraoficial. Siguiendo con el muro de la izquierda o muro norte, también aparecen representadas imágenes de los evangelios apócrifos. El fresco que destaca sobre los demás es el que representa el *Juicio Final* (Fig. 10).

Por tanto, nos encontramos con el *apocalipsis*, una visión religiosa del fin de la humanidad o fin de los tiempos. En el centro nos encontramos a Cristo en el papel de juez, imagen que nos recuerda a los diferentes Pantocrátor, pero a diferencia de esta imagen donde bendice a la humanidad, en el juicio final juzga al hombre por sus acciones. Representado con gesto de autoridad, con la aureola sobre su cabeza y rodeado de personajes celestiales y numerosos personajes bíblicos del Antiguo Testamento tales como Abrahán, Isaac, el rey David, Sansón etc. En la parte izquierda del pantocrátor aparecen representadas numerosas santas y a la cabeza de todas ellas, la Virgen María. A su derecha tenemos al grupo de los Santos y Apóstoles (Fig. 11), encabezándolos está la figura de San Juan. Aquí, siguiendo los evangelios apócrifos, se representan catorce apóstoles y no doce según el Nuevo Testamento. Viendo la cantidad de información en los detalles de estas obras que no siguen lo predicado por la Iglesia católica tanto tiempo, nos surgen algunas cuestiones; ¿Por qué la iglesia ha permitido la representación de estas obras? ¿No lo han visto? o ¿no

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....



Fig. 10



Fig. 11

lo han querido ver? Tampoco hay quórum a la hora de responder estas preguntas. Algunos estudiosos sostienen que los sacerdotes de la época no tenían el nivel de conocimiento que tienen hoy pues no se formaban en los seminarios sino en las propias iglesias desde niños. Sabían leer latín para la misa, conocían algunos conceptos de religión, pero no tenían el suficiente conocimiento de arte pues tampoco era su especialidad. Pero hay que reconocer que en la jerarquía de la Iglesia católica había gente con un pensamiento más abierto a diversas interpretaciones. También existía el tema de la *Inquisición*, que controlaba y perseguía a los que seguían los preceptos estipulados por la Iglesia, y en ella sí había gente que era conocedora de las versiones dadas por los diferentes evangelios. No sabemos a ciencia cierta si en este caso al encontrarse esta iglesia en un lugar tan remoto, llegarían hasta aquí. Suponemos que sí. Pero si así fuese, ¿Por qué consintieron que estas interpretaciones llegasen a ojos de los fieles? La teoría más plausible la podemos encontrar en la propia obra; Si observamos con detenimiento el grupo de los apóstoles, nos encontramos con un personaje (el segundo por la derecha, seguido de San Juan) que

su rostro nos recuerda a un personaje local: Pedro Fernández de Castro, Andrade y Portugal (Monforte de Lemos, 1576 - Madrid, 1622), el séptimo conde de Lemos. El perfil y rasgos de la imagen representada coinciden. Fue él quien promovió y financió la obra y el artista lo inmortaliza en su obra, queremos pensar, como gesto de gratitud o tal vez haya sido encargo del mismo conde. Es uno de los políticos que tuvo más poder en España en aquella época. Llegó a ser presidente del Consejo de Indias, virrey de Nápoles y presidente Supremo de Italia, según Diego Sarmiento de Acuña Conde de Gondomar (noble y diplomático español) “el mayor y más útil cargo que daba el rey en Europa”. Consta en manuscritos de la época que fue el Conde de Lemos quien contrató artistas italianos al llegar a Nápoles para traerlos a España y decorar iglesias y palacios. Uno (o varios) de ellos es el responsable de la obra que nos ocupa. Por lo tanto, el artista trabajaba para el Conde y no para la Iglesia. Dato crucial para poder entender el porqué estas obras han permanecido hasta nuestros días. Si fuese un encargo de la Iglesia católica no hubiesen sido representadas tal y como figuran aquí. Es preciso mencionar, por si hubiese alguna duda de la importancia del Conde de Lemos, que el artista también llega a plasmar a la esposa del Conde, Doña Catalina como Virgen María, al otro lado de Cristo, liderando el grupo de mujeres. Esto sí que era un sacrilegio (representar una persona humana como figura divina) para la Iglesia Católica, pero era la esposa del Conde de Lemos, nadie sería capaz de sacarla de ahí. Un elemento de esta figura es la corona que posee, la virgen María no se representa nunca con corona, y siempre con una actitud pasiva y humilde, todo lo contrario que esta que es muy dinámica y no tan joven (pelo blanco y recogido) y que junto con las prendas

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

y adornos (joyas) que lleva nos dan las pistas inequívocas para llegar a esta conclusión. Recordemos que fueron los Condes de Lemos quienes encargaron y pagaron esta obra cuando llegaron a Nápoles a comienzos del siglo XVII.

Siguiendo con el análisis de esta obra, nos encontramos en la parte inferior con la representación de la *Resurrección de los Muertos*; los buenos se dirigen con San Pedro al cielo, en medio un grupo de almas que creemos se encuentran en el *purgatorio*. El *infierno* también estaba representado en la zona inferior derecha (esto lo podemos adivinar no solamente por su ubicación en la parte inferior sino también por la garra de *Satanás* que se conserva en la pared intentando atrapar a las almas que están pidiendo perdón), pero se ha destruido al hacer un enorme hueco para acceder a una capilla lateral que se construyó posteriormente. Si bien, es posible que parte de este fresco se encuentre oculto tras un pequeño retablo situado en esa misma capilla. Este hallazgo lo ha descubierto una restauradora haciendo un trabajo en el propio retablo cuando pudo comprobar restos de policromía en la pared oculta. Confiando en que futuras investigaciones puedan acreditarlo, nos limitamos aquí a mencionar este dato. Patrimonio nacional tiene la potestad de decidir si merece la pena mover el retablo pues también puede sufrir daños. Hay especial interés por recuperar esta parte del fresco, no solamente por el valor artístico e histórico que tiene sino además porque es aquí, entre la representación del infierno y el cielo donde solían pintarse a sí mismos los artistas y, evidentemente, sería de sumo interés averiguar el autor o autores de la obra que nos ocupa. Todos los estudios llevados a cabo e información recopilada parecen indicar que los artistas pertenecen a la Escuela de

Venecia donde destacaron figuras tan importantes y conocidas como Bellini, Tiziano, Tintoretto, Canaletto entre otros muchos. Es muy probable que estemos ante una obra de estos artistas o sus discípulos y que no sepamos reconocerla como tal, pues no se ha realizado ningún estudio en profundidad.

Cuando se hicieron analíticas para saber la composición de estos materiales por parte de la Universidad de Santiago de Compostela los primeros informes reflejaban una composición de pigmentos de origen vegetal que son todos italianos pero que dentro de estos hay una serie de ellos que son exclusivos de la Escuela Veneciana. Estos pigmentos eran guardados con mucho cuidado y solo los podían manipular aquellos que pertenecían a la susodicha escuela para poder competir con otras escuelas. Todo parece indicar que tuvo que ser un artista de la escuela veneciana quien hizo esta composición pues los pigmentos se confeccionaban en el momento de realizar la obra.

Además de lo dicho, tenemos otro indicio que es la rebeldía que el artista manifiesta en representar escenas y detalles prohibidos por la Iglesia. Esta rebeldía es también típica de la Escuela de Venecia del momento. La República de Venecia fue una ciudad-estado que se extendió por territorios del Mar Adriático desde el siglo IX hasta el año 1797 y era de las más ricas no solo en Italia sino en la Europa del momento, tenía numerosas escuelas de arte y competía con las de Roma y Florencia entre otras. Tuvo un duro y largo enfrentamiento con el Vaticano que duró unos 80 años aproximadamente, y a raíz de ese enfrentamiento comenzaron a representar este tipo de escenas en contra de la versión oficial que marcaba la Iglesia, como señal de rebeldía. Según los últimos estudios

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

llevados a cabo por diversos historiadores, hay una gran posibilidad de que el artista principal de estas obras forme parte de la familia de los *Palma* o alguno de sus discípulos, que a pesar de pertenecer a la escuela de Venecia eran de Nápoles. Recordemos que era virrey de Nápoles el Conde de Lemos, no tendría mucho sentido que encargase a artistas de la escuela de Venecia hacer estas obras habiendo una gran escuela de artistas como era la de Nápoles del momento. Con todo, esta información es, hoy en día, meramente una hipótesis que podría dar pistas para futuras investigaciones y poder concluir la firma de la obra.

Era esta una zona de tierras con tanto poder económico, pues pertenecían en su gran mayoría al condado de Lemos, que cambiaban de moda con frecuencia. En la época del románico, se pintaba al estilo románico. Con el gótico, se sobreimpresionada por encima (aquí se refleja en la parte alta del arco del ábside), luego con el renacimiento, se añadían más capas de cal y más pintura, en el siglo XVIII el cambio de fachada, la construcción de la torre del campanario, luego los retablos barrocos, etc. Ya por último, en la historia reciente, concretamente en el año 1925 se compra la campana, una de las más grandes de toda Galicia. Fue a partir de esos años, con la despoblación del rural que llega hasta esta parroquia al igual que tantas otras parroquias de “concellos” limítrofes cuando empieza el declive de este patrimonio por desuso y poco a poco cayendo en el olvido.

Es preciso mencionar que los frescos han sido recuperados y restaurados por Patrimonio tras tres años de investigaciones, cinco años de trabajos y a la vez mucho dinero invertido pero que, tras finalizar este trabajo, entregó la llave y cerró la iglesia como tantas otras que salpican

no solamente la Ribeira Sacra, sino todo el territorio nacional. Se creó entonces la asociación cultural *Capela Sixtina de Nogueira* para poder tener la iglesia abierta y poder compartir todo este patrimonio con todo el mundo. Los miembros voluntarios de esta asociación son conscientes de que el mantenimiento de las obras y/o restauraciones como retablos y partes de la estructura y limpieza necesitan de un apoyo gubernamental que no lo tienen. Sobreviven con las donaciones de los visitantes, pero corre el enorme peligro de que si desaparecen estos defensores del patrimonio caiga en el olvido y el daño puede ser irreparable.

### **Conclusión**

Son numerosos los ejemplos del románico en el noroeste peninsular. La llamada Ribeira Sacra es un claro testigo. El Camino de Santiago y su resurgir como atractivo, no solo espiritual o religioso sino también como reclamo turístico, ayuda a dar a conocerlo. Sin embargo, otras numerosas joyas del románico, que no están en las rutas de peregrinación o ubicadas lejos de las áreas urbanas, se encuentran en una situación precaria por no decir decadente. Este trabajo pretende ser una llamada de atención, no solamente a las instituciones pertinentes, sino al público en general para que no deje de lado el patrimonio en el rural y sea consciente de la riqueza artística que posee ya que nos muestra una parte sumamente importante de nuestra historia. A la vez, es necesario concienciar a la población rural que rodea este patrimonio para que también ellos inculquen el respeto por el arte románico que fue tan importante en su tiempo. Consideramos que la Iglesia de Santa María de Nogueira de Miño, por todo lo expuesto, merece ser considerada como una de las grandes obras

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

del románico español a preservar y dar a conocer. Es necesario, además, seguir los estudios que se comenzaron hace años para poder concretar el origen de los frescos y así catalogarlos dando la máxima información posible para estudios posteriores.

### **Agradecimientos**

Queremos agradecer enormemente toda la labor que la “Asociación Amigos del Románico” lleva a cabo para difundir y dar a conocer el arte románico, a la “Asociación Cultural Capela Sixtina”, sobre todo, nuestro más sincero agradecimiento a Antonio Vázquez Porto por todas sus explicaciones y por su labor difundiendo y promoviendo esta joya del románico.

### **Referencias bibliográficas**

- ALBO, F. (2002) *Restaurar o noso románico custaría cinco anos de orzamento ministerial* en La Voz de Galicia,
- ARENAS, J. F. (1972) *La Arquitectura mozárabe*. Barcelona. Polígrafa Ed.
- BAGO TORVISO, I. (1995) *Edificios e imáxenes medievales. Historia y significado de las formas*. Madrid. Historia 16
- BECKWITH, J. (2007) *Arte paleocristiano y bizantino*. Madrid. Cátedra
- BGA. (Sept. 5/ 2024) Nogueira de Miño en Románico digital.  
[https://www.romanicodigital.com/sites/default/files/pdfs/files/LUGO\\_Nogueira\\_de\\_mi%C3%B1o.pdf](https://www.romanicodigital.com/sites/default/files/pdfs/files/LUGO_Nogueira_de_mi%C3%B1o.pdf)
- CAAMAÑO MARTÍNEZ, J. M. (1986) *Arquitectura prerománica*, en *Historia de la arquitectura española*, t. I. Zaragoza, Planeta,
- CIRLOT, J. -E. (1991) *Diccionario de símbolos*. Barcelona. Labor
- CONNAT, K. J. (1926) *The early Architectural history of Santiago de Compostela*. Cambridge

- CONNAT, K. J. (1982) *Arquitectura carolingia y románica (800-1200)*. Madrid. Cátedra
- DURLIAT, M. (1972) *El arte románico en España*. Barcelona, Juventud
- GARCÍA FERNÁNDEZ, X. L. (2010) *Simbología del románico en Chantada*, Diputación de Lugo
- GRABAR, A. (2007) *Los orígenes de la estética medieval*. Madrid. Siruela
- GRACIANI, A. (2000) *La técnica de la arquitectura medieval*. Sevilla. Universidad de Sevilla
- GÓMEZ MORENO, M. (1934) *El arte románico español. Esquema de un libro*. Madrid, Centro de estudios históricos
- GUDIOL, J. -GAYA NUÑO, J. A. (1948) *Arquitectura y escultura románicas*. Madrid. Ars Hispaniae, 5
- GUERRA, M. (1986) *Simbología románica*. Madrid. FUE
- MALAXECHEVERÍA, I. (1999) *Bestiario medieval*. Madrid. Siruela
- OLAGUER-FELIÚ, F., (2003) *El arte románico español*. Madrid. Encuentro
- PIJOÁN, J. (2000) *El arte románico. Siglos XI y XII*. Madrid. Espasa-Calpe
- PIJOÁN, J. (2000) *Arte cristiano primitivo. Arte bizantino: hasta el saqueo de Constantinopla por los cruzados*. Madrid. Espasa-Calpe
- RADIO TELEVISIÓN ESPAÑOLA rtve.es (Jun. 15/2024) *Las claves del románico Galicia*.  
<https://www.rtve.es/play/videos/las-claves-del-romanico/claves-del-romanico-galicia-ribeira-sacra/2450967/>
- REY-ALVITE, P. (Jul, 25/2024) en Doira Servicios turísticos.  
[https://www.romanicodigital.com/sites/default/files/pdfs/files/LUGO\\_Nogueira\\_de\\_mi%C3%B1o.pdf](https://www.romanicodigital.com/sites/default/files/pdfs/files/LUGO_Nogueira_de_mi%C3%B1o.pdf)
- RIBEIRA SACRA (Jul, 8/2024) Ruta del románico en: Turismo Ribeira Sacra.  
<https://turismo.ribeirasacra.org/recorridos/ruta-del-romanico>
- ROMÁNICO GALLEGO en Wikipedia (Jun. 10/2014) en [https://es.wikipedia.org/wiki/Románico\\_gallego](https://es.wikipedia.org/wiki/Románico_gallego)
- SCHUNK, H. (1947) *Arte visigodo, arte asturiano*. Ars Hispaniae II. Madrid

An example of Romanesque architecture in the Ribeira Sacra: .....

- SEBASTIÁN LÓPEZ, S. (1978) *Mensaje del arte medieval*. Córdoba. Escudero
- SEBASTIÁN LÓPEZ, S. (1996) *Mensaje simbólico del arte medieval*. Madrid. Encuentros
- SUREDA, J. (1995) *La pintura románica en España*. Madrid. Alianza
- TOMAN, R. (1996) *El románico. Arquitectura, escultura y pintura*. Colonia. Könemann, 20-32/178-216
- VORÁGINE, S. DE LA. (1995) *La leyenda dorada*. Madrid. Alianza
- YARZA LUACES, J. (1989) *Arte y arquitectura en España (500-1250)*. Madrid. Cátedra
- WILLIAMS, J. (1973) La arquitectura del Camino de Santiago. En: *Co mostelatum* 29, 170-184
- XUNTA DE GALICIA (Sept. 8) en Turismo de Galicia. *Igrexa parroquial de Santa María de Miño* <https://www.turismo.gal/recurso/-/detalle/5483/igreja-parroquial-de-santa-maria-de-nogueira-de-mino?tp=8&ctre=31>
- YARZA LUACES, J. (1987) *Arte y arquitectura en España 500-1250*. Madrid, 5a. edición, Cátedra
- YARZA LUACES, J. (1991) *El arte bizantino*. Madrid. Anaya

**Imágenes:** Todas las imágenes han sido realizadas por el autor entre mayo y septiembre del año 2024

**Enlaces de interés:**

<https://www.amigosdelrománico.org/>

<https://www.turismo.gal/>

<https://turismo.ribeirasacra.org/es/#inicio>

**Notes**

- 1) El Concilio de Trento fue un concilio ecuménico de la Iglesia Católica desarrollado en varios periodos entre 1545 y 1563 donde se reafirmó la autoridad y centralidad de la Iglesia como respuesta a la Reforma Protestante.
- 2) Los evangelios apócrifos son escritos surgidos en los primeros siglos del cristianismo en torno a la figura de Jesús de Nazaret que no se incluyeron ni se aceptaron en la Biblia.
- 3) Los evangelios gnósticos son escritos y leídos por diversas comunidades cristianas en Egipto, Siria y parte de Asia Menor (territorio que comprende la península de Anatolia).

# 汉字书法与视错觉

徐 国 玉

## 引言

至今汉字书法（以下略为书法）已有三千多年的历史。在这漫长的历史长河中，先后出现了篆书、隶书、草书、楷书、行书等书体。现在无论看哪种书体的名迹都有多层面的美的享受：哲思的、诗韵的、乐律的、情感的……

汉字为什么能成为世界诸多文字体系中的高雅文字艺术？一是汉字本身具备充分的艺术表现条件：结构复杂（有上下、左右、交叉、重叠、并列、交错等多种方式），形体众多（北京国安咨询设备公司的汉字字库所收入的有出处的汉字高达 91,251 个），外形有上下长方（甲骨文、篆书基本如此）、左右扁方（隶书基本如此）、正方（楷书基本如此）等。其它体系的文字虽然也起源于绘画，但基本都已经成为非常简单的书写符号了。汉字还或多或少地保留着原来形体的一些影子，没有改变原来形体的基本性质，如“日、月、子、马、鹿”等等。因此，说每个汉字都是一幅抽象的简笔画并不为过。美学家宗白华说：“中国书法在国际艺术界也特别受重视，与油画差不多。别的国家，像从前希腊、埃及，他们的书法也不能说一点没有，但不能发展成为中国这样一种艺术。这一点是有很多条件的。中国的笔墨，中国的书法的传统，中国字是象形的。有象形的基础，这一点就有艺术性。原来是象形的，

---

关键词：汉字 书法 视错觉 正面效应 负面效应

后来中国文字渐渐地越来越抽象,后来就不完全包有‘象形’了,而‘象形’、‘指事’等只是文字的一个阶段了。但是,骨子里头,还保留着这种精神。”<sup>1)</sup>二是工具有刀(甲骨文和篆刻等所用)和毛笔。尤其是毛笔的表现力极强,吸墨可多可少,可浓可淡;运笔可提可按;笔迹可湿可枯等。再加上有湿涸等效果的宣纸就更加锦上添花了。三是人们一代又一代地在把汉字用于记录汉语的同时,还将其当作一种欣赏的对象,以及抒发感情,寄托情思的载体,倾注感情进行书写或刀刻,按照美的规律创造汉字的笔画及其结构等,使汉字从最初的单纯的记录语言的书写符号范畴脱离出来,升华为艺术,实现了向艺术范畴的转变。

在以上三个要素中,其中第三个非常关键。这就好像有充足的好的建筑材料,有充足的好的制造工具,但不按照美的规律就造不出美的建筑物一样。

大量事实表明:视觉艺术形式都或多或少地受到视错觉(Optical illusion)的影响。如电影、电视的制作利用了视觉暂留,绘画利用了透视法等。书法当然也不能例外,如“上、下”等字的竖都写得比横短些,“日、目”等方框形的字在整幅作品中要写得比其它的字小些等。

关于什么是视错觉不少人还比较陌生,所以有必要在此简单地说一下。

视错觉是人们因自身的生理、心理因素,对受到形、光、色等干扰的物体所产生的与实际不一致的感知,是诸多错觉中的一种。如看景物,越远的觉得越小;穿带数条横纹的衣服看上去胖;穿带数条竖纹的衣服看上去瘦;有双眼皮的看上去眼睛大;脖子细长的看上去脸瘦长;戴大檐帽的看上去脸小;蓝、白、红三色比例分别为30:33:37的法国国旗看上去搭配和谐等等。

视错觉在满足一定的条件下就会产生,因此无论在古代中国,还是在古罗马、古埃及、古印度等都早已认识到了这种现象。例如中国先秦《列子·汤问》中两小儿争辩初升的和升入高空的太阳到底哪个大的故事说的就是视错觉。古代中国、古罗马、古埃及、古印度等,都创造了些具有视错觉因素的艺术作品或建筑什么的,可以说视觉艺术与视错觉早就有了很深的结缘了。自古至今

所使用的绘画的透视法——近大远小等就是忠实地表现了视错觉中的真实。

考察视错觉与书法的关系可以认识到，视错觉对书法的影响所产生的效应既有正面的，也有负面的。以颜真卿的楷书作品为例，见图1（局部。引自书法家网）：



图-1

此作品中的“口”字看上去显得比其它的字都小一些，但觉得在整幅作品中与其它的字的大小搭配是很和谐的。如果把“口”字写得与其它的字的大小一样，就会出现“口”字鹤立鸡群，显得过大的错觉。这就是视错觉的负面效应。至于视错觉的正面的效应的问题将在后面细谈。

因为视错觉在满足一定的条件下就会产生，所以不少汉字的笔画和结构以及字体大小等在不做某种改变的情况下会给人不美的感觉。如上面颜真卿作品中的“口”字如果不写得小些就与整幅作品不和谐就是很明显的例子。因此古人根据书法实践经验在如何避错成美（规避视错觉的负面效应，创造平衡、和谐之美等）以及怎么借错造妙（运用视错觉的正面效应创造新颖别致的引人入胜的艺术效果等）上早就做了很多的努力。尽管在古代还没有什么系统的视错觉理论方面的认识。根据研究资料来说，在欧洲关于视错觉的比较系统的研究也是从19世纪中叶以后才开始的。

关于视错觉与视觉艺术的研究，如视错觉与绘画的研究在中国进行得比较早，但视错觉与书法的研究起步很晚。以所能检索到的有关研究成果来说，最早做了比较全面而又细致分析的是日本的妻仓昌太郎（1989）。他从心理学的角度分析了 Müller Lyer 错觉与虞世南、欧阳询、褚遂良、颜真卿等古

代有名的书法家的作品中的锅盖头、宝字盖等部首的点在横线上的位置，“王、三”等字的横的上下位置，以及Fiok错觉与“上、下、可、不”等竖与横的长短等等。

近些年关于书法与视错觉的研究已经引起了越来越多的学者的重视，特别是视错觉在文字图形设计方面的应用的研究取得了一些成果（郭欣欣，2007 邓凯、盛建平，2009 张欣、邱灵烨，2012 林平，2018 周艳、许少桦，2021 段碧丽，2021 尚申豪、许铭师、司乐乐，2023），但总的来看，视错觉与书法的研究还很不充分，特别是涉猎视错觉与篆刻方面的研究就更少。妻仓昌太郎（1989）也只是大致谈了有无边框的印章的钤印的印迹以及边框是残边还是非残边所呈现的不同效果等。

本文不揣浅陋，拟在已有的研究成果之上对人们在书法美的创造和探索中是如何规避视错觉的负面效应的，又是如何利用其正面效应的，以及视错觉因素在书法美的构成中占有什么样的地位等问题谈点看法。

—

人们在书法美的创造和探索中是如何避错成美，借错造妙的呢？

楷书和隶书作品的笔画外形的一个突出特点是横画细，竖、撇和捺粗（有一定的粗细的比例制约），横的中部还都往上拱起。同时，楷书的整个横画还要往右上方倾斜。见图2（依次为唐代柳公权、颜真卿的楷书（局部。引自书法家网）和汉代曹全碑隶书作品（局部。引自词典网））：



图-2

## 汉字书法与视错觉

在书法教学上一般讲楷书的横的书写要领的时候，都要求写得横平竖直，其实楷书的横画根本就不是平直的。不写成平直，不仅是因为往右上方倾斜比水平直线容易书写，更关键的是绝对水平的横直线（特别是写得很长的）看上去有往右下方倾斜的错觉。如果真的写成平直，不仅会使人觉得有向右下方倾斜的错觉，而且还觉得很呆板，力感不足。

至于横画还要写得比竖、撇和捺细，这么做有对字形变化之美的追求，另一方面也多少有横画比竖画粗的错觉的影响，见图3：



图-3

图3的一竖一横，看上去横比竖粗一些，其实两者的宽度是一样的。

横画中部要上拱，这是关于动态与力度的感知的展现，是体现力感美之需。力感是书法美的基本原则之一。东汉书法家蔡邕说：“夫书肇于自然，自然既立，阴阳生焉；阴阳既生，形势出矣。藏头护尾，力在字中，下笔用力，肌肤之丽。故曰：势来不可止，势去不可遏，惟笔软则奇怪生焉。”<sup>2)</sup>东晋书法家卫铄说：“善笔力者多骨，不善笔力者多肉。多骨微肉者谓之筋书，多肉微骨者谓之墨猪。多力丰筋者圣，无力无筋者病。”<sup>3)</sup>

人们对线的不同形体是有不同的感知的：横直线——静，呆板，缺少力度；弯线——动，活泼，其上拱者力感足。如果观察一下水平面的大天花板，会出现天花板中部有些下坠的错觉，而看如拱桥状上拱的天花板则会产生其力足承重之感。

观察很多汉字的横的写法还可以发现，“全、金、夸、舍”等带撇捺夹角的字的第一横都写得很短。为什么要这样写？尽管不能排除受到撇和捺形成的夹角的宽度的影响，但也不能排除视错觉因素的影响。见图4（Ponzo

illusion 错觉和 Ehrenstein illusion 错觉) :



图-4

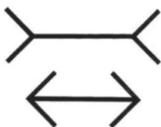
Ponzo illusion 错觉中的两条横线是等长的,但靠近夹角的有长得很多的错觉; Ehrenstein illusion 错觉是个正四边形,两条竖线也都等长,但靠近夹角的也同样给人长得比较多的错觉。“全、金”之类字的第一横如果写得和第二横长短一样,就会显得第二横有点儿短。字写得很小的话并不明显,但把字写得很大就不然了。如果第二横显得很短,就会影响字的整体的和谐之美。为此,书法家们不管是写楷书还是写隶书都把“全、金、夸、舍”之类的字的第一笔写得很短,见下面古代作品中的例子(引自词典网):



多变化, 避雷同也是书法美的基本原则之一。有两个或两个以上相同笔画的汉字, 一般每个笔画都要与其它的有所不同。如横画多的字, 两笔的一般都上短下长, 如“土、天、未、来”等; 三笔的一般都第一笔略长, 第二笔略短, 第三笔最长, 如“春、奉、泰”等。“未”字因与“末”字有别, 所以第一横需要写长。虽然可以说“夸、舍”之类的字, “大”、“人”形下的部件的第一横的长短与视错觉关系不大, 但是“全、金”之类的字就不同了, 因为不作为部件用的“王”字的第一横需要写得比第二横长一些。

另外, 汉字横的长短还受 Müller Lyer 视错觉的影响。Müller Lyer 展

示了两条同样长的线因箭头朝内和朝外而造成的长度不一样的错觉，见图 5：



图—5

上面两个箭头朝内的比下面朝外的感觉长很多。楷书的宝盖头（宀）的左点和右钩的写法就影响对横的长短的感觉。

为什么宝盖头的左点斜向外，右钩斜向里呢？如果左点也斜向内，就会造成横过短的错觉；左点斜向外，右钩也斜向外，就会造成横过长的错觉。同时，右钩斜向外还会造成神不内聚之病。其左点斜向外，右钩斜向里，就达到了横画不过长或过短的平衡，与其它部件搭配会显得很和谐。有关楷书宝盖头形体的写法的演进资料虽然难以查考，但可以想见，现在所看到的楷书宝盖头的样子，一定是经过了一个多次反复尝试的过程之后，才成了现在所能看到的样子的。

隶书因为从篆书草写而来，所以带了不少篆书的形体痕迹。隶书的宝盖头左弯和右弯要么基本与横成直角，要么略向内或略向外斜，但都不过度。由下面的若干古代名迹中的例子（引自词典网）可见一斑：



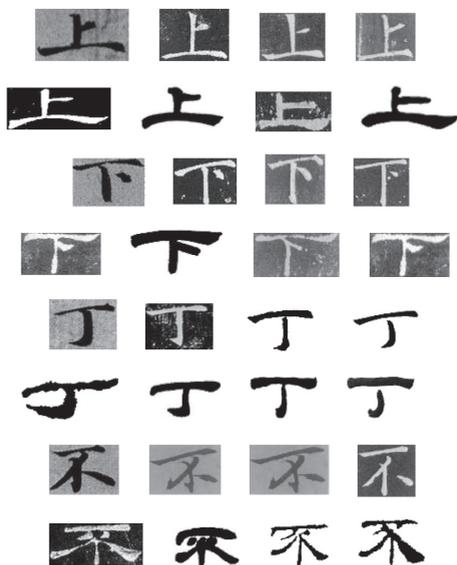
以上所阐述的是视错觉对楷书和隶书的横的书写的影响，那么视错觉对楷书和隶书竖的写法是否也有什么影响呢？

Fick 错觉显示两条同一长度的线组合到一起，会觉得竖比横长一些。见图 6：



图-6

这种视错觉在书法实践中很容易被觉察到。因为让人觉得不和谐，所以很多古代书法名迹都适度压缩了如“上、下、丁、不”等类字的竖的长度。例如（引自词典网）：



这些例子中的竖（其中“丁”是竖钩）大都写得很短。在古代书法名迹中虽然有的也把“上、下、丁、不”这些字的竖写得比横长一点，但为数很少。写得更长一点的一般也都是基于整幅作品的布局的考虑。

“上、下、不”等字都只是一根竖画，我们还要看看竖画多的如“幽”和“出”之类的字，在名迹中是个什么样子。其“幽”字，例如（引自词典网）：



“幽”字有三竖，为了笔画的变化，左右两边的竖写得都比较短，中间的竖写得比较长。即使如此，楷书和隶书也大都写得还是比横短一些。

其“出”字，例如（引自词典网）：



“出”字两边的四根竖画分属上下两个部分，理应写得短一些。楷书体“出”字的中间竖和横的长度则差不多一样，因为中间有横线的分割，减弱了竖比横长的错觉。隶书体“出”字的中间竖都比第二横画短得多，这既有竖比横长的错觉的影响，又有隶书的外形基本为扁方的制约。

视错觉除了对横画和竖画的写法有以上影响以外，还有对多横上下排列的字和多竖左右排列的字的写法的影响。

Helmholtz 视错觉显示，由横线罗列起来的正方形看起来上下偏长，由竖线罗列起来的看起来左右偏宽。见图 7：



图-7

汉字横画多的字如果上下顶格写就会出现上下偏长的错觉，竖多的字左右顶格写就会出现左右偏宽的错觉。篆书的外形基本是上下长方，隶书的外形基本是左右长方，可以说几乎不受 Helmholtz 视错觉的影响，楷书则不然。

楷书外形为方，写楷书基本上是以不偏离正方为度的。为了避免出现上下偏长和左右偏宽的错觉，书法家们写横画排列多的字，如“二、三、工、王”之类以及写竖画左右排列多的，如“川”字也都费了一番心思。见图8（依次是欧阳询（局部。引自书法家网）、颜真卿的楷书作品（局部。引自书法家网））：

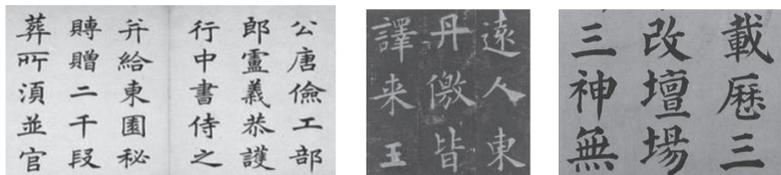


图-8

欧阳询的作品中的“二”字和“工”字，两横上下之间的距离都很近，上横的上面和下横的下面留的余白比较大；“王”字也是上两笔写得比较短，最下面一笔比较长，整个字小于其它的字。颜真卿作品中的“三”字，上两笔都写得短，最下面一笔写得长，整个字的上下长度也基本小于其它的字。

“川”字是三竖，颜真卿和欧阳询的写法，见图9（依次是欧阳询（局部。引自书法家网）、颜真卿的楷书作品（局部。引自书法家网））：

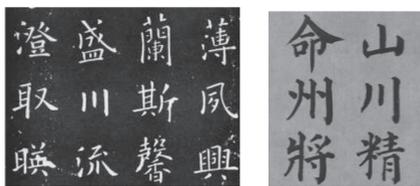


图-9

两幅作品中的“川”字的笔画：欧阳询的第一笔略以撇处理，颜真卿第一笔明显以撇处理。除此以外，两者的第二笔都写得略短，第三笔都写得比较长，同时第一笔和第二笔的长度都略低于第三笔。另外，第三笔还略向内收，这么做就更加减少或避免了整个字的外形偏宽的错觉。

说到这里,还不能不说一下汉字的部首在与其它部件的组合中所占比例的问题。汉字的部首在与其它部件的组合中所占的比例基本都居少。究其原因:一方面是基于避免部首本身偏大的错觉的考虑。以“休、莱、抬”等为例,如果把这些字的部首写得和其它部件的比例一样,会因笔画少而显得过大。另一方面也有避免因部首与其它部件一样大小而导致整个字偏离正方形的考虑。一般来说,与部首组合的字的绝大部分部件的笔画都很多。如果上下结构字的部首和左右结构字的部首占整个字的一半比例的话,其它部件特别是有很多笔画的就会因为特别拥挤而不得不逸出正方形。部首即使笔画多的字,其部首所占比例一般也都比和它组合的部件小一些,如“骠”、“龘”、“鼯”等。笔画特别多的,如“鸟”、“鼠”类的字做部首,因为本身笔画太多,难以被小化,也就只能作为个案处理,在所占比例上与其他部件平分秋色了,例如“鹞、鹤、鸢、鼬、鼯、鼯”等。

接下来要阐述的是本文前面已经提到的“口”字在一幅作品中写得小一些的问题。“口”字不管在篆书、隶书、楷书还是草书、行书作品中一般都写得比其它的字小一些。如果写得和其它的字的大小一样,就会出现大于其它字的错觉。这种错觉的产生,根据视错觉理论来说是“口”字形体出现的光渗现象。所谓光渗,是白色或其它颜色的浅色的形体在黑色或暗色背景的衬托下,具有较强的反射光亮,在视觉上觉得其呈扩张性的渗出。见图10(引自北冈明佳《错视入门》朝仓书店):

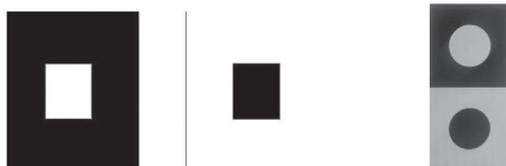


图-10

左侧图中间的正方形看上去比右边的大,右侧图上面的圆看上去比下面的大,其实两个正方形的大小、两个圆的大小都是一样的。

还是以楷书作品中的“口”字为例,“口”字在作品中就相当于处于被

诸多实心的正方形所包围的环境。“口”字的大小如果和其它的字的大小一样，就会因光渗而产生过大的错觉。要解决这个问题，要么把“口”字写得比其它的字小些，要么把其它的字写得更大些。

“日、因、固、国”等中间有其它笔画或部件类的字，因为其中间有其它笔画或部件可以减少扩张性渗出，但是为了尽可能避免大于其它字的错觉，书法家们一般也还是把这类字写得比其它的字小一些。不管是篆书、隶书还是楷书都是如此。见图11(依次为秦朝的峰山碑(局部。引自中国书法大厦网)、清代吴大澂的篆书(局部。引自词典网)、曹全碑隶书(局部。引自书法字典网)):

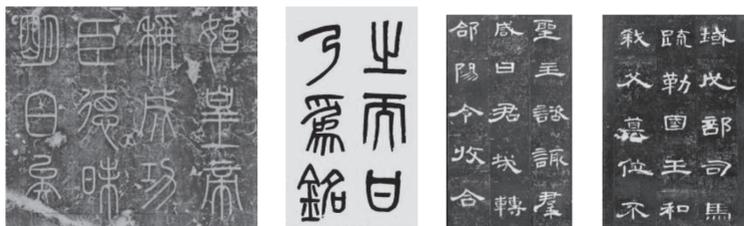


图-11

见图12(上为柳公权的楷书作品(局部。引自书法欣赏网)、下为欧阳询的楷书作品(局部。引自书法欣赏网)):



图-12

另外，“口”字在作品中不仅要写得小些，而且下方还要内敛些，即呈上宽下窄状。这么做，可以避免因写成直角的“口”形而产生神散而不内聚之病。

其它的字如“呆、吴、皋、車、莫、告、杏、吹、喊、扣”等带“口”形部件的，不管“口”形部件处于哪个部位也都是写得比较收敛一些。

行书、草书作品中的有“口”以及有口形部分的字如“日、目”之类，也大都写得小一些。见图 13（依次为王羲之的争座位帖（局部。引自书法欣赏网）、文征明的雪诗卷（局部。引自书法欣赏网））：

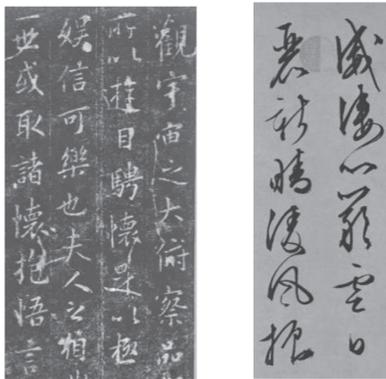


图- 13

王羲之作品中的“目”字写得比其它的字小，文征明作品中的“日”字写得比其它的字更小。当然有的作品，情感抒发强烈，笔墨随情而动，口形之类的字也写得很大。这就是所说的艺术有法，亦无固定不变之法。特别是草书，往往因激情而冲破法的桎梏。见图 14（依次为唐代怀素的自叙帖（局部。引自书法字典网）、清代的傅山的千字文（局部。引自书法字典网））：

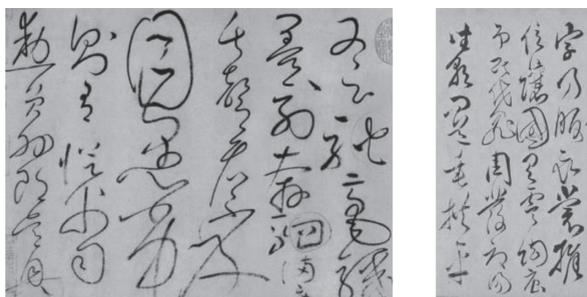
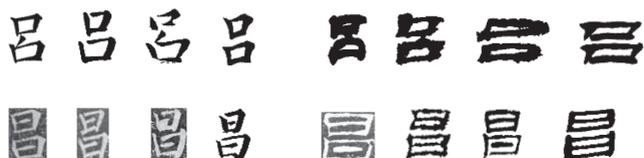


图-14

怀素的作品中的“目”字、傅山的作品中的“国”字都特别大，洒脱豪放，痛快淋漓，气势逼人。因为是激情的自然留痕，不是刻意为之，所以字虽然特别大，但是也让人觉得与其它字搭配得自然和谐。

谈“口”字不免还要触及到像“吕、昌”之类带双口形的字。见下面书法名迹中的一些例子（引自书法字典网）：



这些例子，不管楷书的还是隶书的，看上去上半部分都比下半部分小，上半部分的横都比下半部分的短，但是上半部分的横也都比下半部分的短是错觉。测一下尺寸，上半部分的上边第一横和下半部分的最后一横的长度几乎是一样的（妻仓昌太郎,1989）。这个结果虽然不可思议，但事实就是如此。这种错觉与 Jastrow 视错觉的不可思议的感觉一样。见图 15:

## 汉字书法与视错觉

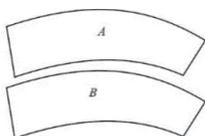


图-15

A 图形和 B 图形的大小虽然一致,但看上去 B 比 A 大不少。

因为“吕”和“昌”的上半部分的第一横和下半部分的最后一横的长度几乎一致,所以使整个字达到了视觉上平衡的美。这可谓借错造妙之一例。破坏这种平衡也就会削弱或失去美感,如下面的古代作品中的几个失败的例子(引自书法字典网):

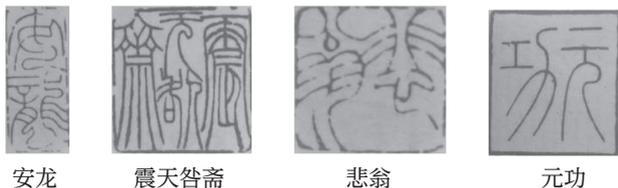


在这第一部分最后要谈的是视错觉对各书体的内部结构的影响的问题。

篆书、隶书、楷书等,其笔画和形体都各有特点,但在内部结构上都遵循这样一条规律:上紧下松。以下面若干一看即知的字的结构为例(依上下次序为甲骨、小篆、楷、隶。引自书法字典网):



甲骨文的“子”基本是象形，头部居上；“十”只是一竖，没有横画，不能做出什么上紧下松的判断；“中、千、王”都可以说是上紧下松。小篆、楷书和隶书的“子、十、中、千”这些字的横都居上而非下，“王”字的第二横也都偏上。再看几个篆刻作品的例子（引自吴颐人编著《青少年篆刻五十讲》，天津人民美术出版社1987年。依次为第57页、第61页、第105页、第107页）：



这四枚印章的字都是典型的上紧下松的结构布局。

字的结构是上紧下松还是上松下紧，就像人着装方式所带来的不同感觉。

见图16（引自知乎网）：



图-16

左侧者身着短上衣，长下裙；右侧者身着长上衣，略短下裙。虽然左侧者的实际身高比右侧者略低一些，但看上去左侧者还是显得略高一点，这就是不同的着装方式所造成的错觉。

人的身材高挑为美，粗胖为丑，这基本上是具有普世价值的审美观。各

种书体基本上都上紧下松，也像人的上短下长着装方式所能带来的美感一样。这样写正好与古希腊毕达哥拉斯提出来的重要美学理论——黄金分割率有吻合之处。

行书和草书尽管形体变化大，特别是草书抒情挥洒，其变化更大，但基本上还是遵循上紧下松这一美的表现规律。为了更清楚地认识到这一点，不妨再看一下其它的作品。见图 17（依次为东汉张芝的（局部。引自书法家网）和唐代怀素的作品（局部。引自词典网））：

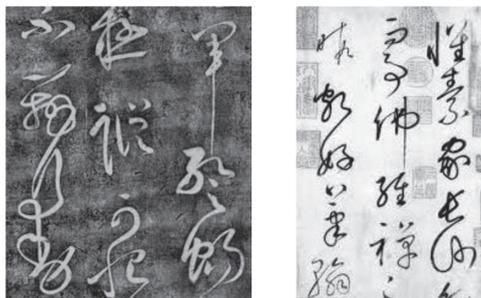


图-17

另外，在整个一幅作品的章法布局上，例如上下余白，一般也都是上面的余白要少于下面的余白。即使不是这种布局的，也大都上下余白相差无几。

计白当黑是清代书法家邓石如论书法艺术美的创造法则之一。他说：“字面疏处可以走马，密处不使透风，常计白以当黑，奇趣乃出。”<sup>4)</sup>这句话的中心意思是将字里行间的虚空（白）处，当作实画（黑）一样布置安排，这样就会创造出特殊的效果。由此可见，不着墨迹之处也是创作之时要考虑的重要组成部分。虽然邓石如说的是字里行间的虚实布局问题，但也同样适用于整幅作品的上下左右的余白布局，因为上下左右的余白也都是作品的重要组成部分。

二

篆刻是不同于用毛笔和纸作为表现工具的另一種别具特色的表现形式。印章发端于春秋战国时期，作为一种凭证的信物，其用途有器物记名用印、金币用印、权益的证物等。把印章特别地作为一种艺术品来欣赏和创作是从宋代才开始的。到了明清时代印章艺术繁盛，流派纷呈，是流派篆刻时代。

印章所使用的材料，古代的多为铜质，其它的为金、银、铁、铅、玉、水晶、陶泥等。明清的多为叶蜡石。叶蜡石中著名的有青田石中的各种冻石，寿山石中的田黄、田白，昌化石中的鸡血石等。叶蜡石软硬适度，容易入刀，书法家们能够大显身手，创作出多种风格的作品，有残边和残笔画的富有“金石味”的就是其中的一种。例如（引自吴颐人编著《青少年篆刻五十讲》，天津人民美术出版社1987年。依次为第29页、第87页、第87页、第43页、第69页、第17页。篆刻之家网）：



郭意



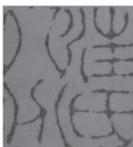
汝舟



鉴古堂



难进易退学者



汪氏八分



朱谭印信

这种风格作品的出现，一方面是印章材料的改变（石料入刀会出现脆崩）；另一方面是铁、玉、陶泥等用得时间久了，会出现磨损，特别是被埋于地下受腐蚀严重的，会出现很多印边和字的笔画断残。印边或笔画断残最初大概

并不是人们所期待的效果，但是印边或笔画断残让人感到有种特别的韵味，能带来更丰富多彩的美的享受。因此，书法家们就把刻出残边和断笔画当作一种风格来追求了。

笔画残断少的印章容易识读，但残断多的就比较难一些，例如（引自印隅网）：



如万顷波



傲福反成裁药误者多矣



假使如今不是梦能长于梦几多时

这三枚印章，第一枚“如万顷波”的四边残缺比较多，其中“如”和“顷”识读比较难；第二枚“傲福反成裁药误者多矣”的左上角和右下角残缺比较多，“反”、“成”、“误”识读比较难；第三枚“假使如今不是梦能长于梦几多时”中的“梦”残缺比较多，识读比较难。尽管如此，人们还是能借助印面环境，把残缺的部分加以补足，最终都能识读出来，这是因为人有知觉恒常性。所说的恒常性是对所看到的在形状、颜色、亮度、音色等有某种程度上的变化的 A 事物，仍能对其做出是 A 而非 B 的判断。这是人对客观事物的知觉的一个重要特性。视觉认知一般是大脑借助“已有图式”（对于已知物体的特征等记忆），对所看到的事物展开联想、比对、整合、补足，继而作出判断的过程，这是动态的、主动构建的过程。

看了图 18（Kanizsa 错觉）会感到没有实线（物理上不存在）的三角形和菱形的存在（主观轮廓），看了图 19（新井仁之错觉）也让人能感到熊猫脸的圆轮廓的存在（主观轮廓），这都是主观补足的结果：



图-18



图-19

如果没有知觉的恒常性，有印边和笔画残缺的印章也就没有存在的价值，我们今天也就享受不到金、石印章的特别的韵致了。

印章是以刀代笔，以石等材料代纸，同时在方寸空间进行布局，如字的大小、字的分行、字的顺序、笔画的粗细、穿插等等都需要精心谋划。其表现手法是阴刻还是阳刻，冲刀还是切刀，单刀还是双刀等等也都需要慎重选择。要达到非常高妙的艺术境界，既需要巧妙的布局，还需要娴熟高超的用刀技巧。国画和书法的一笔都体现数年的功力，篆刻的一刀也是如此。

阴刻和阳刻是篆刻的两种基本表现手法，大多数印章一般都选择其中的一种：要么是阳刻，要么是阴刻。从春秋战国时起，有的作者就为了表现特殊的效果开始在一枚印章里并用这两种手法了。例如（引自吴颐人编著《青少年篆刻五十讲》，天津人民美术出版社1987年，第39页。）：



长吉

## 汉字书法与视错觉

这是一枚汉代的印章。“长”字是阴刻，“吉”字是阳刻。虽然“吉”字是阳刻，但也有让人会产生与“长”字是同一刻法的错觉。

到了明代，同一枚印章中并用阴刻和阳刻的明显地多了起来。不少这类的印章的布局和技法高妙，都达到了阴阳难辨，浑然天成，巧夺天工的效果。例如（依次引自吴颐人编著《青少年篆刻五十讲》，天津人民美术出版社1987年，第27页、第57页。篆刻之家网、印隅网。）：



吕脱之印



朱聚



朱长孺



吹台山房

汉代的印章“吕脱之印”的“脱”字和明代的印章“吹台山房”的“吹、房”两字虽然都是阴刻，但笔画也刻得很粗，所留下的线条与阳刻的“吕、之、印”和“台、山”两字同粗细，因而也产生有阳刻之感的错觉了。明代的作品“朱聚”的“朱”字、“朱长孺”的“朱”字虽然都是阳刻，但阴刻的“聚”、“长、孺”字笔画都像汉代“长吉”的阴刻“长”字一样，刻得很粗。两枚阳刻的“朱”字的所留背景空白与阴刻的“聚”、“长、孺”字笔画粗细差不多一样，于是两个“朱”字也就都能够产生有阴刻之感的错觉了。这种奇妙之美的效果犹如 Rubin's 杯错觉。见图 20:



图-20

Rubin's 杯错觉,以黑为背景,所看到的是个杯;以白为背景所看到的是两个女性对视的头像。

错觉能造成奇妙的艺术效果,因此不少篆刻作品也都采用了以错造妙的手法。以下作品所创造的视错觉虽然不同于一般的所说的视错觉,但这是篆刻所常用的布局手法之一。例如(引自吴颐人编著《青少年篆刻五十讲》,天津人民美术出版社1987年,依次为第45页、第57页、第65页、第91页。):



当惊世界殊



兴仁



杏孙一字幼勔



八十大可为

“当惊世界殊”是现代书法家邓散木的作品。此作品共五个字,属于奇数字入印。奇数字入印,平衡布局比较难,但作者的布局很巧妙。“当、惊、殊”三个字大,“世、界”两个字小,作者把上下结构的“界”字变为左右结构,同时把“田”这个部件与“世”字联结于一体,给人形成“世界”两字是一个字的错觉。这样就把奇数的字变成了偶数的布局,创造了奇妙的平衡美。“兴仁”章的“兴”字约占印面三分之二,“仁”字约占三分之一。作品把“仁”字的单立人的竖的下部刻成竖右弯,造成“兴仁”是一个字的错觉。“杏孙一字幼勔”是清代书画家吴昌硕的作品。此作品共六个字,虽属偶数的字入印,但作者没有简单地把六个字按同等比例布局。此印章中的“杏”和“孙”两字占印面的四分之一,“一”和“字”占四分之一,“幼”约占三分之一,“勔”约占三分之二。把“杏”和“孙”两字、“一”和“字”两字、“幼”和“勔”两字在外在形式上给人造成分别是一个字的错觉。为了造成这样的错觉,作者把“孙”字的右边部件做了笔画减省处理,把“一”字与“字”的宝盖上的点相连,把“幼”字的左右两边部件也都做了笔画减省处理。印章各字的所占印面的比例虽然很不均衡,但所造成的错觉效果让人觉得整个印章的布

局和谐自然,即以不平衡创造了平衡。我们不能不由衷地感叹作者的美妙至极的布局构思。“八十大可为”章是现代书画家王个簃之作。此章五字入印,“八十”合于一起约占印面的四分之一。因为“八十”两字的笔画都很少,同时“八”之形可上覆“十”字,更给人“八十”两字是一个字的错觉了。以上匠心独运的印章的布局,让我们深深地感受到了篆刻的特别的艺术魅力。

另外,还要谈一下印面形式有带边框和不带边框之分的问题。进行创作采用带边框还是不带边框的形式,有私用和公用之别,也有刻什么文字内容之考量等。我们一般所见的官印都是带边框的,私用的比较随意些。例如(左为官印,右为私印。依次引自故宫博物院网、印网网):



这两枚印章,带边框的都是原作,不带的都是边框被去除后的原作。看上去被去除了边框的字都显得小了一些,其实大小与原作的并无二致。这说明:印章是否带边框,会受到光渗的影响。有边框的,字会显得大一些。不仅如此,官印带边框,特别是以前皇帝玉玺的边框大都很粗重。边框粗重还能给人以权力至高无上,不容冒犯的威严感。“镇国之玺”说的就是国家权力的象征物。

## 结语

美是人对事物在视觉和知觉等方面的快乐的享受,是人们永恒的本能的追求。马克思在《1888年经济——哲学手稿》中说:人也按照美的规律来建造<sup>5)</sup>。汉字虽然最初为记录汉语而诞生,但是人们并没有只满足于记录汉语。从甲骨文时代起人们就已经开始不懈地追求着汉字的笔画与结构以及章法的

美感,把汉字也当作艺术欣赏的对象了。

视错觉是在满足一定条件下就会出现的现象,对各种视觉艺术都有或多或少的影响。在按照美的规律进行汉字的书写与创造的过程中,人们一方面规避视错觉的负面的效应,另一方面又积极利用其正面的效应,使书法达到了一个非常完美的艺术境界。书法成了世界诸种文字体系中一朵独一无二的艺术奇葩。

视错觉对书法的影响的负面的效应,实质上是视错觉对书法的一些笔画和结构以及章法在形式上美的反向制约,即什么形式是不美的。视错觉对书法的影响的正面的效应能使书法形成新颖别致的引人入胜的效果。因此,视错觉是书法美的构成中的一个不可或缺的重要组成部分,是书法能够进入艺术殿堂的重要基础之一。书法的欣赏与创作都不可忽视视错觉的地位与作用。

\* 姬梅先生、奥野行伸先生分别协助翻译了英文提要、日语提要,谨此表示谢意。

#### 注释

- 1) 宗白华(1983)中国书法艺术的性质,《书法研究》第4期。
- 2) 蔡邕《九势》,潘运告编注《中国历代书论选》(上),湖南美术出版社2007,第9页。
- 3) 卫铄《笔阵图》,毛万宝 黄群主编《中国古代书论类编》,安徽教育出版社2009,第859、860页。
- 4) 包世臣《艺舟双楫·述书上》,维基文库。
- 5) 马克思《马克思恩格斯全集》第42卷,人民出版社1982,第97页。

#### 主要参考文献

- 梁敬泗(1985)试谈汉字结构与力学的关系——汉字结构形式美的探讨,《齐鲁艺苑》第1期。
- 季羨林(1987)《中国书法美学》,江苏文艺出版社。
- 妻倉昌太郎(1989)『書道心理学』、啓明出版社。
- 陳廷祐著 成家徹郎 訳(1992)『書の美学』、東京書籍株式会社。

## 汉字书法与视错觉

- 宗白华 (1993) 《书法美的探索》, 中国旅游出版社。
- 竹市博臣 (1994) 主観的輪郭: 計算論的解釈試論、《基礎心理学研究》第 13 卷第 1 号。
- 徐国玉 (2000) 漢字書道の弁証法的特徴、『東アジア研究』29。
- 陈彬蘇 (2000) 《书法与中国文化》, 人民出版社。
- 郭欣欣 (2007) 论视错觉在文字图形设计中的运用与表现, 《美与时代》第 5 期。
- 邓 凯、盛建平 (2009) 动态视错觉研究及其在平面设计中的应用探索, 《艺术与设计 (理论版)》第 11 期。
- Phuebe McNaughtun 駒田曜 訳 (2010) 『錯視芸術 遠近法と視覚の科学』創元社。
- 山脇恵子 (2010) 『色彩心理のすべてがわかる本』ナツメ社。
- 阿部恒之 (2012) 日常生活の錯視—森川論文へのコメント—、《心理学評論》55 卷 3 号。
- 森川和則 (2012) 顔と身体に関連する形状と大きさの錯視研究の新展開——化粧錯視と服装錯視——『心理学評論』55 卷 3 号。
- 张 欣 邱灵焯 (2012) 视错觉导向产品设计及应用, 《轻工科技》第 9 期。
- 蒋 勋 (2014) 《汉字书法之美》, 广西师范大学出版社。
- 戴志强 刘国华 (2016) 化错为美: 空间视错觉艺术的审美认知, 《山东社会科学》第 7 期。
- 成田健太郎 (2016) 《中国中古の書学理論》、京都大学学术出版会。
- 北岡明佳 (2017) 『錯視の科学』B&T ブックス日刊工業新聞社。
- 金晓丹 (2017) 字体设计中视错觉原理的应用分析, 《文艺生活》第 11 期。
- 李 刚 胡欣瑶 (2017) 楚文字重心与当代字体形态的构建, 《山东艺术学院学报》第 5 期。
- 饶正松 (2017) 浅析黑白画中留白成像的视错觉现象, 《文物鉴定与鉴赏》第 8 期。
- 林 平 (2018) 在艺术设计领域中的应用探析, 《工业设计》第 7 期。
- 周 艳 许少桦 (2021) 基于艺术视知觉研究现代汉字的间架结构平衡, 《设计》第 5 期。
- 段碧丽 (2021) 基于视觉错位效应的汉字字体设计研究, 《艺术研究》第 6 期。
- 小鷹研理 (2023) 『からだの錯覚 脳と感覚が作り出す不思議な世界』講談社。
- 尚申豪、许铭师、司乐乐 (2023) 视错觉在汉字设计中的应用研究, 《设计》第 36 卷, 第 16 期。

## Chinese Character Calligraphy and Visual Illusion

XU Guoyu

Visual illusion is the perception of objects disturbed by shape, light, color and so on, which is inconsistent with the reality due to people's own physiological and psychological factors.

This is a kind of objective phenomenon that does not depend on people's will. Calligraphy, like other visual arts, closely related to visual illusion, which has a great influence on the formation of the beauty of handwriting. There are positive and negative effects of visual illusion on the art of calligraphy. People pursue the perfection in the calligraphy art by using its positive effect and avoiding its negative effect at the same time, so they make calligraphy a unique and elegant art in the world's various handwriting systems. Therefore, the visual illusion factor is an important part of the beauty of calligraphy, and one of the important foundations for calligraphy to enter the art palace.

# *A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

吉 田 一 穂

## 序

*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) は、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の最初に出版された小説で、1914年2月から1915年9月までロンドンの雑誌 *The Egoist* に連載された。その後、アメリカの出版業者 B・W・ヒューブシュ (B. W. Huebsch, 1876-1964) によって1916年に単行本として出版された。

物語は、スティーヴン・ディーダラス (Stephen Dedalus) の想像力の発露を妨げ、抑制しようとする柔軟性のない社会状況から、彼が孤立していく過程を追って展開される。語りは、アイルランドのカトリック教会が中心となっている家族、教会、民族主義運動に彼が徐々に失望していく様子を細心に記録していく。スティーヴンは、次第にそれらが抑圧的で行動を抑制する力であると考えようになり、その結果ますます芸術に身を捧げる決心の方に傾いていく (A. N. ファーグノリ & ギレスピー 385)。

文化の伝統と重圧を感じながら生きる現代人の複雑な感受性を表現した

---

キーワード：アイルランド、教会、天職、教養小説、魂の問題

という点で、*A Portrait of the Artist as a Young Man* はモダニズムの模範となる作品と言ってもよく、この点で批評家の見解は一致している。宗教や国の取り扱いについてはどうであろうか。ジョン・ポール・リケルム (John Paul Riquelme) は作品について「作家の自伝的小説であると同時に虚構の登場人物の自伝である。それは二人の芸術家の肖像を提供する」と述べているが (Riquelme 91)、J・I・スチュアート (J. I. Stewart) が指摘しているように、この作品は、「本質的にジョイスのカトリック教会との断絶や真実の天職の物語」と考えてよかろう (Stewart 15)。一方でヒュー・ケナー (Hugh Kenner) は、「スティーヴンは教会と国を拒否することによって芸術家になるわけではない」、「国、教会、天職は密接に結びついている」と指摘している (Kenner 27)。ケナーの見解は、国や教会の問題がなければスティーヴンが天職を発見できなかったであろうことを言い当てている。そういうわけで、スティーヴンが天職に至る過程において、彼が国、教会とどのような関係にあるかについて注意する必要があると思われる。

ところで、*A Portrait of the Artist as a Young Man* は、教養小説 (Bildungsroman) というジャンルの中で考えられることも多い作品である。教養小説とは、主人公が環境から影響を受けたり闘ったりしながら、自己を完成させていく教養過程を描く小説である。イギリスではチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の *David Copperfield* (1850) が良く知られているが、*A Portrait of the Artist as a Young Man* が *David Copperfield* と異なる点は、主人公がアイルランドの少年であることだ。ジョイスは、アイルランドという環境の中でどのようにスティーヴンが自己を完成させていくかを読者に示している。

スティーヴンの天職へ至るまでの過程で重要なことは、彼の魂の問題である。彼の魂の問題は、国、教会と密接な関係にあることから、彼の魂とそれらを切り離して考えることはできない。本論文では、彼の成長過程で

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済  
国、教会と密接な関係にある魂の問題がどのように扱われているかについて  
考えてみたい。

## 1. フレミングの落書き

スティーヴンの魂の問題を考えるにあたり、彼が周囲の人々の考え方に  
大きな影響を受けていることに目を向ける必要がある。まず語りは、ス  
ティーヴンの最初の学校、クロングウズ・ウッド・カレッジ (Clongowes  
Wood College) での彼の生活を語る。スティーヴンは、学校で地理の教科  
書に自身のことを次のように書く。

*Stephen Dedalus*  
*Class of Elements*  
*Clongowes Wood College*  
*Sallins*  
*Country Kildare*  
*Ireland*  
*Europe*  
*The World*  
*The Universe (12)<sup>1)</sup>*

スティーヴン・ディーダラス  
初等クラス  
クロングウズ・ウッド・カレッジ  
サリンズ  
キルデア州  
アイルランド

ヨーロッパ

世界

宇宙

このようにステイーヴンが書いたページの反対側のページにフレミング (Fleming) がある晩、ふざけて次のように書く。

*Stephen Dedalus is my name,  
Ireland is my nation.  
Clongowes is my dwellingplace  
And heaven my expectation. (13)*

ステイーヴン・ディーダラスがぼくの名前で、  
アイルランドがぼくの国。  
クロンゴウズはぼくの住所で、  
天国がぼくの行くところ。

フレミングの落書きで見落としてはならない言葉がある。それは、「アイルランド」と「天国」という言葉である。「アイルランド」は、ステイーヴンと国との関係、「天国」は、彼と宗教との関係に読者の意識を向ける効果があるからである。ステイーヴンのいる学校クロンゴウズ・ウッド・カレッジは、1814年設立のイエズス会経営のパブリック・スクールで全寮制の名門校で、「アイルランドのイートン」と呼ばれていた。上流中産階級のカトリック教徒のエリートたちは、子供たちにクロンゴウズ・ウッド・カレッジのようなカトリックの学校かイングランドのパブリック・スクールで教育を受けさせた (Delaney 1438)。パトリック・パリンダー (Patrick

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

Parrinder) は、「ディーダラス氏が息子をクロンゴウズに送るという決断は、長く維持することのできない彼の社会的気どりから生まれた決断である」と述べているが (Parrinder 126)、同時に息子に宗教について考えさせる決断でもあった。

クロンゴウズ・ウッド・カレッジを経営するイエズス会は、ローマ・カトリック最大の男子修道会で、会員はイエズス会士と呼ばれる。イエズス会は、1543年にイグナチオ・デ・ロヨラ (Ignacio de Loyola, 1491-1556) により創設された。ロヨラは、フランシスコ・ザヴィエル (Francisco de Xavier, 1506-52) を含む6人のパリ大学の学究とともに、精神的な成長に生涯を捧げ、清貧、貞節、従順の支配に身を委ねる決意を表明した。パリのモンマルトル (Montmartre) の礼拝堂で「清貧、貞潔、聖地巡礼」の誓いが立てられたのがイエズス会の始まりである。1540年にイエズス会は、教皇パウルス3世 (Paulus III, 1468-1549) の承認を受け、イグナチオは初代修道会長となった。イエズス会士たちは、やがて反宗教改革および世界布教の仕事に携わるようになった。イエズス会は、教会内部の変革を実施し、精神的発達の活性化に能力を発揮した。イエズス会士たちは、ジョイス自身、および小説の中での彼の分身であるスティーヴン・ディーダラスに強い精神的・学問的影響を及ぼした。<sup>2)</sup> 付け加えておきたいことは、イエズス会の宣教には、中世的布教の方法と異なる点があったことである。中世における布教は、十字軍的な異教攻撃を一つの特色としたが、イエズス会士は、ヨーロッパ中心主義とは異なり、諸民族に人間としての価値を見出した。イエズス会士は、中国や日本の文化をヨーロッパの文化に劣らないものと認識した。マテオ・リッチ (Mateo Ricci, 1552-1610) による中国への布教やザヴィエルによる日本への布教がよく知られている。ただ、*A Portrait of the Artist as a Young Man* には、イエズス会を必ずしも肯定的にのみとらえていない見方も存在する。

イエズス会が所属するローマ・カトリックは、アイルランドにも大きな影響を与える。ジョイスは、ステイーヴンの参加するクリスマスの晩餐でディーダラス氏がウィリアム・ジョーゼフ・ウォルシュ (William Joseph Walsh, 1841-1921) を批判していることを示している。1890年12月、ダブリンの大司教であったウォルシュは、チャールズ・スチュアート・パーネル (Charles Stewart Parnell, 1846-91) の不義を断罪し、その結果、国民党党首パーネルは失脚することとなった。

ここでパーネルについて付け加えておきたい。パーネルは、「アイルランドの無冠の王」という名を付けられた19世紀のアイルランドの政治指導者であった。彼は、1875年に国会議員に選出されて初めて表舞台に登場し、1877年までにアイルランド国民党をイギリス議会内の自由党と保守党の勢力の均衡を左右する議決集団に作り上げることに成功し、アイルランド自治運動の指導的存在となった。

1879年にマイケル・ダヴィット (Michael Davitt, 1846-1906) がアイルランド土地同盟を組織すると、<sup>3)</sup> パーネルは、アングロ・アイリッシュのプロテスタントの地主であったが、その運動を支援し、最初の総裁になることを了承した。1880年代にはパーネルの政治的影響力と全国的な人気は、飛躍的に増大した。彼は、1881年のアイルランド土地改革法の成立に大きな影響を与え、1886年にはグラッドストーン (William Gladstone, 1809-98) 首相および自由党と提携して、自治法案をあともう一步で可決させるところまでこぎつけた。

しかし、10年間公然とウィリアム・オシー (William O'Shea, 1840-1905) の妻と関係を持っていたパーネルの名前が挙がると、宗教界の長や市長・政治団体の指導者たちが一斉に圧力をかけて、事実上パーネルをアイルランド国民党党首から引きずり下ろした。<sup>4)</sup> ディーダラス氏によるウィリアム・ジョーゼフ・ウォルシュ (William Joseph Walsh, 1841-1921) の

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

批判は、このことに対する彼の怒りとパーネル支持を示している。<sup>5)</sup>

アイルランドの状況をイングランドの状況と比較すると多くの不均衡を見つけることができる。イギリス政府はダブリンの半分以上の人々が非熟練労働者であり、仕事につけないと烙印を押した。ダブリンの衛生状態は、イングランドのどの都市の状況よりも遅れていて、子供の労働者の死亡率は、1905年において1,000人中27.7人であり、1911年におけるダブリンの死亡率は、1,000人中27.6人であり、ヨーロッパの他の都市よりも高かった。さらにダブリンにおける住宅事情に関しては、ほとんどの労働者の家族が一部屋半で生活していた。

一方、イングランドの植民地支配的な支配の下で、アイルランドの土地は、もともといたゲール人からイングランド人や移住させられたスコットランド人のものとなった。新しく入ってきた土地所有者たちと彼らの子孫は、「優勢である英国系アイルランド人」として知られるようになった(Harkness 1-2)。<sup>6)</sup>このような社会状況もあって、アイルランド人の土地は、アイルランド人に帰すべきであると考えていたパーネル支持者は多かったのである。このようなアイルランド人としてのアイデンティティを意識する一方で、スティーヴンは周囲の人々の考え方により宗教についても意識せざるを得なくなる。次にスティーヴンと宗教の問題について考えてみたい。

## 2. スティーヴンと宗教

ディーダラス家に同居するスティーヴンの幼年時代の家庭教師ダンテ(Dante)は、偏狭なカトリック教徒で、スティーヴンがアイリーン(Eileen)と遊ぶのを嫌がる。それは、アイリーンがプロテスタントだからである。ダンテは、子供の頃、聖母の連禱の文句をからかっていたプロテスタントを覚えていて、それでプロテスタントに反感を抱いている。

ステイーヴンがこのようなカトリック信仰に疑問を持つのは、無実の罪で罰せられたときである。ドラン (Doran) 神父は、自転車小屋から飛び出してきた生徒とぶつかりステイーヴンの眼鏡が壊れてしまったにもかかわらず、作文を書いていないからという理由で、ステイーヴンを革帯で打つ。スゼット・ヘンケ (Suzette Henke) が指摘しているように、イエズス会士の牧師たちは、ステイーヴンに男性的権威や秩序のシステム、正しい訓練やふさわしい社会的権威を確かなものにする教育システムを知らしめるが (Henke 58)、ドラン神父の自分に対する扱いを理不尽だと感じたステイーヴンは、校長に真実を訴える。校長の部屋へ行く途中で、彼は修道士たちの部屋のドアに掛かっている肖像画を見る。

その様子は、イグナチオ・デ・ロヨラがページを開いた本をかかげて、そこに書かれた「大いなる神のために」という文字を指し、フランシスコ・ザヴィエルは胸の十字架を指し、ロレンツォ・リッチ (Lorenzoo Ricci, 1703-75) (イエズス会第18代総長) は、生徒監がかぶっているような宝冠を頭にかぶっているといった具合である。コンミー (Conmee) 校長が自分の正当性を認めてくれなければ、<sup>7)</sup> ステイーヴンはイエズス会の男性的権威そのものに疑惑を感じたであろうが、このときには校長がドラン神父の誤解であることを認め、事情をドラン神父に話してくれると言ってくれたので、疑惑を感じるまでには至らない。

ステイーヴンは、グロンゴウズ・ウッド・カレッジの後、クリスチャン・ブラザーズ (Christian Brothers) に短期籍を置く。<sup>8)</sup> クリスチャン・ブラザーズはカトリックの修道会経営の学校で、授業料が安く、貧しい人たちが行く学校のようなイメージがあった。そのせいかディーダラス氏は、「クリスチャン・ブラザーズなんて、くそくらえ！」(74) と言っている。<sup>9)</sup> クリスチャン・ブラザーズの後、ステイーヴンが行くのがベルヴェディア・カレッジ (Belvedere College) である。ベルヴェディア・カレッジは、ダ

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

ブリン市内にある通学制の学校でイエズス会経営の名門校である。

このベルヴェディア・カレッジに在籍する間にスティーヴンは、父親や教師たちの「なによりもまず紳士になれ」(88)や「なによりもまずカトリック教徒になれ」(88)という声と自身の声の間で揺れ動く。同級生のヘロン(Heron)は、アルフレッド・テニソン(Alfred Tennyson, 1850-92)こそ最高の詩人で、スティーヴンが支持するバイロン(George Gordon Byron, 1788-1824)を「異端で不道徳」(88)と断定する。リチャード・エルマン(Richard Ellmann)は、「ジョイスのヒーローは、バイロンのヒーローと同じように孤独である」と指摘する一方で、「自身の本の中でジョイスは自由を求めるヒーローを描いている」と述べている(Ellmann 32)。ここでバイロン(George Gordon, 6th Baron Byron, 1788-1824)について触れておくと、バイロンは、偽善に満ちた社会に痛烈に反抗したイギリスのロマン派の詩人で、強烈な自我の英雄詩人の原型を作って、19世紀のヨーロッパに広範な影響を与えた人物である。スティーヴンは、バイロンの自由な精神に憧れているかのように見える。エルマンが考えているように、スティーヴンは自由を求めるようになるが、すぐにカトリックから解放されたいと思うわけではない。

ダブリンの売春婦と最初の性的経験を終えたスティーヴンは、罪の意識に捕われる。そのようなとき、フランシスコ・ザヴィエルを記念する静修が行われる。ベルヴェディア・カレッジの守護聖人であることから、校長はザヴィエルについて次のように説明する。

—He had the faith in him that moves mountains. Ten thousand souls won for God in a single month! That is a true conqueror, true to the motto of our order: *ad majorem Dei gloriam!* A saint who has great power in heaven, remember: power to intercede for us in

our grief, power to obtain whatever we pray for if it be for the good of our souls, power above all to obtain for us the grace to repent if we be in sin. A great saint, saint Francis Xavierr! A great fisher of souls! (115-16)

—彼には山をも動かす信仰がありました。わずかひと月で、一万もの魂が神のために獲得されたのです。これこそ真の征服者、わがイエズス会のモットーたる「より大いなる神の栄光のために」に忠実な人です！天国で大きな力を持つ聖人であることも、忘れてはなりません。悲しんでいるときに我々をとりなしてくれる力、なにを祈ろうとも我々の魂のためならばそれをかなえてくれる力、そしてなによりも、我々が罪を犯したときに悔い改める恩寵をもたらしてくれる力を持った方なのです。偉大な聖人、聖フランシスコ・ザヴィエル！魂の偉大な漁師！

第3章は、このような校長によるザヴィエルの説明だけでなく、<sup>10)</sup> 静修会を司るアーナル（Arnall）神父によってなされる説教がある。静修とは良心の状態を検討し、当時教会によって定められた標準的な順序に従い、死、最後の審判、地獄、煉獄、天国について思いめぐらす行事である。アーナル神父による「思い出してほしいのですが、私たちがこの世に遣わされたのは、ひとつのこと、ただひとつのこのためです。それはつまり、神の聖なる御旨をはたし、私たちの不滅の魂を救うことであります。他のことは、いっさい無価値です。必要なのはただひとつ、魂の救済だけです」（117-18）や「神は善人に報い、悪人を罰されます」（121）という言葉だけでなく、地獄の恐怖を植えつけられたスティーヴンは、魂の救済を強く望むようになる。

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

デボラ・ポープ (Deborah Pope) が指摘しているように、天国と地獄のヴィジョンは著しく平行をなしている (Pope 119)。アーナル神父が言う「個人の審判がすめば、魂は至福の家へ、あるいは煉獄の牢へと送られ、さらにあるいは、泣き叫びながら地獄へと投げこまれます」(121) という言葉や良心の苦しみについて言う「この世の無価値なもの、虚しい名誉、肉の慰め、神経の興奮とひきかえに、自分たちが天国の至福を失ってしまったことを思うとき、彼らはどれほど猛り狂うことでしょうか」(139) などにより、スティーヴンは自身の魂の行き着く先を考えざるを得ない。さらに、次のような自身にあてつけられたような言葉を聞く。

You were brought up religiously by your parents. You had the sacraments and graces and indulgences of the church to aid you. You had the minister of God to preach to you, to call you back when you had strayed, to forgive you your sins, no matter how many, how abominable, if only you had confessed and repented. No. You would not. You flouted the ministers of holy religion, you turned your back on the confessional, you wallowed deeper and deeper in the mire of sin. (139-40)

お前は両親によって信心深く育てられた。お前には教会の秘蹟と恩寵と赦免とが力をかしてくれた。お前には聖職者がついていて、お前に説教し、道を踏みはずしたときには呼びもどし、どれほど多くの罪、どれほど憎むべき罪であろうと、お前が告解して悔い改めさえすれば、その罪を赦してくれた。だが無駄だった。お前は悔い改めようとはしなかった。お前は神聖なキリスト教の聖職者を侮蔑し、告解室に背を向けて、いよいよ深く罪の泥のなかでのたうちまわった。

このような言葉により、スティーヴンは自分の犯した淫行の罪を隠しておけなくなり、<sup>11)</sup> チャーチ・ストリート (Church Street) 礼拝堂の神父の前で告解する。告解の後、スティーヴンは、「あれほどの罪を犯したのに、告解すると神は赦してくださった。ぼくの魂は、再び美しく聖らかなものに、聖らかで幸福なものになったのだ」(157) と感じる。悔い改め新しく生きようと決意を新たにしたスティーヴンであったが、彼の前に次に現れるのは、進路の選択という問題である。次に進路の選択と彼の魂の問題について考えてみたい。

### 3. 進路の選択と魂の問題

ベルヴェディア・カレッジの校長は、敬虔さの点、良い模範になるという点、聖母信心会の生徒総代であったという点からスティーヴンにイエズス会士になることを勧める。しかし、校舎の玄関口で見た、落日を反映する校長の陰鬱な顔の印象により、イエズス会の学校での生活が重々しくスティーヴンの意識をかすめる。彼は、「規律正しく沈鬱な生活」(174) が待ち受けていると感じるだけでなく、「クロンゴウズの長い廊下の不快な臭い」(174) を思い出してしまう。

トビアス・ボーズ (Tobias Boes) は、「*A Portrait* はスムーズに発展したりしない。ときどき飛躍したり、スティーヴンの人生のある時期から別の時期へ移動したりする」と述べている (Boes 767)。ジョイスは天職を選ぶに際して、スティーヴンが過去の思い出と関連づけて考えていることを我々に示している。スティーヴンは、イエズス会士になることにより自由を失ってしまうことになると感じ、彼の魂は記憶の中で繰り返される校長の声を迎え入れる気にならなくなる。ジョイスは、「彼の運命は社会や宗教の秩序から逃れることにあった」(175) とスティーヴンの運命について語る。イエズス会士にならず大学へ行くことを選んだスティーヴンの状

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

態をジョイスは、次のように説明している。

The university! So he had passed beyond the challenge of the sentries who had stood as guardians of his boyhood and had sought to keep him among them that he might be subject to them and serve their ends. Pride after satisfaction uplifted him like long slow waves. (178)

大学！さあこれで、少年だったころには保護者ぶった哨兵のようにぼくを囲いこみ、自分たちに服従させて、自分たちの目的に奉仕させようとしてきた人びとから、もうあれこれ言われずにすむわけだ。満足感に続いて誇りがゆるやかな大波のように彼の心を高揚させた。

スティーヴンの願望は、彼がデイヴィン (Davin) に語る「人間の魂がこの国に生まれると、とたんに網がいくつも投げられて、その飛翔をさまたげようとする。きみはぼくに、国民性とか、国語とか、宗教のことを話してくれるね。ぼくはそんな網にかからずに飛んでみたいんだ」(220) という言葉からも明らかである。

スティーヴンがこのように感じるようになったことには、周囲の人々の影響もあると考えられる。彼が入学したのは、ユニヴァーシティー・カレッジ・ダブリン (University College, Dublin) であった。ダブリンには二つの主要大学があり、一つはユニヴァーシティー・カレッジ (カトリック系大学) であり、もう一つはトリニティー・カレッジ (プロテスタント系大学) である。<sup>12)</sup> スティーヴンがカトリック系のユニヴァーシティー・カレッジに入学したのは、彼のそれまでの教育過程を考えると当然のことであるが、大学においてそれまで身近にあった宗教に懐疑的になったと考えられ

る。

スティーヴンはユニヴァーシティー・カレッジの学監について、イグナチウスと同じように、足が不自由でも、その目には「イグナチウスの熱誠の火花のきらめきがない」(201)と感じる。また彼は、学監が「師イグナチウスを愛している気配もなく、自分が仕えている目的すらほとんど愛していない」(201)ように感じる。スティーヴンは、学監の様子から生きがいのようなものを感じていない。

またテンプル (Temple) は、「聖アウグスティヌス (Augustine) が洗礼を受けてない子供は地獄へゆくと言っているのは、あいつも老いぼれの冷酷な罪びとだったからさ」(257) とディクソン (Dixon) に言う。アウグスティヌスの洗礼を受けていない子供が責めを負うべきであると主張しているのは、遺伝的に人間は原罪を受け継いでいて、そこから救われなければならないこと、また、幼児たちは洗礼によって原罪および地獄から解放されるという考えからきている。しかし、このような考えは、新約聖書でイエスが幼な子を我に来させよと言ったことと相反するのではないかとテンプルは思っている。このようなテンプルの疑念がスティーヴンに影響を与える可能性はある。

このような宗教に関する疑念は、*David Copperfield* にも見られる。この作品においてデイヴィッドは、子供の頃の継父であり宗教と精神修養の名にかけて子供を圧迫する暴君マードストーン (Murdstone) とその姉の恐ろしい神学の影響を受ける。彼は、同じ年頃の子供たちと遊ぶことは、まずほとんどなかった。その理由は、マードストーン姉弟が「いずれ子供などというのは小毒蛇の集まりであり (もっとも、昔キリストの弟子たちの真ん中へさえ、一人引き出された子供はいたはずだが)、お互いに毒しあうに決まっている」<sup>13)</sup> と考えたからであった。「もっとも、昔キリストの弟子たちの真ん中へさえ、一人引き出された子供はいたはずだが」という

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

箇所は、マルコによる福音書第9章36節への言及である。イエスは、一人の幼な子を取りあげ、弟子たちの中に立たせ、それを抱いて、「誰でもこのような幼な子の一人をわたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。そしてわたしを受け入れる者は、わたしを受け入れるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受け入れるのである」(Mark 9: 37) と言う。聖書のこの部分の引用により、ディケンズは、マードストーン姉弟の子供を邪悪なものとする神学が、新約聖書におけるイエスの教えを無視した神学であることを強調している。このことは、ディケンズがいかに新約聖書におけるイエスの教えが重要であると考えているかを示している。

後にディケンズは、「船の家」の家庭の崩壊を招いたステアフォース (Steerforth) の悪因に基づく運命を難破船と彼の死によって印象づけている。一方で、オーストラリアという新天地に向かう船によってエミリー (Emily) の救済を印象づけている。すなわち、「ノアの箱舟」のイメージを用いることにより旧約聖書の救済を強く印象づける一方で、新約聖書の救済、すなわち、罪の赦しも示しているので、全体としてデイヴィッドは、キリスト教の規範の中で生きていけると言えそうである。

一方で、*A Portrait of the Artist as a Young Man* において見落としてはいけないことは、スティーヴンがゲッツィ (Ghezzi) からノラ (Nola) の人ジョルダノ・ブルーノ (Giordano Bruno, 1548-1600) について、<sup>14)</sup> 異端者であるがゆえに火あぶりにあったことを聞かされることである。ブルーノは、イタリア出身の哲学者でドミニコ会の修道士であった。彼は、それまで有限と考えられていた宇宙が無限であると主張し、地動説を唱えた。16世紀に地動説を著書で発表した人物として知られているのがコペルニクス (Copernicus, 1473-1543) である。当時の西洋の宇宙観は、アリストテレス (Aristotelēs, B. C. 384-22) およびプトレマイオス (Ptolemæus, c.

83-168.) の天動説に基づいていた。また、キリスト教神学でも人間が暮らす地球こそが宇宙の中心に位置するのにふさわしいと考えられていた。そのため、地動説を唱えるブルーノは、異端であるとの判決を受けたが、撤回しなかったため、火刑に処せられた。<sup>15)</sup> このようなカトリックの理不尽な側面もスティーヴンが魂の自由を求める原因になったと考えられる。<sup>16)</sup>

スティーヴンの場合、天職とは、自由な表現者としての芸術家であると考えられる。「職業」を意味するドイツ語の「ベルーフ」(Beruf) という語の内に、また同じ意味合いを持つ英語の「コーリング」(calling) という語の内にも明瞭に、宗教的な、神から与えられた使命 (Aufgabe) という観念がともにこめられている (ヴェーバー 95)。スティーヴンの場合は、神の導きに応じ、順応するというよりは、この世の現実直面し、魂がそれを求めたという印象を読者は受ける。ただ、全く神的な意味合いがないかということそうは言い切れない。

ここで、ディーダラスという名前の由来、ギリシア神話の工匠ダイダロスが作品に出てくることについて付け加えておきたい。スティーヴンは、大学に進学することを決めた後に、世界のかなたから、伝説の工匠の名前で呼ばれる。彼はその名前を呼ばれたとたん、「おぼろげな波音が聞こえ、翼あるものがその波のうえを、空へゆっくりと昇ってゆくのが見えるような」(183) 気がする。ジョイスは、スティーヴンの魂の状態を次のように表現している。

His soul had arisen from the grave of boyhood, spurning her graveclothes. Yes! Yes! Yes! He would create proudly out of the freedom and power of his soul, as the great artificer whose name he bore, a living thing, new and soaring and beautiful, impalpable, imperishable. (184)

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

彼の魂は少年時代の墓場から立ち上がり、そのころの屍衣を脱ぎ捨てたのだ。そうだ！そうだ！そうなのだ！同じ名を持つあの偉大な工匠のように、彼は、魂の自由と力から誇らかに、新しく天翔る、美しく、精妙で、不滅の、生けるものを作り出すであろう。

スティーヴンは、自身の天職をギリシア神話により肯定しているように思われる。このことから、カトリックの理不尽な側面から逃れ、自由な表現者として生きるという強い彼の決意が感じとれる。

### 結び

以上、*A Portrait of the Artist as a Young Man* において、スティーヴンの成長過程で魂の問題がどのように扱われているかについて考えてきた。最初ジョイスは、クロンゴウズ・ウッド・カレッジにおいてフレミングがスティーヴンが書いたページの反対側に書いた落書きによって、読者にスティーヴンのアイデンティティを意識させる。この落書きは、スティーヴンがアイルランドとカトリックに関わっていくことを予示する内容であった。その後も、アイルランドとカトリックがスティーヴンの成長過程につきまとう。

シーマス・ディーン (Seamus Dean) は、「児童として少年として青年としてスティーヴンは、繰り返し両親や政治や宗教や性や文学のサイレンのような声に引き込まれそうになるが、究極的には自身の声に従う」と指摘している (Deane vii)。ディーンの言及の中の宗教に関しては、クロンゴウズ・ウッド・カレッジ、ベルヴェディア・カレッジ、およびユニヴァーシティー・カレッジ・ダブリンで学校を運営し、実際に教育を担当したイエズス会士たちは、スティーヴンに大きな影響を与えている。ダブリンの売春婦との性的経験の後、スティーヴンが罪の意識に捕われ、チャーチ・

ストリート礼拝堂の神父の前で告解するのもベルヴェディア・カレッジのアーナル神父の説教によるものであると考えられる。告解した後、敬虔で模範的な人物となり、聖母信心会の生徒総代となったスティーヴンは、ベルヴェディア・カレッジの校長にイエズス会士になることを勧められるが、イエズス会士になることにより規律正しく沈鬱な生活を強いられると感じ、大学へ進学することを選択する。大学へ進学してから、スティーヴンは、さらに魂の自由を求める。

ジョン・ブレイズ (John Blades) は、「我々は小説が幼い頃から大人になるまでのスティーヴン・ディーダラスの伝記の類いであり、タイトルが芸術家になるある個人の発達期の描写であることを暗示していると考えられることができる」と述べている (Blades 60)。ベルヴェディア・カレッジでのアーナル神父の説教におけるアダムとイヴの話は、誘惑に負けた人間の姿を示しているが、スティーヴンの支持するバイロンは、*Cain* (1821) の中で禁断の木の実を食べたアダムとイヴを肯定するような言葉をカインに言わせている。このことは、バイロンが芸術家として宗教に縛られずに表現していることを示している。

ルース・ギリガン (Ruth Gilligan) は、「歴史的にアイルランドは移民の国 (自国から他国への) である」と述べているが (Gilligan 111)、スティーヴンが国から解放されたいと望むことは、移民となることへの望みというよりは、*A Portrait of the Artist as a Young Man* というタイトルから察するに、表現者として自由を得たいという心情に起因しているように思われる。

スティーヴンにとって天職とは、自由な表現者としての芸術家であると考えられる。彼は、カトリックの理不尽な側面から逃れ、自由な表現者として生きるという強い彼の決意をするにあたり、自身の名前の由来であるギリシア神話の工匠ダイダロスによって正当化しているように思われる。

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

教養小説という範疇の中で考えると、ディケンズは、*David Copperfield* においてあくまでもキリスト教の規範の中で生きる主人公デイヴィッドを描いているが、*A Portrait of the Artist as a Young Man* においてジョイスは、スティーヴンの魂が良心に従って生きることを望む一方で、芸術家として何ものにも縛られない自由を求めていることをも示している、と断言していいだろう。

注

- 1) James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man* (New York: Penguin Books, 1992), pp.12-13. この作品からの引用は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、加藤光也訳『若き日の芸術家の肖像』（集英社）を参考にした。
- 2) 長い間、聖職に対する強い反感があったにもかかわらず、ジョイスはイエズス会士に対する尊敬の念と自分の受けた教育に対する高い評価を持ち続けた（ファークノリ、ギレスピー 437-38）。エイドリアン・フレイゼリア (Adrian Frazier) は、「*A Portrait of the Artist as a Young Man* においてジョイスは、教会が子供たちの教育に取りつたように支配的であることについて自身の経験を再現した」と述べている。一方で、「ウィリアム・バトラー・イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) とウィリアム・ヘンリー・グレゴリー (William Henry Gregory, 1816-92) は、国立劇場がその元で運営しなければならなかった宗教的圧力に不本意にも沈黙を保っていた」と述べている (Frazier 328-29)。
- 3) 「土地同盟の父」として知られるダヴィッドは、英国のアイルランド統治に対する土地闘争を指導し、アイルランド自治獲得やこの時代のアイルランド・ナショナリズムの形成に中心的役割を果たした。ダヴィッドの率いる土地連盟は、1870年頃から地主の所有地を分割し、小作農に分け与える製作を押し進めた。

パーネルは、最終的にはダヴィッドを支援することとなる。パーネルの父親は熱烈なアイルランドナショナリストであり、母親はアイルランド系アメ

リカ人であった。彼は、この両親の強い影響を受けて育った。パーネルは、ウィックロー（Wicklow）の旧家出身で、生活に困ったことはなかったが、ダヴィッドの方は、強制退去を命ぜられた小作農の息子であった。ダヴィッドは、1878年に渡米し、アメリカのフェニアン運動の指導者ジョン・デヴォイ（John Devoy, 1842-1928）の協力を得て、再び自治と土地問題を結びつけて両派のナショナリストを大同団結させることに成功した。当初パーネルは、ダヴィッドの新運動方針に必ずしも賛成でなかったが、彼がアイルランド農民の苦難救済に積極的に活動するのを見て、ダヴィッドの創設した全国土地連盟の総裁を引き受けることに同意した（波多野 179-84）。

- 4) 1890年12月6日、かつての支持者ティモシー・マイケル・ヒーリー（Timothy M. Healy, 1855-1931）は、醜聞に反発し、党の大半を連れてパーネルのもとを離れていった（ファークノリ、ギレスピー 370）。
- 5) *Dubliners* (1914) の中の *Ivy Day in the Committee Room* でハインズ（Hynes）氏は、「パーネルの死」（The Death of Parnell）を朗誦する。

以下の部分は、パーネルの死に対する無念さが伝わってくる部分である。

*He is dead. Our Uncrowned King is dead.  
O, Erin, mourn with grief and woe  
For he lies dead whom the fell gang  
Of modern hypocrites laid low.*

*He lies slain by the coward hounds  
He raised to glory from the mire;  
And Erin's hopes and Erin's dreams  
Perish upon her monarch's pyre.  
(Dubliners 131)*

彼は逝きぬ、我が「無冠の帝王」は逝きぬ。  
おおエリンよ、慟哭して悲しまん、

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

彼は無情なる現代偽善者の一味に  
打ち倒されて骸を横たえたれば。

卑怯なる徒輩にさいなまれ死したるなり。  
かくてエリンの希望とエリンの理想は  
その専制政治を葬る火とならず。

- 6) もともといたアイルランド人に対する偏見は、19世紀のステレオタイプ化に一因があると考えられる。1860年代にフィニアン (Fenian) 主義が盛り上がっていた。フィニアン主義というのは、アイルランドの民族主義の組織で、物理的な力を用いても、イギリスによる支配を打倒しようとするものである。「フィニアン」というのは、ゲーリック語の学者であったジョン・オマホニー (John O'Mahony, 1816-77) がアメリカで同盟を結ぶ際、古代アイルランドの伝説的な戦士団フィアナ (Fianna) にちなんで命名された。1860年代に、フィニアン主義者たちが、警察署を襲ったり、アイルランドで決起したりした。それらの決起自体は全て鎮圧され、関係者が逮捕されて終わったが、イギリス人にとっては脅威であった。
- 7) コンミー師は、スティーヴン (およびジョイス) が学んだクロングウズ・ウッド・カレッジの校長やベルヴェディア・カレッジの学事長を歴任しただけでなく、ダブリンの聖フランシスコ・ザヴィエル教会の修道院長も務めたこともある。
- 8) 1802年に設立された学校で、裕福でない子供たちに初等教育を提供した。
- 9) 父親のアルコール中毒や家庭の不安定な経済事情にもかかわらず、ジョイス自身もまた、クリスチャン・ブラザーズ、クロングウズ・ウッド・カレッジ、ベルヴェディア・カレッジに通っていた。ジョイスの父親ジョン・スタニスロウス・ジョイス (John Stanislaus Joyce, 1849-1931) は、横柄な飲んだくれで子供たちを虐待することもあったが、ジェームズの芸術に多大な影響を与えたと考えられている (Cowles 18)。
- 10) 12月3日はイエズス会の創立メンバーの一人フランシスコ・ザヴィエルの祝日である。「インド諸国の使徒」とも呼ばれたザヴィエルは、ジョイス

が学んだダブリンのベルヴェディア・カレッジの守護聖人である。ザヴィエルは、中国南東沖の上川島でこの日に生涯を終えた。イエズス会で「九日間の祈り」が最初に実践されたのは1643年ナポリでのことで、以来、イエズス会の教会や学校で行事として盛んに行われた。前述のフランシスコ・ザヴィエルの祝日、またはザヴィエル列聖記念日である3月13日にいたる9日間が一般的であった。ダブリンで最初に行われたのは1712年、現在のホルストン (Halston) 通り教区にあるメアリーズ・レイン (Mary's Lane) の教会でのことで、1832年以降はガーディナー (Gardiner) 通りにある聖フランシスコ・ザヴィエル教会に引き継がれている (レイデン 74)。

- 11) ジョイスは、売春婦たちを描き出している。ここで18世紀から20世紀にかけて運営されていたマグダレン (Magdalene) 洗濯場について付け加えておきたい。マグダレン洗濯場は、1765年にアラベラ・デニー (Arabella Denny, 1707-92) によって設立された。ローマ・カトリックの修道女によって運営されたこの洗濯場には、転落した女性たち、すなわち売春婦たちが入ってきて罪ほろぼしのため働いた。結婚せずに妊娠してしまった女性たちも入ってきた (O'Loughlin 3)。
- 12) トリニティ・カレッジ (ダブリン) は、ダブリンのピューリタンによって1592年に設立されたものであり、最初に学長になった5人はみなケンブリッジで教育を受けていた。設立目的は、ダブリン住民にイングランドの「文明」と敬虔なプロテスタント信仰を教えこむことで、アイルランドにおける宗教改革を進め、またテューダー朝の植民地行政を安定させることであった。そこでの教育をアイルランド語で行ってほしいという声もあり、トリニティ・カレッジが手助けして聖書が初めてゲール語から翻訳されることとなった (クレア 255-56)。
- 13) Charles Dickens, *David Copperfield* (New York: Oxford: UP, 1989), p.55.
- 14) ノラは、イタリア共和国カンパニア (Campania) 州ナポリ (Napoli) 県にある。
- 15) 時代が経って19世紀になると、ブルーノは、「自由思想の殉教者」として再評価され、処刑の地となったカンポ・デ・フィオーリ (Campo de' Fiori) 広場には彼の像が建立された (三澤 31)。

コペルニクスは、*Nicolai Copernici Torinensis De revolutionibus orbium*

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるスティーヴンの魂の救済

*coelestium, Libri VI* (1543) (『天球の回転について』) で地動説を主張した。ガリレオ (Galileo Galilei, 1564-1642) の場合は、地動説を唱えたことで異端審問にかけられた。

ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) は、*Areopagitica* (1644) の中で、年老いたガリレオを訪ねたことを伝えている。ミルトンは、ガリレオを「フランシスコ会やドミニコ会の考え方と異なる天文学の考え方をしたことで異端審問にかけられた囚人」(“a prisoner to the inquisition for thinking in astronomy otherwise than the Franciscan and Dominican licensers thought”) と表現している (Milton 259)。

- 16) カトリックにおける欺瞞を示している作家もいる。シヨン・オフエイロン (Seán O’Faoláin, 1900-91) は、*Unholy Living and Half Dying* (1947) において、ある男が死ぬ前に 20 年ぶりに告解に来たという作り話をする司祭の姿を示している。また、ジョン・モンタギュー (John Montague, 1929-) は、*An Occasion of Sin* (1964) で売春婦と恋に落ちた司祭の姿を示している。

*Dubliners* のなかの ‘Grace’ (『恩寵』) において、カーナン (Kernan) 氏は、元来プロテスタントの出であったが、結婚の間際にカトリック教に改宗する。彼は、20 年に一度も教会に足を入れてなかっただけでなく、好んでカトリック教を痛罵した (*Dubliners* 56)。

## 作品

Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man* (New York: Penguin Books), 1992.

## 参考文献

Anders, A. C. *Dublin Made Me: An Autobiography*. Cork: Mercier P, 1979.

Blades, John. *How to Study James Joyce*. London: Macmillan, 1996.

Boes, Tobias. “*A Portrait of the Artist as a Young Man* and the ‘Individuating Rhythm’ of Modernity.” *ELH*. Vol. 75. No. 4. Ed. Frances Ferguson. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2008: 767-85.

Cowles, Gregory. “Fathers of Geniuses” (Book Review: *Mad, Bad, Dangerous*

- to Know: The Fathers of Wilde, Yeats and Joyce* by Colm Toibin), *The New York Times* (2018. 12. 1-2). New York: The New York Times, 2018: 18.
- Deane, Seamus. Introduction to *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Harmondsworth: Penguin Books, 1992: vii-xxx.
- Delaney, Enda. “There But For The Grace of God Go I: Middle-Class Catholic Responses to Ireland’s Great Famine.” *The English Historical Review*. Vol. CXXXV. No. 577. Ed. Catherine Holmes, Peter Marshall, Stephen Conway, Hannah Skoda. Oxford: Oxford UP, 2020: 1433-60.
- Dickens, Charles. *David Copperfield*. New York: Oxford UP, 1989.
- Earle, Rebecca. “Promoting Potatoes in Eighteenth-Century Europe.” *Eighteenth-Century Studies*. Vol. 51. No. 2. Ed. Sean Moore. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2018: 147-62.
- Eide, Marian. “Famine Memory and Contemporary Irish Poetry.” *Twenty-Century Literature*. Vol. 63. No. 1. Ed. Lee Zimmerman. Durham: Duke UP, 2017: 21-48.
- Ellmann, Richard. “A Portrait of the Artist as Friend.” *Modern Critical Interpretations: James Joyce’s A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988: 31-42.
- Frazier, Adrian. *George Moore, 1852-1933*. London: Yale UP, 2000.
- Gilligan, Ruth. “Towards a “Narratology of Otherness” : Colum McCann, Ireland, and a New Transcultural Approach.” *Studies in the Novel*. Vol. 48. No. 1. Ed. Stephanie Hawkins. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2016: 105-20.
- Harkness, Margueritte. *A Portrait of the Artist as a Young Man: Voices of the Text*. Boston: Twayne Publishers, 1990.
- Henke, Susette. “Stephen Dedalus and Women: A Portrait of the Artist as a Young Misogynist.” *Modern Critical Interpretations: James Joyce’s A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988: 55-75.
- Hill, C. P. *British Economy and Social History 1700-1982*. Bath: The Pitman P,

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるステイヴンの魂の救済

1985.

Howes, Marjorie. Introduction to *The Cambridge Companion to W. B. Yeats*.

Ed. Marjorie Howes, John Kelly. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

Joyce, James. *Dubliners*. London: Penguin Books, 1992.

Kenner, Hugh. "The Portrait in Perspective." *Twentieth Century Interpretations of A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. William M. Schutte.

Englewood Cliffs, Prentice-Hall, 1968: 26-37.

McBride, Ian. "The Politics of *A Modest Proposal*: Swift and the Irish Crisis of

the Late 1720s." *Past and Present*. No. 244. Ed. Alexandra Welsham, Matthew Hilton. Oxford: Oxford UP, 2019: 89-122.

McLean, David. "Famine on the Coast: The Royal Navy and the Relief of

Ireland, 1846-1847." *English Historical Review*. Vol. CXXXIV. No. 566. Ed. Catherine Holms, Peter Marshall, Stephen Conway, Hanna Skoda. Oxford: Oxford UP, 2019: 92-120.

Milton, John. *Areopagitica, John Milton: The Major Works*. Ed. Stephen

Orgel, Jonathan Goldberg. Oxford: Oxford UP, 2008: 236-73.

Mullen, Mary L. "A Great Public Transaction': Fast Days, Famine, and the

British State." *Victorian Studies*. Vol. 61. No. 3. Ed. Ivan Kreilkamp, Rae Greiner, Lara Kriegel, Monique Morgan. Bloomington: Indiana UP, 2019: 446-66.

O'Brien, Máire and Conor Cruise. *Ireland: A Concise History*. New York:

Thames & Hudson, 1999.

O'Loughlin, Ed. "Irish survivors find their voices." *The New York Times*

(2018. 6. 9-10). New York: The New York Times, 2018: 3.

Orwell, George. "Notes on Nationalism." *George Orwell: Essays*. London: Pen-

guin Books, 2000: 300.

Parrinder, Patrick. "Joyce's Portrait and the Proof of the Oracle." *Modern*

*Critical Interpretations: James Joyce's A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988: 109-130.

- Pastore, Christopher. "How the Irish Won Their Freedom." *The New York Times* (2019. 1. 23). New York: The New York Times, 2019: 8.
- Pope, Deborah. "The Misprision of Vision: "A Portrait of the Artist as a Young Man." *Modern Critical Views: James Joyce*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986: 113-19.
- Riquelme, John Paul. "The Preposterous Shape of Portraiture: A Portrait of the Artist as a Young Man." *Modern Critical Interpretations: James Joyce's Portrait of the Artist as Young Man*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988: 87-107.
- Stewart, J. I. "A Portrait of the Artist as a Young Man." *Twentieth Century Interpretations of A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. William M. Schutte. Inglewood Cliffs: Prentice-Hall, 1968: 15-20.
- 岩瀬ひさみ, 「スコットランド・ゲール語」, 『ケルト文化事典』, 木村正俊, 松村賢一 (編), 東京堂出版, 2017: 75-77.
- ヴェーバー, マックス, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 大塚久雄 (訳), 岩波書店, 1994.
- クレア, マクナマス, 「17世紀ブリテン諸島の諸文化」, 『オックスフォードブリテン諸島の歴史 第7巻 1603～1688年』, ジェニ・ウァーモールド (編), 西川杉子 (監訳), 慶應義塾大学出版, 2015.
- ケルズ, スチュアート, 『図書館巡礼「限りない知の館」への招待』, 小松佳代子 (訳), 早川書房, 2019.
- サイクス, ノーマン, 『イングランド文化と宗教伝統一近代文化形成の原動力となったキリスト教』, 野谷啓二 (訳), 開文社, 2000.
- 齋藤英里, 「大飢饉と移民」, 『アイルランド史』, 上野格, 森ありさ, 勝田俊輔 (編), 山川出版, 2018: 230-72.
- 鶴岡真弓・松村一男, 『図説 ケルトの歴史』, 河出書房新社, 2017.
- 夏目博明, 「移民するアイルランド人はどのように描かれたか—アイリッシュ・ジョークとイラストに見るアイルランド人」, 『アイリッシュ・アメリカンの文化を読む』, 結城英雄, 夏目康子 (編), 水声社, 2016: 30-40.
- 波多野裕造, 『物語アイルランドの歴史』, 中央公論新社, 2001.

*A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるステイーヴンの魂の救済

- バエス, フェルナンド, 『書物の破戒の世界史—シュメールの粘土板からデジタル時代まで』, 八重樫克彦, 八重樫由貴子, (訳), 紀伊國屋書店, 2019.
- ハーメル, クリストファー, デ, 『世界で最も美しい12の写本『ケルズの書』から『カルミナ・ブラーナ』まで』, 加藤磨珠枝, 松田和也 (訳), 青土社, 2018.
- 平田雅博, 『英語の帝国 ある島国の言語の1500年史』, 講談社, 2016.
- ファーグノリ, A. N., ギレスピー, M.P., 『ジェイムズ・ジョイス事典』, ジェイムズ・ジョイス研究会 (訳), 松柏社, 1997.
- 福原麟太郎, 吉田正俊 (編), 『文学要語辞典 改定増補版』, 研究社, 1987.
- ペインター, ネル・アーヴィン, 『白人の歴史』, 越智道雄 (訳), 東洋書林, 2011.
- 三澤信也, 『世界を変えた科学史』, 彩図社, 2024.
- ミノワ, ジョルジュ, 『ジョージ王朝時代のイギリス』, 手塚リリ子, 手塚喬介 (訳), 白水社, 2004.
- 山本正, 『図説 アイルランドの歴史』, 河出書房新社, 2017.
- 結城英雄, 『文学都市ダブリン—ゆかりの文学者たち』, 春風社, 2017.
- レイデン, エイジャー, 『宝石 欲望と錯覚の世界史』, 和田佐規子 (訳), 2017.

## The Salvation of Stephen's Soul in *A Portrait of the Artist as a Young Man*

YOSHIDA Kazuho

*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) is the first novel of Irish writer James Joyce (1882–1941). It traces the religious and intellectual awakening of young Stephen Dedalus, Joyce's fictional alter ego, whose surname alludes to Daedalus, Greek mythology's consummate craftsman. Stephen questions and rebels against the Catholic and Irish conventions under which he has grown up.

Joyce was born in Dublin into a middle-class family. He attended the Jesuit Clongowes Wood College in County Kildare, then, briefly, the Christian Brothers. Despite the chaotic family life imposed by his father's unpredictable finances, he excelled at the Jesuit Belvedere College and graduated from University College Dublin in 1902.

Clongowes Wood College is a Catholic voluntary boarding school for boys near Clane, County Kildare, Ireland, founded by the Jesuits in 1814. It features prominently in James Joyce's semi-autobiographical novel *A Portrait of the Artist as a Young Man*. At Clongowes Wood College, the apprehensive, intellectually gifted boy suffers the ridicule of his classmates while he learns the schoolboy codes of behavior. Stephen is strapped when one of his instructors believes he has broken his glasses to avoid studying, but, prodded by his classmates, Stephen works up the courage to complain to the rector, Father Conmee, who assures him there will be no such recurrence, leaving Stephen with a sense of triumph. Stephen's father gets into debt and the family leaves its pleasant suburban home to live in Dublin. Stephen realizes that he will not return

to Clongowes. However, thanks to a scholarship obtained for him by Father Conmee, Stephen is able to attend Belvedere College, where he excels academically and becomes a class leader. Joyce attended the Jesuit Belvedere College in Dublin from 1893 to 1898 and later he translates his experiences and memories to Stephen Dedalus in the middle portion of his novel.

As a student at University College, Dublin, Stephen grows increasingly wary of the institutions around him: Church, school, politics and family. In the midst of the disintegration of his family's fortunes his father berates him and his mother urges him to return to the Church. An increasingly dry, humourless Stephen explains his alienation from the Church and the aesthetic theory he has developed to his friends, who find that they cannot accept either of them. Stephen concludes that Ireland is too restricted to allow him to express himself fully as an artist, so he decides that he will have to leave. He sets his mind on self-imposed exile, but not without declaring in his diary his ties to his homeland. Unlike Charles Dickens (1812-70) who shows David within the frame of Christianity in *David Copperfield* (1850), Joyce represents Stephen as a hero who escapes from the Church and establishes himself as an artist in *The Portrait of the Artist as a Young Man*.

# スジャラ・ムラユにおける古地名ムラユ

深見純生

## 1. はじめに

筆者は論文「7世紀のシュリーヴィジャヤとマラユ」(深見1981)以来、古地名すなわち史料に記される地名のムラユ Melayu (ないしマラユ Malayu) の位置比定に関心をもってきた。筆者はムラユの位置を通説のジャンビではなくパレンバンと考えている。青山亨(2019)は、ジャワの史料において13～14世紀のマラユはスマトラ全島をさし、ジャワの影響を受けたスマトラ現地の史料において14世紀のマラユはスマトラ中部内陸のダルマーシュラヤ Dharmāśraya に中心のある王国の名前であることを示したうえで、その遺跡の河川上流部という立地に関する考察を展開している。

本稿ではこれらに続く史料である『スジャラ・ムラユ Sejarah Melayu (ムラユの歴史)』においてムラユの位置はパレンバン、より限定的にはスグンタン Seguntang の丘あるいはその近傍であることを示したい。あわせて、この論述をとおしてこの文献が古地名ムラユを述べる最後の史料であることが自ずから明らかになるであろう。

---

キーワード：ムラユ, スジャラ・ムラユ, パレンバン, スグンタン,  
クドゥカン・ブキット

## 2. 民族名称としてのムラユ

『スジャラ・ムラユ』は周知のように1400年ころ建国のムラカ Melaka (英語名マラッカ Malacca) 王国の歴史を記したマレー語の書物であり、英語では Malay Annals と呼ばれる。このタイトルは通称であって原題はアラビア語で Sulalatus Salatun といい<sup>1)</sup>、王の系譜の意味ということである。本書は実際にはムラカ王国の諸王の系譜と事跡、そして宮廷の出来事などを語るものである。

その中でムラユの語は単独で用いられることはほとんどなくて、ふつう次のような成句をなしている。adat Melayu ムラユの慣習, istiadat Melayu ムラユのしきたり, bahasa Melayu ムラユ語, lidah Melayu ムラユの発音, raja Melayu ムラユの王, adat raja Melayu ムラユの王の慣習, istiadat raja Melayu ムラユの王のしきたり, larangan raja Melayu ムラユの王の特権, anak Melayu ムラユの民, hamba Melayu ムラユの臣民, orang Melayu ムラユ人など。これらの訳語の適否については異見もあると思われるが<sup>2)</sup>、いま本稿にとって重要なことは、ムラユが王とその高官や臣民などムラカ王国の中心をなす人々の民族名とみなしうることである。すなわち『スジャラ・ムラユ』におけるムラユは現在に連なる民族名であって古地名ではないのである。しかしながら、王の伝説的な出自を示す部分に1度だけ古地名のムラユが記されている。次にこれを取りあげる。

## 3. ラッフルズ 18 号写本の第 3 章冒頭

『スジャラ・ムラユ』の写本は30ほどあり、その中でラッフルズ18号写本 Raffles MS 18 と呼ばれるものがもっとも古いとされる [Miksic 2007: 236]。この写本においてムラユはまずパレンバンにおける地名として現れる。すなわち次にあげる第3章の冒頭であり、シュラン

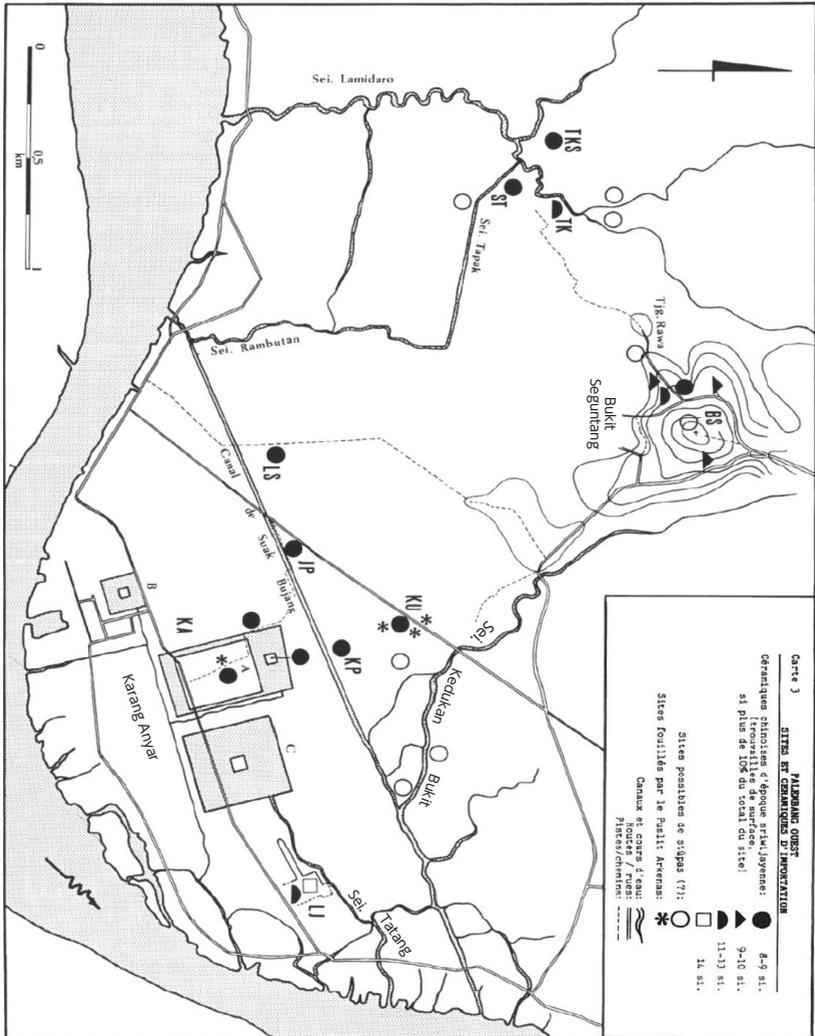
Syulan / Shulan (南インドのチョーラ Chola) の3人の王子が光り輝くこの丘に降臨する場面へと連なる [Cheah 1998: 83]<sup>3)</sup>。

Maka tersebutlah perkataan ada sebuah negeri di tanah Andalas, Palembang namanya. Demang Lebar Daun nama rajanya, asalnya daripada anak cucu Raja Syulan juga, Muara Tatang nama sungainya. Maka di hulu Muara Tatang itu ada sebuah sungai, Melayu namanya. Dalam sungai itu ada sebuah bukit, Si Guntang Mahameru namanya.

語り伝えられるところでは、アンダラス（スマトラ）の地にパレンバンという国があった。その王はやはりシュランの王の子孫でドゥカン・レバル・ダウンといい、その川の名はムアラ・タタンといった。そのムアラ・タタンの上流にムラユという名の川があった。その川の上にシ・グンタン・マハメルという丘があった。

ムラユの位置を確認しておこう。パレンバン市中心部から南西へ4～5キロのムシ川北岸のカラン・アニヤル Karang Anyar 地区に現在史跡公園が整備されており、その敷地内の東部にムシ川に注ぐタタン Tatang 川がある（地図参照）。タタン川の上流でスグンタン（史料ではシ・グンタン）の丘の東から流れてくる川を現在はクドゥカン・ブキット Kedukan Bukit 川というが、上の引用に照らせば、このクドゥカン・ブキット川がかつてムラユ川と呼ばれていたことがわかる。

スグンタン丘からムシ川まで現在もなお小規模な舟運が可能であるという [Manguin 1987: 356-357]。その上流部において舟の発着する所に川の名前の由来となるムラユという地名があったかと想像される。それはおそらく、いわゆるシュリーヴィジャヤ碑文のひとつクドゥカン・ブキット碑



地図 スグンタン丘とカラシ・アニヤル地区 [Manguin 1987: 401]

(西暦 682 年) の発見地であるクドゥカン・ブキット村あるいはその近くであろう。というのも、この石碑は 1920 年クドゥカン・ブキット村の住民の家にポートルースの「マスコット」としてずっと以前から保管されていたものが見つかったのだという [Cœdès 1930: 33]<sup>4)</sup>。この村の名はもとはムラユだったであろう<sup>5)</sup>。その丘の名前シ・グンタン・マハメルについては次項で述べる。

#### 4. シェラベア版の序文から

ラッフルズ 18 号写本の他にいわゆるシェラベア Shellabear 版もよく利用される。上の引用部分はシェラベア版では第 2 章の冒頭であるが、ほぼ同文なのでいまは省略する [Samad 1986: 19; Situmorang 1952: 22]。西暦換算 1612 年に記されたというシェラベア版にはラッフルズ 18 号写本には存在しない序文がついている。その中の作者自身について語る中に次の一節がある [Samad 1986: 2; Situmorang 1952: 1]。

Melayu bangsanya, dari Bukit Siguntang Maha Miru

(私は) マハ・ミルたるスグンタン丘の出身のムラユの一族である

原文の bangsa を一族と訳してみた。すなわち本書の作者は自身をムラユ民族の出自であると自認しているのである。マハ・ミル (マハメル) の語源はサンスクリット語のマハーメール Mahāmeru である。これはインドの伝統的世界観において世界の中心に聳えるという高い山であり (日本では須弥山), ここではスグンタン丘が世界の中心と位置づけられ<sup>6)</sup>, ムラユ民族はそこを源郷とするという認識が明示されている。ここからまた民族名ムラユが自称であることがわかる。

ムラカ王家がパレンバンの出身であることは多くの歴史書が述べている

が、それは『スジャラ・ムラユ』によってより限定するならスグンタン丘なのであり、その民族名ムラユはスグンタン丘が位置する地名ムラユに由来すると考えられるのである。

## 5. おわりに

『スジャラ・ムラユ』における地名ムラユの位置は、パレンバンのスグンタン丘の東側、クドウカン・ブキット村に比定できる。スグンタン丘をムラユ民族の出身地と見なす立場からはムラユの位置をスグンタン丘に求めることも可能であろう。

『スジャラ・ムラユ』においてムラユは、地名ムラユの1例を別にすると、その地名ムラユに由来し、現在に連なる民族名である。したがって古地名ムラユの位置比定の問題においては、本書は扱うべき最後の史料ということになり、これ以前の諸史料（深見 1981：166 および青山 2019 参照）が検討対象になる。

## 謝辞

本稿は科研による研究成果の一部分である。基盤研究(A)課題番号19H00538(2019～2022年度)「東南アジア『古代史』の下限としての14・15世紀に関する地域・分野横断的研究」研究代表者青山亨東京外国語大学教授。

## 注

- 1) この書名のアラビア語のローマ字綴り(とそのカタカナ表記)は複数存在する。ここでは Samad 1986 による。
- 2) とりわけ larangan raja Melayu は王が発した禁令あるいは王に課された禁制という意味に解するの也有可能かもしれないが、ここでは royal privilege という英語訳に従った〔Cheah 1998: 122-123; Brown 1970: 44-45〕。
- 3) 英語では次のように訳される〔Brown 1970: 13〕。

## スジャラ・ムラユにおける古地名ムラユ

Here now is the story of a city called Palembang in the land of Andalus. It was ruled by Demang Lebar Daun, a descendant of Raja Shulan, and its river was the Muara Tatang. In the upper reaches of the Muara Tatang was a river called the Melayu, and on that river was a hill called Si-Guntang Mahameru.

- 4) セデスは最初その紀年をシャカ 605 年（西暦 683）と読んだが〔Cœdès 1930: 34〕, ダメーが 604 年（682）に修正し〔Damais 1952: 99〕, 後にセデスもダメーに従う〔Cœdès 1968: 82〕。
- 5) このマラユは 7 世紀の文献に見られるマラユと何らかの関係があるかもしれない。別稿において考えてみたい。
- 6) 現実のスグンタン丘はせいぜい標高 30 メートルほどでけっして高くはない。しかしながら、カラン・アニヤル史跡公園内に作られた望楼に登ると、全体が低平な中でスグンタン丘が視界の中で一番の高地である。

### 参考文献

- 青山亨 2019「ダルマーシュラヤ試論：ジャワ王権から見た 13 世紀前後のムラユ」  
青山亨編『東南アジア史の統合的編年プラットフォームの構築～「長い 12・13 世紀」を中心に～』東京外国語大学大学院総合国際学研究院（科学研究成果報告書）：17-36.
- 西村朝日太郎 1942『馬來編年史研究（スジャラ・ムラユ）』東亜研究所発行・岩波書店発売
- 深見純生 1981「7 世紀のシュリーヴィジャヤとマラユ」『南方文化』8：161-174.
- Boechari 2012 (originally published in 1986): “New Investigations on the Kedukan Bukit Inscription”, Boechari, *Melacak Sejarah Kuno Indonesia Lewat Prasasti*, Jakarta, 385-399.
- Brown, C. C. 1970: *Sĕjarah Mĕlayu or Malay Annals*, Oxford University Press, Kuala Lumpur.
- Cheah Boon Kheng 1998: *Sejarah Melayu, The Malay Annals, Ms. Raffles No. 18, Edisi Rumi Baru / New Romanised Edition*, MBRAS.

- Cœdès, G. 1930: “Les inscriptions malaises de Çrīvijaya”, *BEFEO*: 30(1-2): 29-80.
- Cœdès, G. 1968: *The Indianized States of Southeast Asia*, The University Press of Hawaii, Honolulu.
- Damais, L.-Ch. 1952: “Études d'épigraphie indonésienne. III. Liste des principales inscriptions datées de l'Indonésie”, *BEFEO* 46(1): 1-105.
- Manguin, Pierre-Yves 1987: “Études Sumatranaises I. Palembang et Sriwijaya: Anciennes hypothèses, recherches nouvelles (Palembang Ouest)”, *BEFEO* 76: 337-402.
- Miksic, John N. 2007: *The A to Z of Ancient Southeast Asia*, Scarecrow Press, Lanham / Toronto / Plymouth, UK.
- Samad Ahmad, A. 1986: *Sulalatus Salatin (Sejarah Melayu)*. Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur.
- Situmorang, T. D. dan A. Teeuw 1952: *Sejarah Melayu: Menurut terbitan Abdullah*, Djambatan, Jakarta / Amsterdam.
- Winstedt, R. O. 1938: “The Malay Annals or Sejarah Melayu”, *JMBRAS*: 16(3): 1-226.

[研究ノート]

# 生成 AI を活用した 英語ライティング教育支援ツールについて

谷野圭亮

## はじめに

2022年12月に ChatGPT 3.5 が一般にリリースされて以降、教育現場においては生成 AI の導入が学習者に与える影響が注目されており、その課外・課内での利用に関する議論が活発に行われている。多くの場合、生成 AI の使用は講義担当者の裁量に委ねられており、レポートや課題で無許可、または引用なしで生成 AI を使用した場合、剽窃として扱われることが一般的である。生成 AI が教育に与える影響については積極的に活用すべきだとする意見がある一方で、教育の質や学習者の自主性に対する懸念も指摘されている。しかし、日常生活や教育の文脈において、生成 AI の使用を全面的に禁止することは現実的ではなく、教育業界全体がその対応を模索している状況である。

本稿では、2024年9月現在における日本の中等教育における生成 AI の普及状況の概要を紹介するとともに、著者が開発・公開している「英語教員支援ツール」に含まれる「英作文評価プロンプト作成」機能を紹介する。また、この機能を通して、語学教育における生成 AI の活用可能性と課題

---

キーワード：英語ライティング、フィードバック、生成 AI

について考察する。

### 中等教育における生成 AI 使用の現状

生成 AI を組み込んだサービスは、有償・無償を問わず多くの企業によって提供され、教育現場での運用方法の検討が進んでいる。教育現場での導入事例として、文部科学省が中学校および高等学校向けに実施している「リーディング DX スクール事業」が挙げられる。本事業では、生成 AI の教育活動および校務での活用に向けたパイロット校を指定して研究が進められている。

具体的な応用事例として、生成 AI による作文や論文のフィードバック、自動化された質問応答システム、学生の学習進捗管理、そして教材作成補助や校務支援のためのツールとして利用が始まっている。生成 AI を効果的に活用するには、ユーザーの意図を正確に AI に伝えるための指示文（プロンプト）作成スキル、すなわち「プロンプトエンジニアリング」が重要である（Brown et al., 2020）。適切なプロンプトを設計することで、AI からより精度の高い回答やフィードバックを得られ、教育効果に直接影響を与えることが示されている（Reynolds & McDonell, 2021）。

しかし現状では、多くの教師が生成 AI の利用に慎重な姿勢を示しており、導入は一部の学校（研究拠点校）や教師個人レベルの使用に限られている。また、教育産業の文脈でも多くのサービスがリリースされているが、有償利用が基本であり、予算の制約がある中等教育の現場でスピード感のある導入は難しい状況である。教師自身がこの技術の可能性を理解し、活用方法を模索している段階で、実際の使用が広がっているとは言えない。また、生成 AI を教育に取り入れるための具体的なガイドラインや研修も不足しており、今後も情報収集や実験的な利用がさらに進展することが期待されている。

## 生成 AI と英語教育

生成 AI が言語教師にもたらす最大の恩恵は、従来のデータベースを凌駕する大規模な学習データを基にして生成された情報や英文を容易に引き出せる点にある。その言語知識の豊富さは人間をも超えており、外国語教育の文脈において非常に注目されていることに議論の余地はない。

英語教育の分野において特にライティングの自動採点やフィードバックの提供、教材作成の支援、翻訳やパラフレーズの補助といった多様な活動において、生成 AI の有用性が広く示されている（柳瀬, 2023a；水本, 2024）。これにより、教員は業務の負担を軽減しながら、学習者が自律的に学習を進めるための環境を構築することが可能であり、教育現場での教師の負担軽減と学習者の個別最適な学びへの貢献が期待される。また、生成 AI による即時フィードバックは、従来の教育方法と異なり、学習者に新たな学習体験を提供し、個々の学習ペースに応じた支援を実現している（水本, 2024）。特に、生成 AI は英語ライティングやリーディングの支援ツールとして広く活用されており、教育現場における効果的な学習支援の手段として評価されている（柳瀬, 2023a）。

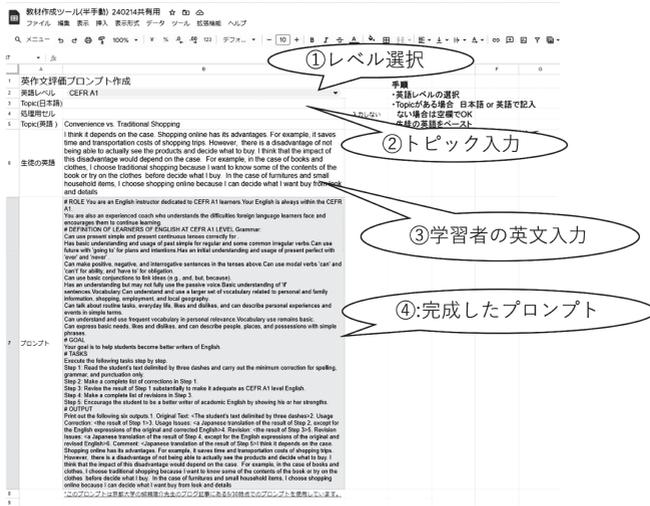
一方で、前項で述べたように、生成 AI 自体に英語教師や学習者を支援する能力があったとしても、適切な指示文（プロンプト）がなければ効果的な活用は不可能である。筆者は英語教師向けに公開されているプロンプトを、状況に応じて学習者のレベルやトピックなどの変数を変更可能なプロンプトへと改変する関数を表計算ソフト上で作成した。以下にその構造および使用例を示す。

## 英語ライティング支援ツール

筆者は前述の英語ライティング評価プロンプト作成補助ツールを「英語

教員支援ツール」として Web 上で公開している（谷野，2024）。このツールは Google スプレッドシート上に保管されており，個人の Google ドライブにコピーすることで，誰でもセキュリティに配慮しながら簡単に使用することが可能である。

本ツールは，京都大学の柳瀬陽介氏がブログ上で公開している高校生用 ChatGPT/Bing 英作文自動添削・改訂プロンプト（柳瀬，2023b）を基礎として開発されたものである。英語教員支援ツールのインターフェイスは，図 1 に示すように，①のレベル選択，②のトピック入力，③の学習者の英文入力



例.

入力した実験文

I want to become a police man, because My father is a policeman. ←  
 He protect people everyday. I see him everyday, so I like to became it.←  
 To become police I study hard everyday, especially English. Because I can help people from another country.←

図 1. 英語教員支援ツール内「教材作成ツール」インターフェイス

## 生成 AI を活用した英語ライティング教育支援ツールについて

文入力を各セルに入力することで、レベル選択からプロンプトの完成までを効率的に行うことができる。

本ツールの使用感について、倫理面への配慮から、実際の学習者ではなく筆者自身がエラーを含む英文を作成（例）し、本ツールのプロンプトに組み込んだ上で、2024年9月現在、登録不要で利用可能な ChatGPT 4o mini を用いてフィードバックを出力した（図2）。

図2のフィードバックでは、1. Original Text に入力したテキストが出力され、2. Usage Correction にて修正された英文が出力され、3. Usage

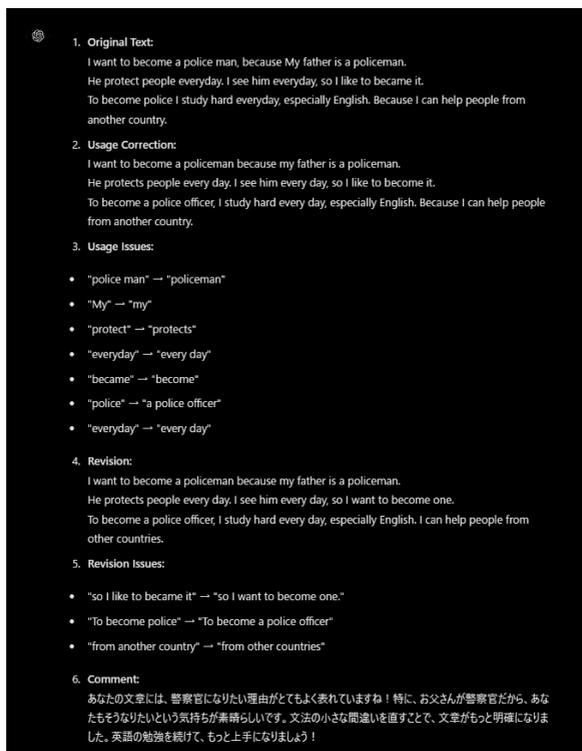


図2. 出力されたフィードバック (Model: GPT 4o mini)

Issues において修正された点が箇条書きで示され、英文自体のエラーが修正され、4. Revision では提案として修正された英文が示され、5. Revision Issues において修正された箇所が示され、6. Comment では学習者に対するフィードバックが日本語で出力される。

本ツールは、学習者が書いた英作文の文法や語彙の適切性を判定し、修正版と対応表、さらに表現方法や構成に関するフィードバック、そして再度修正版と対応表を出力する。2024年9月現在、無料版の ChatGPT 4.0 mini および Google Gemini 1.5 Flash において、プロンプト通りの出力が行われることを確認している。特に、教師の英作文評価の補助ツールとして、次の3点において有用性が高いと考えられる。(1) 学習者の英作文に対する具体的な改善点を即座に提示できること、(2) 文法的な誤りだけでなく、より自然な表現への提案も含まれていること、(3) 励ましのコメントを含めることで、学習者の動機づけにも配慮された設計となっていることである。しかし、出力からもわかるように、出力される情報や解説については改良の余地があり、言い換えるとプロンプトの改良の余地が残されているため、その精緻化を進める計画である。今後は、このツールを Web ブラウザなどで API (Application Programming Interface) 経由で使用可能なアプリケーションとして開発し、より効率性を高める改良を行う予定である。

また、本プロンプトは当初 ChatGPT 3.5 に対応する形で作成されたが、その後 ChatGPT 4.0、ChatGPT 4.0o などへモデルがアップグレードされるにつれて、出力される内容が精緻化されている。すなわち、モデルの進化によりプロンプトを変更せずとも機能としてのアップグレードにつながる点が示唆されている。

さらに、本ツールは Google Drive 上で公開されており、誰でも自身の Google Drive 内に保存して使用することができる。また、クラウドベース

## 生成 AI を活用した英語ライティング教育支援ツールについて

という特性上、作成者が変更した場合にその変更が即時に同期される点も、表計算ソフトのファイルを配布するより利便性が高いといえる。

### まとめ

生成 AI を活用することで、教員は学習者のレベルに合わせた文法や語彙の修正案を、文脈を考慮しながら提示できる。一方、学習者はライティングに対して迅速なフィードバックを得ることが可能となる。また、仮に学習者が個人で使用する場合においても、文法の間違いや不自然な表現を即座に指摘してくれるため、学習者はリアルタイムで自分の文章を見直し、修正を行うことが可能になる。従来、教師からのフィードバックを待つ必要があったが、生成 AI の導入により、このプロセスが大幅に短縮され、自律的な学習を促進する環境が整うことになる。加えて、学習者は自身のペースで学び、アウトプットの質的な内容の充実に時間を費やすことが可能になりつつあると言えるだろう。

ただし、生成 AI には限界も存在する。生成 AI が提示するフィードバックは必ずしも正確とは限らず、誤った修正提案が含まれることもあるため、使用する際には批判的な視点で内容を確認する必要がある。また、微妙なニュアンスや文化的背景を理解する力は依然として人間の教師に頼る部分が多い。したがって、現段階では生成 AI はライティング支援の補助的なツールとして活用し、最終的な判断は人間が行うべきである。一方で、生成 AI を教育現場で活用するにあたり、倫理面の配慮は非常に重要である。特に、教育活動の中で生徒に使用させる際には、生徒のデータプライバシーや、生成されたコンテンツが偏見を含む可能性を考慮しなければならない (Bender et al., 2021)。このようなリスクを軽減するためには、教師が適切なインストラクションを与えることで、生成 AI の効果を最大限に引き出すことが可能である。

また、生成 AI は使用が目的というよりは、目的に応じて使用するものであり、これまで人間が主導で行ってきた営みの効率化という視点を持つことが重要である。すべてを丸投げできる世の中はまだまだ遠く、教師自身が持つ独自の指導の観点や経験値が今後も必要である点だけは強調して本稿を閉じる。

### 謝辞

本稿に対し、丁寧な査読と貴重なコメントをいただいた査読者の皆様に心より感謝申し上げます。皆様のご助言により、本稿の内容がより明確かつ充実したものとなりました。いただいたご指摘とご意見に深く感謝いたします。

### 引用文献

- Bender, E. M., Gebru, T., McMillan-Major, A., & Shmitchell, S. (2021). On the Dangers of Stochastic Parrots: Can Language Models Be Too Big In *Proceedings of the 2021 ACM Conference on Fairness, Accountability, and Transparency* (pp. 610-623). ACM. <https://doi.org/10.1145/3442188.3445922>
- Brown, T. B., Mann, B., Ryder, N., Subbiah, M., Kaplan, J., Dhariwal, P., Neelakantan, A., Shyam, P., Sastry, G., Askell, A., Agarwal, S., Herbert-Voss, A., Krueger, G., Henighan, T., Child, R., Ramesh, A., Ziegler, D. M., Wu, J., ... Amodei, D. (2020). Language Models are Few-Shot Learners. In *Advances in Neural Information Processing Systems 33* (NeurIPS 2020) (pp. 1877-1901). Curran Associates Inc. <https://doi.org/10.5555/3495724.3495883>
- Reynolds, L., & McDonnell, K. (2021). Prompt Programming for Large Language Models: Beyond the Few-Shot Paradigm. In *Extended Abstracts of the 2021 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems* (Article 314, pp. 1-7). Association for Computing Machinery. <https://doi.org/10.1145/3411763.3451760>
- 水本篤 (2024). AI のある英語教育・研究. *KELES ジャーナル*, 9, 52-58. [https://doi.org/10.18989/keles.9.0\\_52](https://doi.org/10.18989/keles.9.0_52)

## 生成 AI を活用した英語ライティング教育支援ツールについて

- 柳瀬陽介 (2023a). 機械翻訳はバベルの塔を築くのか. *ことばと社会*, 24, 43-63.
- 柳瀬陽介 (2023b, May 30). 高校生用 ChatGPT/Bing 英作文自動添削・改訂プロンプト. *英語教育の哲学的探究* 3. <https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/05/chatgptbing.html>
- 谷野圭亮 (2024). 英語教員支援ツール. <https://ktanino.notion.site/8d02277c2284c99b94b3f3d714f876>

〔翻 訳〕

## 朝鮮漢文短編小説集（Ⅳ）

人の性と情篇（中）

梅 山 秀 幸

### 二十九、沈生 放っておかれた女の三つの怨み

沈生はソウルの両班である。弱冠の歳でありながら、はなはだ抜きん出た容貌をしていて、駘蕩たる風情をもった青年であった。

ある日、沈生は雲従街<sup>1)</sup>で王さまの行駕を見て帰ってくる道で、ある健壯な婢女が紫色の明袖のポジャギ（風呂敷）でもって一人の女子を覆って背中に負って行くのを見た。その後を一人の童女が緋緞の靴をもってついて行く。沈生が背負われた女子の大きさから推測するに、幼子ではないようである。

沈生はその後をつけた。あるいはすぐ後ろをつけ、あるいは袖で顔を隠して前に出たりして、ずっとその眼を風呂敷から離すことはなかった。小広通橋に到ったとき、にわかには旋風が前方から起こって、紫のポジャギを翻して、その半ばを露わにしたが、それはうら若い女子であった。桃色の臉に柳の眉、緑色のチョゴリに紅のチマ、脂粉はなはだ狼藉として、ひと目見て、絶代の佳人であることがわかった。女子の方でもまたポジャギの中からおぼろげに藍の衣を着て草の笠をかぶった美青年が左に行き、右に行って、秋波を送っているのがわかった。ポジャギを通してだったが、そのポジャギがすでに翻って、柳の眼と星の瞳、四つの目が相会って、かつ驚きかつ恥じらって、またポジャギをかぶって去って行こうとする。

沈生はどうしてそれを放っておけよう。そのまま追って行って、小公主洞に至り、その紅箭門<sup>2)</sup>の中に着くと、処女は一つの中門の中に姿を消した。

沈生は茫然として自失したかのように、あたりを長いあいだ彷徨していたが、隣家の老嫗を捕まえて、あれこれと尋ね出した。すると、それは戸曹に計士として勤めて今は引退した者の家である。娘が一人いて、歳は十六、七で、まだ結婚はしていないということである。その女子のいるところを尋ねると、老嫗は指差しながらいった。

「この狭い辻を廻って行けば、色塗りの塀があり、その中の離れのコルバン（小部屋）にその女子は住まっている」

沈生はこのことばが忘れられず、夕方になると、家の者に嘘をついて、「同窓の某が私と夜を過ごしたいといっている。今日の夕方に行くつもりだ」

といい、往来を行く人が絶えるのを待って、その家の塀を越えて忍び込んだ。そのとき、初旬の月が淡い黄色の光を放ち、庭の草木は美しく整えられている。部屋の中の燈火が窓紙から漏れ、沈生は軒の下で壁にもたれて息を殺して身を潜めた。

部屋の中には二人の梅香（小間使い）とともに、その処女がいて、処女は小さな声でハンゲルの小説を読んでいる。小鳥が囀るようなその声がなんとも愛らしい。三鼓になって、梅香たちはようやく眠りに就いた。処女も燈火を消して寝ようとするものの、なかなか寝付けぬ。輾転として何か思うところがあるようである。沈生にも眠りが訪れる道理がないが、声をかける勇氣も出ない。まんじりともせず、明け方の鐘が鳴って、やっこのことで塀を越えて帰って行った。

その後、これが沈生の日課となった。日が暮れると行き、罷漏となると帰って来る。それが二十日のあいだ続いたが、沈生はそれに倦むことはない。女子は宵方には小説を読んだり、針仕事をしたりして、夜が更けると

明かりを消し、床に就いて眠ることもあったが、なかなか眠れないことが多かった。六日、七日が経って、「身体の具合が悪い」といって、初めて宵方に床に就き、壁をしきりに手で叩いては、長く短く溜息をついて、その息遣いは窓の外にも漏れ聞こえたのだった。それが一夕ごとにはなはだしくなっていて、二十日目夕には部屋から出て、壁をめぐって、沈生の座っているところにやって来た。沈生は暗い影になったところから、突然、立ち上って、女子を抱きすくめた。女子はいささかも驚くことなく、低い声でいった。

「あなたは小広通橋でお逢いした方ですね。わたくしはあなたが来ていらっしゃることをすでに二十日前から存じていましたわ。そんなにきつく抱かないで、わたくしを放してください。今ひとたび声を出せば、あなたはもうここに来ることができません。放してくださいれば、後ろの扉を開けて、部屋にあなたを迎え入れましょう」

沈生は娘のことばを信じ、退いて待った。女はまた壁を廻って入ってしまった。部屋に入ると、小間使いに、

「お前はお母さんのところに行って、大きな朱錫の錠を渡してもらって来てください。部屋が真っ暗で怖くてしかたない」

といったので、小間使いは奥の部屋に行って、すぐに錠をもって戻って来た。女子は開けておくと約束した後ろの戸に、先が二股に分かれた鉄串をわかるように刺して置き、ふたたび手で錠を挿した。わざと鍵を挿す音ががちりとするようにした。そしてすぐ燈火を消して、深い眠りに落ちたかのように振る舞ったが、実は眠ってはいなかったのである。

沈生は騙されたと思って、憤った。その一方で考えてみると、ただ側にいるだけでも幸せなのである。依然として鍵で閉ざされた部屋の外で夜を過ごし、明け方になると帰って行った。翌日も行っては帰り、その翌日も行っては帰り、戸が閉ざされているからといって、決して倦むことはなかつ

た。雨が降れば、雨滴をはじくように油をほどこした上着を着込んで、悪天候をものともしなかった。そうしてまた十日が過ぎた。

夜半過ぎ、家中がみな熟睡して、女子もまた燈火を消してしばらく経ったが、にわかには起き上がって、小間使いを呼び、燈火を点けさせて、

「お前たちは今夜は奥の部屋に行って寝なさい」

と命じた。二人の小間使いが出て行くと、女は壁の上に掛かった鍵を取って、錠に挿し、後の戸を開けて、沈生に、

「どうぞお入りください」

といった。沈生はいきなりのもので面喰いながらも、我を忘れて中に入って行った。女子はふたたびその戸に鍵をかけて、沈生に、

「しばらくお座りください」

といい、奥の部屋に行って、父と母を連れて出て来た。父と母は沈生がいるのを見て驚いたが、女子はいった。

「驚かずにわたくしのお話を聞いてください。わたくしは十七歳の今までこの家の門の外に出ることもありませんでしたが、一月前、たまたま王さまの行駕を見物に出かけ、その帰り道で小広通橋に到ったとき、風がわたくしを覆っていたボジャギを翻して、草笠をかぶった郎君と顔を見交わすことになりました。その夕べから、郎君はこの家に来ない日はなく、この部屋の外にいて、今日ですでに三十日になります。いくら雨が降っても、いくら寒くても、やって来て、扉に鍵をかけて拒んでも、やって来られました。わたくしがつらつら考えるに、万一、噂が外に漏れて伝わり、近隣の人がこれを知れば、夕暮れに入って行って、明け方に出て、どうして郎君が独り壁の外の窓際に立っていただけなどと信じましょう。その実がないのに汚名が広がることになりましょう。わたくしはさしずめ犬に食われた雉になってしまいます。

そして、彼もまた士大夫の家の郎君です。年はまだ青春にあり、血気が

いまだ定まらず、ただ蜂や蝶が花を貪るのを知っているだけで、風露の憂うべきであるのを顧みず、幾日も無理を続けては病づくかも知れません。病づいて、もしものことがあれば、わたくしが殺したのではなくとも、わたくしが殺したと同然のことになります。たとえ人が知らなくとも、かならず隠れた報いを受けましょう。わたくしのこの身は一介の中人の家の娘に過ぎません。それに絶世の傾城の女人として、魚を沈め花を恥じらわせるような容色があるわけでもありません。郎君は鷹を見て鷹と勘違いして、わたくしに真心を尽して、このように日参していらっしゃるのです。これでもし郎君に従わなければ、きっと天が罰して、わたくしはけっして福に恵まれますまい。

意を決して、お父さまとお母さまにお願いします。

どうか心配なさないでください。ああ、わたくしには年老いた両親がいて、兄弟がなく、婿養子を迎えて、生きていらっしゃるときは孝養を尽し、亡くなれば祭祀に努めること、これがわたくしの願いです。このようなことになったのも、これもまた天のなせるわざであり、どうかお受け入れください」

その父母は黙然として、何もいうことができなかつた。沈生にもいうべきことばがない。

こうして、二人はともに寝ることになった。これまで待ち望んだことであり、どんな喜びがあったかはかり知れない。その日の晩、部屋に入ってからというもの、それからは日が暮れるとやって来て、明け方に帰らない日がなかつた。

女の家は本来豊かであつた。そこで、沈生のために華美な衣服をそろえてくれたが、沈生は実家で妙に思われるのを恐れて、あえてこれを着ることがなかつた。

しかし、沈生がいくら注意をしても、家では外に泊まって長く帰って来な

いのだと疑わないわけにはいかなかった。すると、寺に籠もって書物を読めという父親の命令が下った。沈生は内心ははなはだ不満であったが、家の圧力を受けて、また友人たちに連れられ、書物を抱えて北漢山城に登って行った。

禅房に留まり、ほぼ一月が経ったころ、沈生にあの女子のハンゲルの手紙をもってきてくれた人がいた。手紙を読むと、まさに遺書として綿々と離別を告げる内容ではないか。女子はすでに死んでいたのである。

その手紙の内容は次のようなものであった。

「春になってもまだ肌寒く、山寺でのお勉強はお身体におさわりではないでしょうか。いつもあなたのことを思慕して、忘れる日はありません。

わたくしは、あなたが出て行かれてから、たまたま病気にかかり、その病が骨髓に染み入って、薬餌も効き目がなく、今はもう死ぬほかは残されていないようです。わたくしのように薄命の身では、生きていて何ができたでしょう。ただ今は、まず三つの大きな恨みがあって、死んでも瞑目することができません。

わたくしは本来、男子のいない家の女子として、父母が愛憐して下さったのは、婿養子を迎えて晩年の抛りどころとし、後日のことを謀られたからでした。しかし、思いがけず、好事魔多しとはこのこと、悪縁に縛られてしまい、女蘿（ひかげのかずら）が松の木にまつわりつく、朱陳の計<sup>3)</sup>も今や望みを絶たれました。これはわたくしが快々として樂しまず、ついには病気になって死に到ることになったため、いまやわたくしの両親は永遠に老いの日々をわたくしに頼ることができなくなりました。これが第一の恨みです。

女子が結婚すれば、たとえ婢女であっても、店の門にもたれかかって客を迎える妓生の身ではなく、夫がいてまた舅と姑がいることになります。世

の中に舅と姑のない嫁などいましょうか。わたくしのような身の上は人の憐れみを買うべきもので、この数か月来、いまだかつてあなたの家の老婢の一人にも会わせていただけません。生きていても日陰の立場であれば、死んでも帰るところがない鬼神となるしかありません。これが第二の怨みです。

女子が夫に仕えるのに、食事を用意して給仕し、衣服を調べてお着せすることより大事なことはありません。ところが、わたくしがあなたと相会って、歳月はすでに久しく経って、こちらで調えた衣服も少なくはないのに、あなたはそれをお召しになることがなく、また一度としてこちらで食事をなさることもなく、ただわたくしとは枕を交わすだけのことでした。これが第三の怨みです。

そして、あなたと結ばれてまだいくばくも経たないのに、こうしてお別れすることになり、病に臥せって対面もかなわず、死んでいこうとしています。この女子の悲しみは君子のお耳には入れるべきことではないのでしょうか。思いがここに至ると、腸が断たれ骨が碎けるようです。草が風に吹き倒され、散った花卉が泥にまみれた、この悠々たる怨みはいつの日に晴れるのでしょうか。

ああ、窓越しの密会はこのような結末になりました。今をお願いします。あなたは、この賤しい妾のことなどに思い煩うことなく、ますます勉学に励んで早く青雲の志を遂げられんことを。

お身体を千万に珍重なさってください」

沈生はこの手紙を見て、声を出して泣き、気を失った。その後も泣き続け、どうすることもできなかった。しばらくして、筆を投げ捨てて武科の科挙を受け、金吾郎の官職に到ったが、彼もまた早死にしたのだった。

梅花外史<sup>4)</sup>がいう。わたくしが十二歳のとき、田舎の書堂で本を読んで、

毎日、同窓の子どもたちと先生の話聞いては楽しんでた。ある日、先生が沈生の話をして、『これはわたしの少年のときの同窓生であった。山寺で読書をしてたとき手紙を読んで急に大哭したので、その理由を聞いたのだが、今になっても忘れることができないのだ』とおっしゃって、また『わたしはお前たちにこの風流少年の真似をしてはならないと戒めたいのだ。人が事に当たって、いやしくもその志を遂げようとするなら、閨中の女子に対しても真摯でなくてはならない。ましてや勉強に対して、科挙に対してはいうまでもあるまい』とおっしゃった。わたくしたちはそのときこの話を聞いて、小説のように思ったが、後に多くの情史を読むようになって、だいたいこの類のものだと知った。そこで、ここに追記して情史の補遺とする。

(『潭庭叢書』<sup>5)</sup>)

- 1) 雲従街：現在の鐘路。当時も今もソウルの中心街である。
- 2) 紅箭門：陵，園，廟，宮廷，官衙などの正面の入り口に建ててある朱塗りの門。
- 3) 朱陳の計：中国，江蘇省豊県に朱陳という村があり，朱氏と陳氏が一村を成し，両氏が通婚してきたということから，ここでは婚姻のことをいう。
- 4) 梅花外史：この話の作者である李鉦をいう。李鉦は朝鮮後期の文人。生没年1760～1812。字は其相，号は文無子・梅史・梅庵・花石子・梅花外史など。本貫は延安とも，全州ともいい，少年期のこともよくわかっていない。三十歳前後には成均館の儒生となったが，小説の文体になじんで弊害が見られたので，正祖は文体を替えて科挙を受けるように命じた。しかし，科挙においてもその文体が改まらなかったので，従軍するように命じられた。その後，1796年に，別試に首席で合格したが，このときもふたたび文体が問題とされ，末席に落とされた。正祖の「文体反正」の犠牲となって，しばらく官途に就いたが，後には京畿道南陽に下って田園での落魄の生活を送りながら，著作

活動に励んだ。

- 5) 『潭庭叢書』：李鈺の文集は上の「文体反正」の影響からか伝わっていないが、その遺稿の相当部分が潭庭・金鑑が編集した『潭庭叢書』に収められている。

### 三十、約束を守らず女子を死なせてしまう（離情）

ソウルに一人の儒生がいた。弱冠の年で進士試に合格し、それを父親に知らせようと、叔父とともに父親の任地である南方の邑に行く道でのこと、日が暮れて、ある田舎家に行き着いた。竹の戸に柴の垣根、青々とした竹藪に常緑の松の木が左右に茂って、その幽邃な風情がまことにすばらしい。主人の老翁が舎廊でこれを迎えて、すぐに夕飯を供した。山菜や野の果物が清潔で、はなはだ美味である。

その日の晩は、この家の舎廊に泊まることにしたが、叔父は旅の長い行程に疲れ、床に着くとすぐに熟睡した。進士は興味をもよおし、月の光に照らされた庭を徘徊した。年若い好奇心に動かされるままに、家の後ろ庭に入っていくと、女子の詩を吟じる声が竹林を通してかすかに聞こえて来る。その声のする方向に歩を進めると、池に面して数間ほどの茅葺の建物があった。そこに一人の閨秀がいて、この家の主人の娘であった。その泳ぐ魚を沈め、飛ぶ雁を落とす、花のような顔と名月のような容色はまさに国の絶色といってよい。

進士は高ぶる感情を抑えることができず、戸を開けて入っていくと、娘はおもむろに尋ねた。

「客人はいったいどなたですか」

進士がつぶさに来由を告げ、また、

「ここまで来たからには、一晚、ここに泊めてはいただけまいか」というと、娘は進士の立派な容貌をみて、しばらく考えた後にいった。

「わたくしは農家の娘に過ぎず、いずれまた農家に嫁ぐ身なのです。女

子の身として、この地で生まれ、この地で育ち、この地で嫁となり、この地で死ぬ運命なのです。ソウルの繁華を見ることもなく、宮廷の華美を見ることもなく、草木と同じくここで朽ち果てるしかない身の上。しかし、今夜あなたと縁を結んで、あなたがわたくしを棄てなければ、その運命から逃れる宿願を遂げることができることになります。あなたはそれを叶えていただけるのでしょうか」

進士はそれに答えて、

「わたしは父上にあなたの話をして、日時を決めて連れて行こう。もしこの口約束を違えたら、死んでも恥を免れまい」

といったので、娘は喜んで身を任せた。

翌朝、鶏が鳴いた。娘はまず起きて、かいがいしく進士の衣服をそろえて着せ、彼に出て行くように勧め、かたく約束を交わして、送別の詩を贈った。

分かれ道に立ってあなたを送るが行く道を忘れてしまえばいい。

離別の涙をながす泣き声も降りしきる雨に消される陰鬱な城市。

川の水は渡し場を横切って休むことなく流れて行くが、

その浅さ深さはどうして互いの離別の情に似ているのだろう。

(臨岐相送却忘行 別涙無声雨暗城 水絶渡頭流不盡 浅深何似此離情)

進士はこの詩を袖にしまい、舎廊の方に出て行った。叔父はそのときまで熟睡していて、進士にこのことがあったのを知らなかった。

進士は父母に会って合格を告げて、そのまま書齋に留まり、女子と約束した日時が迫っていたものの、父親の厳しい性格を知っていたので、ためらいながら、荏苒と期限を過ぎてしまった。翌年の春、父親は進士に学業に励ませるためにソウルに帰らせた。進士はふたたび叔父とともに、行装をととのえて出て行ったが、その家に到ると、家の主人が進士を見るや

慟哭を始めた。叔父が驚いてそのわけを尋ねると、主人は初めて事の顛末を話し始め、娘が死んだことを告げた。叔父は怒って、進士を問い糺した。

「お前が父親にいうのが難しければ、どうしてすぐにわたしに周旋するように頼めなかったのだ。このような怨恨を買って、どうしてお前の前途に大きな害がなくてすむものか。しかし、もう過ぎたことだ。お前を責めても仕方あるまい」

進士はこの時以来、しだいに病づき、それが重くなって、飲食も摂らなくなり、ついには死んでしまった。

副墨子<sup>1)</sup>がいう。ああ、悲しいかな、才能と美貌に恵まれた女子として、どうして行露を恐れず、命を終えることができるのか。孔子はいう、「人はみな死ぬものであり、人は信がなければ立ち行かない」<sup>2)</sup>と。進士の行実はあってはならないもので、信義まで守らなかった。どうしてその報いを得ないでいられよう。この文章を読む者は、男女の会合はすべからく正道を通すべきであり、面倒がってはならないと肝に銘ずるべきである。

（『破睡録』<sup>3)</sup>）

- 1) 副墨子：『破睡録』の編著者の号だが、その姓名は未詳。
- 2) 人はみな死ぬものであり…：『論語』「顔淵篇」の「古より皆死あり、人、信なければ立たず（自古皆有死、人（民）無信不立）」による。
- 3) 『破睡録』：二卷二冊。原本は日本の東洋文庫が所蔵する筆写本。編著者は副墨子とみずから号するが、その姓名はわからない。

## 三十一、梅軒と百花堂

### （一）、梅軒

士族の韓生の夫人の李氏は寡婦となった母の下で育ったが、兄たちの読

書する声を聞いて、記憶して諳んじ、忘れることがなかった。そうしていつの間にか文書に長じ、出て来ることは、出て来ることは、すべて人びとを驚かせずにはいなかった。

結婚した後も、富貴にも栄華にも意を用いず、静かな部屋で従容として過ごし、紡績や針仕事には興味を示さなかった。

そのとき、中人の家の処女である趙召史<sup>1)</sup>は名前が玉簪<sup>オクチヤン</sup>で、号が玄圃<sup>ヒュンポ</sup>といった。李氏の名声を伝え聞いて、徒歩で訪ねて来た。互いにひと目見てまるで旧知のようで、その問答は事物の道理を貫き、経伝や歴史を議論して、世の中の男子はこの女子たちに閨房の世界をうかがうことができなかった。

李女子が趙召史に和した詩がある。

二羽の鷺はどうして飛び、また止まるのか、  
一片の雲が跡形もなく消えて、また現れる。  
(双鷺何心飛復坐 片雲無跡去還来)

これに対する趙召史の評は、

「夫人の詩想は清麗であるが、悠遠たる気象はなく、心に憂慮を抱えている」

というものであった。その後、間もなくして、李氏は流産して死んだ。

趙召史は霊前で慟哭して、祭文をつくって祀ったが、帰って来る道で詩を詠じた。

新しい蚕が繭から出る日、遅くに沐浴をすると、  
老いた燕が卵を落すとき、空しく宙を旋回する、  
(新蚕晚浴生縲日 旧燕空回墮卵時)

趙召史は、その後というもの、世の中に意を失い、花の咲く朝、月の出る夕べに、涙を流してはため息をついて、

「李梅軒の美しい容貌と智慧のあふれたことばは、もう見ることも、聞くこともできない。わたくしは生きていても悲しいだけだ」といって、穀物を絶って食わず、病づいて死んでしまった。

李氏は梅軒と号した。その手稿の数百篇はすべて珠玉であったが、夫の家では固く忌んで口にする事なく、李家でも深く蔵して伝えようとしなかったもので、世間からは湮滅してしまった。まことに惜しいことである。

1) 召史：両班ではなく中人身分以下の婦女子を呼称することば。

## （二）、百花堂

百花堂の主人の妻の姓氏はわからない。主人はもともと詩を吟ずるのを愛好し、父母には、

「わたくしは妻を娶るのに、その門閥の高下も、家の貧富も問いません。ただ才芸に富む女子を娶りたいと思います」

といていた。そのために、而立の年（三十歳）まで独り身であったが、遠方に貧しい家に育った一人の才女がいると聞き、百般に求婚して、めでたくこれと夫婦になった。

この夫人の清潔な文辞と美しい会話ははたして噂どおりであった。

主人は家の裏の閑寂な場所に堂を造り、さまざまな草花を植え、「百花堂」という扁額をかけた。

主人は不幸にも四十歳で死んだ。夫人は慟哭して、悲しみのあまり自決しようとしたが、その意を遂げられなかった。

夫人の詩がある。

三従の教えもその一が欠け、いまは舅姑にしたがひ、

ただ死に遅れたわが身が恨めしい。  
悲しみに閉ざされて百花堂にただ独り、  
鶯が鳴き、蚕が繭ごもる、残んの春。  
(三従无一可従親 此死遅遅恨此身  
惆悵百花堂独在 鶯啼蚕睡又残春)

(『左溪哀談』<sup>1)</sup>)

- 1) 『左溪哀談』：編著者も編著の年代も未詳。宣祖の時代以後の朝野の人物たちの事績を記し、女性たちの話を別に付し、閨室のはなしを興味深く記している。

### 三十二、友人の美しい妻を盗む

甲と乙は竹馬の友であった。結婚をすれば、たがいに夫人を見せ合うことを約束した。

甲がまず結婚して、乙にその妻を見せた。乙もしばらくして結婚したが、その妻は絶世の美女であった。乙が甲に対してその妻に挨拶をさせると、甲は一見して深くため息をつき、立ち上って、家も妻も棄て、行方知れずになった。

その後、十年あまりして、乙は科挙に及第して、湖南（全羅道）のある邑の長官として赴任した。その道で徳祐山<sup>1)</sup>のふもとを通りかかると、百騎あまりの武装した男たちを引き連れ、駿馬にまたがった美丈夫が金の轎子とともに忽然と現れた。乙とことばを交わして、大きな声を出して、

「お前は美人を十年あまり独り占めしたが、今はこのわたしにうやうやしく譲るのだ」

といった。そして、乙の一行の婢女に中に行かせ、ことばを乙の妻に伝えさせた。

「天下の絶色をもって天下の愚夫に従われて十年あまり、今は金の轎子に乗り移り、天下の美丈夫と連れ添ってはいかがでしょう」

甲はそうして轎子をもって来させ、みずから奥に入ってしまったのだった。乙は為すすべもなく、ただ甲の後について行って見ると、その妻は欣然と甲を迎え、笑いながら金の轎子に乗り込むではないか。甲は大喜びして、乙を振り返り、

「わたしにも幼な馴染の情があるから、君を殺すまい」

といった。乙はしばらく轎子について出たが、百騎は稲妻のように駆け、金の轎子は鴿のように飛び去って行った。乙は茫然と眺めながらたたずみ、涙が流れて襟を濡らして、任地に赴こうという気すら起きなかった。吏卒もまた意気阻喪して人としての顔色もなかった。

やや久しくして、婢女が奥から出て来ていった。

「夫人が『どうして任地に行かれないのですか』とおっしゃっていますよ」

乙は驚いて、奥に入って行って、

「夫人というのはいったい誰だ」

と聞くと、夫人は笑って、

「あなたはわたくしが盗賊の轎子に乗って行ったと思ったのですか」

といった。乙は目をこすってふたたび見つめ、

「お前は どうしてここにいるのだ。鬼神ではないのか」

というと、夫人はまた笑いながら、

「今は話している暇はありません。すぐに任地の大邑におもむき、宿所を定めることです」

といった。乙はそれでも、

「お前は確かに轎子に乗り込んだではないか。それがどうして今、ここにいるのだ。お前は遁甲の術でも使えるのか」

というと、夫人はいった。

「わたくしは妖術など学んだことはなく、どうして遁甲の術など使えましよう。盗賊の轎子に乗ったのはわたくしではなく、婢女だったのです。」

あの盗賊は十年前、わたくしを見るや深いため息をついて、その妻も家も棄てて姿を晦ましました。わたくしはそのときすでにあの男が盗賊となり、きつとこのようなことが起こることを予見したのです。そこで、お金を払ってわたくしによく似た婢女を買い、化粧をほどこし、衣装も着せて、わたくしと見まがうようにして待たせたのです。はたして今日、その婢女は盗賊の轎子に乗って行きましたが、真偽は最後まで隠し通し、一生、盗賊の寵愛をこうむるようにと念を押しました。今から後、わたくしたちには何の憂いもありません」

乙が大喜びして、

「どうしてそれをはやくいわなかったのだ。わたしは死のうとしたのだぞ」というと、夫人は、

「深慮遠謀は夫婦のあいだでも秘密にしておかねばなりません。予告して疎漏なことがあってはならないからです。それで、その婢女というのも隠して、あなたにも見られないようにしていたのです」

と答えた。

乙は夫人を奇特とも尊いとも考えて、情愛がますます募ったのだった。

(『書橋別集』<sup>2)</sup>)

- 1) 徳祐山：全羅北道茂朱郡にある山。
- 2) 『書橋別集』：五卷五冊。日本の東洋文庫所蔵の筆写本。編著者は英宗・正宗時代の老論系の学者であった安錫徹。錫徹はとくに出世せず、一介の寒士として書橋山に住まって著述するのを楽しんだ。彼の文集には前・後・続・別の四集があり、別集はまた漫録・識聞・芸学録の三部に別れている。

### 三十三、暗行御史、不実な府使を罰する

むかし、一人の武弁がいて、よく人相を観ることができた。

この武弁が新たに永興<sup>1)</sup> 府使に任じられて赴任することになり、鏡に自分の顔を写して観ると、任地で暗行御史<sup>2)</sup> の手にかかって死ぬ相が出ているのではないか。武弁は大いに驚き、憂慮した。

王さまにお暇を告げて宮廷を出て行き、樓院<sup>3)</sup> の客店で昼食をとっていると、喪人が客店の前を通り過ぎた。その相を観ると、遠からず、暗行御史になる人物であることがわかった。

武弁は客店の主人に、

「今、この店の前を通り過ぎた喪人は両班らしいが、どういう人物だろうか」

と尋ねると、主人は、

「この奥の邑の李参議の家の子弟です。参議が亡くなって初喪が終わりましたが、その家は貧しくて、お気の毒な状況です」

と答えた。武弁は李氏の家の内情を尋ねて、その大体を理解した後、胥吏を送って弔問させて自らも行くことを知らせ、祭庁に行つて霊前に伏して哭した。しばらくすると、喪人は武弁を亡き父の親友だつたと考えて、悲しみが今さらのようにこみ上げた。武弁も涙を流しながら喪人に、

「亡くなったあなたの父上とわたくしの交誼を思い出すと、悲しみは尽きることがありません。わたくしは長いあいだ辺境の地にあつて、消息がまったく途絶していましたが、父上がこのようなことになるとは考えもしませんでした。初喪が終わつた今になって初めて訃報を聞き、弔問をするなど恥ずかしい限りです」

といい終わると、嗚咽を始め、そしてまたいい繼いだ。

「お見受けしたところ、何かと不自由をなさっている様子。その上にこの葬事の費えで大変ではありませんか」

主人はそれに対して、

「ことばに言い尽くすこともできません」

と答えると、武弁は、

「わたくしはこのたび地方官の職を得ましたが、喪主がこの大事に当たられるのは見るに忍びない。昔の情誼を考えて、この葬事の費えはわたくしにもたせていただけませんか。ただ、当初は官衙の仕事が煩雑で、到任してすぐには荷を下ろして金品をお送りすることが困難です。喪主は大喪の前後を問わずに貸馬に乗って下って来られれば、わたくしが十分におもてなししましょう」

といて、官衙に自由に入出入りすることのできる入門帖を書いて渡して去った。

李喪人が客を見送って中に入ると、母親が、

「いったいどなたがやって来て、あんなにねんごろに弔ってくださったのですか」

と尋ねるので、李喪人は、

「新たに永興の役人になられた方です。お父さまとは親しかったようで、わが家の喪の費えを考えて、わたくしに永興まで来るようにおっしゃり、入門帖まで書いてくださいました」

と答えた。母親も喜んでいった。

「それでは、わが家はまるで生き仏にあったかのようだ。まことに幸いなことだ。行くがよい。行くがよい」

李氏は大喪を終えると、なんとか馬を借りて奴を雇い、高峻な鉄嶺<sup>4)</sup>の峠を越えて永興に至ったが、風雪を冒して、その顔面はすっかりやつれ果てていた。李氏は入門帖を見せて官衙の中に入っていったが、永興守令となった武弁は李氏の姿を見て、すっかり面代わりをしていたので、これはもう暗行御史にちがひあるまいと思った。そこで、薄情にもこれを追い出すに限ると考えた。武弁は李氏に挨拶をした後に尋ねた。

「あなたとわたくしは旧知の間がらでしょうか」

客が、

「守令は赴任される途中、わが家に立ち寄って、弔問してくださり、このように入門帖まで書いてくださり、わたくしに訪ねて来るようにとおっしゃったではありませんか。千辛万苦して険しい鉄嶺を越えてここにやって来たのに、知らないふりをなさる。このように無礼な応答がありましようか」

というと、武弁は、

「あなたの家を訪ねて弔問をしたというのは、わたくしのことではないし、あなたに入門帖を書いたというのも、わたくしではない。あなたには初対面なのに、わたくしを脅すようなことをあなたはいう。これはなんといいがかりだ」

と答えた。主人と客人の応酬は一去一來し、ようやく狼藉たるありさまになった。守令は下吏を呼んでこの両班を引きずり出すように命じ、また管内の人びとに、

「今晚、この両班を家に泊める者は棍棒で強く打ち、また罰としてソウルで賦役につかせる」

と布告した。

李氏が出て行くと、すでに官令が伝わっていて、誰も彼を泊めてくれようとはしない。気候ははなはだ寒く、すでに日もすっかり暮れた。東西に家を求めるものの、顔を見合わせると戸を閉ざして奥に引き込み、どうすることもできない。ただ死を待つだけである。

馬を村の片隅の精米小屋の前に立て、主人と奴はともにぶるぶると震えていた。

そのとき、素服を着た村の女が十六、七歳の娘と十歳あまりの息子とを連れて精米小屋の前を通り過ぎて行った。しばらくして、その素服の女が

ひとりで戻って来て、李氏にいった。

「いったいどこから来られて、このような苦境に遭われているのですか」

李氏がおおよその事情をはなすと、その女は、

「上道進賜はこのままではお死になさいます」

といった。「上道進賜」というのは、北海道の人がソウルの両班を呼ぶことばである。女は、

「わたくしはこの村に住む寡婦です。役所の命令に背いたところで、まさかわたくしを打ち殺すまではしますまい。わたくしがあなたを助けましょう」

といて、李氏を自分の家に連れて帰った。大きな瓢ひきごに温かい水を入れたものを出され、李氏がその上に顔を近づけてしばらくすると、湯気によって顔に貼りついていた氷が落ちた。李氏をオンドルの部屋に入れて、さっぱりした食事でもてなした。女の家は富裕であり、義気にも富んでいた。李氏は大いに感謝し、恩を肝に銘じた。この家にとどまること一兩日して、女主人がいった。

「上道進賜の帰路ははなはだ困難でしょう。人というのは、いくら他人であっても、久しく接していれば、どうして情が写らないでいられますよう。上道進賜が長いあいだこの家にいらっしゃって、このまま放っておくことができなくなってしまいました。できれば、わたくしの娘を妾にしてもらえますまいか。娘もなかなかの器量ではないでしょうか」

李氏は喜んでこのことばに従うことにした。そうして、新郎として待接されるようになり、衣食もふんだんに供された。

李氏は老母が家の門に寄りかかりながら、自分の帰りを待っているのが心配になり、ソウルに戻ることにした。女主人とその娘がともに、

「この厳しい冬のさなか、道は雪に塞がれています。鉄嶺を越えるなど、命さえ保つことができますまい。お母さまのことを考えると、なかなか堪

えがたいこととは思いますが、春になるのをお待ちになる方がいいでしょう」

というので、やむをえず、そのことばに従った。

一冬をこの地に留まっているあいだに、永興の守令が賄賂を貪り、不法の限りを尽くしていることが、耳目に入って止まなかった。冬が終わり、まさにソウルに戻ることにになると、女主人は馬を用意し、六百両の銀子と数十匹の細麻布を持たせた。

李氏はねんごろにその妾と後日の約束を交わし、ソウルに戻って行った。

李氏は父の葬事のための借財を返還して、その後、運勢が好転するようになって、その年の科挙に及第した。

翰林として王さまの経筵に侍るようになったが、たまたま閑暇なときがあつて、王さまが、

「なにか面白い話があれば、してくれないか」

とおっしゃったので、李氏は王さまに、

「私は自分の経験談を致したいのですが、宜しいでしょうか」

といい、永興での事の顛末をつぶさに申し上げた。

王さまは寢殿に入って行かれ、しばらくして出て来られると、三つの封書を李氏に手渡して、

「ここに三つの封書があり、表に一、二、三と書いてある。これを順に開けて見るがよい。まず一つ目は宮廷の門の外に出たら開けて見るのだ。二つ目はその場所に着的いたら開けて見るがよい。三つ目はその後になる」とおっしゃった。

李氏は宮廷の門を出ると、さっそく一つ目の封書を開けて見た。すると、永興の暗行御史となって収賄の官吏を捉えよとの命令である。李氏はさっそく旅立って、永興に到ると、破れてぼろぼろになった衣服と冠に着替えて、妾の家に行った。妾の母はそのみすぼらしい姿をひと目見て、まった

く喜ぶ様子がなく、

「いったい何のために遠くから帰って来たのか」

と、なじるようにいった。李氏は、

「あなたの娘が忘れられずに帰って来たのです」

といて、そのまま妾の部屋に向かうと、たがいに喜んでむつまじく、枕を交わしたのであった。夜が更けて、李氏は妾が眠っている隙に外に出て、妾の誠実さを探ってみた。妾は眠りから覚めて、李氏の肘を引いてふたたび抱かれようとするが、李氏はいない。起きて母を呼んで、かつ泣きかつなじって、

「昼間、お母さんが上道進賜の姿を見てうれしくない様子だったので、上道進賜は怒って出て行ってしまいました」

というと、母親は、

「わたしの応対がどうして上道進賜を怒らせたというのだ」

と答える。娘はさらに、

「千里の他郷をものともせず、わたくしに会うために来られたのです。なのに、お母さんは不機嫌な顔をなさった。どうして憤らずにいられましょう。四方を振り返っても、上道進賜には親戚も知己も見当たらず、頼るところがありません。飢えと寒さできつと亡くなってしまいます。わたくしはどうしたらいいのでしょうか」

といい続けて、号泣してやまなかつた。母親は再三再四なだめて、娘はやつとのことで泣き止んだ。

李氏はすぐに衣服を永興に下ってきたときのものに着替え、書吏と官奴を呼んで、客舎にどっかと座った。裁きの場には松明をともし、一方では庫を封鎖し、一方では三人の郷所と吏房、戸長などを捕まえて刑罰を与えた。管内は震え驚いた。

李氏の妾の母親は、娘を誘って御史の姿をひと目見ようと官衙に行つて、

その垣根から覗いたが、御史の姿は遠くから灯りの下にぼんやりと見えるだけであった。しばらくすると、母親は娘にいっしょに帰ろうといったが、娘は、

「お母さんは先に帰ってください。わたくしはもうしばらく見えています」といって、その場にとどまった。しかし、しばらくすると、娘は走って帰って来て、母親に告げた。

「お母さん、お母さん、あの御史は他でもない、わが家の上道進賜ですよ」  
母はうけがおうとせず、

「そんなわけがあるはずがない」

といったが、娘が、

「わたくしはちゃんと見たのです。お母さんももう一度行って見てください」

というので、母と娘はもう一度出て行き、垣根のあいだから覗くと、果たして娘の言うとおりの、あの上道進賜である。母と娘は転げ返るようにして帰って来て、その夜は余りの喜びに眠りに付けなかった。

御史はすぐに書啓を書いて、永興府使が公金を横領したこと、人民の財物を略奪したことなど、大貪大虐の数十条の事例を列挙し、駟馬でソウルの宮廷に送った。そして、第二の封書を開けて見ると、永興府使の任命状である。すぐに印章をもって来させて、到任状を官営で作成して送った。何日もせずに、金吾郎（義禁府都事）がソウルからやって来て、旧府使を逮捕して行った。

最後に三つ目の封書を開けて見ると、妾を第二夫人とせよという命令である。李氏はすぐに色鮮やかな轎をやって、役人たちに先駆けをさせ、後から守らせながら、女子を官衙の奥の部屋に迎え入れた。

村の常民の娘がついには官府の室内に昇ったのである。その栄耀は四隣に鳴り響いた。

武弁の不誠実は悪しき手本となるであろう。

(『東稗洛誦』<sup>5)</sup>)

- 1) 永興：咸鏡南道の南部に存在した地名。現在は金野と改称している。
- 2) 暗行御史：朝鮮時代，地方の行政および民情，役人の行実を探索するために潜行して回った朝廷が放った密偵。説話の中では正義を示して悪を懲らす水戸黄門のような役割を果たすことが多い。
- 3) 楼院：ソウルから議西府に行く道筋にある地名。
- 4) 鉄嶺：江原道と咸鏡道のあいだにある峠。
- 5) 『東稗洛誦』：日本の東洋文庫が所蔵する筆写本。編著者は未詳。

### 三十四、崔風憲の娘

崔氏の娘というのは横城の風憲<sup>1)</sup>の娘で、美しい上に聡明であった。風憲の家は裕福で、娘は深窓に養われ、掌中の珠のように愛されて育った。

隣の村に趙という生員がいた。困窮した老人であったが、文章をよくした。邑の中の学究として生計を立て、邑中の士族たちはその子弟を送り、趙生員のもとで学ぶ者がはなはだ多かった。

趙生員が死んで、遺された一人の息子は頼るところもなくなった。趙生員に学んだ人たちが亡くなった師匠への恩義を思い、自分たちの家で食事を与え、書堂にそのまま居住させて、ようやく年齢も二十歳を越えた。まだ独り身である。

青年たちが相談し合って、

「わたしたちが力を貸して、あの友人が結婚できるようにはかれば、拒むこともあるまい。某邑の崔風憲は財産持ちで、玉のような娘がいる。もしこれと結婚できれば、頼ることができるのではあるまいか。誰か計略を練ってうまく二人を結婚させられないだろうか」

という議論になった。一人が、

「これはまさに権道を用いるべきであろう。普通のことをしては、はかが行くまい」といった。その場にいた青年たちが、

「その権道というのはどういうものだ」

というと、その青年がいった。

「崔風憲というのはこの郷土の富者だ。いくら両班が貴いからといって、趙家の孤児を婿に迎えようとしようか。聞くところでは、風憲の娘は美しい上に淑徳をそなえているという。もしその閨秀の承諾さえ得られれば、事はたやすいはずだ。さて、趙チョンガーはこれを成し遂げられるか」

そして、趙チョンガーを振り返って、

「ここに君が死中に生を得る道がある。今晚、塀を越えて風憲の家に忍び込むのだ。風憲の娘とよく話しをして承諾を得れば、後はわたしたちが助けて婚姻を遂げさせよう。もしうまくいかなければ、死んでしまって、帰って来ようとは思わず、わたしたちとも二度と会おうとしないがよい」といった。

「死ぬか生きるか、ただ君たちのことばに従うこととしよう」

その夜の三更、かすかに月の明かりに照らされて、青年たちは趙チョンガーとともに風憲の家に向かった。風憲の家の塀の後ろの丘に登って、家の明かりが透けて見える小窓を指して、

「あれが処女のいる部屋だ。君は心肝を据えて、処女を説得するのだ。なにか証拠になるものを手に入れて帰ってくるがよい。わたしたちはここで待っていよう」

といい、青年たちは趙チョンガーを持ち上げて塀を越えさせた。

趙チョンガーはついに塀の中に入り込み、灯りの漏れる部屋の前に到った。扉の隙間から中をのぞくと、処女がまさにひとりで座っている。そこで、扉を開けて入ったが、あえて側には近づかず、部屋の隅に跪いている。

処女が低い声で、

「これは人か、鬼か」

と尋ねると、趙チョンガーは、

「わたしは書堂の趙生員の子の、老チョンガーです」

女子は色を正して責め、

「両班の家の子弟が深夜に塀を越えて処女の部屋に忍び込むとは、これはどういうことですか」

というと、趙チョンガーは当初は怖気づいていたが、次には恥ずかしくなり、そして我を取り戻して襟を正して答えた。

「わたしも両班の子として、この振る舞いが正しくないことをどうして知らないはずがありません。同学の者たちがわたしの困窮を憐れんで、死中に生を求める計略を思いついて、わたしに教えたのです。わたしもまた強迫しようとして忍び込んだのではなく、ただあなたの一言だけを聞いて、月下の佳縁を定めたいのです。どうかわたしを憐れに思ってください」

それに対して、処女はいった。

「婚約は女子の心のままになるものではありません。家には父上がいらっしやいます。道令は帰って書堂の青年たちに話をして、まずわたくしの父を呼んで真心を込めて申しこんでいただきたいと思います。わが家は賤しいのに、どうして両班との結婚を拒みなどいたしましょう。もし事が意のままに進まなければ、わたくしは死を選ぶのにやぶさかではありません」

趙チョンガーが、

「できれば、あなたが身に着けたものを一つください。それをもって他日の証拠にしたいのです」

というと、処女は銀の指輪を指から外して、趙チョンガーに与えた。

趙チョンガーはこれを得てはなほだ喜び、塀を越えて外に出ると、青年たちはまだそこで待っていた。趙チョンガーは女子から得た指輪を示し、

こと細かに女子との問答を話した。青年たちもまた大喜びであった。

翌日、若者たちはみな書堂に集まって、風憲を呼び出し、趙チョンガーを指差し、話を切り出した。

「彼の家が両班であることは、あなたもよく知っているはずだが、今は困窮していて、頼るところもない。そこで、あなたの家と婚姻を結びたいと考えている。その気持ちは同情に堪えないもので、わたくしたちは義気でもって、これを勧めるのだ。あなたもまた義気でもってこれを承諾してもらえないだろうか。この事が成就すれば、これはこの郷中の痛快事となろう」

風憲はしばらく沈思していたが、

「秀才たちの義気はまことに高々として、どうしてこのわたくしが一人の娘を惜しんで、秀才たちの義気をいたずらになどいたしまししょう」

といて、ついに婚姻が定まった。

その場で、吉日を選んだが、もうその日は遠くはなかった。青年たちはそれぞれ家に帰ると、父母にこの結婚のことを話し、緡銭を出してもらって、趙チョンガーの婚資としたが、すでに三、四十緡にもなった。青年たちは趙チョンガーにこれを渡して、

「君には近在に舅（母方オジ）さんがいて、わたしたちが最初から最後までこの結婚を主導する必要もあるまい。この銭があれば、貧しい人間の当座の結婚資金としてはなんとか間に合って、舅さんの家に迷惑をかけることもあるまい。これを持って舅さんの家に行くことにして、はやく必要なものをととのえてもらい、無事に婚礼を遂げるのだ。そのときにはわたしたちは酒を持って行って祝おうではないか」

というと、趙チョンガーは、

「君たちのことばどおりにしよう」

と答えた。

趙チョンガーが金をもって舅の家に行くと、この話をすると、舅はいっ

た。

「お前のような困窮した天下の両班が富者の家の処女と結婚する。これは万々に幸いなことだ。どうしてその家の門閥の高下を問うことがあろう。わたしがお前のために、婚姻に間に合うよう、必要なものは整えようではないか。お前はなにの心配もなく従兄弟たちとともにこの家にいればいい」

ところが婚礼の日を明日に控えて、舅はにわかには縄で趙チョンガーの手足を縛り、綿で口を塞いで、土室に放り込んで、大きく頑丈な鍵をかけてしまった。そして、夜になると、慣例のままに幣帛を送り、翌日には自分の息子に新郎の礼服を着せ、ともに風憲の家に行ったのである。

奠雁を終えて、交拜する席でも、風憲はなんら疑いを抱かなかつたが、新婦はひと目見て、新郎が趙チョンガーではないことがわかった。新婦は倒れて気絶してしまった。家中が大騒ぎして、新婦を新しい部屋に担いで行き、これに水を飲ませようとしても、水は咽喉を通らない。新郎はその家の別の部屋に案内されて待たされることになった。

新婦は部屋に他の人がいない隙に新郎の衣服に着替え、後の門から出て塀を越えて走り、書堂の中に入って行った。書堂にいた青年たちに挨拶をした後、

「趙秀才はどこにいらっしゃいますか」

と尋ねると、青年たちは、

「趙秀才は今日が婚礼の日で、ここから数馬場を過ぎて行けば、庭に幕を張って人が大勢集まっている、それが趙秀才の妻となる人の家です」

と答えた。新婦が、

「趙秀才には家がなく、この書堂に住まっているとうかがいました。今日はここから趙秀才を送ったのですか」

と尋ねると、青年たちは、

「いいえ、違います。十里ほど向こうにある某村の某の家が趙チョンガー

の舅の家です。今日はそこから行くことになっていました」

新婦は挨拶をして出て行き、その舅の家に向かったが、その家の人は出払って、誰もいなかった。その家の垣根の下を歩いていると、一人の老婆の姿が見えた。蝸牛の殻のような小さな家にぼつねんと座っている。その家に入って行って、

「旅の者ですが、腹を空かせています。一碗の飯を所望できますまいか」というと、老婆は、

「今はご飯はないが、米が数合残っている。それで粥でも炊くので、すこし待てばよい」という。

「それは本当にありがたい」

という、老婆は台所に行って粥を炊いている。そのとき、歎歎する声が聞こえる。

「お婆さん、どうして泣いているの」

と尋ねると、

「聞かないでください。客人が知らずともいいことです」

というので、しいて尋ねると、

「この年寄り婆はこの家の主人の両班のお姉さまの轎前婢としてお姉さまの嫁ぎ先にもに行きました。お姉さまが亡くなって、私はこの家に戻りましたが、お姉さまには一人の子息がいて、風憲の家の娘御との結婚が決まったそうです。ところが、この家の主人というのはとんでもなく性格が凶暴で、その子息を縛って閉じ込め、自分の息子を風憲の娘御と結婚させようとしたのです。今日はもう日が暮れて、婚礼はすでに終わってしまったでしょう。土室の子息はもう死んでしまうでしょう」

といい、語りながら、泣きだして、声にもならない。

女は土室のあるところを尋ねると、その家に駆けだして行った。だれもこれを止める者はいず、土室に到って、手で鎖を引きちぎり、背中に趙チヨ

ンガーを負って出た。その縛っていた縄をほどいて見ると、咽喉からかすかに温かい息が漏れる。粥を咽喉にそっと注ぎ入れると、やや久しくしてそれを嚥下した。

新婦は趙チョンガーを背負って走り、ふたたび書堂に着いたので、青年たちは大いに驚いた。新婦は青年たちにいった。

「皆さんはこの方をよく看護して、最後まで恩恵を垂れてください。わたくしは風憲の娘です。この方が快復したら、その話を聞いてください」  
いい終わるやいなや、自分の家に帰って行った。

家では新婦がいなくなって、四方を探していたが、男の衣服を着て帰って来た娘を見て、皆は大いに驚き、いったいどうしたのかと尋ねた。新婦が前後のことを一とお話しすと、近隣の下人たちまで動員して、新郎父子を捕まえて縛り上げ、一方では官衙に告発し、結納の品を庭に積み上げて火をつけ、「これはみな汚らわしい品物で、用いるわけには行かない」といい、もう一方では、書堂に人を遣って趙チョンガーの安否を尋ねさせると、つつがなく回復していた。

そこで、ふたたび醮礼場<sup>2)</sup>を設け、水を汲み交わして簡単な婚礼を行った。官衙ではこの件を調べ上げて、その舅は死刑になったのだった。

外史氏がいう、書堂の学童たちは郷曲の若者として義気を發揮して困窮した仲間を結婚させたが、これもまた奇事なことであり、その女子の振る舞いはまことに立派で、昔の節婦の風があって実にすばらしい。趙氏の舅は財物を貪り、甥を害して、おのが息子を結婚させようとして、死刑を免れなかった。当然のことである。大体、月老赤繩<sup>3)</sup>は天が定めるもの。天理に背いてはならないものである事は、この話のとおりである。

(『青野談叢』<sup>4)</sup>)

## 朝鮮漢文短編小説集（Ⅳ）

- 1) 風憲：郷村の行政組織の末端の役職の一つ。現在の韓国で面長というのに当たる。この話から兩班階級ではなかったことがわかる。
- 2) 醮礼場：婚姻の礼式を行う場所。
- 3) 月老赤繩：男女間の縁を取り持つ月下老人は赤い繩でその男女を結びつけるということから、男女の縁をいう。
- 4) 『青野談叢』：六卷六冊の編著者未詳の筆写本。ソウル大学所蔵。

### 三十五、龍山の車夫

龍山のある車夫がソウルの城中に荷物を運んで、日が暮れて家に帰って来る道でのことである。車夫が水閣橋のほとりの人家の後ろで小便をしていると、頭上から声がする。見上げると、一人の美人が樓の窓辺に立っている。半身を隠して、車夫に、

「しばらくしたら、後門から入って来てください」

と語りかける。

車夫は怪訝であったが、いわれるままに、中に入って行った。女は二十歳になるかならないかで、すこぶる姿色をそなえている。それが車夫を喜んで迎え入れ、しばらくここに留まるようにと頼むのである。旦那はいるのだが、別監<sup>1)</sup>として今夜は宿直のために留守なのだという。

車夫は、

「牛を別のところに預けて、またやって来よう」

というと、女は、

「約束を破っちゃ、いやですよ」

と、二度、三度と念を押した。

車夫が牛を城中の得意先に預けて、ふたたび後門からやって来ると、女は門にたたずんで待ちわびていた。

夕食には御馳走が用意され、それが済むと、同衾することになった。破

れ笠に継ぎはぎだらけの衣服を脱ぎ捨て、緋緞の布団にふたりは入って、淫蕩の限りを尽くす。その様は形容のしようもない。

三更も過ぎたころ、門の外で大きな声がする。女は驚いて目を覚まし、  
「あの人が帰って来たのだわ」

といて、急いで車夫を屋根裏に隠して閉ざし、出て行って門を開け、旦那を迎え入れた。

車夫が屋根裏から覗いて見ると、男の容貌は秀麗で、衣服も立派である。女が、

「当直の人がどうして帰って来たのです」

と尋ねると、男は、

「急に夢を見て、この家が火事になって、すべてが灰燼に帰ってしまったのだ。夢から覚めたものの、気が気ではなく、宮廷の塀を越えて帰って来たのだ」

と答えた。女は驚いたふりをしたが、大いに責め立てて、

「たとえ夢見が悪かったとしても、宿直というのは重い任務ではありませんか。みだりに帰って来ていいものですか。早く宿直に戻ってください」といって、男は、

「すでに帰って来てしまったのだ。このまま宿直に戻るの寂しい。ちょっと楽しもうじゃないか」

といて、戯れかかる。女は百端に拒んで、ついにこれを迎えることはなかった。男はかつ怒り、かつ笑って、また宿直の場に誰もいないのが心配になって、宮廷に戻って行った。

女はその後について行って、これを見送り、堅く門を閉ざした後、ふたたび屋根裏の車夫を迎えて、淫乱を尽すこと、前よりいっそう甚だしく、しまいには疲れ果てて寝入ってしまった。

車夫の方は眠ることができず、燈火の下で輾転としていたが、にわかに

心に悟るところがあった。

「あの男は私より百倍も立派ではないか。私はただ行きずりの人間に過ぎず、端無くも招き入れて淫蕩の限りを尽くしたのは、ただの性欲を満たすために過ぎない。にわかになんか男が帰って来て、身体を許さなかったのが、ただ私が屋根裏にいたからに過ぎない。おおよそその父母が夫婦として添わせただけなのに、このような醜行に陥っている。人には誰にも血気というものがあるとしても、このようなことを目で見て、そのままにしておいていいものであろうか」

車夫は刀を振るって、女を殺し、鶏が鳴くのを待って逃げ去った。

翌日、人が家に入って見ると、流血が淋漓として部屋を満たし、死体には刀痕が狼藉たるありさまである。女の実家が訴訟を起こしたが、犯人を捜査する端緒がつかめない。ただ門脇に住む者が、

「その日の夜中、男主人が宿直から急に帰って来て、ひそかに部屋に入って、いつの間にかまた戻って行った。このほかには何も知らない」と陳述した。

別監は尋問を受けて、性格が虚弱で年少であったため、拷問に堪えられず、妖邪な妾に惑わされて、自分が刺し殺してしまったと虚偽の自白に及んだのである。そこで、死刑の判決が降りた。

大概、罪人が刑場におもむくとき、龍山の車夫が車に乗せて行くのが慣例であった。その日の夜も、その車夫が命令を受けて待機していたが、罪人はなかなか出て来なかった。

典獄街の前に立っていて、刑曹の吏属に、

「今日、私が乗せる死刑囚は何を仕出かしたのでしょう」

と尋ねていると、死刑囚がようやく獄門を出て来て車に乗ったが、車夫が子細に見ると、あの晩、屋根裏に潜んで、燈火に照らされるのを見た男ではないか。大いに驚き、心の中で、「自分の命を惜しんで、無罪の人が

処刑されるのをどうして見ていられよう」と考えて、ついに自首して出て、「この人は殺していない」といい、つぶさにその事情を告げたのである。

獄官は、

「一人の淫乱な女を殺し、一人の無辜の男子を生かした。これは義人というべきである」

と判決を下し、賤民の身分を免じて褒美を与えた。

この龍山の車夫は姓を柳といい、もともとは私賤であったためである。

別監は生きることができ、車夫に慇懃に待接した。別監の家はもともと豊かであったので、財産を折半して車夫に与えた。

車夫はその生業を棄て、その財産を活かして幸せに過ごし、子孫にも恵まれたのだった。

(『記聞拾遺』<sup>2)</sup>)

- 1) 別監：掖庭署の隷属の一つ。大殿別監，中宮殿別監，世子宮別監，処所別監の区別がある。
- 2) 『記聞拾遺』：一冊。原本は日本の東京大学図書館所蔵の筆写本。編著者は未詳。

### 三十六、姦夫姦婦を許して陰徳を積む

ある富家の子弟が道を踏み外してしまい、家産を大いに傾けたものの、別監となって、なお衣服は華麗であった。

ある日、<sup>チヨドン</sup>亭洞<sup>1)</sup>に行こうとして、その道で一位の大将の行列に行き遭ったが、強く辟邪(先払い)するので、あえてそれを冒して行くことができず、路のわきに身を避けて立ち尽くしていた。すると、向こう側の小角門が半ば開いていて、一人の美人が大将の行列を見ようとするのか、門の戸によりかかっている。不意に別監と目と目が合っ、女子は慌てて家の中に引っ

込んだが、またすぐに顔を出した。やはり何ともなまめかしい。女子は門を閉じて、中に入ってしまった。別監はなおも女子の姿を見ようとその門を見つめるが、ふたたび開くことがなかった。別監はまるで雷に打たれたようで、情欲を抑えることができない。

その家の東に小さな家があり、老婆が豆粥を売って生業としている。別監はその日は茫然としたまま帰ったが、翌日の未明にはまた亭洞に足に向け、ただ徘徊して無聊のまま、ふと一計が思い浮かんで、粥屋に入って行った。老婆はその紅衣と草笠の姿を見て、別監だとわかり、

「別監の旦那さまがどうしてこんな賤しい家に入って来なされたので」というと、別監は、

「私は看視しなければならぬ所があり、それで朝霜を冒してやって来たのだが、それにしても寒いのは堪えられない。一碗の粥をすすりたいと思ったのだ」

と答えた。そこで、老婆が急いで清潔な器を取り出して粥をよそってさし出すと、別監は錦の袋を取り出し、中から銅銭を一掴みして老婆に与えた。老婆は大いに驚き、

「一、二分で十分ですよ。どうしてこんなに下さるのか」というと、別監は、

「さっきまで寒さに震えていたことを思えば、一掴みの銅銭では少なすぎるくらいだ。どうか受け取ってくれ」

といった。老婆はその厚意に感じ入りながら、別監を見送った。

翌日もまた、別監はこの近辺に事件があったという口実で、粥屋に入って行った。老婆は欣然としてこれを迎え、一碗の粥を供して勧めたが、その情誼ははなはだ懇懃であった。

別監が袖から一錠の銀を取り出して、老婆に与え、

「婆さんはこれからこのように苦しい生活から脱して、安穩に余生を過

ごしたいとは思わないか」

といった。老婆もこのような大金を見て、どうして欲心を動かさないでいられよう。昔からのことわざに、「黄金は心を黒くし、白酒は顔を紅くする」というのではないか。左手ではことわり、右手では承諾して、

「この老女は身体は老い衰え、家は貧しくて、子女を結婚させることもできません。旦那さまの徳義は山よりも高く、海よりも深いものです。いったい何をもって報いればよいのでしょうか」

といった。

別監はこの老婆がどんなに難しいことでも回避しないと見て、口を開いて従容としていった。

「あの家はどういう人の住まいなのだろうか」

老婆が答えて、

「中人の金某の家です。家がはなはだ貧しくて生きていくことができず、富家に身を寄せていますが、なかなか大変なようです」

というと、別監は老婆の手を握り、

「私が生きるか死ぬかはただただ婆さんにかかっている。婆さんがもし聞いてくれなければ、私はもう死ぬしかない」

というと、老婆は、

「わたくしはあなたの大恩を受けています。沸騰するお湯の中でも燃え盛る火の中でも、どうして飛び込むのを辞しましょう。何なりとおっしゃってください」

と答えた。

そこで、別監は初めからのことを話し、なんとかことがうまく行くように頼んだところ、老婆はいった。

「あの女子は性格が貞淑で、平生、よその人たちとの交際がなく、わたくしについては往来で顔見知りではあっても、押し黙ったまま、たがいに

ことばを交わすわけでもありません。いま急にこちらからいきなり声をかけたなら、事が成らないだけでなく、わたくしとの間もぎこちなくなってしまうでしょう。ここは一計を案じるしかありません。かくかくしかじかして、別監の思いがかなうようにしたいと思いますが、いかがでしょう」

別監は大喜びして、膝を叩き、老婆と約束を交わして立ち去った。

その夕べ、老婆は味の良い濁酒に清酒を加えてお燗をして、女子の家を訪ねた。女子が挨拶をして、

「お婆さん、どうして久しく顔を見せなかったの」

というと、老婆は、

「すっかり年を取ってしまって、体の具合がよくなく、来れなかったのですよ。申し訳ありませんね。今日はおいしいお酒が手に入りましたので、差し上げようと思って、やって来たのです。どうか召し上がってくださいな」といって、器を置いた。

女子は夕食を食べていなかったし、気候は寒く、あまりにも空腹だった。もともと酒はたしなまず、強いられても、飲もうとはしなかったが、老婆が再三懇勸に勧めたので、女子はやむを得ず口をつけた。一杯を呑むと空の胃の腑に沁みわたり、酩酊して大酔してしまった。

別監はすぐに戸を開けて入って来て、灯りを点して見ると、まさに国中の一色といってよい美女である。衣服を脱いで同衾して、雲雨の楽しみを極めようとするとき、女子は目を覚まして大声で、

「いったい誰がこのような非礼なことをするのか」

と叫んだ。別監は、

「あなたは先日、目と目が合った人間を記憶していませんか。事はここに到りましたが、これもまた天の定めた縁ではありますまいか。大声を出して、隣の人を驚かせますまい」

といった。女子が泣きながら、

「あなたはただ花を摘みたいという欲望だけで、摘まれる身のわたくしの羞恥を顧みない。かつ恥じ、かつ怨むばかりです」

といて、顔を隠して、ことばもない。

別監はいよいよ女子が可愛くなって、大切にして、頻繁に通うようになった。

夫の金氏はこのようなことが起きているのにまったく気づいていない。富者の家に入り浸っているだけである。たまたまその家で祭祀があって、明け方の罷祭(祭祀の終わり)に、一盤のご馳走に預かることができた。主人が金氏に箸をつけるよう勧めるのだが、金氏はこのご馳走を食べることができない。主人はその理由がわかっていて、

「また別の一盤の食事を分けて用意してあるので、それを君の家にもっていかせよう。これはすべて食べてしまえばいい」

といった。金氏が喜んで盤の上の食事を食べてしまった後、主人はまた一盤に盛大にご馳走を載せ、奴子に持って行かせようとする、金氏は自分が持って行くといつて、急に立ち上がって家に帰って行った。

その夜も別監が来ていて、その妻と夜を徹して戯れ、やっと眠りに就いたところであった。金氏が門外で大きな声で呼んでも、目を覚まして起きて来ようとしな。そこで、金氏は塀を越えて入って見ると、部屋の中には灯りが点って煌々と明るい。窓を開けて中をうかがうと、その妻が男と枕をともしして眠っていて、まだ気づかない。壁の上には紅衣と草笠が掛けてあり、それは姦夫のものと知れた。

金氏はため息をついて、

「私の家は貧しく家を治めることもできない。あの女は水のような性格で流されやすく、飢えや寒さに堪えられず、男の誘いを聴き入れて、このようなことになったのであろう。いま、大声を張り上げて騒ぎ立てたところで、隣近所の笑いものになるだけのことだ。ここは隠忍自重するに若くはない」

とひとりごち、しずかに別監を揺り動かした。

別監が驚いて目を覚ますと、一人の男が端座していて、

「あなたはいったいどういう人だ」

と尋ねる。別監は倉皇としてこれに答えることができない。

金氏はまたその妻を起し、別監に向かって、

「これまでのことはもう詮索すまい。君はこの女は連れて行って、ともに暮らして大切にして、平生の衣食に事欠くことがないようにしてやってほしい。もしそれができず薄待するようなら、そのときは私の剣の露となるのを免れないぞ」

といった。

別監は汗を満面に流し、ただ「はい、はい」といって、他のことばは出て来ない。金氏が早く立ち去るように促すと、その妻も胸が塞がって、どんなことばも出て来ない。

別監は忽卒にその美人を連れ、促されて外に出て、網から逃れた魚の体で、いそいで自分の家に帰った。

別監には七十歳の老母がいて、まだ眠りに就くことができず、門に寄りかかってわが子の帰りを待っていた。すると、門をたたく音がする。門を開けてこれを入れようとする、一人の女子が後ろについている。母がこれはいったいどういう女子かと尋ねると、金氏はつぶさにこの間の事情をすべて語った。老母は、

「それでは、その方は大恩人で、あなたは命拾いしたのです。この後は二心を起こしてはなりません。今から、この女子をわたくしの養女にします。あなたは兄と妹として対接することで、金氏の大恩に報いるのです。他日、その方がきっと訪ねてくることあるはずです」

といった。

別監は老母の戒めを承諾して、女子とのあいだを、たがいに兄と称し、

妹と称した。

このとき、金氏はその妻を見送ると、門戸を閉じて、家を出て行き、鬱々とした思いに堪えず、金剛山に向かった。

金化を過ぎるころには日が暮れて、客店もなく、山荘に投宿し、翌朝早くにそこも発って、道に迷って深山に入り込んでしまった。さ迷いながらそこを出ようとして、ふと頭をもたげて見上げると、山の上に人参の花が咲いている。心の中で大喜びをして、這い登って行って、これを掘った。すると大きな根で童子の形をしているものを一袋に入れて負い、小さなものはその場に棄て、ソウルに向かって帰って行った。

富者の家に到って、初めからのことをつぶさに話すと、主人は大喜びをして、

「君の陰徳に上天も感応して、このように貴重なものを得ることができたのだ。これはめでたい、めでたい」

といった。

金氏はその人参を売ると、数万の財を手にすることができた。そこで、家を買ひ、奴婢をそろえて、富饒を極め、世間に冠たる富翁となった。しかし、初めからのことを振り返って、考え込むのだった。

「家が貧しいばかりに、家の者を大切にすることができず、出て行かせてしまった。いま、私はこのように豊かになったが、貧賤な暮らしをさせた妻に、これを享受させることができない。これは私の過失なのだ」

ついに、金氏は別監の家を訪ねて行った。すると、別監の老母が大喜びして、

「わたしはあなたが必ず訪れて来ると思っていました」

といい、そしてその間の経緯を話した後に、その妻を送って、親戚のような交わりをしたのだった。

金氏とその妻とのあいだには男子と女子が生まれ、金氏は八十の齢を享

受して、富豪として久しく過ごした。これも一時の憤怒を堪えて陰徳を積んだ賜物ではなからうか。

（『奇聞』<sup>2)</sup>）

- 1) 苧洞：ソウルの地名、現在の中区にある。
- 2) 『奇聞』：編著者は未詳。十九世紀の入ってなったものとみられる。

### 三十七、義島記

箕城（平壤）の人である桂生は、その名は伝わっていない。彼は少年のころ、大同江の南に住む先生の下に学問をするために通っていた。

あるとき、ともに文章を読む少年たち十余名とともに江を渡ろうとしたが、船はあったものの、船頭がいなかった。少年たちはみな江の辺で育ち、船を恐れていなかったから、みな乗り込んで自分たちで漕いで江を渡ろうとした。

江の中ほどに到ったとき、にわかには強い風が吹き出して、海に押し出された。そうして、数日、海を漂い、一つの島にたどり着いた。

少年たちは舟から島に下りたが、島には人影がない。そこで、穴をうがって、そこに身を寄せて、

「われわれは死ぬのも同じ穴というわけだ」といった。

数日後、沖を通り過ぎて行く船がある。袖を振るって、その船を招くと、やって来て、文字でもってことばを交わした。

その船の人がいおうとするところは、

「君たちの本国に行こうとしても、私たちはその方角を知らない。私たちといっしょに私たちの住むところに行こうではないか」というのである。

そこで、その人たちの住むところに行くと、それは周囲が数十里の島であった。人家が数百戸あって、衣冠は中華の制度を模して、その風俗は淳古として礼讓があった。人びとは争うように酒とご馳走をもってきて少年たちをもてなした。島の名前は義島といった。王や首長といった者はいず、租税や貢納といったものもなかった。

少年たちがその島に住み着いて久しくなったが、島は狭小で人も少ない。いざ結婚するとなると難しい。少年たちの中で年長の者がやっとのことで結婚にこぎつけた。

桂生が島の者たちに尋ねた。

「この島はどの国と交通しているのか」

「交通している国はない。ただこの島には麻や綿花がなく、毎年、一度だけ中国の浙江省に出て行き、衣服を買って来る」

「わが朝鮮は、毎年、中国に使臣を送っているのです、中国に行きさえすれば、朝鮮に帰る術がある。お願いだから、浙江に行くとき、われわれを連れて行ってもらえまいか」

まさにその島を離れることになって、結婚をした男はその新婦のことで悩んだ。新婦はそれを理解して、

「あなたは故国に帰って、父母兄弟にお会いになろうとしている。どうして一介の女子のことを思い煩うのです。それで、大丈夫といえますか」といった。

船が出る時、新婦は酒とご馳走を用意して夫を餞別した。船が鰻網を解くとき、新婦は夫に告げて、

「わたくしは、今日、あなたの目の前で死んで、けっして再婚しないことを明らかにしましょう」

といい、海に身を投げた。船中のみなは大驚した。

少年たちは中国に入って、わが国の使臣たちとともに帰国することに

なった。その妻を喪った男は悲しみのあまりに病づき、鴨緑江を渡るときになって死んだ。

残りの少年たちはみな無事に故郷に帰って行ったという。

私どもの伯父の芑はソウルでこの話を聞いて、帰って来て私ども兄弟にお説きになった。

「義島の人びとは、恐らくは大明国の遺民ではあるまいか。義理の上で夷（満州族）に仕えるのを潔しとせず、海に浮かんで生き延びて、その痕跡を晦ますために、わが国の少年たちにも本当のことをいわなかったのではないか。私はそのことを書き記して世間に知らせたいと思うのだ」<sup>1)</sup>

従兄の話では、この話について伯父の草稿が完成されることはなく、ただ「江上児輕舟（江のほとりの少年たちは舟をおそれない）」という主題だけが残っているという。惜しいことだ。

（『嘉林二稿』<sup>2)</sup>）

- 1) 「義島の人びとは…」：明の遺臣として新たに勃興した清に抵抗を続け、台湾に渡って鄭氏政権を創始した鄭成功（日本名は田川福松）の物語を近松は『国姓爺合戦』に戯曲化した。この話の内容から、この「義島」は台湾を想像させる。
- 2) 『嘉林二稿』：九卷三冊からなる。李疇（邁齋を号とする）と李研（征齋を号とする）兄弟の詩文集。芝峰・李暉光の後孫として南人系に属し、文翰の高い家門であった。忠清道の嘉林に代々住んで、書物の名も『嘉林二稿』として、二人の文章を分けずに載せ、ただ各篇の上に二人それぞれの号を書いている。この「義島記」の著者は李疇。

### 三十八、剣を振るう女

丹翁<sup>1)</sup>が湖南の人から聞いた話だという。

進士の蘇凝天は三南<sup>ソウナン</sup><sup>2)</sup>で名声が高く、人びとは彼を奇士だと考えていた。

ある日、一人の女子が蘇凝天を訪ねて来て挨拶を交わし、

「あなたの盛名を聞いて久しく、わたくしはふつつかな身ながら、巾櫛をお受けしようと思うのですが、お許しくありませんか」

といった。凝天は、

「あなたは処女の姿をしながら、丈夫に対してみずから結婚を持ちかける。これは、しかし、処女のすることではない。どこかの家の婢女か、あるいは娼家の女か。あるいはすでに男子と結ばれていながら、鬢を結わず簪を刺さずに処女のような姿をしているだけではないのか」

と尋ねた。女子はそれに対して、

「わたくしは人の家の婢女でした。しかし、主人の家には後継ぎもなく、行くところもなくなりました。それでも、わたくしなりに一縷の望みがあって、平凡な男子と結婚して一生を終えたいとは思いません。そこで、男装をして過ごしたのですが、そのために粗忽に身を汚さずに済みました。しかし、相手が天下の奇士ならば、みずから進んで身を委ねようと思うのです」

といった。

凝天はこの女子を妾として家に納れ、ともに過ごして数年が経った。

その女子が、ある日、強い酒と佳肴を用意して、明るい月の閑暇な夜に、みずからのすぎ越し方を話し出した。

「わたくしは某氏の家の婢女でした。たまたま主人の娘と同年に生まれたので、特に娘のままごと遊びの相手として使われ、将来に娘が嫁ぐときには、その轎前婢<sup>3)</sup>として嫁ぎ先に行くことになっていたのです。ところが、九歳のとき、主人の家が権勢家のために滅亡してしまい、田園もことごとく奪われてしまったのです。そうして残ったのは、娘と乳母だけで、それも他郷に身を隠すしかなく、婢女としてついていったのはこのわたくしだけでした。

娘子はわずかに十歳を越え、わたくしと相談して、男装をして遠くに旅をして劍の師匠を探し歩きました。二年してようやく師匠を得て、劍舞を学び、五年すると、始めて虚空を飛んで往來することができるようになり、町に出ては妙技を披露して、千金を得ることができました。その金で四宝劍を買い、主家の仇の権勢家のところに行つて、妙技を披露しましたが、月夜に乗じて劍舞を舞い、劍を飛ばして振るうと、しばらくすると、数十の首が家の内外に転がりました。仇の家の人びとがみな血まみれになって倒れたのです。わたくしたちは劍舞を舞いながら帰つて来ると、娘子は沐浴をして女子の服装に替え、酒と料理を供えて、復讐を遂げたことを亡父の靈に告げて、そして、わたくしにいったのです。

『わたくしは男子の身に生まれなかつたので、たとえ世間に生き残つても、家門を嗣ぐことができない。男子の身なりをして八年のあいだ世間を渡り歩いたが、たとえ身を汚すことがなかつたとしても、どうしてそれが娘子の道理であつたらうか。結婚をしようにも、夫など見つからうか。あるいは夫が見つかつて、どうして心に思い描く男子を得ることができようか。その上、わが家は代々独りっ子で、どんな親戚もなく、誰がわたくしの結婚を主管してくれよう。わたくしはいっそこで自刎して死んでしまおう。お前はわたくしの一對の宝劍を売り、そのお金でわたくしをここに葬つておくれ。死んだ身であっても父上と母上の横に帰つて行くことができるのであれば、わたくしには恨みはない。お前の立場として身を処す道理はわたくしとは異なり、わたくしを追つて死ぬ必要はない。わたくしを葬つた後に、国中を広く旅して、奇士を探し出し、その妻か妾になるがよい。お前もまた高い志と激しい気性をもつていて、どうして平凡な男子に頭を垂れて従順に生きていくことができようか』

そういい終わると、娘子は劍を突き立てて死んだのでした。わたくしは娘子のことばのままに、一對の劍を売つて五百余りの金子を得て葬式を済

ませ、その残りで田畑を買って、主家の祭祀を絶やさないようにしました。

わたくしは男装を改めることなく、三年のあいだ諸国を旅してまわりました。聞くところでは、先生のような高名なソンビはいないということでした。そこでこうして先生の座の下の塵に伏して、先生の能くなさる術を学びたいと思ったのです。すなわち、文章はもちろん、天文・暦術・律学・算学、および四柱・占い・符籙・図讖などすべてです。先生は心を磨き、身を保つための大きな術と、世の中を治め、後世に模範を垂れる大きな道にいたるまで習得していないものはない方だという名を得ていらっしゃいますが、これはあまりに過ぎたことばというべきです。実の無い名声は泰平時にも禍を免れるのが難しく、ましてやそれが乱世のときにはいうまでもありません。先生は、いま、身を慎んで安閑と一生を送ろうとなさっていますが、それも容易なことではありません。いまからは、深山に住まっていることなく、ただ適当かつ平凡ですが、全州のような大きな町に出て役人たちの子弟を教授し、衣食の充足をおはかりになって、別段の希望を持たなければ、世間の禍を免れることができましょう。

先生が奇士ではないことがすでにわかっている、まだ仕えているようでは、わたくし自身の望みを捨ててしまうことになり、また娘子の命にも背くことになります。そこで、わたくしは、明日の朝、この家を出ます。遙かな海に浮かび、高峻な山を遊覧します。ふたたび男装をして飄然と遊んで、どうしてまた女子に戻ることを考えましょうか。眼差しを垂れ、手について、飲食のことに心を砕き、針仕事をして過ごすことを望みましょうか。

振り返ると、三年近く仕えましたので、惜別の情がないわけでもありません。また、わたくしの習得した妙技を隠して、先生に一度もお見せしなかったのが悔やまれます。先生はどうかお酒を召し上がり、肝を据えてよくご覧になってください」

凝天は大いに驚き、顔を赤くして黙然として一言もいうことができなかつた。ただ、注がれた酒杯を注がれるままに飲み干して、すでに平時の酒量を上回っていたので、飲むのを止めようとしたが、女は、

「わたくしの剣舞ははなはだ激しいものですが、あなたの精神は強くはなく、酒の力でも借りなくては、とうていこれを見ることができません。酒に酔わないでは、持ちこたえられないのです」

といて、さらに十余杯を勧め、みずからも一斗の酒を飲んだ。酒の酔いが回ると、青氈の頭巾、紅錦の衣裳、黄繡の帯、白綾の袴、斑犀の鞞、そして一双の蓮華剣を取り出し、女子のチマ・チョゴリを脱ぎ捨てて着替え、再拝して立ち上った。翻然と翻って燕のように飛び、剣を高く上に放り投げて、身をすくめて飛び上がると、剣を両脇に脇挟んだ。始めは四方に飛んで、花卉が飛び散り、氷が碎けるようで、半ばでは丸く固まって、そして雪が融け、稲妻が走るようで、そして最後は鵠と鶴が大空高く飛翔して舞うようであった。すでに人も見えず、剣も見えず、ただ白い光が東に走り、西に翻り、南にひらめき、北を撃つと、びゅうびゅうと風が吹きすさび、寒気が空を凍らせた。そして、にわかにな大きな声とともに、庭の大木が倒れて、すっと人が剣を擲って立っている。冴え冴えとした光が残り、余された気運が人をして凍り付かせ、鳥肌立たせた。

凝天は当初は緊張して座っていたが、半ばには震えて縮み上がり、最後には気絶して転倒して、ほとんど人事不省である。女は剣を納め、衣服を着替え、酒を温めてくつろいだ。凝天はやつとのことで意識を回復した。

次の日の朝、その女ははたして男装して家を出て行った。その行方は漠然としていてわからない。

ああ、女子の身で、しかも人の婢としての身分でありながら、わが身を尊しとして、凡夫に身を任せるのを良しとしなかつた。どうして鴻儒、奇士の他にしがうことができようか。孔鮒<sup>4</sup>が陳涉<sup>5</sup>に、鮑永<sup>6</sup>が劉玄<sup>7</sup>

に従うのはいったいどういうことであろうか。

(『書橋別集』)

- 1) 丹翁：『書橋別集』の編著者の安錫徹と親交のあった閔順之の号。
- 2) 三南：忠清道，全羅道，慶尚道の三道をいう。
- 3) 轎前婢：新婦に付き従って行き，身の回りの世話をする婢女。文字通り，新婦の輿入れに際して，輿（轎）の前を歩いて新郎の家に行ったからの名称。
- 4) 孔鮒：秦の人。孔子の九世の孫，広く六芸に通じて名士となり，始皇帝が召して魯国文通君としたが，焚書に際して，論語・尚書・孝経などの書物を壁中に隠し，嵩山に隠居した。後に陳涉が楚王になったとき，招聘されて太傅となった。著書として孔叢子二十篇がある。
- 5) 陳涉：陳勝。涉は字。秦代の陽城の人。人に雇われて耕作して，休憩していたとき，ともに耕す者たちに，富貴となるも相忘るる無からんといつて，雇い主に笑われ，嘆息しながら，燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんやといった。二世皇帝のとき，呉広とともに兵を挙げ，王を称したが，諸将を把握できず，御者の莊賈に殺された。
- 6) 鮑永：後漢の人。字は君長。幼少のころから志操があり，継母に仕えて至孝であった。初め，郡功曹を拝し，劉玄が帝位についたとき，尚書僕射となり，また大將軍として，河東・并州・朔部を平定して，中陽侯に任じられた。光武帝が即位すると，諫議大夫となり，閔内侯に封ぜられ，東海相，兗州牧に至った。
- 7) 劉玄：後漢の人。光武帝の族兄にあたる。王莽の末，光武は兵を起し，劉玄を更始將軍とし，ついで擁立して天子とし，王莽を破って長安に入った。劉玄は酒色におぼれてまつりごとを顧みず，赤眉の乱が起って劉玄は殺され，光武がこれを平定して即位した。劉玄は即位したものの，懦弱で群臣を顧みることもできず，首をそらして席を撫でまわすだけだったという「劉玄刮席」の故事がある。

### 三十九、いつわりの道学先生

南方の田舎に一組の夫婦が生業に勤しんでいた。最初は裾の短い衣服もみずから用意することができず、人に頼ってやっとのことで生活していた。いつの間にか、奴婢が千人もいて、城郭の周囲にある田が千頃もあるようになって、巨万の富を得ることができた。しかし、それは夫の力によるものではなく、実は妻の才によるものであった。

ある日、妻が夫と議論して、

「近ごろの人たちは富と貴を追います。わたくしたちは富は得ましたが、青紫の衣服（官服）を身にまとうわけでもなく、人びとは附いて来はするものの、尊敬を受けているわけではありません。あなたはソウルに上って暮らして見る気がありますか」

と尋ねた。夫が、

「ああ、私は若いときに学問を疎かにしたので、立身出世する道理がない。どうしたものか」

というと、妻はいった。

「それは心配なさらなくてもいい」

夫婦は旅装をととのえてソウルに上り、権勢のある宰相の屋敷の横に居を定めた。妻は夫にいつも居所を清掃しておくようにいい、性理学の書物を机の上に置かせ、左右の壁にも書物を積み上げさせた。そして、夫が朝になって起きれば、正座して開いた書物に向かうようにさせ、晩になると、応対・揖讓・進退の節次を教えた。

「もし誰かがあなたに会いにやって来て、何かを尋ねても、ただ、知らないだけ答えてください。また誰かがやって来て、あなたのもとで文章を学びたいといっても、これもただ、知らないだけ答えるのです」

その一方で、妻は遠くに行っては珍しい品物を買求め、宰相の家の侍

女たちと行き来してこれを与えては歓心を買ひ、いっしょに騒ぐ声が屋敷の奥の宰相夫人にも聞こえた。侍女たちはすでに珍しい品物で買収されていて、隣の夫婦たちのことを宰相夫人の前でほめそやしたのである。その話は当然、宰相の耳にも入ることになる。

宰相の家の子弟たちがしばしば出て行つては、隣家の夫を見ることになる。その夫といえは、いつも性理学の書物に向かい、うやうやしく正座して微動だにしない。その様子を見ると、尋常な人物ではない。それを宰相に報告すると、宰相もまた出て行って見る。すると、やはり性理学の書物に向かって静座して沈思している様子である。果たして、尋常ならざる人物だと宰相は考えた。そこで、宰相はつねづね疑問に思っていたことを尋ねてみたが、夫はただ、

「知りません」

とだけ答える。再三再四尋ねてみるが、そのたびに同じように、

「知りません」

とだけ答えた。宰相は知らないという返答は、知っていながら、謙讓の気持ちでいうのだと信じこみ、いよいよ立派な人物だと考え、推挙したので、夫は一命服（九品の官職）に任命されることになった。しかし、妻は、

「これはお受けしてはいけません」

という。夫は召されても出て行かなかったので、ふたたび再命服（前より高い官職）に任命された。妻はこれにも、

「これもお受けしてはなりません」

という。夫は出て行かず、再三再四召されても、出て行こうとはしなかった。

宰相はここに至って、

「これはまことの賢者なのだ」

といい、朝廷で表彰を受けて、清顕の職に登用されるようにした。

妻は夫にいった。

#### 朝鮮漢文短編小説集（Ⅳ）

「タルマエナガが鵬の真似をし、カマキリが轍の前で怒ったところで、みずから敗亡するしかありません。いまやあなたの官職はいよいよ高く、いよいよ清くおなりです。官職が高くなれば名声も日々に広まり、それが清廉であれば行跡も日々に称賛されますが、好事魔多く、なにか災禍に遭われないかと心配です。故郷に帰ることになさいませんか」

そこで、荷物をまとめて、その夜には家を出て、南方に帰って行った。宰相には一通の手紙を残した。

「某は実もないのに、虚行を飾り立てて宰相を騙し、官職を手に入れました。その奸邪なること、これ以上のものではありません。奸邪であれば、かならず罰を受けることは必定で、某もみずからこれを赦そうとは思いません。いま、某は遠い田舎に退いて休むことにいたします。某の任命を撤回して、清顕なる官職を辱めることのないようお願いします」

この手紙も妻が指図して書かせたものである。

このときになっても、宰相は真相を悟らず、彼が立ち去ったことを哀惜した。そして、世間にはいまだ耳を洗うべき高尚な気風が残っていると、始めから庸劣な境遇から抜け出そうとした偽りの人となりに気づかなかったのである。

（『訥隱集』<sup>1)</sup>）

- 1) 『訥隱集』：訥隱・李光庭の文集。光庭は英宗・正宗時代、嶺南地方の代表的な学者であったが、道学に没頭することなく、当時の新しい文学の気風を摂取して異色であるとされる。

#### 四十、盧同知

盧同知<sup>1)</sup>というのは南陽の人である。よく弓を射たが、運数が悪いのか、

武科を受けていつも初試には合格するのだが、会試になると落ちるのだった。

ある日、盧同知は人定の鐘が鳴って後、酒に酔った勢いで、六曹の前の大路に立ちはだかった。その日は御営庁が巡邏をする日で、邏卒が同知を捉えようとする、同知は邏卒を手で殴り倒した。牌将がやって来ると、これもまた殴って、四、五人を続けて殴り倒して、その場を立ち去らなかった。各牌の邏卒たちが急いで集まって来て、同知を搦めとって縄で縛りあげ、翌日の朝を待って、大将のいる役所の門前に連れて行った。

大将というのはすなわち安国洞の洪丞相<sup>2)</sup>である。洪公は同知を中に連れて来させて尋ねた。

「お前は巡邏法の意味を知っているか」

「存じています」

「それなら、なぜ巡邏を殴ったのだ」

「一言述べた後に死にたいと思います。しばらく縄を解いてもらえまいか」

洪公が同知の縄を解くように命じると、同知は立ち上がって答えた。

「私は南陽の拳子（科挙の受験生）ですが、若干の勇力もあり、また馬に乗って弓を射ることもできます。しかし、運数が悪くて、会試に臨むことがすでに十度にもなりますが、そのたびごとに落第して、今度もまた落第してしまいました。そうしたみずからの身の上を顧みると、死を望んでも、なかなかそれを得ることができません。宰相の門下に頼って出世する企てを立てても、またその道がありません。当今、名望が大監の右に出る者はいず、一度でもお会いしたいと思いましたが、門番に妨げられてかなわず、こうした計略を立てたのです。巡邏たちを殴れば、すなわち捉えられてこの場に引き立てられ、一度は顔を合わせることができ、陳情することもできるだろう。もし巡邏を殴らなければ、ただ夜警たちを驚かす

だけで、執事庁で棍棒で殴りつけられて放免され、どうしてこの場に出ることができましょうか。また一人が二人に相對すれば「兼人（二人分）の勇」といいますが、わたくしは五人を相手にしましたから、「兼五人の勇」というべきです。大監はこのわたくしを門下に加えてくださいませんか」

洪公は同知を熟視して、笑いながら、

「先ほど殴られた將校はどこにいるのか」

という、その將校が前に出て来たので、

「お前たち校卒が五、六人して、あの一人に殴り倒されたというのか、そんなことではお前たちには何ができるといふのだ。お前はその牌を外してここに置いて出て行くがよい」

といい、その伝令牌を盧君に佩びさせ、そのまま門下に迎えたのであった。

盧君は、その人となり凡百の事に伶俐かつ敏捷で、その仕事ぶりは大いに主人の意にかなった。そのために寵愛が日々に深まり、内外の大小の事がらをすべて任されたが、彼が事を処理して適切でなかったものはなく、一つとして粗忽なものはなかった。洪公は盧君を自分の左右の手のように見なした。

盧君は別軍官から出世して、長く勤勉に勤めて、宣沙浦僉使となった。任地に赴くとき、洪公は官營および兵營に手紙を書いて、盧君の仕事を助けるように依頼した。しかし、盧僉使は任期を終える三年のあいだ、一度も洪公の門下に手紙を書いて、見舞い一ついって来なかったので、人びとは盧君を背恩の人ではないかと疑った。盧君が任期を終えてソウルに帰って来るや、まず洪公に拜謁するために訪ねて来たので、洪公は欣然としてこれを迎えた。

「この間、つつがなく任期を終えたようだが、俸禄の所得はいかほどになったかな」

「わたくしは大監の恩恵を被って、良い鎮台を任せられ、三年の収入で

南陽の田畑を買いました。いますぐにでもそこで生活を送るに十分です」

洪公はそれを聞いて喜んで、

「それはたいへん結構なことだ」

という、盧君はすっと立ちあがり、暇を告げて立ち去ろうとした。洪公が驚いて、

「君はいま帰って来たばかりではないか。どうしてここに留まらず、すぐに帰って行こうとするのか」

と尋ねると、盧君は、

「わたくしは誠意を尽くし精一杯に大監にお仕えたのは、求めるものがあつたからです。いまや所得は望んだものを越えて充足しています。これ以上、何を望みましょうか。いまは去るべきときです」

と答えた。洪公は一言もいわずに、これを許した。

盧君が洪公の家の門を出て行くとき、ある人が忘恩の行為だと責めたが、盧君は笑って、

「わたくしがどうして知らないでいようか。わたくしは大監の門下に十年ものあいだいた。いろいろなところから送られてくる物件を、どうして大監はすべて見るのができたろう。若干の物件はみなわれわれの用いるところとなったのだ。わたくしが取るに足りない鎮の僉使となって、たとえ一鎮の力を傾けて封物を差し上げても、みな屋敷の者たちの分け前になるに過ぎない。だから、それは考えなくてもいいことだ。わたくしはもうお役御免だ」

といて、南陽に帰って行った。

そうして、便りもなくなった。

丙申の年（1776）になって<sup>3)</sup>、洪公は失脚して、高陽の文峰にある先祖の墓所に隠居した。そのときは家来の中の一人として側に仕えようという者がなかった。盧君ははじめて杖をついて訪ねて行き、朝夕にそばに侍し

て世話をした。洪公の病が重くなると、左右から扶け起こして薬餌を摂らせ、亡くなると手ずから斂襲して棺に入れて、葬った後に、痛哭して帰って行った。

（『里郷見聞録』<sup>4)</sup>）

- 1) 同知：官位のない者で、特に老人に対して使う尊称。
- 2) 洪丞相：洪鳳漢のこと。1713～1778。1744年、文科に及第、顯官を歴任して、官職は領議政に至った。父王の英祖に処刑された思悼世子の舅であり、正祖の外祖父に当たる。英祖の継妃である貞純王后金氏の兄である金龜柱一派と勢力争いをした。英祖の中期以後、金龜柱が中心となる南党に対立して北党の中心人物となる。
- 3) 壬申の年になって：英祖が亡くなり、その孫の正祖の即位するや、洪鳳漢の弟の洪麟漢が舌下事件を起こしたとして、麟漢は処刑され、鳳漢は流された。鳳漢の娘の恵慶宮洪氏は正祖の母親であり、洪氏一族は正祖の外戚にあたるが、正祖の父の思悼世子は父・子の相克から祖父の英祖に米櫃に閉じ込められて殺され、祖父（英祖）と孫（正祖）のあいだも微妙であり、老論と少論の党派争いもからまって、宮廷は複雑な様相を帯びていた。この間の事情については、恵慶宮洪氏自身が書いた『閑中録』に詳しい。
- 4) 『里郷見聞録』：十卷三冊。ソウル大学所蔵の筆写本。「里郷」というのは「里仁郷善」から出たことばで、坊里、郷村の一芸、一徳を備える人という意味で、『里郷見聞録』は閭巷の人びとの記録になる。士大夫階級にかたよらず、至誠の人びとの行実を活写する話が多いと評される。

## 島田勝正教授 略歴

1954年 6月 三重県に生まれる

### 学歴

- 1977年 3月 三重大学教育学部中学校教員養成課程卒業  
1986年 3月 三重大学教育専攻科（教育学専攻）修了  
1990年 3月 兵庫教育大学大学院学校教育研究科教科・領域教育専攻（言語系コース）修了（教育学修士）  
2000年 10月 マッコーリー大学大学院英語・言語学・メディア研究科修了（応用言語学修士）

### 職歴

- 1978年 4月 三重県名賀郡青山町立青山中学校教諭（1980年3月まで）  
1980年 4月 三重県桑名市東員町中学校組合立東員中学校教諭（1983年3月まで）  
1983年 4月 三重県員弁郡東員町立東員第二中学校教諭（1991年3月まで）  
1991年 4月 三重県立桑名工業高等学校教諭（1994年3月まで）  
1992年 4月 名城大学理工学部非常勤講師（1994年3月まで）  
1994年 4月 桃山学院大学文学部専任講師（1997年3月まで）  
1997年 4月 桃山学院大学文学部助教授（2002年3月まで）  
2002年 4月 桃山学院大学文学部英語英米文学科助教授（2003年3月まで）  
2003年 4月 桃山学院大学文学部英語英米文学科教授（2008年3月まで）  
2008年 4月 桃山学院大学国際教養学部国際教養学科教授（2015年3月

まで)

- 2015年4月 桃山学院大学国際教養学部英語・国際文化学科教授
- 2025年3月 桃山学院大学を定年退職
- 2025年4月 桃山学院大学名誉教授の称号を受ける

### 主な役職歴

- 1996年4月 学生生活委員会次長 (1997年3月まで)
- 2001年4月 学生生活委員長 (2005年3月まで)
- 2007年4月 教職課程委員長 (2009年3月まで)
- 2010年4月 キリスト教センター長 (2012年3月まで)
- 2010年4月 国際ワークキャンプ実行委員長 (2012年3月まで)
- 2013年4月 教職課程委員会次長 (2015年3月まで)
- 2016年4月 文学研究科長 (2018年3月まで)
- 2018年4月 大学評議員 (2020年3月まで)
- 2022年4月 教職課程委員長 (2023年3月まで)

### 所属学会

中部地区英語教育学会, 日本言語テスト学会, 全国英語教育学会, 大学英語教育学会, 全国語学教育学会, 兵庫教育大学言語表現学会, 外国語教育メディア学会, Teachers of English to Speakers of Other Languages (TESOL)

### 学会および社会における活動

- 1996年4月 外国語教育メディア学会中部支部運営委員中部支部評議員 (1998年3月まで)
- 2003年4月 中部地区英語教育学会近畿地区運営委員 (2025年3月まで)

- 2007年4月 全国英語教育学会紀要査読委員（2025年3月まで）
- 2011年4月 日本言語テスト学会研究会運営委員長（2012年3月まで）
- 2019年4月 中部地区英語教育学会紀要編集委員長（2022年3月まで）
- 2020年4月 日本言語テスト学会著作賞選考委員会委員長（2022年3月まで）
- 
- 1996年11月 文部省・三重県教育委員会主催第3ブロック英語教育指導者講座講師
- 2002年8月 三重県北勢町シリーズ夏季文化講演会講演
- 2003年7月 桃山学院大学大学等オープン講座（英語教員夏季ワークショップ）講師（2008年7月まで）
- 2005年9月 神戸市中学校英語研究会部会講演
- 2007年8月 くわな教研研究大会外国語教育分科会助言者（2009年8月まで）
- 2007年11月 三重県立川越高等学校杯中学生英語弁論大会審査委員長（2013年11月まで）
- 2008年4月 三重県立川越高等学校学校評議員（2011年3月まで）
- 2009年7月 桃山学院大学教員免許更新講習（英語教員夏季ワークショップ）講師（2019年7月まで）
- 2012年10月 河内長野市教研中学校英語部会ワークショップ講師

## 島田勝正教授 主要研究業績目録

### 著書

#### (単著)

1. 『「気づき」をうながす文法指導—英語のアクティブ・ラーニング』, ひつじ書房, 2022年, 191頁

#### (共編著)

2. 『推論発問を取り入れた英語リーディング指導—深い読みを促す英語授業』(田中武夫・紺渡弘幸との共編著), 三省堂, 2011年, 2章「推論発問づくりのポイント」pp. 23-36, 3章「行動の目的や意図を推測させる」pp. 40-41, 「テキストにない動作や言葉を推測させる」pp. 48-49, 6章「テキストにない行動や言葉を推測させる」pp. 66-69, 8章「推論発問は文法への気づきを促すか」pp. 174-181.
3. 『英語教育学の今：理論と実践の統合』(全国英語教育学会第40回研究大会記念特別誌編集委員会編〈7章「第二言語習得と文法」編集担当〉), 2014年, 「第二言語習得と文法指導」pp. 178-181.

#### (分担執筆)

4. 青木昭六編『英語授業事例事典』, 大修館書店, 1990年, 「AETの訪問を最大限に活用」pp. 18-19, 「1回きりに終わらない問答」pp. 100-101, 「There is (are) ～をコミュニカティブに」pp. 178-179, 「関係代名詞を含む文を身近に」pp. 188-189, 「自己表現をさせたい」pp. 248-249.
5. 青木昭六著『英語授業の組み立て』, 開隆堂, 1990年, Ⅲ章3節「言語活動を総合的に扱った授業案」pp. 74-83.
6. 青木昭六編『英語授業事例事典Ⅱ—コミュニケーション活動を中心に—』, 大修館書店, 1994年, 「関係代名詞は名詞句で導入」pp. 26-

- 29, 「学習段階に応じた文脈化ドリル」 pp. 32-33, 「一般動詞をよりコミュニケーションに」 pp. 46-47, 「分詞の後置修飾は推測ゲームで」 pp. 52-53, 「間接話法の導入は人間関係を把握してから」 pp. 54-55, 「協同授業によるリスニング」 pp. 114-115, 「工業英語で要点把握」 pp. 320-321, 「科学論文で概要把握」 pp. 322-323, 「背景知識を有効に使って概要把握」 pp. 324-325, 「推論的発問で深層的理解を」 pp. 330-331, 「未知語の意味推測テクニック」 pp. 350-351, 「創造的なライティングをせりふ作りから」 pp. 406-407, 「予測読みでリーディングの積極的な態度を育てる」 pp. 418-419.
7. 青木昭六編『英語科教育の理論と実践《学習指導編》』, 現代教育社, 1995年, I章1節「学習者中心の授業の創造」 pp. 12-14, V章4節「発問の種類とそのしかた」 pp. 171-173.
  8. 青木昭六編『英語科教育の理論と実践《理論編》』, 現代教育社, 1996年, VI章IV節「コミュニケーション活動」 pp. 92-94.
  9. 望月明彦・山田登編著『私の英語授業—コミュニケーション能力育成のための授業—』, 大修館書店, 1996年, III部1章 授業案「[オーラルコミュニケーションB]の授業」 pp. 218-222.
  10. 青木昭六編『新しい英語科教育法』, 現代教育社, 2002年, 8章1節「テストの目的と種類」 pp. 165-168, 2節「テスト作成と採点上の留意点」 pp. 169-172, 3節「点数の処理法」 pp. 165-175.
  11. 青木昭六編『英語科教育のフロンティア』, 保育出版社, 2012年, 5章4節「指導過程の総合型構成モデル タスク支援型の構成」 pp. 108-116.

## 論文

1. 「いかにして教室に real situation を設定するか」『中部地区英語教育

- 学会紀要』第16号, 1987年2月, pp. 34-41.
2. 「ロールプレイから自己表現へ」『中部地区英語教育学会紀要』第17号, 1988年3月, pp. 185-191.
  3. 「場面で活性化する文法能力の養成について—コミュニケーション活動と機械的ドリルの比較—」『中部地区英語教育学会紀要』第18号, 1989年3月, pp. 201-207.
  4. “Principles and practice in communicative language teaching” 兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士論文, 1989年2月
  5. “Inferential questions in reading comprehension — a teaching strategy as a facilitator of inferencing” 『中部地区英語教育学会紀要』第21号, 1992年4月, pp. 121-126.
  6. “The effect of inferential questions on reading comprehension” *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, No.3, August, 1992, pp. 99-108.
  7. 「読解テストに於ける推論的設問のレベル」『中部地区英語教育学会紀要』第22号, 1993年3月, pp. 1-6.
  8. 「日本語・英語読解方略の比較(2) —日本語・英語読解方略アンケート結果分析—」『中部地区英語教育学会紀要』第23号, 1993年12月, pp. 49-54.
  9. 「日本語・英語読解方略の比較(1) —日本語から英語への推論方略の転移—」兵庫教育大学言語表現学会編『言語表現研究』第10号, 1994年3月, pp. 11-19.
  10. “The effect of semantic mapping on listening comprehension” *Language Laboratory*, No. 31, March, 1994, pp. 45-59.
  11. “Head-initial/head-final parameter resetting in instructed second language acquisition: Acquisition order of word order among four

- phrase categories”『中部地区英語教育学会紀要』第24号, 1994年12月, pp. 181-186.
12. “Acquisition order of word order in the complement adjunct structure: An explanation from the viewpoint of the subset principle” 桃山学院大学英語英米文学会編『英米評論』第9号, 1994年12月, pp. 79-95.
  13. 「意識化の特性と分類」『中部地区英語教育学会紀要』第25号, 1995年12月, pp. 175-180.
  14. “The role of positive and negative evidence in the classroom: Does the subset principle operate in L2 learning?”『英米評論』第10号, 1995年12月, pp. 3-28.
  15. “How Japanese learn to be Japanese: Group-oriented behaviour as imbibed at school” 桃山学院大学国際文化学会編『国際文化論集』第14号, 1996年9月, pp. 37-50.
  16. 「『英語科教育法』受講生の英語学習・教授に対する意識変化」『中部地区英語教育学会紀要』第26号, 1996年12月, pp. 35-40.
  17. “The validity of multiple-choice rational cloze tests”『中部地区英語教育学会紀要』第27号, 1997年12月, pp. 139-146.
  18. “Communicative language testing: Principles and problems”『英米評論』第12号, 1997年12月, pp. 3-24.
  19. “Item analysis of a multiple-choice rational cloze test”『英米評論』第13号, 1998年12月, pp. 3-16.
  20. “Variability in learner language”『桃山学院大学人間科学』第16号, 1999年1月, pp. 49-64.
  21. “Task variation: A case study”『英米評論』第14号, 1999年12月, pp. 5-26.

22. “Dimensionality of a listening comprehension test”, Unpublished master’s dissertation, Macquarie University, Australia, February, 2000.
23. 「[学習]中心の英語授業」青木昭六先生古希記念論文編集委員会編『英語教育学論集』, 桐原書店, 2000年8月, pp. 43-52.
24. “A comparison between higher-order and lower-order questions: Item difficulty and item discriminability in a listening comprehension test”『中部地区英語教育学会紀要』第30号, 2001年12月, pp. 247-256.
25. “Skills separability in a listening comprehension test” *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, No.12, March, 2001, pp. 61-70.
26. 「学外実習評価の傾向および評価項目の再検討」(竹中暉雄との共著)『桃山学院大学総合研究所紀要』第26巻3号, 2001年3月, pp. 59-71.
27. 「ビリーフテスト：学習と教授の相関」『中部地区英語教育学会紀要』第31号, 2002年2月, pp. 15-20.
28. 「英語学習・指導に関するビリーフ修正の質的分析」『桃山学院大学総合研究所紀要』第28巻2号, 2002年12月, pp. 14-24.
29. 「多肢選択型クローズテストの選択肢の選択」『中部地区英語教育学会紀要』第32号, 2003年3月, pp. 283-288.
30. 「英語学習・指導に関するビリーフの修正—横断法による「英語科教育法I」の授業効果の検証—」『英米評論』第18号, 2003年12月, pp. 3-13.
31. 「EAP 語彙テスト—受容語彙と制御的発表語彙の関係—」『中部地区英語教育学会紀要』第33号, 2004年3月, pp. 113-120.
32. 「多肢選択式意図的削除クローズテストの選択肢の改善」『英米評論』第19号, 2005年2月, pp. 39-57.

33. 「沈黙は金ならず—スピーチ訓練の流暢性に対する効果」『中部地区英語教育学会紀要』第34号, 2005年2月, pp. 9-14.
34. 「EAP 語彙知識における広さと深さの関係」望月昭彦・久保田章・磐崎弘貞・卯城祐司編『新しい英語教育のために—理論と実践の接点を求めて—』, 成美堂, 2007年3月, pp. 75-86.
35. 「ライティングにおける気づきから修得に至る過程を促進する要因」『中部地区英語教育学会紀要』第37号, 2008年1月, pp. 391-396.
36. 「読解授業における推論的発問」『中部地区英語教育学会紀要』第38号, 2009年1月, pp. 399-404.
37. 「文法性判断テストにおける問題文提示時間制限の有無と明示的・暗示的知識」『英米評論』第24号, 2010年3月, pp. 41-53.
38. 「読解において推論的発問が言語形式への気づきに与える効果」『中部地区英語教育学会紀要』第39号, 2010年1月, pp. 319-326.
39. 「明示的知識・暗示的知識における母語の干渉と生起変異」『中部地区英語教育学会紀要』第42号, 2013年1月, pp. 257-262.
40. 「日本人初中級英語学習者の言語知識モデルの構築」山岡俊比古先生追悼論文集編集委員会編『第2言語習得研究と英語教育の実践研究』, 開隆堂, 2014年3月, pp. 111-122.
41. 「タスク支援型およびタスク基盤型英語授業に対する現職教員の評価」『桃山学院大学人間科学』第45号, 2014年3月, pp. 111-122.
42. 「タスクの繰り返しにとまなう振り返り活動の効果」『国際文化論集』第49号, 2014年3月, pp. 7-19.
43. 「文法性判断と確信」『中部地区英語教育学会紀要』第43号, 2014年1月, pp. 293-298.
44. 「インプット重視の文法指導」『英米評論』第28号, 2014年3月, pp. 37-52.

45. 「タスク基盤型授業の問題点と改善策」『中部地区英語教育学会紀要』第44号, 2015年1月, pp. 89-94.
46. 「誤りと訂正フィードバック」桃山学院大学人間文化学会編『人間文化研究』第2号, 2015年3月, pp. 5-30.
47. 「教職実践演習における「教師学」訓練の実践」『人間文化研究』第4号, 2016年2月 pp. 79-91.
48. 「リーディングの評価」『日本言語テスト学会誌 20周年記念特別号』, 2016年12月, pp. 104-107.
49. 「インプット処理指導による明示的知識の保持効果」『中部地区英語教育学会紀要』第46号, 2017年1月, pp. 277-284.
50. 「ディスコースの中で気づきを促す文法指導」『人間文化研究』第8号, 2018年2月, pp. 53-71.
51. 「結束性への気づきが異なる文法範疇に与える転移効果」『中部地区英語教育学会紀要』第48号, 2019年1月, pp. 271-278.
52. 「意識化指導の理論と実践」『人間文化研究』第10号, 2019年2月, pp. 131-146.
53. 「結束性判断テストによるディスコース能力の発達の測定」『人間文化研究』第12号, 2020年2月, pp. 1-20.
54. 「認知文法を援用した意識化指導」『人間文化研究』第14号, 2021年3月, pp. 5-23.
55. 「文法指導の分類」『人間文化研究』第16号, 2022年2月, pp. 121-136.
56. 「英語教師のための言語テストに関する基礎知識」『人間文化研究』第20号, 2024年2月, pp. 1-20.
57. 「文法指導におけるピリーフ変化」『人間文化研究』第22号, 2025年2月, pp. 5-29.

## 学会発表

1. 「いかにして教室に real situation を設定するか」第16回中部地区英語教育学会山梨大会, 1986年6月28日, 山梨大学
2. 「ロールプレイから自己表現へ」第17回中部地区英語教育学会和歌山大会(問題別討論会), 1987年6月28日, 和歌山大学
3. 「場面で活性化する文法能力の養成について—コミュニケーション活動と機械的ドリルの比較—」第14回全国英語教育学会京都研究大会, 1988年8月4日, 京都パークホテル
4. “The activation of grammatical knowledge in a given situation — a comparison of communicative activities and mechanical drills—” JALT '88 (Poster Sessions), 1988年10月10日, 神戸国際会議場
5. “Communicative classroom: An experiment” 兵庫教育大学言語表現学会, 1989年9月30日, 兵庫教育大学
6. 「Inferential Questions を用いた読解指導」第21回中部地区英語教育学会富山大会, 1991年6月29日, 富山大学
7. 「Inferential Questions を用いた読解指導—文法訳読式の alternative を求めて—」第17回全国英語教育学会香川研究大会, 1991年8月19日, ラポール・イン・タカマツ
8. 「読解テストに於ける推論的設問のレベル」第22回中部地区英語教育学会愛知大会, 1992年6月27日, 愛知教育大学
9. 「日本語・英語読解方略の比較(1)—日本語・英語クローズテスト結果分析—」1993年度大学英語教育学会中部支部大会, 1993年6月6日, 名古屋女子大学
10. 「日本語・英語読解方略の比較(2)—日本語・英語読解方略アンケート結果分析—」第23回中部地区英語教育学会福井大会, 1993年6月26日, 福井大学

11. “The effect of semantic mapping on listening comprehension” 第 43 回語学ラボラトリー学会中部支部大会, 1994 年 5 月 14 日, 愛知女子短期大学
12. “Head-initial/head-final parameter resetting in instructed second language acquisition: Acquisition order of word order among four phrase categories” 第 24 回中部地区英語教育学会岐阜大会, 1994 年 7 月 9 日, 岐阜大学
13. “The role of positive and negative evidence in the classroom: Does the subset principle operate in L2 learning” 第 33 回大学英語教育学会全国大会, 1994 年 9 月 9 日, 愛知淑徳短期大学
14. 「意識化の特性と分類」第 25 回中部地区英語教育学会和歌山大会, 1995 年 6 月 24 日, 和歌山大学
15. 「[英語科教育法] 受講生の英語学習・教授に対する意識変化」第 26 回中部地区英語教育学会山梨大会, 1996 年 6 月 29 日, 山梨大学
16. “The validity of multiple-choice rational cloze tests” 第 27 回中部地区英語教育学会三重大会, 1997 年 6 月 28 日, 三重大学
17. “Item analysis of a multiple-choice rational cloze test” 第 52 回語学ラボラトリー学会中部支部大会, 1998 年 11 月 28 日, 三重大学
18. “Dimensionality of a rational cloze test” 第 29 回中部地区英語教育学会静岡大会, 1999 年 6 月 26 日, 常葉学園大学
19. “Difficulty and discriminability in a listening comprehension test: A comparison between higher-order questions and lower-order questions” 第 30 回中部地区英語教育学会石川大会, 2000 年 6 月 24 日, 金沢学院大学
20. 「リスニングテストにおける技能分離可能性」第 26 回全国英語教育学会埼玉研究大会, 2000 年 8 月 9 日, 東京国際大学

21. 「ビリーフテスト：学習と教授の相関」第31回中部地区英語教育学会愛知大会，2001年6月23日，椋山女学園大学
22. 「EAP 語彙テスト」第27回全国英語教育学会広島研究大会，2001年8月9日，広島国際会議場
23. 「多肢選択型クローズテストの錯乱肢の選択」第32回中部地区英語教育学会福井大会，2002年6月30日，福井大学
24. 「英語学習・指導に関するビリーフ修正の質的分析」第28回全国英語教育学会神戸研究大会，2002年8月22日，神戸大学
25. 「英語学習・指導に関するビリーフ修正の質的分析—横断法による「英語科教育法I」の授業効果の検証—」第31回中部地区英語教育学会岐阜大会，2003年6月28日，岐阜大学
26. 「EAP 語彙テスト—受容語彙と制御的発表語彙の関係—」第29回全国英語教育学会南東北大会，2003年8月9日，宮城教育大学
27. 「「沈黙は金」ならずスピーチ訓練の流暢性に対する効果」第34回中部地区英語教育学会富山大会，2004年6月26日，富山大学
28. 「多肢選択型クローズテストの選択肢の改善」第30回全国英語教育学会長野研究大会，2004年8月7日，JA 長野県ビル
29. 「英作文における気づきから再構成に至る過程を促進する要因」第33回全国教育学会大分研究大会，2007年8月5日，大分大学
30. 「文法性判断テストによる明示的／暗示的知識」日本言語テスト学会第11回全国研究大会，2007年10月28日，愛知学院大学
31. 「読解授業における推論的発問」『第38回中部地区英語教育学会長野大会，2008年6月29日，清泉女学院大学
32. 「明示的知識と暗示的知識：時間制約の有無，文法的適格性／非適格性，産出／判断の関係」日本言語テスト学会第12回全国研究大会，2008年9月14日，常磐大学

33. 「読解において推論的発問が言語形式への気づきに与える効果」第35回全国英語教育学会鳥取研究大会, 2009年8月8日, 鳥取大学
34. 「明示的知識・暗示的知識を測定するテストバッテリーの可能性と問題点」日本言語テスト学会第13回全国研究大会, 2009年9月7日, 北海学園大学
35. 「明示的知識・暗示的知識における母語の干渉と生起変異」第38回全国英語教育学会愛知研究大会, 2012年8月5日, 愛知学院大学
36. 「文法性判断と確信」第39回全国英語教育学会北海道研究大会, 2013年8月10日, 北星学園大学
37. 「タスクの授業に対する評価の評価」第44回中部地区英語教育学会山梨大会, 2014年6月22日, 山梨大学
38. 「インプット処理指導の理論と実践」第46回中部地区英語教育学会三重大会, 2016年6月26日, 鈴鹿医療科学大学
39. 「インプット処理指導とその効果」第42回全国英語教育学会埼玉研究大会, 2016年8月21日, 獨協大学
40. 「ディスコースの中で気づきを促す文法指導」第48回中部地区英語教育学会静岡大会, 2018年6月24日, 静岡大学
41. 「結束性への気づきが異なる文法範疇に与える転移効果」第44回全国英語教育学会京都研究大会, 2018年8月25日, 龍谷大学
42. 「結束性判断テストによるディスコース能力の発達の測定」日本言語テスト学会第22回全国研究大会, 2019年9月12日, 新潟青陵大学
43. 「認知文法を援用した意識化タスク」中部地区英語教育学会第50回記念愛知大会, 2021年6月27日, オンライン
44. 「文法のアクティブ・ラーニングを促す意識化指導」第51回中部地区英語教育学会福井大会, 2022年6月25日, オンライン
45. 「文法指導におけるピリーフ変化」第53回中部地区英語教育学会富山

大会, 2024年6月23日, 富山大学

## その他

1. 「読解と推論」『啓林高英編』啓林館, 1996年7月, pp. 15-18.
2. 「地域連携教育活動の成果と課題」阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会編『阪神教協リポート』38号, 2015年4月, pp. 24-27.
3. 「教科書本文をタスク化する」『英語教育』第64巻3号, 大修館書店, 2015年6月, pp. 13-15.
4. 「ディスコースの中で文法への気づきを促す」『英語教育』第67巻9号, 大修館書店, 2018年11月, pp. 20-21.

## 友沢昭江教授 略歴

### 学歴

- 1973年 3月 兵庫県立長田高等学校卒業
- 1973年 4月 大阪外国語大学 英語科入学
- 1977年 3月 大阪外国語大学 英語科卒業
- 1977年 9月 ウィスコンシン大学マジソン校歴史学部大学院 修士課程  
入学
- 1978年 12月 ウィスコンシン大学マジソン校歴史学部大学院 修士課程  
修了

### 職歴

- 1979年 10月 大阪外国語大学留学生別科 非常勤講師（1985年9月まで）
- 1980年 4月 芦屋女子短期大学英文学科 専任講師（1982年3月まで）
- 1982年 3月 大連外国語大学赴日大学院留学生生培訓部（中国）文部省派  
遣講師（1982年9月まで）
- 1983年 4月 CDI（コミュニケーション・デザイン・インスティテュート）  
特別研究員（1985年3月まで）
- 1983年 10月 京都大学学生部 非常勤講師（1987年3月まで）
- 1987年 4月 香川大学教育学部 助手（1988年3月まで）
- 1988年 4月 香川大学教育学部 講師（1989年3月まで）
- 1989年 4月 香川大学教育学部 助教授（1991年3月まで）
- 1991年 4月 桃山学院大学文学部国際文化学科 助教授（2002年3月まで）
- 1996年 9月 ニューヨーク市立大学シティーカレッジ教育学部バイリン  
ガル教育学科 客員研究員（1997年8月まで）

- 2002年4月 桃山学院大学文学部国際文化学科 教授（2008年3月まで）
- 2007年4月 桃山学院大学 文学部長補佐（2008年3月まで）
- 2008年4月 桃山学院大学国際教養学部国際教養学科 教授（2015年3月まで）
- 2008年4月 桃山学院大学 国際教養学部長補佐（2009年3月まで）
- 2008年4月 桃山学院大学学生生活委員会 次長（2009年3月まで）
- 2009年4月 桃山学院大学 学長室員（2011年3月まで）
- 2010年4月 桃山学院大学外国語教育センター 運営委員（2016年3月まで）
- 2010年4月 桃山学院大学国際センター 委員（2016年3月まで）
- 2015年4月 桃山学院大学国際教養学部英語・国際文化学科 教授（2024年3月まで）
- 2017年4月 桃山学院大学 学長室員（2019年3月まで）
- 2018年7月 桃山学院大学 副学長（2020年3月まで）
- 2018年7月 桃山学院大学 大学評議員（2020年3月まで）
- 2019年4月 桃山学院大学日本語教員養成課程運営会議 議長（2024年3月まで）
- 2020年4月 桃山学院大学 国際センター長（2024年3月まで）
- 2024年4月 桃山学院大学国際教養学部英語・国際文化学科 特任教授
- 2025年3月 桃山学院大学を定年退職
- 2025年4月 桃山学院大学名誉教授の称号を受ける

**所属学会**（在職中以下の学会に所属したことがあります）

MHB（母語・継承語・バイリンガル教育）学会（2003年～2017年度まではMHB研究会。2018年度に学会に変更）、日本言語政策学会、社会言語科学会、異文化間教育学会、日本語教育学会

### 学会および社会における活動

- 2006年4月 MHB（母語・継承語・バイリンガル教育）学会理事  
（2025年8月まで）
- 2015年7月1日 日本語教育学会 研究集会委員（関西地区）（2018年  
3月まで）
- 2016年3月12日 第10回日本語教育学会関西地区研究集会開催（於：  
桃山学院大学）

## 友沢昭江教授 主要研究業績目録

### 著書

『日本語教育および日本語普及活動の現状と課題』（共著）CDI 編，NIRA OUTPUT 総合研究開発機構，1985年7月，分担執筆：第四章「海外における日本語普及・日本語教育」第二節「日本語普及・日本語教育の問題点」pp.222-254. 付論2「国・地域別日本語学習の状況」pp.361-511. 付論8「アメリカ合衆国における日本語教育」（三浦昭監修）pp.645-670.

『日本語教育論集』（分担執筆）吉田弥寿夫先生還暦記念論集編集委員会編，学習研究社，1991年10月，分担執筆：第3部日本語教授法—理論と応用，「日本語教育における媒介言語」pp.116-125.

『異文化理解とコミュニケーション2—組織と人間』（共著）本名信行編，三修社，1994年6月，分担執筆：第7章「バイリンガリズムとバイリンガル教育—多民族国家アメリカの実情」pp.149-172.

『日本語の地平線』（共著）吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会編，くろしお出版，1999年12月，分担執筆：第一部「言語」の部，「日本語の規範性—日本語教師にとって『日本語』とは」pp.163-177.

『多文化共生社会への展望』（共著）徐龍達，遠山淳，橋内武編，日本評論社，2000年5月，分担執筆：第9章「多言語社会への挑戦—アメリカ言語事情最前線」pp.145-165.

『*Studies in Japanese Bilingualism*』, eds. by Mary Goebel Noguchi and Sandra Fotos, (分担執筆) Multilingual Matters. UK, 2001年，分担執筆：Chapter 6 'Japan's Hidden Bilinguals: The Languages of "War Orphans" and Their Families After Repatriation from China', pp.133-163.

『*The Age of Creolization in the Pacific: In Search of Emerging Cultures and Shared Values in the Japan-America Borderlands*』, edited by

Takeshi Matsuda, (分担執筆) Keisuisha, 2001年, 分担執筆: Chapter 6, 'Beyond the Politics of Japanese Language Education: Reconsidering Its History through Japan's Contact with the United States as a Rival and a Master'. pp.215-255.

『*Handbook of Language and Ethnic Identity, Disciplinary and Regional Perspectives*, Volume 1/Second Edition』, eds. by Joshua A. Fishman and Ofelia Garcia, (分担執筆) Oxford University Press, 2010年5月, 分担執筆(吉村雅弘との共同執筆): Chapter 29 'Japan', pp.486-500.

『新時代的世界日語教育研究』修剛, 李運博編, (分担執筆) 高等教育出版社(北京), 2012年11月, 分担執筆: 「家庭言語環境からみる中国ルーツの子どもの二言語能力」 pp.181-187.

『*The Handbook of Bilingual and Multilingual Education*』, eds. by Wayne E. Wright, Sovicheth Boun and Ofelia Garcia, (分担執筆) Wiley Blackwell, UK, 2015年6月, 分担執筆: (真嶋潤子との共同執筆) Chapter 30, 'Japan: Bilingual Education in Japan. Slow but Steady Progress.' pp.493-503.

『多文化児童の未来をひらく一国内外の母語教育支援の現場から』(分担執筆) 松田陽子他編著, 学術研究出版, 2017年3月, 分担執筆: 第11章座談会「母語学習支援—これまでの活動から見えてきたこと, これからの課題」, pp.149-167.

『母語をなくさない日本語教育は可能か—一定住二世児の二言語能力』(分担執筆) 真嶋潤子編著, 大阪大学出版会, 2019年2月, 分担執筆: 第6章「家庭言語環境調査から見える子どもの二言語能力—1年時と6年時の保護者へのアンケートとインタビューを通して」pp.119-158. 巻末資料(資料1)「保護者へのアンケート」 pp.252-271.

論文

「日本語教育の現状と問題点の考察—香川大学の場合」『香川大学一般教育研究』第33号, pp.187-212, 香川大学一般教育部, 1988年3月

「大学における「日本事情」科目のあり方」『香川大学一般教育研究』第36号, pp.1-19, 香川大学一般教育部, 1989年10月

「アメリカの言語政策をめぐる動き—英語公用語化運動とバイリンガル教育を中心として」『香川大学教育学部研究報告』第80号, pp.63-87, 香川大学教育学部, 1990年9月

「第四回国際異文化コミュニケーション会議報告」『月刊言語』第22巻7号, pp.82-83, 1993年7月

「多文化主義と外国語教育—アメリカ合衆国の新しい試み」『異文化間教育』第9号, pp.143-152, 異文化間教育学会, 1995年6月

「バイリンガル教育の可能性—中国帰国生の高校、大学進学との関連において」『国際文化論集』第22号, pp.81-117, 桃山学院大学総合研究所, 2000年12月

「中国帰国生の大学における教育を考える—言語能力と学力の伸長をめざして」『桃山学院大学総合研究所紀要』第28巻2号, pp.39-56, 桃山学院大学総合研究所, 2002年12月

「日本と韓国における自国語普及施策の比較（試論）」『桃山学院大学総合研究所紀要』第33巻3号, pp.35-48, 桃山学院大学総合研究所, 2008年3月

「帰国・渡日生の言語能力—高校から大学への連携を考える—」『2012年度日本語教育国際研究大会予稿集』第二分冊, p.270, 2012年7月

「帰国・渡日生の言語能力—高校から大学への学びの連携をめざして—」『国際文化論集』第49号, pp.109-138, 桃山学院大学総合研究所, 2014年3月

「Fishman, J.A. (1990): What is reversing language shift (RLS) and how can it succeed?」*Journal of Multilingual Multicultural Development*, (文献紹介)『母語・継承語・バイリンガル教育研究』第18号, pp.142-144, 母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会, 2022年5月

「Family Language Policy から考える中国帰国者の子どもの言語」『母語・継承語・バイリンガル教育研究: 20周年記念特別号』第20号, pp.60-61, 母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会, 2024年3月

「中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える—Family Language Policy の視点から—」, 『人間文化研究』第22号, pp.31-69, 桃山学院大学人間文化学会, 2025年2月

## 報告書

『中国帰国者の言語使用研究—日本語習得と中国語維持の両立をめざす言語教育の基礎資料』, 平成11～14年度科学研究費補助金基礎研究(C)(2)研究成果報告書, 2004年3月

『日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から構築する試み』(分担執筆), 平成21～23年度科学研究費助成金基礎研究(C)研究成果報告書, 研究代表者: 真嶋潤子, 第3章「言語環境調査から見えるもの」および「資料: 言語環境に関するアンケート(中国語版・日本語版)」pp.91-119, 2012年7月

『外国人児童生徒の複数言語能力の縦断的研究—何もなくさない日本語教育をめざして』(分担執筆), 平成24年度～28年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書, 研究代表者: 真嶋潤子, 第7章「家庭言語環境からみる中国ルーツの子どもの二言語能力」, 第8章「家庭言語環境調査から見える子どもの二言語能力—一年次と六年次の保護者へのアンケートとインタビューを通して—」および「資料: 言語環境調査アンケート質問

紙（日本語・中国語版）」2018年6月

## 書評

Ofelia Garcia, Tove Skutnabb-Kangas and Maria E. Torres-Guzman eds. (2006) *Imagining Multilingual Schools: Languages in Education and Glocalization*, Multilingual Matters. 第1章 ‘Weaving Spaces and (De) Constructing Ways for Multilingual Schools: The Actuals and the Imagines’ 担当、『母語・継承語・バイリンガル教育研究』第5号、pp.43-44、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会、2009年3月

Dorma M. Brinton, Olga Kagan, and Susan Baukus eds. (2008) *Heritage Language Education: A New Field Emerging*, Routledge. 第2章 G. Richard Tucker, ‘Learning Other Languages for Promoting Bilingualism’ 担当、『母語・継承語・バイリンガル教育研究』第6号、pp.122-123、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会、2010年3月

Ofelia Garcia and Li Wei (2014) *Translanguaging: Implications for Language, Bilingualism and Education*, Basingstoke, UK. 第3章 ‘Language, Bilingualism and Education’ 担当、『母語・継承語・バイリンガル教育研究』第11号、pp.52-53、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会、2017年3月

Shinji Sato and Neriko Musha Doerr eds. (2014) *Rethinking Language and Culture in Japanese Education Beyond the Standard*, Bristol, UK, Multilingual Matters, *International Multilingual Research Journal*, Vol.10, Issues 2, pp.161-164, January 2016

## 講演

‘Empowering through bilingualism and biliteracy: A Case of Returnee

Students from China', Bilingualism and Biliteracy through Schooling: An International Symposium, Long Island University, Brooklyn Campus, New York City, U.S.A, 1999年(招待講演)

'Can Schools Promote Linguistic Diversity in an Overwhelmingly Monolingual Japan?' An International Symposium on Language Education, Teachers College, Columbia University, NY, U.S.A, 2004年(招待講演)

「移動する子どもの言語教育—日本型移民社会の可能性との関連において」多文化関係学会関西支部夏季研究会集会, 2010年7月(招待講演)

「外国にルーツをもつ児童・生徒・学生の教育のあり方—日本語, 母語(継承語), 学力の面から考える」日本語教育学会研究集会第7回四国地区 2015年10月24日(招待講演)

「外国人児童生徒の複数言語能力の研究—家庭言語調査から見えること」, おおさかこども多文化センター2017年度総会, 2017年5月28日(招待講演)

## 口頭発表

「アメリカ合衆国における言語(外国語)教育の動向」異文化間教育学会第15回大会(於: 目白学園女子短期大学)1994年

「多文化理解のための言語政策」第2回社会言語学研究会(現: 社会言語科学会)シンポジウム「国際理解と社会言語学」1995年

'Language use and ethnic identity of "war-orphans" and their families who came back to Japan from China' The 5th. International Conference on Cross Cultural Communication (於: ハルビン工科大学, 中華人民共和国) 1995年

'Chinese "war orphans": Japan's hidden bilinguals' 第23回JALT(全国語学教育学会)年次国際大会(於: 浜松市)1997年

「中国帰国者の言語生活: 日本語習得と中国語維持の狭間に隠れたバイリ

ンガル達」第3回 Pacific Second Language Research Forum (PacSLRF)  
(於：青山学院大学) 1998年

'Empowering through Bilingualism and Biliteracy: A Case of Returnee Students from China at a Senior High School in Osaka, Japan', The 8th. International Conference on Cross Cultural Communication (於：香港バプティスト大学) 2001年

「日本と韓国における自国語普及施策の比較(詩論)」, 第28回国際学術セミナー(於：韓国啓明大学校) 2007年11月6日～7日

「日本語と母語の習得研究—日本の公立小学校に学ぶ中国ルーツの児童の言語能力—」2011年日本語教育国際研究大会(於：天津外国語大学) 2011年8月19日

「帰国・渡日生の言語能力—高校から大学への連携を考える」2012年日本語教育国際研究大会(於：名古屋大学) 2012年8月19日

「日本の多文化多言語環境で育つ児童への二言語教育の可能性—大阪府下の公立小学校2校の試み—」2014年日本語教育国際研究大会(於：シドニー工科大学) 2014年7月11日

「多様な言語背景と日本語能力を持つ高校生を対象とする日本語教育の可能性—大阪府立高校の実践から」AEJ日本語教育シンポジウム(於：イタリア, カ・フォスカリ・ベネチア大学) 2016年7月9日

「家庭言語環境から見えるもの—一年次と六年次の保護者へのアンケート調査を通して」(子ども科研(平成24年度～28年度科学研究費基盤研究(B)外国人児童生徒の複数言語能力の縦断的研究, 代表：真嶋潤子, 課題番号24320094) 成果中間報告会, お茶の水女子大学, 2016年8月8日

「家庭言語環境から見えるもの—一年次と六年次の保護者へのアンケート調査とインタビューを通して」(子ども科研(平成24年度～28年度科学研究費基盤研究(B)外国人児童生徒の複数言語能力の縦断的研究, 代表：

真嶋潤子, 課題番号 24320094) 研究成果報告会, 大阪大学中之島センター,  
2017年3月4日

「中国帰国者家庭の子どもの言語生活に影響する親の言語観と子の主体性を考える」, ICJLE2024 (日本語教育国際研究大会), アメリカ合衆国, ウィスコンシン大学マジソン校, 2024年8月1日～3日

# 2024 年度人間文化学会活動報告

2024 年 12 月 23 日作成

## 1. 人間文化学会総会

(1) 2023 年度人間文化学会第 2 回総会（2024 年 2 月 26 日メール持ち回り開催）

審議事項 1：2023 年度会計報告

審議事項 2：2024 年度役員案

報告事項 1：2023 年度人間文化学会活動報告

報告事項 2：『人間文化研究』第 20 号投稿論文の審査結果報告

報告事項 3：学会年会費の納入

審議事項の承認：3 月 7 日 審議事項が承認された。

(2) 2024 年度第 1 回人間文化学会総会（2025 年 2 月中旬～下旬に予定）

(3) 人間文化学会員退職者への『退職記念紀要』の贈呈式と懇親会（2025 年 3 月に予定）

## 2. 『人間文化研究』の発行

(1) 投稿募集：『人間文化研究』投稿規程（2023 年 9 月 30 日改訂施行）に基づき、論文を募集

(2) 投稿論文の審査：会員以外の投稿論文について、審査を実施

(3) 発行：

21 号 2024 年 10 月

22 号 2025 年 2 月

以上。

文責 庶務担当 釣井千恵

## 執筆者紹介

(掲載順)

島田勝正 (SHIMADA Katsumasa)	国際教養学部教授	英語教育学
友沢昭江 (TOMOZAWA Akie)	国際教養学部特任教授	日本語教育 バイリンガル教育
高田里恵子 (TAKADA Rieko)	経営学部教授	ドイツ文学
Thomas LEGGE	経営学部講師	応用言語学 英語教育学
ÁLVAREZ PEREIRA Abel	国際教養学部准教授	美術 非言語コミュニケーション
徐国玉 (XU Guoyu)	本学兼任講師	現代中国語文法
吉田一穂 (YOSHIDA Kazuho)	本学兼任講師	イギリス文学
深見純生 (FUKAMI Sumio)	国際教養学部元教員	海域東南アジア史
谷野圭亮 (TANINO Keisuke)	大阪公立大学工業高等専門学校 総合工学システム学科専任講師	英語教育学
梅山秀幸 (UMEYAMA Hideyuki)	本学名誉教授	日本文化史 比較文学

# 桃山学院大学 人間文化学会 会則

第1条（名称） 本学会は「桃山学院大学人間文化学会（英語名 St. Andrew's University Association for Research in the Humanities）」と称する。

第2条（目的） 本学会は、人間科学全般および大学教育に関する研究を行い、あわせて会員相互および学外関係者との学術交流を促進することをもって、その目的とする。

第3条（事務局） 本学会の事務局は桃山学院大学内におく。

第4条（事業） 本学会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 学会誌その他の編集
- 2 総会の開催
- 3 研究会・講演会その他集会の開催
- 4 その他本学会の目的を達成するために必要な事業

第5条 本学会の会員資格は次のとおりとする。

- 1 （正会員） 本学会の正会員は、桃山学院大学の専任教員で、本学会の目的に賛同する者。
- 2 （名誉会員） 本学会の正会員であって定年退職した者およびこれに準ずる者。なお、「準ずる者」とは、「選択定年制で退職する者」、「特任教員で退職する者」、「65歳以上70歳以前に自己都合で退職する者」、および、「勤続年数が20年を超えて自己都合で退職する者」のことである。
- 3 （準会員） 本学大学院文学研究科の修了生、大学院生、研究生、および大学院特別研究員。
- 4 正会員は、本学会の総会および第4条に定める各種事業に参画し、本学会の刊行物の配布を受ける。
- 5 名誉会員および準会員は本学会の開催する大会、研究会、講演会等に参加し、また本学会の機関誌などの刊行物の配布を受けることができる。
- 6 （入会） 本学会への入会を希望する者は、本学会役員会の推薦および学会総会の審議で決定する。

（退会） 本学会の退会を希望する者は、本学会役員会に退会届を提出し、学会総会の審議で決定する。

第6条（学会誌） 本学会の学会誌は『人間文化研究』（英語名 Journal of Humanities Research）と称する。

- 2 学会誌の編集は本学会の責任において行い、発行は桃山学院大学総合研究所が行う。
- 3 学会誌の発行は、原則として年2回とする。
- 4 学会誌への投稿規定は、別に定める。

第7条（会費） 正会員は年額3,000円の会費を納入する。

第8条（役員）

- 1 本学会に次の役員をおく。
  - (1) 会長 1名
  - (2) 理事 庶務 1名  
編集 1名

会計 1名

(3) 監査 1名

2 役員はすべて総会において正会員の互選により選出し、その任期は原則として2年間とする。

3 会長は本学会を代表し、会務を総括する。

4 理事は学会誌編集責任者、会計責任者、大会庶務担当者とし、会長を補佐して会務を運営する。

5 監査は本学会の会計監査を行う。

第9条（総会）本学会は毎年度2回総会を開催する。

2 会長は、その必要を認めるときは、臨時に総会を招集することができる。

第10条（会計および監査）本学会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

2 監査は毎年度本学会の会計監査を行い、これを総会に報告して承認を得なければならない。

第11条（議決）本学会会則の改訂は、役員会の議を経て、総会の過半数でこれを行う。

附則 この会則は2014年4月1日より施行する。

この会則は2024年4月1日より改訂施行する。

## 桃山学院大学『人間文化研究』投稿規程

- (1) 本誌に投稿できる者は、原則として本学会の正会員、名誉会員、準会員とする。ただし、準会員による投稿については、本学会の正会員または名誉会員の推薦を必要とし、さらに、編集委員が選定し、役員会が承認した本学会正会員または名誉会員（合計2名）の審査員による学術的評価を得なければならない。準会員の論文については、学会誌への掲載は、論文審査結果を踏まえて、役員会が審議を経て、決定する。
  - (2) 本学会の会員以外の者の投稿は、本学会正会員または名誉会員の推薦を必要とし、さらに、編集委員が選定し、役員会が承認した本学会正会員または名誉会員（合計2名）の審査員による学術的評価を得なければならない。会員以外の者の論文については、学会誌への掲載は、論文審査結果を踏まえて、役員会が審議を経て、決定する。
  - (3) 特別号発行の際、役員会の審議を経て、外部の研究者等に寄稿を依頼することができる。
- 投稿内容は、論文、研究ノート、翻訳、資料、書誌、書評、その他とし、投稿者は類別を指定して投稿すること。投稿原稿は未発表の原稿に限る。ただし、口頭発表を基に作成した原稿は投稿できる。
- 原稿はワープロで作成する。原稿の分量は、論文および翻訳で20,000語（欧文の場合は10,000語）、論文以外は12,000語（欧文6,000語）を限度とする。
- 投稿には英文タイトルを別記し、論文の場合には500語程度の英文抄録を添付すること。論文以外の場合は、英文抄録を付するかどうかは投稿者の意向に委ねる。また、論文、研究ノートには、5語以内のキーワードを記載する。
- 原稿は完成原稿を提出し、校正に際して大量の修正、追加は認められない。
- 投稿者による校正は原則として再校までとし、定められた期日内に校正刷りを返却すること。
- (1) 英文校閲（英文タイトルと英文抄録）は、掲載が決定した論文（正会員、名誉会員、準会員）については、桃山学院大学総合研究所に委託する。
  - (2) 会員以外の者の論文は、投稿時には英文校閲を完了していなければならない。なお、英文校閲者の氏名と所属を投稿申込書に明記すること。
  - (3) 特別号発行の際に投稿依頼した原稿については、英文校閲（英文タイトルと英文抄録）は桃山学院大学総合研究所に委託する。
- 準会員、および会員以外の投稿時の審査員には、一定の報酬を支払う（1件につき、5,000円）。
- 特別号発行の際、外部の研究者等に寄稿依頼を行ったときには、謝礼を支払うことができる。謝礼の額は役員会で決定する。
- 本誌に掲載された論文等の著作権のうち、「複製権」と「公衆送信権」の行使は、桃山学院大学総合研究所に委託する。
- 本誌に掲載された論文等については、桃山学院大学学術機関リポジトリに公開することを原則とする。
- 本規程の改訂は、役員会の議を経て、総会の過半数でこれを行う。

附則 この規程は2014年4月1日より施行する。  
この規程は2023年7月31日より改訂施行する。  
この規程は2023年9月30日より改訂施行する。

# CONTENTS

Foreword ..... ARIKAWA Koji ( 1 )

## Articles

Changes in Beliefs about Grammar Instruction  
..... SHIMADA Katsumasa ( 5 )

Language Ideology and Language Practices of Chinese  
Returnee Parents and Child Agency from the Perspective  
of the Family Language Policy  
..... TOMOZAWA Akie ( 31 )

Abe Nosei or the “Bad Father”  
..... TAKADA Rieko ( 71 )

An Exploration of Japanese Working Holidays:  
Trends, Motivations, and Challenges  
..... Thomas LEGGE ( 103 )

An Example of Romanesque Architecture in the Ribeira Sacra:  
The Church of Santa María de Nogueira de Miño  
..... ÁLVAREZ PEREIRA Abel ( 119 )

Chinese Character Calligraphy and Visual Illusion  
..... XU Guoyu ( 159 )

The Salvation of Stephen’s Soul  
in *A Portrait of the Artist as a Young Man*  
..... YOSHIDA Kazuho ( 185 )

## Notes

The Toponym Melayu in the Sejarah Melayu  
..... FUKAMI Sumio ( 215 )

Utilization of Generative AI for Supporting English  
Writing Education  
..... TANINO Keisuke ( 223 )

## Translation

Chinese Classic Style Novels of Joseon Period (IV)  
..... UMEYAMA Hideyuki ( 233 )

Brief Biography of Professor SHIMADA Katsumasa ..... ( 289 )

Bibliography of the Writings of Professor SHIMADA Katsumasa ... ( 292 )

Brief Biography of Professor TOMOZAWA Akie ..... ( 305 )

Bibliography of the Writings of Professor TOMOZAWA Akie ..... ( 308 )

人間文化学会役員（2024年度）

会 長           : 有 川 康 二

理 事（編集）: 宮 脇 永 吏

理 事（庶務）: 釣 井 千 恵

理 事（会計）: 南 郷 晃 子

監 事           : 松 澤 俊 二

2025年2月26日発行

## 人 間 文 化 研 究

第 22 号

編 集 桃 山 学 院 大 学 人 間 文 化 学 会  
発 行 桃 山 学 院 大 学 総 合 研 究 所  
594-1198 大 阪 府 和 泉 市 ま な び 野 1 番 1 号  
TEL. 0725-92-7129

印 刷 所 友 野 印 刷 株 式 会 社  
700-0035 岡 山 市 北 区 高 柳 西 町 1 - 23  
TEL. 086-255-1101（代表）

# Journal of Humanities Research St. Andrew's University

---

No. 22      February      2025

---

Special Issue Dedicated to  
Professor SHIMADA Katsumasa  
Professor TOMOZAWA Akie

~~~~~  
Published by the Research Institute,  
St. Andrew's University  
1-1 Manabino, Izumi, Osaka 594-1198, Japan  
~~~~~